

## 専任教員の教育研究等活動業績

### [人間文化学部人間文化学科]

#### 〈教授〉

難波道弘	1
小菅健一	7
深津容伸	13
窪内節子	20
岡田真樹子	30
荒井直	36
田代順	42
黒田浩司	52
小林真理子	62

#### 〈准教授〉

石橋泰	69
高橋寛子	76
韓曉宏	89
李尚珍	95
佐柳信男	104
森稚葉	114
井上征剛	125
本多明生	133
杉山歩	140
杉浦学	147

#### 〈専任講師〉

Danny W. Brown	153
堀江桂吾	160
大井奈美	166

#### 〈助教〉

飯田敏晴	172
島内宏和	180
後藤晶	186

### [教職課程]

山口勝弘	195
近藤弘	203
槻舘尚武	208

# 専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
ナンバ 道弘 難波 道弘	男	1974年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(工学)	専門分野	情報工学(知能情報学・教育工学)	
学 歴	1997年	3月	岡山県立大学情報工学部情報通信工学科卒業	
	1997年	4月	岡山県立大学大学院情報系工学研究科機械情報システム工学専攻(修士課程)入学	
	1999年	3月	岡山県立大学大学院情報系工学研究科機械情報システム工学専攻(修士課程)修了	
	1999年	4月	岡山県立大学大学院情報系工学研究科システム工学専攻(博士後期課程)入学	
	2002年	3月	岡山県立大学大学院情報系工学研究科システム工学専攻(博士後期課程)修了	
実 務 経 験	2002年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科助手	
	2004年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科専任講師	
	2009年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科准教授	
	2009年	9月	埼玉学園大学経営学部会計学科非常勤講師(～2011年3月)	
	2011年	4月	帝京科学大学生命科学部生命科学科非常勤講師(～2016年3月)	
2012年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科教授		
受 賞 歴	2002年	3月	仁科顕彰会仁科賞(岡山県) (学術論文「不定セル探索アルゴリズムを用いた連想記憶セルラニューラルネットワーク」に対する受賞)	
	年	月		
	年	月		
所 属 学 会	1998年	5月	電子情報通信学会会員(現在に至る)	
	2001年	5月	情報処理学会会員(現在に至る)	
	2002年	5月	日本教育工学会(現在に至る)	
	2005年	6月	教育システム情報学会会員(現在に至る)	
	2006年	7月	日本感性工学会会員(現在に至る)	
	2007年	7月	人工知能学会会員(現在に至る)	
特 免 資 格 等 ・ ・	2009年	12月	情報処理技術者試験応用情報技術者 取得	
	年	月		
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>近年、ICTはすべての職業人に求められる必須能力であるが、ICTの専門能力だけでは実際の職務を遂行することはできない。とりわけ近年の学生に欠如しているといわれる次の能力を習得させるための教育・研究指導を行いたいと考えている。</p> <p>1)論理的思考力 2)分析力 3)プレゼンテーション力 4)ディベート力 5)主体性</p> <p>ICTを敬遠する学生の多くは、「コンピュータは難しそう」や「数学は苦手だから」などが多い。そのような学生たちには考えることの楽しさを伝え、課題を解決したときの達成感を実感できるような授業を、そしてこれまでの教育スタイルであった受動型から能動型に転換し、学生が主役となるような授業展開を推進したいと考えている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>1. 教育におけるWeb利用 学生のITリテラシー向上の一環として、課題提出をすべてE-mailで行わせ、マナーなどを含めた指導により、知識と技術の向上に寄与した。また講義では課題をWeb配信することにより欠席した場合などでも自宅から入手できると好評である。</p> <p>2. 研究室Webサイトによる研究室内での情報交換と共有 研究室内の活性化とIT活用機会の増加などを目的としており、実際に研究室内での活性化に寄与している。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 「情報システム実験演習II-オブジェクト指向入門」のテキストを作成。以前の担当科目において多数。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>1. 難波道弘 他、`1人1台端末の学習環境におけるICT教育の試み`、日本教育工学会、2013 2. 難波道弘、`演習型WBTシステムの開発と評価`、教育システム情報学会、2006</p>
担当授業科目	<p>2016年度 インターンシップ、コンピューターシステムI、II、プロジェクトマネジメント、メディアサイエンス、人間文化学A、卒業研究、専門ゼミナール、情報セキュリティ</p>
代表的シラバス	<p>講義においては、ほぼ毎回課題を課し、次回の授業で提出させ、添削・フィードバックしている。理解の一助となっており、受講生にはおおむね好評である。授業内でもインタラクティブ性を重視し、問題を解かせ、できた学生に板書させるなど参加型授業の展開に努めている。</p> <p>少人数講義科目においては輪講制を採用し、学生自らが交替で教師役を務めることで、主体的な参加を促すことにつなげた。</p>
教育改善活動	<p>FD推進会議への出席と参加報告：2009年に私大連主催の標記会議に大学代表として出席。その後学内の研修会においてその内容を報告。自己点検・評価活動の一助となった。</p> <p>FD・SD推進委員長としての企画立案：2013年に委員長就任後、これまでの学内のFD活動で見られなかった教員による授業実践の報告、職員による研修参加報告などを積極的に企画、実行している。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 授業評価アンケートの平均得点においては概ね高い得点である。講義ではほぼ毎回課題を与え、添削・フィードバック・解説のプロセスによって学生の理解の一助となっていることが要因として考えられる。ただし、学生が分からないところをそのままにして結局、試験ができずに単位を落としているケースが散見される。そのような学生へのフォローアップが今後の課題である。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 これまでのところ特に行っていないので、今後の課題としたい。</p>

## 研究業績

研究の特徴	<p>人工知能とその応用に関する研究を行っている。特に連想記憶セルラニューラルネットワークを用いており、これまでに文字認識、肝臓病診断、故障診断、点字画像認識へ応用した研究成果を公表している。</p> <p>近年では、連想記憶CNNをe-learningシステムに組み込んだシステムを設計・構築しており、国内外の学会でその成果を公表している。</p>
研究経歴	<p>2002年 山梨英和大学人間文化学部で人工知能、主に連想記憶CNNとその応用に関する研究に従事。(現在に至る)</p> <p>2006年 山梨英和大学人間文化学部でe-learningシステムの開発・評価に関する研究に従事。(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>1. E-Learning-Organizational Infrastructure and Tools for Specific Areas (Chapter8: Intelligent Tutoring System with Associative Cellular Neural Network)、共著、2012年1月、Intech, ISBN 978-953-51-0053-9、Elvis Pontes et al.(Eds.)、pp.123-136</p> <p>(2) 学術論文(最新のものから)</p> <p>1. 杉浦学, 秋月 拓磨, 後藤 晶, 難波 道弘, 高橋 弘毅, “Build and Bring Your Own DeviceによるICT活用能力の育成”, 日本教育工学会論文誌, Vol.38(3), pp.287-297, 2014</p> <p>2. T.Akiduki, Z.Zhang, T.Imamura, T.Miyake, H.Takahashi and M.Namba, “` Toward Symbolization of Human Motion Data Space Statistical Analysis in Symbol Space- “ICIC Express Letters, in press.</p> <p>3. 難波 道弘, “3値出力CNNを用いた理解度診断システムの評価”, 日本教育工学会論文誌, Vol.35, Suppl., pp.133-136, 2011</p> <p>4. M.Namba, “` Design of Tri-Valued Output Cellular Neural Network for Associative Memory for Self-Directed E-learning”, ICIC Express Letters, Vol.2, No.3(B), pp.552-558, 2010.</p> <p>5. S.Yancong, M.Namba and H.Murao, “Solving a Timetabling Problem Using Distributed Genetic Algorithm”, ICIC Express Letters, Vol.3, No.4(A), pp.1055-1060, 2009.</p> <p>6. 難波 道弘, “連想記憶セルラニューラルネットワークによる学習者の理解度推定”, 日本教育工学会論文誌, Vol.32, Suppl., pp.97-100, 2008.</p> <p>7. 難波 道弘, 澤田 隆幸, “演習問題を重視したWBTシステムの開発と試行”, 日本教育工学会論文誌, Vol.30, Suppl., pp.17-20, 2006.</p> <p>など。詳細は<a href="http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/">http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/</a>を参照。</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)(最新のものから)</p> <p>1. M.Namba, “An attempt to Diagnose Learners’ Understanding Levels Considering Confidence”, Proc.of the 15th IASTED International Conference on Technology for Education and Learning(TEL) Marina del Rey, USA, pp.459-462, 2013.</p> <p>1. M.Namba, “Diagnosis of Understanding Level by Self Organization Map in Self-learning”, Proc.of the 15th IASTED International Conference on Computers and Advanced Technology in Education(CATE), Naples, Italy, pp.79-82, 2012.</p> <p>2. M.Namba, “Associative Cellular Neural Network and Its Application to Intelligent Tutoring System”, Proc.of the 14th IASTED International Conference on Computers and Advanced Technology in Education(CATE), Cambridge, UK, No.734-016, 2011.</p> <p>3. M.Namba, “Tri-Valued Output Cellular Neural Networks for Associative Memory to Estimate Understanding Level”, Proc. of the 13th IASTED International Conference on Computers and Advanced Technology in Education (CATE), Maui(Hawaii), USA, pp.88-93, 2010.</p> <p>など。詳細は<a href="http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/">http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/</a>を参照。</p>

競争的資金採択課題	2014年6月～2017年3月：科学研究費補助金若手研究(B)、主観的評価を取り入れた連想記憶CNNによるE-learningシステム、研究代表者 2009年6月～2012年3月：科学研究費補助金若手研究(B)、連想記憶CNNの理解度推定を用いたE-learningシステム、研究代表者	
学会等発表・役員参加	2013年	10月 難波道弘、杉浦学 他, ``1人1台端末の学習環境におけるICT教育の試み”、日本教育工学会研究会
	2013年	10月 高橋弘毅、難波道弘 他, ``タブレット端末を用いた教育実践報告”、日本教育工学会研究会
	2011年	3月 篠原大地、難波道弘, ``3値出力連想記憶CNNを用いた理解度推定に関する研究”、教育システム情報学会学生研究発表会
	など。詳細は <a href="http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/">http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/~namba/</a> を参照。	
受託共同研究の実績	2013年	8月 地域再発見ウォーキングマップWebサイト制作(一宮町を考える会【山梨県笛吹市】)(～2016年3月)
	年	月
	年	月
	年	月
大学院生指導	特になし	
研究能力に対する評価	主研究テーマである「連想記憶CNNを用いた学習者の理解度推定に関する研究」はその研究成果が学術論文や国際会議プロシーディングスなどにも掲載されている。その後その実績が評価され、学術振興会科学研究補助金に採択されている。このテーマは人工知能技術をe-learningに適用したシステムであり、その有用性が認められれば、汎用性が高いため、今後は広範囲にわたる実用化が期待される。	

## サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2014年	4月 副学長(学生サービス担当)、学長室運営会議(現:学長・副学長会議)構成員
	2013年	4月 学長特別補佐(教学支援・広報担当)、FD・SD推進委員長、情報システム運用全学実施責任者
	2012年	4月 学長特別補佐(カリキュラム改革・ICT担当)、大学運営評議会構成員
	2011年	10月 教育用PC検討会座長
	2011年	4月 教務部長、IT委員長、大学運営委員会委員
	2010年	10月 事務システム検討会座長
	年	月 その他、これまでに入試委員、広報委員、教職課程運営委員などを歴任。
アドバイザー活動実績	基礎ゼミナールにおいて、学生間のコミュニケーションを図るための企画を推進した。 2012年度以降、ポータルサイトを活用したアドバイザー学生全員との個人面談を半期に1度以上のペースで実施している。	
後進育成活動実績	特になし	

社会 貢 献 活 動	(1)講演会 年 月 特になし
	(2)出前講座 年 月 特になし
	(3)公開講座 年 月 特になし
	(4)学外審議会・委員会等 年 月 特になし
	(5)その他 2006年 4～6月 山梨英和高等学校での高大連携授業「インターネットの光と影」など。

## 成果と目標

専門的 成果	<p>①連想記憶CNNとその応用に関する研究 1988年に考案されたセルラニューラルネットワーク(CNN)は画像処理や迷路探索など多くの応用事例が報告されている。その後CNNが連想記憶に有効であることが提案された。これまでに文字認識、肝臓病診断、自動車異常音診断、点字画像認識などへの応用例を提案・報告している。それと並行して連想記憶CNNの効率化設計についても研究し、いくつかの観点から設計法を提案した。</p> <p>②e-learningシステムの開発・評価に関する研究 主として、ITS(連想記憶CNNを融合させたシステム)を研究開発している。教師不在型e-learningシステムにおけるこのモデルの可能性については学術論文や国際会議などで公表しているが、今後の実用化に向け、その基盤が整備されつつある。</p>
専門的 目標	<p>①連想記憶CNNとその応用に関する研究 これまでの応用事例における精度の向上と新たな応用事例の開拓をめざす。</p> <p>②e-learningシステムの開発・評価に関する研究 これまでの研究成果を踏まえ、実用化に向けた研究開発を推進したい。特に本研究はその成果が認められ、競争的外部資金の獲得に至っている。研究の質を高めるために積極的な教育研究活動を行いたい。</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
コスゲ ケンイチ 小菅 健一		男	1959年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号		文学修士	専門分野	日本近現代文学・表現論・表象文化	
学 歴	1984年	3月	早稲田大学第一文学部 日本文学専攻 卒業		
	1987年	3月	早稲田大学大学院文学研究科(博士前期課程) 日本文学専攻 修了		
	1991年	3月	早稲田大学大学院文学研究科(博士後期課程) 日本文学専攻 単位取得満期退学		
実務 経 験	年	月			
	年	月	特になし		
	年	月			
受 賞 歴	年	月			
	年	月	特になし		
	年	月			
所 属 学 会	1981年4月～現在 早稲田大学国文学会				
	1988年4月～現在 日本近代文学会				
	1989年4月～現在 早稲田大学国語教育学会				
	1991年4月～現在 昭和文学会				
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	1984年	3月	中学校教諭一級普通免許状(国語)		
	1984年	3月	高等学校教諭二級普通免許状(国語)		
	1987年	3月	高等学校教諭一級普通免許状(国語)		
	1993年	5月	普通自動車運転免許		
e-mail	非公表				

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>担当する学生の問題意識とニーズの多様性に対して、十分に応えられるように、内容やレベルの幅が広く、情報量が多い講義を行い、一人一人が自分に見合った成果や満足が得られる教育を目指している。学生には参加意識を持って、自発的・積極的に臨めるようなインタラクティブな講義になるように授業を進めている。そのために、学生が興味・関心の持てるものをとすることで、様々な表現ジャンルから教材化出来るものを探し、授業で取り上げるので、受講生の学習意欲が喚起されるので、良い評価をもらっています。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 安定教材や定番教材よりも、現代文化(サブカルチャー)の様々なジャンルのものを教材化して、学生が驚くようなものから授業が展開していくような方法を実践している。視聴覚教材として使うDVDやビデオ、CDの内容選択に工夫を凝らしている。そして、授業によっては、様々なタイプのワークショップ的な実践作業を多く取り入れている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 町田守弘 編「新しい表現指導のストラテジー」(東京法令出版 平成12年5月)に論文「切り結ぶ映像と〈ことば〉—イメージ喚起力活性化の試み」を寄稿。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 第38回中部地区私学教育研修会(2000年10月)において、「〈ことば〉を生かす—国語教育の意義と可能性—」という基調講演と研究発表会のコメンテーターをする。</p> <p>2007年1月山梨県立甲府城西高校の教職員を対象に、「日本語表現力を向上させるための指導方法」というテーマで講演をする。</p> <p>2011年5月山梨県立富士北稜高校での県内の国語教員の研修会において、「言語活動の充実—ことば・表現・ものの見方や考え方」という講演をする。</p>
担当授業科目	<p>2016年度 まんが論、コミュニケーションスキル、セルフ・プロデュースの技法、メディアの編集工学、卒業研究、基礎ゼミ、専門ゼミ、日本文学購読、日本文学史、現代文化論、現代芸術論、近現代文学論</p>
代表的シラバス	<p>日本語文化特論 日本の言語文化の精髓である文学作品には、古典、近・現代を問わず様々な形で読む機会が多かったはずだが、文学評論ということになると、なかなか触れることがなかったと思う。この講義では“特論”と銘打っていることもあり、今年度は、文学評論を取り上げて、精緻に読んでいくことで、あまり馴染みのない論説文に特有の抽象的・観念的な語句や表現を学び、読解力や分析力、考察力を磨いていく講義になる。</p>
教育改善活動	<p>FD研究会には時間が許す限り参加して、自分の講義や演習に生かせるものは取り入れています。「授業改善のためのアンケート」の改善して欲しい点に挙げられたことに関しては、自分で注意するとともに、そういった傾向(話すスピードが早くなる)が出た時には、指摘するように授業の初回において必ず話しています。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 「授業改善のためのアンケート」によれば、講義において使用する視聴覚教材、プリント、テキストが授業の内容理解に非常に役立つとともに、興味・関心を引き、面白くて勉強になったという好意的評価を多く頂いています。ただし、盛り沢山の内容をこなしていく時に、時々、早口になってしまうので、もう少しゆっくり話して下さいという要望をもらうことがあります。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 本学においては、教員が他の教員の授業に参加して、相互に評価するという制度はまだ取り入れていないので、ありません。</p>

## 研究業績

研究の特徴	<p>〈ことば〉の持っている映像(イメージ)喚起力を言語映像論と措定して、その対義概念である映像言語論と合わせて、表現論ということで学部時代から一貫して研究している。作品論や読者論的なアプローチも組み込みながら、文学研究の狭い枠組みに留まらないで、影響関係にある映画やアニメ、演劇、マンガ、音楽といった文化事象にも範囲を広げながら、作品創作や表現活動としての国語教育にまで手を伸ばして、表現論を駆使した総合的な文化論の研究を幅広く繰り広げていくことを考えている。</p>
研究経歴	<p>1987年～1994年 立正大学教養学部 非常勤講師</p> <p>1994年 山梨英和短期大学国文学科 専任講師 1998年 助教授 2002年 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科へ改組</p> <p>2002年～2013年 愛知淑徳大学文化創造学部 非常勤講師</p> <p>2004年～現在 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 教授</p> <p>2006年～2008年 和洋女子大学</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>『時は過ぎゆく』論—時間論再考の視点から—(共著)(『論考 田山花袋』桜楓社 1985年2月)</p> <p>『父母への手紙』論—〈私〉という表現装置(共著)(『日本文芸の系譜』笠間書院 1996年10月)</p> <p>「古賀春江の表現原理—同心円としての絵画と詩—(共著)(『日本文芸の表現史』おうふう 2001年10月) 専攻としている川端康成と表現論をめぐる書いた、それぞれの時点の代表的な論</p> <p>(2) 学術論文</p> <p>『浅草紅団』論—空像としての都市〈浅草〉—(『国文学研究』第96集 1988年10月) 「川端康成における大正十二年の意義—“作家”以前の問題をめぐる—(『日本文藝論集』第27号 1994年9月) 「『美しい日本の私—その序説』論—小説論としての読みをめぐる—(『山梨英和短期大学紀要』第28号 1995年12月) 「『美の存在と発見』論—小説論としての可能性と限界—(『山梨英和短期大学』第29号 1996年12月9日) 「川端康成の表現意識の確立—文学と美術の結節点から—(『国文学』2001年4月) 川端康成をめぐる研究論文の主要なもの。『『当選の日』—生活者と作家の相克—(『太宰治研究 第十九輯 2011年6月)。</p> <p>「〈考現学〉の方法—“事実”の“再現”としての修辞学—(『国文学 解釈と鑑賞』1991年1月)</p> <p>「コミックメディア論試稿—“言語芸術”と“映像芸術”の融合—(『山梨英和短期大学紀要』第32号 1998年12月) 「広告表現における音・映像・〈ことば〉—佐藤雅彦の“ルール”の教材化をめぐる—(『月刊 国語教育研究』No.332 1999年2月) 「『ロバート・メイプルソープ』の写真行為論序説—〈見えている〉ものを〈見る〉ことをめぐって—(『国文学』1999年8月) 「『言語映像』と『映像言語』による表現論の結節点—押井守論の前提として—(『山梨英和大学紀要』第5号 2006年12月) 「押井守論(1)—表現原理の基底にあるもの—(『山梨英和大学紀要』第11号 2013年2月) 表現論によって展開した代表的な文化論。</p> <p>2014年3月5日 「『梶井基次郎』の流儀——〈美〉をめぐる意識と表現—(『梶井基次郎全集(上) 檸檬』大韓民国 ドンチョン社)</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>特になし</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>1982年 10月 「『眠れる美女』論」(第49回 川端文学研究会)</p> <p>1983年 8月 「『東京の人』論」(第52回 川端文学研究会)</p> <p>1984年 8月 「川端康成における言語映像試論」(第56回 川端文学研究会) 川端文学専門家の前で卒業論文の成果を発表したもの。</p> <p>1988年 11月 「習作期における川端康成の〈表現〉意識」(昭和63年度 早稲田大学国文学会 大会) 修士論文に取りあげた問題との関連性から、新たな課題として取り組んだテーマだった。</p>

表・学 加・役 員等 参 発	1995年 12月 「表現装置としての〈私〉—「父母への手紙」論—」(第101回 川端文学研究会)
	2011年 現在 早稲田大学国語教育学会 委員
受 託 共 同 研 究 の 実 績	年 月 年 月 年 月 特になし 年 月 年 月
大学院生指導	特になし
対 研 究 能 力 評 価 に	自己の研究能力に対して、同じ学問領域の学内外の専門家から、評価に関するヒアリングなどを本学はまだ行っていませんので、ありません。

### サービス活動業績

学 内 委 員 会 ・ 作 業 部 会 実 績	2009年4月～2012年3月 エクステンション委員会 委員長
	2010年4月～2012年3月 学生部委員会委員 2011年4月～2012年3月 国際交流委員会 委員 2012年4月～ 日本語・日本文化コース コースコーディネーター 2008年 新カリキュラム検討作業部会
アドバイザー活動実績	担当している基礎ゼミナール(1, 2年生)、専門ゼミナール(3年生)、卒業研究(4年生)を受講する学生たちの、履修・生活・部活・進路などの相談をうけて、アドバイスを行っていくという一般的な活動を、オフィスアワーに限らず昼休みや空き時間に行っている。
後進育成活動実績	大学院での講義や演習を担当したことがないため、具体的な形での後進育成活動の実績はありません。
社 会 貢 献 活 動	(1)講演会 1995年 6月 山梨県立文学館で行われた井伏鱒二展の関連講演として、「井伏鱒二の戦後作品を読む—『遥拝隊長』論—」を行う。  (2)出前講座 2004年 3月 山梨県韮崎市市民教養講座「日本語の豊かさ・おもしろさ・むずかしさ—丸い卵も切りよで四角—」を、中央公民館の市民教養講座の講義として行う。  2012年 6月 甲府城西高校・山梨英和大学連携授業 小論文演習授業 講師 2013年 6月、10月、12月 山梨県立甲府城西高校・山梨英和大学連携授業 小論文演習授業 講師  2013年 3月 平成24年度大学ガイダンスセミナー inやまなし 模擬授業  2015年 高大連携講座 山梨県立甲府城西高等学校

社会貢献活動	(3)公開講座 2009年5月～現在	山梨県立文学館 年間文学講座 講師 (2009年度川端康成、2010年度芥川龍之介、2011年度太宰治、2012年度夏目漱石、2013年度村上春樹)
	2014年 10月	「生命を巡る〈ことば〉と“物語”に触れる——手塚治虫の『火の鳥』論——」 (平成25年度コミュニティーカレッジ講座 大学コンソーシアムやまなし)
	(4)学外審議会・委員会等 2008年4月～2012年3月	大学コンソーシアムやまなし 委員
	2013年 9月	山梨県文学館 協議会委員
	2014年 2月	平成25年度第2回山梨県文学館協議会 出席
	2015年	山梨県立文学館協議会委員 甲府市地域創生戦略会議委員 平成28年度「幼児教育テレビ番組放送事業」 企画提案審査会委員(山梨県教育庁社会教育課)
	(5)その他 2010年4月～2012年3月	キャンパスネットやまなし企画運営委員会 委員
	2011年 12月	「おもてなし条例」制定に伴う県民向け啓発のための山梨県制作のCMの審査
	2012年 6月	富士山の世界文化遺産登録実現に向けての山梨県制作のCMの審査
	2012年 10月	第28回国民文化祭・やまなし2013PRのための山梨県制作のCMの審査
2013年 5月	第28回国民文化祭・やまなし2013夏のステージCMコンペ審査委員	
2013年 8月	第28回国民文化祭・やまなし2013秋のステージCMコンペ審査委員	
2013年 8月	第9回放送文化大賞 関東・甲信越・静岡地区審査会審査委員	

## 成果と目標

専門的成果	<p>① 文学作品や文化事象の読解・分析の作業に生かしていた表現論の様々な技法を、作品の創作や制作の理論に応用することによって、自己表現に興味や関心のある多くの学生の指導に一定の成果を上げることが出来た。</p> <p>② 〈ことば〉や表現ということを目にした、文学作品はもちろんのこと、様々な文化事象の教材化の作業も一段落つき、個々の教材の吟味・内容精査によって、読む・聞く・考える・書く・話すという、人間の表現活動の流れに基づいた体系的な学習活動の枠組みが出来上がった。</p> <p>③ 本来、専門にしている文学における作家や作品の研究と、サブカルチャーと呼ばれる様々な文化事象の研究が、表現論という視点と読者論(享受者論)という視座によって、二本立てで行ってきたことが相乗作用して、それぞれの研究活動を効果的に進めていくことが出来た。</p>
専門的目標	<p>① 文章表現や絵画表現、映像表現による創作や制作を希望する学生の能力の開花、開発、発展に寄与する指導を行うことで、より高い完成度を目指させて、表現欲求を持つ学生に対して、自己表現の奥深さに気付かせて、卒業後も表現活動を継続してもらう。</p> <p>② 人間文化の基本になっている〈ことば〉、そして、その〈ことば〉を駆使することによって成立する表現、さらに、自分たちを取り巻いている文化事象を意識させて、自覚的なコミュニケーション活動の実践によって、日常生活をより豊かなものにしていく指針となるような授業展開を行う。</p> <p>③ 卒業論文のテーマとした、言語映像論と映像言語論の相関性と原理論を、文学作品や文化事象、マンガやアニメーション、日本語表現の問題の読解・分析、理論化・教材化の作業を通して、いっそう進化・深化させていく。</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
フカツ 深津 蓉伸	男	1947年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	Th.M(神学修士)	専門分野	聖書学・キリスト教学	
学 歴	1966年	4月 青山学院大学文学部神学科入学		
	1970年	3月 青山学院大学文学部神学科卒業(神学士)		
	1970年	4月 青山学院大学文学研究科聖書神学専攻修士課程入学		
	1972年	3月 青山学院大学文学研究科聖書神学専攻修士課程修了(文学修士)		
	1972年	4月 青山学院大学文学研究科聖書神学思想専攻博士課程入学		
	1975年	3月 青山学院大学文学研究科聖書神学思想専攻博士課程単位取得退学		
	1975年	9月 プリンストン・セオロジカル・セミナリー大学院修士課程入学		
	1977年	7月 プリンストン・セオロジカル・セミナリー大学院修士課程修了(Th.M)		
実 務 経 験	1974年	2月 日本基督教団新泉教会伝道師		
	1981年	7月 日本基督教団新泉教会主任担任教師(1988年3月まで)		
	1984年	4月 明治学院大学非常勤講師(2005年3月まで)		
	1988年	4月 日本基督教団百人町教会担任教師(2005年3月まで)		
	1991年	4月 ウェスレアン・ホーリネス神学院講師(現在に至る)		
	1992年	4月 日本聖書神学校講師(2005年3月まで)		
	1995年	4月 青山学院大学非常勤講師(2007年3月まで)		
	2005年	4月 山梨英和大学宗教主任・教授(現在に至る)		
受 賞 歴	年	月		
	年	月 特になし		
	年	月		
所 属 学 会	1970年	4月 青山学院大学同窓会基督教学会会員(現在、委員、同学会誌『基督教論集』編集委員)		
	1972年	6月 日本聖書学研究所会員		
	1974年	10月 日本旧約学会会員		
	1983年	7月 日本基督教学会会員		
特 免 資 格 等 ・ ・	1972年	3月 高等学校教諭宗教科第一種免許状取得		
	1972年	3月 中学校教諭宗教科第一種免許状取得		
	1997年	1月 日本基督教団正教師		
	年	月		
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>本学はミッションスクールとして、キリスト教の信仰に基づく人間形成としての学校教育を建学の理念に掲げている。従って、キリスト教科目のうち、『キリスト教と文化』、『キリスト教と山梨英和』が必修として設置されているのであるが、学生の多くがキリスト教に初めて触れる者である故に、大学教育の水準を保ちつつも、できる限り分かり易い内容となるよう工夫する必要がある。また、縁遠さを感じている学生を配慮し、身近な内容をも心がけるべきものとなっている。そのために取られるべき方法としては、さまざまな教材、特に、現代の学生には身近なものとなっている視覚教材の活用があげられる。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>視覚映像の取り入れ；多くの学生にとってなじみの薄いキリスト教について、より身近でリアルなものとしていくため、映像を多く取り入れるよう努める。「偉大なる生涯の物語」「天地創造」「プリンス オブ エジプト」「ブラザーサン、シスタームーン」「フォレスト・ガンブ」等。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>共著『聖書謎百科』(荒地出版社、2006年)；表記の中の「ヤコブとヨセフの信仰は報われたのか？」の項をもとにして講義</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>2007年1月21日、講演「青年と教会」日本基督教団山梨分区社会部講演会；表記講演会にて、青年の指導のあり方をめぐって講演</p>
担当授業科目	<p>2016年度</p> <p>『キリスト教概論Ⅰ』『キリスト教概論Ⅱ』『キリスト教と山梨英和』『キリスト教と現代社会』『聖書学Ⅰ』『聖書学Ⅱ』</p>
代表的シラバス	<p>『キリスト教概論Ⅰ』聖書は数百年、数千年にわたって書き継がれ、読み継がれてきたものであり、世界中の言語に翻訳され、群を抜いたベストセラーであり続けている。同時に、人間の文化や生き方に多大な影響を与えてきた。そこには、人はいかに生きるべきかということについて、時代を越えた共通の真理が描かれている故であり、それらは現代の読者の人生に対しても指針、希望、力を与えてくれるものである。講義ではこの聖書が有益で身近なものとなるよう解りやすく解説をしていきたい。また、そのためのビデオも活用したい。</p>
教育改善活動	<p>本学のFD推進委員会に委員として所属し、2010年11月9日に風間重雄学長、木田献一山梨英和学院長を講師として、「人間文化学部人間文化学科設立への思い」(木田院長)、「人間文化学部人間文化学科としてのディプロマポリシー」(風間学長)の講演題でのFD研究会を企画した。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>『聖書の世界』コミュニケーション力をつける目的もあって、授業はグループワークで進められた。その効果は「チームワークが発揮できた」という感想にも表われている。和気あいあいの雰囲気の中、活発な議論がなされており、「楽しい授業だった」という感想はその反映と思われる。</p> <p>「グループ分けでよかった」というのは、履修の確定まで入れ換えが激しかった故であり、次回は履修の確定を待ってグループ分けしたい。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>特になし</p>

## 研究業績

研究の特徴	<p>海には様々な海流という流れがあって、それらが気温や気象、さらには農業や経済にまで作用していくように、歴史にも、傾向という様々な流れが存在している。それらは、神観や神学、倫理観や人間観あるいは派閥の継承に見られるような傾向の流れであったりする。歴史の出来事はこうした傾向の表面化とも言えるのであって、歴史理解にとっては、このような諸傾向の抽出と把握が重要なものとなる。以上のような傾向の流れは聖書の内容にも影響してきた。聖書からそうした傾向を抽出する。また、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の源流である旧約聖書がそれらの諸宗教に対してどのような影響を与えてきたか、またどのように解釈されてきたか、そして現代のキリスト教や現代社会にどのような意味を持つかをも探る。</p>
研究 歴 経	<p>1996年 青山学院大学総合研究所、キリスト教文化研究センター研究員(1998年まで) 年</p>
研究 実 績	<p>(1) 著書 翻訳『ダニエル書・ホセア書・アモス書』ケンブリッジ旧約聖書注解19,1981年,新教出版社 共著『古代イスラエル預言者の思想的世界』「預言者エレミヤの傾向史的研究」新教出版社,1997年 共著『新版 総説 旧約聖書』「エレミヤ書」日本キリスト教団出版局、2008年 共著『聖書学用語辞典』日本キリスト教団出版局、2008年 翻訳『エレミヤ書』現代聖書注解スタディ版,日本キリスト教団出版局、2010年</p> <p>(2) 学術論文 「ホセア書1章—3章の考察」『基督教論集』18号、青山学院大学基督教学会、1973年 「ホセアの予言とその時代」『基督教論集』23号、青山学院大学基督教学会、1979年 「ヤハウイストの編集」『基督教論集』30号、青山学院大学基督教学会、1987年 「聖書に見る法の精神」『婦人新報』1052号、日本基督教婦人矯風会、1988年 「旧約聖書の人道主義的傾向」『基督教論集』33号、青山学院大学基督教学会、1990年 「ヤコブとヨセフ」「ヨシュアと士師」『歴史読本ワールド』新人物往来社、1990年、『別冊歴史読本』新人物往来社、1995年 「ゼカリヤ書4章1-14節」『説教者のための聖書講解』75、日本基督教団出版局、『12小預言書』日本基督教団出版局,2000年 「サムエル」『のら』創刊号、雑誌「のら」発行所、1991年 「イスラエルの王国観—申命記を中心として—」『基督教論集』36号青山学院大学同窓会基督教学会、1992年 「旧約聖書学の課題と展望」『新教コイノー=ア』12号、新教出版社、1993年 「サムエル—国家と宗教—」『のら』7号、雑誌「のら」発行所、1993年 「ダニエル書7章15-28節」『アレテア』4号、日本基督教団出版局、1994年、『アレテア—釈義と黙想』日本基督教団出版局、2003年 「詩編8編」『アレテア』9号、日本基督教団出版局、1995年 「マタイによる福音書27章27-44節」『アレテア』22号、日本基督教団出版局、1998年、『マタイによる福音書』日本基督教団出版局、2001年 「エロヒストの編集—その人道主義的傾向—」『研究叢書』8号、青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センター、1999年</p>

研究実績	<p>「平和への希求ー紀元前八世紀の世界的視座ー」『研究叢書』8号、青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センター、1999年</p> <p>「バビロニア捕囚とモーセ五書」『基督教論集』44号、青山学院大学同窓会基督教学会、2001年</p> <p>「詩編45編」『アレテイア』33号、日本基督教団出版局、2001年</p> <p>「一神教をめぐって」『基督教論集』46号、青山学院大学同窓会基督教学会、2003年</p> <p>「悔い改めをめぐって」『基督教論集』47号、青山学院大学同窓会基督教学会、2003年</p> <p>「自意識の変遷史」『聖書と神学』16号、日本聖書神学校キリスト教研究会、2004年</p> <p>「偶像礼拝(異教礼拝)をめぐって」『基督教論集』49号、青山学院大学同窓会基督教学会、2005年</p> <p>「日本人とキリスト教」『山梨英和大学紀要』5号、山梨英和大学、2006年</p> <p>「青年とキリスト教」『山梨英和大学紀要』6号、山梨英和大学、2008年</p> <p>「全能の神」『山梨英和大学紀要』7号、山梨英和大学、2009年</p> <p>「聖書学と日本」『基督教論集』52号、青山学院大学同窓会基督教学会、2009年</p> <p>「日本人とキリスト教ー山梨の場合ー」『山梨英和大学紀要』8号、山梨英和大学、2010年</p> <p>「日本人とキリスト教ー山梨英和学院の場合ー」『山梨英和大学紀要』9号、山梨英和大学、2011年</p> <p>「日本人とキリスト教ーキリシタン伝道の場合ー」『山梨英和大学紀要』10号、山梨英和大学、2012年</p> <p>「聖書における女性表現をめぐって」『山梨英和大学紀要』11号、山梨英和大学、2012年</p> <p>「日本人とキリスト教ー日本人の宗教意識とキリスト教ー」『山梨英和大学紀要』12号、山梨英和大学、2013年</p> <p>「日本人とキリスト教ー初代キリスト教と日本ー」『山梨英和大学紀要』13号、山梨英和大学、2014年</p> <p>「日本人とキリスト教ー旧約聖書父祖物語の場合ー」『山梨英和大学紀要』14号、山梨英和大学、2015年</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 青山学院大学同窓会基督教学会学会誌『基督教論集』編集委員(1998年～現在まで)</p>	
	競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>1978年 2月 青山学院大学基督教学会委員</p> <p>1978年 10月 青山学院大学基督教学会研究発表「ホセアの予言とその時代」</p> <p>1986年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「ヤハウイストの編集」</p> <p>1988年 11月 明治学院大学キリスト教研究所研究発表「旧約聖書におけるヒューマニズム」</p> <p>1991年 6月 日本聖書学研究所研究発表「イスラエルの王国観ー申命記を中心としてー」</p> <p>1994年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「預言者エレミヤの傾向と生涯」</p> <p>2002年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「一神教をめぐって」</p> <p>2008年 4月 青山学院大学基督教学会研究発表「聖書学と日本」</p>	

託共同研究の実績・受	1996年 4月 青山学院大学総合研究所、キリスト教文化研究センター研究員として「平和と人権プロジェクト」に旧約聖書学専門の立場で参画し共同研究を行った(1998年まで)。
大学院生指導	特になし
研究能力に対する評価	19世紀末以来、旧約聖書学は急速に、発達をしてきたが、それは、聖書の各文書がいかに編集されてきたかを分析することに力点が置かれた。そして各文書の中で、編集者(学問的には主として申命記学派と呼ばれているが)の言葉を見い出していくことに努力が払われてきた。結果として、各文書における本来の言葉、著者、語り手の言葉が削除されていくこととなり、これは本来の著者の実像が薄れていき、消えていくという副産物をもたらした。ここ20年来にわたって提唱してきた傾向史的研究は、編集者の傾向(例えば人間観)と著者の傾向を抽出して文献に当てはめていくことにより、失われ、ぼやけてしまった著者の実像を浮き立たせていこうとする試みである。これは現在、エレミヤ書に適用されているが、今後他の諸文書にも試みられていかねばならない。また、この傾向史は歴史の根底に流れる海流のようなものとして位置づけられ、この流れの上に各文書が出現しているものと受けとられる必要がある。この観点から、各文書の神観、思想、伝統への向き合い方を抽出する試み(例えば「全能の神」『山梨英和大学紀要』7号)もなされつつある。そしてさらには、キリスト教の傾向と日本人(民族)の傾向を抽出し、キリスト教宣教はいかになされ、今後いかにあるべきかという実践面にも関心を広げている。今後以上のような諸方面への研究が充実していくことにより、「傾向史的研究」の有効性が確かめられるものと考えている。

### サービズ活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2005年 4月 宗教主任(現在まで) 2005年 4月 宗教委員会委員長(現在まで) 2005年 4月 学生委員会委員(2007年3月まで) 2005年 4月 大学運営協議会委員(2008年まで) 2005年 4月 大学運営委員会委員(2012年3月まで) 2007年 4月 司書・学芸員課程運営委員会委員(2012年3月まで) 2009年 4月 学部FD推進委員会(2012年3月まで) 2010年 4月 進路支援委員会(2011年3月まで) 2011年 4月 総合人間文化コースコーディネータ(2012年3月まで) 2012年 4月 大学運営評議会委員(現在まで) 2014年 4月 総合人間文化コースコーディネータ(2015年3月まで)
アドバイザー活動実績	2005年4月より現在まで担当(教養演習、専門演習、卒業研究、基礎ゼミナール)
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	(1)講演会 特になし (2)出前講座 2008年 11月 山梨英和高等学校(高大連携授業として担当) 2009年 3月 山梨英和高等学校(高大連携授業として担当) (3)公開講座 2006年 7月 山梨英和大学公開講座「日本人とキリスト教」を担当

社会 貢 献 活	(4)学外審議会・委員会等 年 月 特になし
	(5)その他 2015年 12月 山梨県立愛宕山少年自然の家「あたごやまでクリスマス会」講師

### 成果と目標

専門的成果	<p>① 「預言者エレミヤの傾向史的研究」(『古代イスラエル預言者の思想的世界』,新教出版社)はエレミヤ書に傾向史を適用し、編集者の人間観と預言者エレミヤの人間観を対照することによって、エレミヤの実像を浮き彫りにした。</p> <p>② 上記方法論は、旧約聖書を貫く神観や思想に対しても、その源流から後世への流れを明らかにしえると考えられる。この観点から、これまで人道主義的傾向、国家観、平和観、一神教、悔い改めといった重要事項について考察を進めてきた。</p> <p>③ 近年では、日本人の傾向と基督教の傾向を対照させ、日本における基督教宣教のあり方という実践面にも関心を広げている。</p>
専門的目標	<p>① 今後、傾向史的研究を聖書文献にさらに適用していくことにより、聖書内容がより実体的、立体的に浮かび上がることを目指していく。</p> <p>② 傾向史的研究の実践的応用として、日本人としての聖書の見方はどうあるべきか、日本人にとっての基督教はどうあるべきかを探究していく。</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

## 専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
クボウチ セツコ 窪内 節子	女	非公表	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(心理学)	専門分野	臨床心理学・学校臨床心理学・学生相談	
学 歴	1968年	3月 横浜共立学園高等学校卒業		
	1972年	3月 横浜国立大学教育学部小学校教員養成課程卒業		
	1979年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科教育原理専攻教育心理学入学		
	1981年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科教育原理専攻教育心理学修了		
	2003年	4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻博士後期課程入学		
	2006年	3月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻博士後期課程修了		
	2007年	1月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻において博士(心理学)取得		
実 務 経 験	1972年	4月 東京都目黒区五本木小学校教諭(～1979年3月)		
	1979年	10月 国際基督教大学カウンセリングセンター 非常勤カウンセラー(～1993年6月)		
	1988年	1月 恵泉女学園大学・短期大学英文科 非常勤カウンセラー(～1993年3月)		
	1989年	4月 恵泉女学園短期大学英文学専攻非常勤講師 心理学及び教育心理学担当(～1996年3月)		
	1990年	4月 青山メンタルヘルスカウンセラー(～現在)		
	1993年	4月 恵泉女学園大学・短期大学英文学専攻 学生相談室専任カウンセラー(～1996年3月)		
	1996年	4月 山梨英和短期大学専任講師(～1996年3月)		
	1997年	4月 富士市立看護専門学校非常勤講師 (～2010)		
	1998年	4月 山梨英和短期大学助教授 大学との兼任(～2003年3月)		
	1999年	4月 甲府市立東中学校カウンセラー(～2000年3月)		
	2000年	4月 玉川大学 非常勤講師(～2002年3月)		
	2001年	4月 甲府市立西中学校スクールカウンセラー(～2001年3月)		
	2001年	4月 山梨県養成訪問カウンセラー(～現在)		
	2001年	4月 山梨大学保健センター非常勤講師 学生相談担当(～2002年3月)		
	2002年	4月 山梨大学工学部非常勤講師 (～現在)		
	2002年	10月 山梨英和大学人間文化学部助教授(～2003年3月)		
	2003年	4月 山梨県立看護大学非常勤講師(～2007年3月)		
	2006年	4月 山梨英和大学教授(～現在)・山梨英和大学カウンセリングセンター所長(～2008年3月)		
2011年	4月 山梨英和大学副学長(～現在)・同大学院臨床心理学専攻主任(～2012年3月)			
2014年	4月 山梨英和大学広報戦略担当副学長			
2015年	4月 山梨英和大学社会連携担当副学長(2016年2月まで)			
歴賞受	2012年	5月 日本学生相談学会学会賞受賞		
所 属 学 会	1994年	4月 日本学生相談学会正会員(監事)		
	1982年	4月 日本心理臨床学会正会員		
	1999年	4月 日本精神分析学会正会員(2015年3月まで)		
	2008年	10月 日本臨床動作学会正会員		
	2011年	8月 日本教育心理学会正会員(2015年3月まで)		
	2016年	6月 精神分析的な心理療法フォーラム正会員		
特 免 資 許 格 等 ・ ・	1972年	3月 小学校1級普通免許(小1普第518号)		
	1972年	3月 中学校1級普通免許(中1普第838号)		
	1972年	3月 高等学校2級普通免許(高2普第1000号)		
	1989年	月 臨床心理士(941号)		
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	臨床心理学は、現実生活している対象と関わりながら、その実践を研究していく学問である。そこで、学生を教えるにあたって、臨床心理学や学校心理学等の知識として理論や技法を身に付けることはもちろんのこと、①人との関係性の構築、②コミュニケーション、③人間関係を通して自己を発見することの3点を重視している。そのためにたとえ講義であっても、学生と教員の双方向のコミュニケーションができるよう学生への問いかけや体験的ワークなどを取り入れ、常に生き生きとした講義ができるよう配慮している。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.“学生相談的教育指導”(窪内考案)の実施          長年の学生相談経験を生かし、学生の心理的成長を促すことを目的として、担当した教職課程の授業全体を学生が教師という仕事を「役割実験」する機会として提供した。その指導の仕方を“学生相談的教育指導”と名づけ、その観点を、①人間関係能力の育成、②授業に何らかのハードルを設ける、③学習したことを社会で実践する、④学生へのフィードバック、を挙げ、追跡研究し発表した。この方法がシンポジウム「学生相談の立場から大学教育を考える」(日本学生相談学会17回大会)にも取り上げられ発表討議された。</p> <p>b.講義、臨床体験グループ作業、シェアリング、ふりかえりという形式で、自己理解、他者理解を深め、対人関係能力を高めていく体験的授業の実施          カウンセラーになるには、これまでの臨床心理学の知見を理解し、臨床実践の場で人間関係や援助の相互作用に気づき、有効な相互作用の関係を構築できることが必要となる。そのために、体験学習を取り入れながら、自己理解を深めながら他者との相互関係についての理解をめざしている。具体的には、カウンセリングの基礎を学んでいることを前提として、心理教育プログラムにおけるコンセンサス、問題解決、ロールプレイングなどの実習を行ない、対人援助技法について身につけていく。</p> <p>c. 学生の体験レポートを役立てつつスクールカウンセラーについて学ぶ授業実践          豊富なスクールカウンセラーの経験をもつ筆者の、実際の体験談を述べた後、小レポートで、学生自身のいじめや不登校について記述を求め、そのレポートを匿名で講義で取り上げ、学校臨床心理学側面を加えて筆者が解説することで、より実践的で身近な問題として学生の興味を喚起される授業となっている。</p> <p>d. 臨床心理面接方法習得のための演技的手法の導入          面接をどう始めるか、面接の進め方、「わかる」ということについて、見立て、「ストーリー」の読み方、家族との会い方などについて学ぶ。その際、学生にカウンセラーとクライアントの役を演じさせ、それを他の学生に見せることで、自らの面接のあり方を気付かせるよう配慮する。特にクライアント役には、病理を持つ人を演じさせることで、カウンセラーの応答をより敏感に感じ取り、各人の人間関係のあり方が浮かび上がらせる中で、臨床心理面接を学習させている。その結果実際の臨床心理面接について学ぶと同時に、自らの対人関係のあり方についての気づきを深められる。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a. メンタルヘルスと心理学: 吉武光世・窪内節子・山崎洋史・小野留美子(共著)4章、6章、7章全202頁のうち41頁 学術図書出版社 1995.2 人間理解の学問である心理学をメンタルヘルスに焦点をあてて書いたものである。          第1部は、人間理解の基礎として、不適応行動を理解するための枠組みとなる学習理論、情報処理過程、発達理論、集団の役割と個人の行動について言及した。          第2部は、メンタルヘルスの維持・増進の観点から、パーソナリティの理論的枠組みを概観し、心理検査による人格理解の方法、症状形成の背景、心理療法などについて具体例を交えて解説した。</p> <p>b. 楽しく学ぶこころのワークブック: 窪内節子編著書 全138ページ 学術図書出版 1997.4          心理学の理論をもとに、精神発達過程、人間関係、適性などから本来の自分を探り、身近なこころの問題を中心に、心理学を体験しながら学べるよう理論編と体験を楽しむ実践編とに分けて書いた本である。カウンセラーとしての臨床体験から得られた知恵と実践の仕方が随所に加味され、心理学の基礎知識から心理療法の意味や手法を理解するために分かりやすく書いたが、内容的には専門書を目指した。</p> <p>c. 生徒理解と教育相談: 窪内節子(単著)全191ページ 玉川大学通信教育部 2001. 3月          筆者のカウンセラー経験を生かし、具体的で実践的なものを目指し、生徒を理解するために中学・高校生の心理と発達課題、生徒理解の内容や方法、学業不振への対応、進路指導の方法と実際、教育相談とカウンセリング、問題行動の指導・援助の実際について、心理の専門家の立場から取り上げてある。教育相談(カウンセリングを含む)を中心に生徒指導、進路指導、さまざまな問題行動の実際とその指導援助について書いたものである。筆者のカウンセラー経験を生かし、具体的で実践的なものを目指し、生徒を理解するために中学・高校生の心理と発達課題、生徒理解の内容や方法、学業不振への対応、進路指導の方法と実際、教育相談とカウンセリング、問題行動の指導・援助の実際について、心理の専門家の立場から取り上げてある。</p> <p>d. やさしく学べる心理療法の基礎: 窪内節子 吉武光世(共著) 培風館 約220頁のうち約110頁 2003.4          カウンセラーの基礎姿勢に始まり、精神分析とそれ以後の様々な心理療法に焦点をあて、各章にサイコセラピー練習という項目を設け、各心理療法の課題をこなしていくことで自然と心理療法の理論が学べる仕組みを取り入れ書いた心理療法論である。</p>

教育能力	<p>e.窪内節子(共著):学校における心理・社会的な問題の相談と対応 作問慎一編集者代表 教育心理学 玉川大学出版部 2005. 3. 1</p> <p>「教育心理学」のテキストとして、教師がスクールカウンセラーを如何に有効に活用していけるかに焦点をあて、教師の行うカウンセリングの方法など、最新の児童・生徒の心理理解の方法についても言及した。</p> <p>f. 窪内節子(共著): はじめて学ぶメンタルヘルスと心理学 —「こころ」の健康をみつめて 学文社 3、8、9章(61頁)2005.4. 1</p> <p>前書「メンタルヘルスと心理学」の姉妹書で、よりメンタルヘルスに焦点をあてて書いたものである。心の発達に始まり、病める心の理解のために心理検査や心の病気についてかなり詳細に書き、解決法としての心理療法について具体例を交えながら解説している。</p>
担当授業科目	<p>2016年度: 学部: 専門ゼミナール、学校臨床心理学 臨床心理面接実習、卒業論文 大学院: 臨床心理学特論 I、心理臨床面接特論、心理臨床事例検討、修士論文</p>
代表的シラバ	<p>例として「生徒指導」のシラバスを取り上げる。(授業概要)</p> <p>学級経営が困難な「学級崩壊」状態にある学級を再生させるための授業と生徒の指導法について学ぶ。学級崩壊に至らないための教師の工夫について、討議形式を用いて学生とともに考えていく。その際、生徒を理解することに重点を置いた生徒指導、進路指導、教育相談についての最新の情報や技法についても取り上げる予定である。以上のように、学生とのディスカッションを加え、主体的に学ぶながらその内容を深めていく授業を心がけている。</p>
活改教動善育	特になし
教育能力に対する評価	<p>(1)①学部学生による授業評価 学校臨床心理学: 約97%以上の人から満足という評価で、実体験をもとに話されるので、イメージしやすかった、前期の授業で一番知識を得る授業だったなどの感想を得た。悪い点は、「板書の字が読みにくかった」挙げられた。 生徒指導: ほぼ全員から満足をもらい、「学生の意見をもとめ、言いやすい雰囲気だった」学生同士発表したり、ワークをしたりするのが良かったという。 その他、基礎ゼミ、専門ゼミ、卒業研究においても同様の評価が得られた。</p> <p>②大学院生による授業評価 2013年度の学生による授業評価から臨床心理面接特論: 5点評価で4.9を得て、臨床現場の空気が伝わってきた。言葉が心に残った。分かりやすく、受講しやすかったなどの自由記述が寄せられた。臨床心理学特論: 4.9の評価を得て、心理臨床家として自分の成長に役立つなどの感想が寄せられた。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 現在、本学学部・大学院共に授業評価は行っていない。しかし、文部科学省が後援する全国大学学生相談担当者を対象とする全国学生相談研修会の分科会講師評価において、2011年度・2012年度5点評価で4.71および4.23を獲得した。その際の記述として、本当に楽しかったです。自身の捉え方、認識が広がった気がします。講師のパーソナルパワーにより、内容に深まりができたと感じるなどが挙げられた。</p>

## 研究業績

研究の特徴	<p>臨床心理学は、実践を基盤とする学問である。したがって、理論や技法の知識だけでなく対人援助職としての研鑽が不可欠な学問である。その結果として、対象となる者の心理内容を把握しでき、研究が可能となる特徴がある。特に次のような観点について、関心を持ち研究を進めている。</p> <p>a.大学生を対象にする学生相談において、青年の幼児化が進み、内省体験が減少して、主体となる「自分」が希薄になり、アイデンティティの形成が困難となっている。このようなアイデンティティ形成の道筋が多様化している現代の青年の心理内容について検討する。</p> <p>b.アイデンティティ確立を意味する「自分がある」という意識形成に焦点を当てた事例の検討を通して、青年期のクライアントの自我意識形成プロセスと、そのプロセスにおけるセラピスト-クライアント関係のあり方を考察する。</p> <p>c.既知集団の研修型エンカウンター・グループに有効な、様々な身体的表現を媒介とするオリジナルなプログラムの開発と施行方法について</p> <p>d.大学退学とその防止に繋がるこれからの新入生への学生相談的アプローチのあり方</p> <p>e. スクールカウンセラーがより有効に機能するための他業種との連携の意義と有り方の検討</p>
-------	--

研究 経 歴	<p>1980年 土居健郎から週2回のスーパービジョンを受ける。(1982年12月まで)</p> <p>1983年 関東中央病院精神神経科(小倉清)にて病院研修。(1988年まで)</p> <p>1984年 精神療法研究会で事例研究。(2009年3月まで)</p> <p>1987年 首都圏心理臨床懇話会で事例研究。(2010年3月)</p> <p>1992年 ICU事例研究会で事例研究。(1998年3月まで)</p> <p>1992年 関東地区学生相談研究会で事例研究等。(～現在)</p> <p>1994年 ヒルズ研究会で事例研究。(2008年3月まで)</p> <p>1996年 小倉研究会(わかば会)で事例研究。(現在まで)</p> <p>1997年 日本語臨床研究会にて事例研究。(2002年3月)</p> <p>1997年 自分の言葉で語る臨床研究会主宰。(～現在)</p> <p>2014年 フロイト論文講読会(福本修)(2016年3月まで)</p>
研究 経 歴	<p>2007年 青山動作法研修会で臨床動作法の訓練。(～現在)</p> <p>2011年 わかば会(小倉清主宰事例研究会)。(～現在)</p>
研究 実 績	<p>(1)著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 窪内節子(分担執筆):学生相談におけるガイダンスとカウンセリング 都留春夫監修 学生相談—理念・実践・理論化 p95-107 星和書店 1994.5</li> <li>2. 窪内節子 吉武光世 山崎洋史 小野留美子(共著): メンタルヘルスと心理学 p79-94, p155-169, p181-198 学術図書出版社 1995.2</li> <li>3. 窪内節子(分担執筆):こころの日曜日3 菅野泰蔵編著 p29-30, p187-190 研友企画出版 1995.6</li> <li>4. 窪内節子(分担執筆):全国大学学生相談ガイドブック 学生相談ガイド編集委員会編 p4-5, p76-77 実務教育出版 1996.4</li> <li>5. 窪内節子(分担執筆):こころの日曜日4 菅野泰蔵編著 p158-159, p206-207 研友企画出版 1996.6</li> <li>6. 窪内節子(単編著):楽しく学ぶこころのワークブック 全138頁 学術図書出版 1997.3</li> <li>7. 窪内節子(分担執筆):いつもこころに休日を 菅野泰蔵編著 p56-58 成美堂出版 2000. 4</li> <li>8. 窪内節子(単著):生徒理解と教育相談 玉川大学通信教育部 全191頁 2001.3</li> <li>9. 窪内節子(分担執筆): 短期大学生の学生生活 鶴田和美編著 学生のための心理相談 p. 155-167培風館 2001. 11</li> <li>10. 窪内節子 吉武光世(共著):やさしく学べる心理療法の基礎 培風館 約220頁のうち, 2, 3, 4, 5, 11章(約110頁)2003.4</li> <li>11. 窪内節子(単監訳):バチエラーズ—結婚しない男達の心理 全208ページ 世織書房 2003. 12</li> <li>12. 窪内節子(共著):学校における心理・社会的な問題の相談と対応 2005. 3. 1 作間慎一編集者代表 教育心理学 玉川大学出版部 p.124-154</li> <li>13. 吉武光世編著 窪内節子・山崎洋史・平澤浩一(共著):はじめて学ぶ メンタルヘルスと心理学—「こころ」の健康をみつめて 学文社 3,8,9章(61頁)2005.4. 1</li> <li>14. 窪内節子(分担執筆):学生相談における可変的な面接構造の重要性 鶴田和美・斎藤憲司共編 学生相談シンポジウム—大学カウンセラーが語る実践と研究 培風館 p.86-90 2006. 11</li> <li>15. 窪内節子(分担執筆):相談対象に応じた援助 短大・高専・専門学校生 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編 学生相談ハンドブック 学苑社 p.89-92 2010. 2.20</li> </ol>

研究実績	<p>16. 窪内節子(分担執筆):大学での問題行動—薬物依存 心理臨床学事典 日本心理臨床学会編 p.196-197 2011.8.31</p> <p>17. 窪内節子(単編著):やさしく学べる心理療法に実践 培風館 2011. 12</p> <p>18. 窪内節子・設楽友崇・高橋寛子・田中健夫(編著) 学生相談から切り拓く大学教育実践:学生の主体性を育むための仕掛け 2015.3 学苑社</p> <p>(2)学術論文(最新5年間のもの)</p> <p>1. 窪内節子:大学退学とその防止に繋がるこれからの新入生への学生相談的アプローチのあり方 山梨英和大学紀要 8号 p.9-17 2009. 3</p> <p>2. 窪内節子:書評「事例から学ぶ学生相談」鶴田和美・桐山雅子・吉田昇代・若山隆・杉村和美・加藤容子 編著 学生相談研究 第31巻 第2号 p.175-180 2010.11</p> <p>3. 今村亨・窪内節子:効果的な初年次教育の導入に関する研究—山梨英和大学におけるアカデミックリテラシー の内容分析を中心に 山梨英和大学紀要第10号 p.68-81 2011.3</p> <p>4. 窪内節子:教育臨床30年を生きて—その出会いと喜び 山梨英和大学心理臨床センター紀要第6号 p.94-98 2011.5</p> <p>5. 窪内節子:管理的立場の経験から中退予防・不登校に取り組んで 学生生活にかかるリスクの把握と対応に関するセミナー ～中途退学、休学、不登校の学生に 対する取り組み～報告書 p49 -51 独立行政法人日本学生支援機構 2014. 3</p> <p>6.窪内節子:母親の自己実現に繋がる子育て支援試論 山梨英和大学紀要14号 2015.3</p> <p>7. 窪内節子:山梨英和大学における学生中心(student centered)のメンタルヘルス対策の実践 私学経営 No.495 p.30-37 2016.5.</p> <p>(3)その他</p> <p>1. 窪内節子:ベテランカウンセラーから若者への生き方案内Ⅲ 山梨英和大学学生相談室報告書 2010.3 10-14</p> <p>2. 窪内節子・鈴木健一:学生相談の基礎 第48回全国学生相談研修会報告書 p.18-19 2011.3</p> <p>3. 窪内節子:ベテランカウンセラーからの若者への生き方案内Ⅳ 山梨英和大学学生相談室報告書 2011.3 8-10</p> <p>4. 窪内節子:ICU教育が私にもたらせたもの ころの面影 創設30周年・55周年記念文集合本 国際基督教大学心理学研究室 p.54-55 2012.2</p> <p>5. 窪内節子:ベテランカウンセラーからの若者への生き方案内Ⅴ 山梨英和大学学生相談室報告書 2012.3 10-13</p> <p>6. 窪内節子:学生相談を語る(XVI)—相談実践と組織づくりの往復から 第49回全国学生相談研修会報告書2013.3</p> <p>7. 窪内節子:ベテランカウンセラーからの若者への生き方案内Ⅵ 山梨英和大学学生相談室報告書 2013.3 9-12</p> <p>8. 菅野泰蔵・窪内節子:危機について考える—対処と予防、そしてあらたな模索—全国学生相談研修会報告書2013.</p> <p>9. 窪内節子:心理臨床センター紀要巻頭言 山梨英和大学心理臨床センター紀要9号 2014. 5</p> <p>10. 窪内節子:ベテランカウンセラーからの若者への生き方案内Ⅷ—福島での傾聴ボランティアの体験から</p> <p>11.牛山茜・窪内節子:過剰適応者の本来感に影響を与える要因の検討 日本心理臨床学会第34回大会発表論文集 p. 315 2015.9</p> <p>12. 窪内節子:ベテランカウンセラーからの若者への生き方案内Ⅸ —これからの若者の新しい生き方— 山梨英和大学学生相談室報告書第9号 2016.2</p>
競争的資金採	<p>2011年 日本臨床心理士資格認定協会平成23年度臨床心理学の実践に関する研究助成 10月 黒田浩司・馬場禮子・窪内節子・五味義夫・山口勝弘・田代順・田中健夫・森稚葉・ 奥村弥生・小野綾子・篠原恵美 「初学者のケース担当における体験をコンテインする教育・訓練システムの研究」 2011年 日本学生相談学会学会賞受賞</p>
表・学会等発 加・役員参	<p>(1)学会発表等(最新のものを5編を記載)</p> <p>2012年 9月 窪内節子:災害後ケアのための効果的な学級ミーティング実施について —心のケアのための絵本を用いて簡易的ディブリーフィングを促進する— 第31回日本心理臨床学会 2012.9</p>

学会等発表・役員参加	2012年	9月	本田綾乃・窪内節子:不登校の親の会における母親の変化過程 第31回日本心理臨床学会 2012.9	
	2012年	9月	加賀美くみ・窪内節子:大学留年生におけるすとりす対処方略に関する研究 第31回日本心理臨床学会 2012.9	
	2012年	12月	内閣府公募事業「子ども・若者支援ネットワーク形成のための研究会事業シンポジウム 基調講演:窪内節子「山梨における若者支援の現状とその連携を探る」	
	2013年	5月	学会賞受賞記念講演:窪内節子「私の学生相談、これまでとこれから」 第31回日本学生相談学会 2013.5.20	
	2013年	11月	山梨県教育庁職員対象講演会「心を癒すストレスマネジメント体験」 山梨県ぴゅあ総合大研修室 2013. 11. 15	
	2014年	8月	今井明日香・窪内節子:教員の援助行動における意思決定に関する研究— 援助要請回避に着目して 日本心理臨床学会第32回大会口頭発表	
	2014年	10月	動作法の集団施行にみる導入前後の姿勢の変化 第22回日本臨床動作学会口頭発表 大阪大学 2014.10.11	
	2015年	9月	牛山茜・窪内節子:過剰適応者の本来感に影響を与える要因の検討 日本心理臨床学会第34回大会ポスター発表 2015.9.19	
	(2)学会等の役員参加(最新5年間のもの)			
	2010年	5月	第28回日本学生相談学会事例研究発表座長	
	2010年	8月	山梨県総合教育センター研修会講師・企画運営	
	2010年	9月	第29回日本心理臨床学会事例研究発表司会者	
	2011年	5月	第29回日本学生相談学会事例研究発表座長	
	2012年	5月	第31回日本学生相談学会事例研究発表座長	
	2012年	5月	内閣府公募事業 「平成24年度 子ども・若者支援地域ネットワーク形成研修会」世話人	
2014年	5月	第32回日本学生相談学会研究発表座長		
2004年5月～2013年5月 日本学生相談学会理事(編集委員)				
2006年6月～2014年6月 山梨県臨床心理士会事務局長				
2011年4月～2015年3月 山梨県総合計画審議会委員				
2014年7月～2018年6月 山梨県青少年問題協議会委員				
2014年8月26日～2016年8月25日 山梨県いじめ問題調査会委員				
2016年5月～2019年5月 日本学生相談学会倫理委員会委員				
共同研究・受託研究の実績	(最新のもの)			
	2004年	4月	学校臨床場面における心理査定活用についての一考察 面接導入への有効性の観点から 山梨英和大学学生相談室との共同研究	
	2005年	5月	カウンセラーとして授業に携わる試み-新入学生の適応支援のために- 山梨英和大学学生相談室との共同研究	
	2006年	5月	身体的訴え:新入学生の適応支援のキーワード 山梨英和大学学生相談室との共同研究	
	2007年	3月	中国高等教育の現状と留学生問題 中国学生相談学会会長 樊 富珉先生を囲んで学生相談学会国際交流委員会委員として	
	2009年	3月	学生相談と心理臨床—現場に生きる心理臨床の創造とは— 京都大学カウンセリングセンターとの共同研究	
	2011年	10月	日本臨床心理士資格認定協会平成23年度臨床心理学の実践に関する研究助成 黒田浩司・馬場禮子・窪内節子・五味義夫・山口勝弘・田代順・田中健夫・森稚葉・ 奥村弥生・小野綾子・篠原恵美 「初学者のケース担当における体験をコンティンする教育・訓練システムの研究」	

大 学 院 指 導	<p>大学院修士論文指導教員(副査)</p> <p>2005年度 1. 子育てサークルにおける心理的効果と母親援助の可能性に関する一考察</p> <p>2006年度 1. 職場におけるストレス・コーピングー愛着スタイルとの関連の検討 2. 教師との関係形成を重視したスクールカウンセリングに関する研究 ー予防的観点から</p> <p>2007年度 1. 抑うつ傾向にある青年への支援プログラムの効果測定 ー認知行動療法による抑うつ軽減プログラムを自己効力感の側面から考える 2. 障害児とその母親の遊び場面に関する一考察</p> <p>2008年度 1. キャリア支援の一環としての集団コラージュ導入の試み 2. 学生相談における贈り物の意味 ー心理面接過程におけるターニングポイントの視点からー</p> <p>大学院修士論文指導教員(主査)</p> <p>2009年度 1. 高齢者の心理に与えるコラージュ継続制作の影響 2. 大学生における対人関係が自己受容に及ぼす影響ー愛着との関連ー</p> <p>2010年度 1. グループにおける「語り」を通じた介護職従事者への関わり ーストレスケアの一環としての心理的援助の試みー 2. 小中移行期におけるコンピテンスの変化と学校適応の関係</p> <p>2011年度 1. 不登校の子どもを持つ母親のセルフヘルプグループに関するー 2. 大学留年生におけるハーディネスとストレス対処方略との関連</p> <p>2012年度 1. 青年の自尊感情に与える重要な他者の影響に関する一考察 2. 「物語としての自己」を支える語り手・聞き手の関係性についての一考察</p> <p>2013年度 1. 教員の援助要請行動における意思決定に関する研究: 援助要請回避に着目して</p> <p>2014年度 1. 過剰適応傾向者の本来感に影響を与える要因の検討: 成功の捉え方に着目して 2. 自己愛の脆弱性に注目した不登校傾向の生徒に関する研究</p>
	<p>対 研 す 究 る 能 評 力 価 価 に</p> <p>①日本学生相談学会の編集委員に推挙され、編集作業に当たっている。 ②日本心理臨床学会における論文査読の推薦を受けた。(2008年度・2009年度) ③学生相談の立場から心理臨床の新しい視点を提供したと京都大学カウンセリング・センター紀要に取り上げられた。 ④長年の学生相談研究や活動に対して学会賞を授与された。</p>

### サービス活動業績

学 内 委 員 会 ・ 作 業 部 会 等 活 動 実 績	<p>2003年 4月 山梨英和大学教授・カウンセリングセンター所長</p> <p>2010年 4月 山梨英和大学共通科目委員長</p> <p>2011年 4月 山梨英和大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻主任</p> <p>2011年 4月 山梨英和大学副学長</p> <p>2011年 4月 山梨英和大学FD推進委員会・大学院FD推進委員会委員</p> <p>2012年 4月 山梨英和大学副学長社会連携担当</p> <p>2014年 4月 山梨英和大学副学長広報戦略担当</p>
ザ ー ア ド バ イ ザ ー 活 動 実 績	<p>学部基礎ゼミアドバイザーとして、年2回懇親会を開催</p> <p>学部専門ゼミ及び卒論ゼミアドバイザーとして、懇親会開催・大学祭ゼミ出店・卒業旅行など開催</p> <p>大学院指導教員として、懇親会開催のほか、修了生も参加する同窓会も主催</p>
後 進 指 導 実 績	<p>事例検討会「自分の言葉で語る臨床研究会」を主宰し、後進の指導に当たっている。</p> <p>大学院修了生に対し、適宜スーパービジョンを引き受け、事例の指導にあたっている。</p>

(1)講演会

2008年	9月	FM甲府ラジオ番組「生涯学習の時間」対談出演「不登校からの学び」
2010年	8月	山梨県総合教育センター研修会講演 「本来の連携の在り方と意義について考える」
2010年	10月	山梨英和大学文化事業 第6回臨床心理講演会講師 「教育臨床30年を生きて-その出会いと喜び」
2011年	1月	名城大学FD研修会講演講師「大学における学生相談について」
2011年	1月	被害者支援センターやまなし第5期生ボランティア候補者養成講座講演 「被害者支援のためのカウンセリング」
2012年	2月	被害者支援センターやまなし第6期生ボランティア候補者養成講座講演 「カウンセリング概論」
2012年	3月	山梨県臨床心理士会東日本大震災被害者支援報告会講師 「東日本大震災支援福島県におけるSC活動報告」
2012年	7月	山梨県立富士見支援学校旭分校実践報告会講師
2012年	12月	シンポジウム「山梨における若者支援の現状とその連携を探る」基調講演者
2013年	5月	第31回日本学生相談学会学会賞受賞記念講演
2013年	11月	山梨県教育庁職員対象講演会「心を癒すストレスマネジメント体験」
2014年	11月	山梨県庁職員対象講演会「職場のメンタルヘルス」
2015年	8月	IDE東海支部大学セミナー講演会「学生の学習とメンタルヘルス」
2015年	11月	職場のメンタルヘルス研修会「心を癒すストレスマネジメント体験」

(2)出前講座

2009年	7月	石和こすもす教室事例検討会講師
2009年	11月	第47回全国学生相談研修会講師「学生相談の基礎」 小講義「カウンセリング入門」講師
2009年	11月	学校教育相談実践研修会事例検討会講師
2010年	11月	教育相談における実践力を養う研修会講師
2010年	11月	第48回全国学生相談研修会講師「学生相談の基礎」
2010年	12月	石和こすもす教室事例検討会講師
2011年	5月	ラジオ FM甲府出演「ざっくばらん:新しい場になじみにくい人に
2011年	7月	曹洞宗山梨県宗務所主催第1回心の人権学「いのちに寄り添うために」講座講師 「カウンセリング入門」
2011年	9月	曹洞宗山梨県宗務所主催第2回心の人権学「いのちに寄り添うために」講座講師 「自殺について考える」
2011年	11月	第49回全国学生相談研修会講師「学生相談を語る(XVI)ー相談実践と組織作りの往復から」
2011年	11月	曹洞宗山梨県宗務所主催第3回心の人権学「いのちに寄り添うために」講座講師 「寄り添いについて考える」
2012年	1月	山梨県立富士見支援学校PTA研修会講師 「親と子の良い距離を保った関わりとは」
2012年	7月	ラジオ FM甲府出演 ①いじめ経験者の話 ②臨床心理士を目指して
2012年	10・11月	山梨放送ラジオ「GO GO イチ ワンストップ」出演 リスナーの相談に答える

(3)公開講座

2009年	5月	山梨いのちの電話公開講座「こころを考える10章」講師 こころに寄り添う「カウンセリングの技術」
2011年	10月	大学コンソーシアムやまなし・県民コミュニティーカレッジ講師
2011年	11月	「心のケアとしてのリラクゼーション」
2012年	7月	心のサポート授業 ストレスマネジメント教育 山梨県立都留高校

社会貢献活動	2013年	5月	山梨県立富士見支援学校旭分校実践報告会講師
	2013年		山梨英和高校 ストレスマネジメント教育一みんなでストレスを解消してみよう
	(4)学外審議会・委員会等		
	1995年	4月	日本学生相談学会理事 研修委員
	1998年	5月	日本学生相談学会常任理事 特別委員長 資格検討委員長
	1998年	5月	日本学生相談学会大会準備委員
	2001年	4月	山梨県心の健全育成委員会副会長
	2001年	5月	日本学生相談学会常任理事資格認定委員長
	2002年	4月	山梨県新教育ビジョン策定委員会委員
	2003年	4月	山梨県臨床心理士会幹事
	2004年	5月	日本学生相談学会理事(編集委員)
	2006年	5月	山梨県臨床心理士会事務局長
	2006年	11月	日本心理臨床学会理事長推薦甲信越・北陸地区世話人
	2007年	5月	第25回日本学生相談学会大会準備委員長
	2007年	9月	第26回日本心理臨床学会大会準備委員
	2008年	10月	第4回山梨県総合計画審議会委員
	2011年	4月	第5回山梨県総合計画審議会委員
	2013年	5月	日本学生相談学会監事就任
	2014年	6月	山梨県青少年問題協議会副会長
	2014年	8月	山梨県いじめ問題調査会委員
2014年	3月	地域連携として『子ども・若者の不登校・ひきこもり対策支援事業』活動に関して、山梨県総合教育センター及び山梨県精神福祉センターとの協定を社会連携副学長として推進	

## 成果と目標

専門的成果	<p>①著書(窪内, 2001・2010)で、短大生の心理相談の実情や学生の特徴について、大学と短大の学生生活の違い、相談内容からみた短大生の入学期、中間期、卒業期の傾向を分析し、①必修授業の多さからくる心理的余裕のなさ、②単位取得失敗すると挽回することの困難さ、③規模が小さいゆえの目立たない存在であることの困難さがあることを明らかにした。</p> <p>②論文(窪内, 1994・1997・2004)で追及してきた心理療法における治療者とクライアントとの間の心の通い合いを原初的な「気持ちのむすびつき」と名付けた。その関係性概念を導入して、「甘え」理論による青年期の自我意識形成のプロセスを事例から明らかにして博士論文(窪内, 2006)まとめた。</p> <p>③論文(窪内, 1997・1998・1999・2000・2003・2007・2009)一貫して学生相談の立場から事例・調査・ワーク開発などを追及し、大学における学生相談のあり方について考察している。</p> <p>④窪内節子・吉武光世(共著)「やさしく学べる心理療法の基礎」(倍風館)は、発売後心理療法の概論として多くの大学の教科書として取り上げられ、大学院入試のための参考書ともなり、現在約13000部が販売されている。</p> <p>⑤「やさしく学べる心理療法の基礎」の続編を出版社から強く求められ2012年度に出版。</p>
専門的目標	<p>①心理療法において、治療的視点ではなく成長的視点に重点を置いて、幼児的な「甘え」の処理の仕方について考察を深めたい。</p> <p>②博士論文は事例研究ゆえに個人のプライバシーを考慮して出版しなかった。匿名性を高めるなどの工夫をして出版にこぎつけたい。</p> <p>③大学での任期終了時に今までの学生相談経験をまとめた著書を出版予定。</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
オカダ マキコ 岡田 真樹子	女	非公開	教授	人間文化学部
取得学位称号	学士	専門分野	英語教育、コミュニケーション	
学歴	1965年 5月 英国ロンドン私立Francis Holland School, Regent's Park在籍 (~1969年5月) 1970年 6月 東京都調布市The American School in Japan卒業 1970年 9月 国際基督教大学教養学部理学科入学 1974年 6月 国際基督教大学教養学部理学科卒業 1976年 4月 国際基督教大学教養学部にて外国語(英語)教育職員免許課程履修 1977年 3月 国際基督教大学教養学部にて外国語(英語)教職員免許取得			
実務経験	1974年 9月 国際会議通訳、翻訳業 1983年 4月 国際基督教大学高等学校外国語科英語講師 1984年 4月 国際基督教大学高等学校専任教諭(外国語科英語) 1992年 4月 国際基督教大学高等学校帰国生徒教育センター長代行 1994年 4月 国際基督教大学高等学校帰国生徒教育センター長 2010年 3月 国際基督教大学高等学校 退職 2010年 6月 一般社団法人 日本英語交流連盟常務理事 2015年 4月 山梨英和大学教授			
受賞歴	1973年 4月 国際基督教大学 Merit 奨学金受賞			
所属学会	1998年 6月 国際理解教育学会正会員(1998年—2000年理事、2001年—2003年監事) 1998年 6月 日本英語交流連盟正会員(The English-Speaking Union of Japan) (1998年—2010年理事、2010年—現在常務理事)			
特免資格等	1977年 3月 高等学校外国語(英語)教職員免許 1977年 3月 中学校外国語(英語)教職員免許			
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>英語教育では聞く、話す、読む、書くの4つの技能をバランスよく教える必要がある。また、学生自身が英語を学ぶ重要性を認識し、主体的かつ意欲的に学ぶことがもっとも重要である。英国の議会を模したパラメンタリーディベートは一種のパブリックコミュニケーションであり、グローバル市民として必要な総合的な能力(論理的思考力、問題解決能力、発信力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力等)を育成するために効果の高い教育手法である。英語でディベートをすることにより英語の4つの技能に加え、英語で考え、コミュニケーション能力を鍛えることができる。学生一人一人が授業に参加し、アクティブに学習する新しい学習方法である。身近なテーマの討論からはじめ、段階的に時事問題等の討論に発展させることにより、学生は英語を身近に感じるようになり、将来活用できる実践的な英語力を身につけることができる。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>国際基督教大学高等学校では英語を母国語とする海外帰国生徒を対象にアカデミックライティング、英文学、英語ディベートの授業を担当。海外生活経験のない高校3年生の英語選択授業で10年間に渡り英語ディベートの授業を実践し、生徒の英語運用能力に加え、コミュニケーション能力、主体性と社会問題に対する関心、柔軟性と多角的思考力の向上を実感した。1998年に日本英語交流連盟主催の全国大学英語(パラメンタリー)ディベート大会を設立し、2015年に第18回大会(文部科学省後援)を実施。現在までに1000人以上の日本の大学生が本ディベート大会に出場している。2014年3月には第3回全国高校生英語パラメンタリーディベート連盟杯(文部科学省後援)の主顧問を務め、2010年から全国の高校生への英語ディベート普及活動を行っている。2015年6月まで大学英語ディベート大会委員長を務めていた。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>1993年「On Air」Communication B (株)開拓社 (高等学校英語文部省検定済教科書)(共編著)</p> <p>1997年「On Air」Communication A (株)開拓社 (高等学校英語文部省検定済教科書)(共編著)</p> <p>2005年「話す・聞く」コミュニケーション能力を高める授業(学事出版) 単著</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1998年10月 日本英語交流連盟第1回全国大学生英語パラメンタリーディベート大会発足 委員長</li> <li>・2005年10月 奈良県奈良市立青和小学校教員研修会 講師</li> <li>・2006年10月 大阪大学理学研究科・理学部「魅力ある大学院教育」ディベートに関する講演 講師</li> <li>・2012年6月 日本英語交流連盟グローバルコミュニケーション実践ワークショップ 講師</li> <li>・2012年12月 日本経済新聞社主催:日経ビジネススクール「英語ディベート実践講座」講師</li> <li>・2014年10月「英国流ディベート体感セミナーin 京都、パラメンタリー・ディベートが開くグローバル人材の戸」、「高校生のための英国流ディベートセミナー」主催:大学コンソーシアム京都・日本英語検定協会、後援:京都市教育委員会 / 京都府教育委員会、日本英語交流連盟) 講師</li> <li>・2014年10月「英国式英語ディベートワークショップ」山形県酒田東高校 講師</li> <li>・2014年10月「英国ディベート実演～世界各国との相互理解と友好を目指して～」主催:山形県東北公益文科大学、日本英語交流連盟) 講師</li> <li>・2014年11月立命館大学国際経済学科基礎演習 講師</li> </ul>
担当授業科目	2016年度:英語1、Presentation in English、コミュニケーション スキル(ディベート)、基礎ゼミ2、専門ゼミ、卒論、海外インターンシップ、カナダ中期留学、Intensive English
代表的シラバス	英語コミュニケーション、日本語コミュニケーションスキル、Presentation in Englishの授業ではテーマ(論題)に関するブレインストーミング方法、リサーチ、情報の取捨選択、キーワードや論点の決定を行う。議論の柱となる論点を決定した後に論題の是非を証明する説明方法(argumentation skills)、例証の示し方、分析した内容と論題のリンク方法をワークショップ形式で実践する演習型の授業。明確なアウトラインを作成した後に、口頭で発表する際の話し方(public speaking skills)の訓練を行う。(英語の授業の指導言語は基本的に英語)
教育活動改善	特に無し

教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価 各教科の途中でアンケート調査を行い、授業の進め方、内容理解を把握するようにしている。 少人数授業で学生が質問や発言できるようにしている。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p>
------------	---

## 研究業績

研究の特徴	アメリカ合衆国、英国における教育制度、カリキュラム、シラバス、評価方法の研究を行い、アクティブな教授法を授業に取り入れる方法論を研究している。特に英国で行われているパラメンタリーディベートの学習効果および英語を第二言語とする児童生徒の言語習得および学習内容の理解に注目している。	
研究経歴	1995年 文部省委託研究「アメリカ合衆国の教育と学習評価」編著 国際交流教育センター 1996年 文部省委託研究「イギリスの教育と学習評価」編著 国際交流教育センター 2010年 国際基督教大学高等学校 1978年－2009年 帰国生徒教育センター資料（発行責任者）	
研究実績	<p>(1) 著書 「話す・聞く」コミュニケーション能力を高める授業（話し方の基本からパラメンタリーディベートまで）学事出版(株)2005年発行 単著</p> <p>(2) 学術論文 特に無し</p> <p>(3) その他の研究活動（国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等） 「海外の教育と学習評価の研究」（文部省委託研究）は海外在留邦人子女が特に多い地域の教育制度と学習評価の研究である。国際基督教大学高校では毎年約130人の海外現地校出身者を受け入れている。彼らの教育歴と学習言語は在留国によって異なり、真の学力は必ずしも日本語の筆記試験で計ることはできない。このため海外現地校から受験する生徒に対しては海外の成績を審査する書類選考を設立当初から行っている。本研究は、日本の学校が書類審査を行えるように海外の教育制度、カリキュラム、成績表の見方を紹介し、帰国生に対する学校および教師の理解を広めることを目的とした。研究に使用した成績表は帰国生が実際に海外から持ち帰ったものである。アメリカ合衆国の教育制度やカリキュラムは各州によって異なるため、できるだけ多くのサンプルを紹介した。イギリスの本研究で筆者は私立St. Paul's Girl's Schoolの視察報告を通してイギリスの学校生活、カリキュラム、国家試験、学校行事、生徒会活動、校則、入学試験制度を紹介した。</p>	
競争的資金採択課題	特に無し	
学会等参加・役員	1998年 6月 国際理解教育学会理事（2000年まで） 1998年 6月 日本英語交流連盟理事（2010年まで） 2000年 6月 国際理解教育学会監事（2003年まで） 2010年 6月 一般社団法人 日本英語交流連盟常務理事（現在に至る） 2011年 4月 全国高校パラメンタリーディベート連盟 主顧問（現在に至る） 年 月	
受共同研究の実績	1995年 3月 文部省委託研究「アメリカ合衆国の教育と学習評価」編著 国際交流教育センター 1996年 3月 文部省委託研究「イギリスの教育と学習評価」編著 国際交流教育センター	

大学院生指導	2015年 10月 政策研究院外交アカデミープログラム講師(政策研究大学院大学) 2016年 6月 政策研究院外交アカデミープログラム講師
研究能力に対する評価	1983年より2010年まで高等学校における英語教育、特に海外帰国生徒の教育に従事しており、海外で学ぶ日本人子女の内外での適応、bilingualismおよびbiculturalismを教育現場で研究してきた。2010年まで勤務していた国際基督教大学高等学校では109ヶ国から約5,700人の帰国生徒の受入に携わった。海外各地で学ぶ児童生徒の学習成果を正確に把握するために海外の教育制度に関する調査を行い、帰国後彼らの能力が最大限評価され、将来発揮できる教育環境と日本の社会の受入の整備に努力した。帰国生と国内生が自信を持って自分の考えを論理的に述べる訓練方法として英国議会方式(パーラメンタリー)ディベートの研究と教育現場での実践の普及活動を20年に渡り実施してきた。

### サービス活動業績

学内委員会・作業部 会等活動実績	2015年 4月 山梨英和大学入試委員 2015年 11月 山梨英和大学教職員研修会 講師
アドバイザー活動実績	2016年4月より2年生基礎ゼミ18人、留学生2人、3年生2人を担当。
後進育成活動実績	
社会貢献活動	(1)講演会 2015年 5月 山梨英和大学後援会総会 講演 講師 (2)出前講座 2015年 10月 山梨英和中学校高等学校教職員研修会 講師 (3)公開講座 2015年 7月「英語ディベートワークショップ in 山梨」(高校生・教員対象) 講師 (4)学外審議会・委員会等 一般社団法人日本英語交流連盟 常務理事 (5)その他 2015年10月 第18回大学対抗英語シベート大会(文科省後援) 企画運営委員 2015年10月 政策研究院外交アカデミープログラム講師(政策研究大学院大学) 2016年3月 第5回日本高校生パーラメンタリーディベート連盟杯(文科省後援) 主顧問

## 成果と目標

専門的成果	<p>① 世界各地からの帰国生徒の受入および教育に携わってきたことにより、教育の国際比較と幅広い教育方法の導入と実践に関する専門的知識を習得することができた。</p> <p>② 英国議会方式ディベートの授業実践を通じて、学生主体の総合的な言語習得方法および教授法を習得することができた。</p> <p>③ 全国大学対抗英語ディベート大会の企画運営委員長として多くの大学・大学院生および社会人と英語ディベートの研究および普及活動に携わることができた。1998年から毎年英国から4-5人の大学生ディベーターを招聘し、ディベートのし方、論題解釈、立論方法、審査方法等についての研修を行ってきた。これは国内の大学生と高校生への英語ディベートの普及に大いに役立っている。</p>
専門的目標	<p>① 日本の学校および大学における参加型、アクティブラーニング形式の授業実践と普及</p> <p>② 英語ディベートを通じて学生が積極的に参加する英語の授業の実現</p> <p>③ 日本人学生のコミュニケーション能力の向上に役立つ授業計画と実践</p>

最新データ入力日	2016年	5月	1日
----------	-------	----	----

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
アライ ナオン 荒井 直	男	1954年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	文学修士	専門分野	西洋古典学・比較文化・文学	
学 歴	1974年	4月	国際基督教大学教養学部人文学科入学	
	1978年	3月	国際基督教大学教養学部人文学科卒業(教養学士)	
	1980年	4月	国際基督教大学大学院比較文化専攻科博士前期課程入学	
	1982年	6月	国際基督教大学大学院比較文化専攻科博士前期課程修了(文学修士)	
	1983年	4月	国際基督教大学大学院比較文化専攻科博士後期課程入学	
	1987年	9月	ケンブリッジ大学トリニティー・ホール大学院在籍(1988年6月まで)	
	1988年	8月	国際基督教大学大学院博士後期課程単位取得満期退学	
実 務 経 験	1982年	4月	国際基督教大学教養学部人文学科非常勤助手(1986年3月まで)	
	1985年	4月	多摩美術大学非常勤講師(ドイツ語・英語)(~87年3月/88年9月~91年3月)	
	1988年	4月	山梨英和短期大学非常勤講師(文学)(88年10月まで)	
	1990年	4月	立教大学文学部非常勤講師(古典ギリシア語)(1992年3月まで)	
	1990年	4月	山梨英和短期大学専任講師(95年3月まで)・助教授(95年4月~)	
	1995年	4月	青山学院女子短期大学教養学部非常勤講師(西欧古典文化等)(98年3月まで)	
	1995年	4月	在外研究員としてケンブリッジ大学トリニティー・ホールで研究(95年9月まで)	
	1996年	12月	国際基督教大学教養学部非常勤講師(西洋古典文学II)(96年3月)	
	1997年	7月	岩手大学文学部非常勤講師(比較文学特講IX・古代ギリシア文学)97年7月	
	1999年	4月	多摩美術大学非常勤講師(宗教学)(2000年3月)	
	2002年	4月	山梨英和大学教授(現在に至る)	
受 賞 歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所 属 学 会	1981年	4月	国際基督教大学比較文化研究会(現在に至る)	
	1990年	4月	日本西洋古典学会(現在に至る)	
	1991年	6月	The Society of Biblical Literature(97年7月まで)	
	1992年	9月	The American Philological Association(98年8月まで)	
	2008年	4月	ICU哲学研究会(現在に至る)	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	年	月		
	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>「愛智は驚嘆(タウマゼイン)にはじまる」(アリストテレス)および「知性は人間が生き延びるのに必須のツールである」(ベルクソン)が教育上の指導理念である。レクチャでも語学科目でも、未知の対象に対して心を開くよう、異質なものに対して敬意をもつよう、そして喜びをもって学ぶよう促している。レクチャでは「テキストを読む」とはどういうことかを、語学科目ではある程度科学的で普遍的な方法を試行している。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例：以下に、比較文化・思想論、英語、そしてドイツ語の場合について述べた。</p> <p>「比較文化・思想論」は、制度的には「英語圏文化」という枠内で想定されているが、いわゆる「英語圏」の文化も、より広範な「ヨーロッパ文化圏」のなかで捉えないと正確な像を結ばない事象があることを勘案して、学生に「ヨーロッパ文化」の核心に触れてもらえるようなテーマを設定している。また社会人(リピータを含む)のために開放している講座でもあるため、毎年テーマを変えている。2009年アビ・ワールドブルク、2010年ロラン・バルト、2011年ヨハン・ホイジンガを取り上げている(ドイツ[北米]、フランス、オランダ)。講義は、知識の修得ではなく、学生が今生きて当然と見なしている現代の社会を自ら改めて見直し考え直し、(可能ならば)喜びをもって生き延びられることができるような視点の提供を目指している。2012年はシモーヌ・ヴェイユ『根を持つこと』をとりあげ、社会的絆を破砕するような力に抗して生き延びるにはどうしたらよいかを考える予定である。</p> <p>「英語」: 英語には、①イギリス文化の精髓である言語 English と②英語を母語としない人々間でのコミュニケーションのツールとして使用される言語—現在の国際社会でのリンガ・フランカである— Globish の二種があることを理解してもらい、学生には主に②の修得にエネルギーと時間を傾注するように促し、折にふれ①の成果にも触れてもらっている。このアプローチにより、English に対する不要なコンプレックスから解放され、修得目標もある程度明確に提示できるようになったので、英語再挑戦者である学生の学習意欲の向上に役立っていると思われる。また、やさしい英語で(日本やアジア独自のものについて)内容のある発信ができる好例として鈴木大拙の講演などを学修している。</p> <p>「ドイツ語」には、はじめての第二外国語の修得にはあまり適格的ではない週一回年間30回で教授しなければならないという制約がある。したがって、①一年後に自力で継続して学び続けられる(あるいは一度放擲しても再挑戦を志したときに容易に再開できる)程度の基礎力の修得を工夫している。しかし、上記の枠内では「実用」になるドイツ語の修得が(一部学生を除いて)困難であることを勘案し、②「言語は諸民族の真髄を忠実に表すもの」(ミシュレ)、「言語は文化を保存する」(ハンナ・アーレント)という立場を採用し、(a)ドイツ語による名句50の説明をし暗記してもらっている。また、(b)バンヴェニスト『インド・ヨーロッパ諸制度語彙』などを利用しながら、語彙や文章にまつわる文化的伝統・社会的背景などに触れ、ヨーロッパ文化に対するある種の「教養」を培ってもらう時間も設けている。</p> <p>以上、レクチャ科目と語学科目の教育実践について述べたが、私の専攻がヨーロッパの古典である古代ギリシア・ローマ文化であるため、ある程度歴史的奥行きをもって授業を展開できていると思う。そして、それが、学生が、日本語だけで考えているのでは立ち入れないような現代の社会や文化の偏移を再考する契機になっているのではないかと考えている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	<p>2016年度 英米の思想、専門ゼミナール、卒業研究、人間文化学B、外国語(フランス語1)、外国語(フランス語2)、外国語(英語1)、世界の文化、多文化共生論、英語の文法</p>
代表的シラバス	<p>比較文化・思想論:</p> <p>ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス—文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み—』を読みながら、「遊び」「文化」「人間」などについて考えていきます。ブルクハルト、ニーチェ、オルテガ・イ・ガゼット『大衆の叛乱』などが考察の&lt;補助線&gt;歴史的・文化人類学的思考のパワー(の一端)に触れて下さい。現代の文化のあり方を考え直す機縁にもなるはずです。</p>
教育改善活動	<p>FD研究会は「皆勤」。どんな発表、レクチャ、ワークショップからも自分の教育実践の改善についてのヒントを得ているが、具体的に教育改善に活かさきれない憾みがある。自分で工夫したことでない現場で臨機応変に使えないからであろう。</p> <p>学生サービス部のアンケートや講義内でのフィードバックの学生によるコメントで、改善の要求の多いのは、板書の丁寧さの欠如と、早口と滑舌の悪さである。この二つにも十全に対応できていない。2011後期による試行の後、2012年4月からは(科目によるが)パワーポイント導入を計画中である。ポイストレーニング考慮中。2012年度は、FD・SD推進委員会座長として、教員の授業実践の更なる改善・PCを最大限に活用する方途に習熟してもらう研究会等を企画予定(勿論自らの講義や授業でのPC運用レベルアップを図る)。</p>

教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>学生サービス部アンケートのコメントおよび各講義の学生のフィードバックによれば、「今までに触れたことのないものに触れられてよかった」「大学の講義っぽかった」という意見がよく見られる。これは、講義科目では、「若い頃にこそ本格・大物を」というスタンスで授業をしているからだと思う(恩師の恩師からのモットーである)。具体的な対応も求められている改善点は上記の通りである。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>今のところ実施していない。教育改善の目標を具体的に設定した上で2012年度の前期には実施したい。</p>
------------	---

## 研究業績

研究の特徴	<p>古代ギリシア文学、とくにアリストパネス喜劇の研究を主要なテーマとしている。西欧の知性は、ことある毎に、自己を再把握するために古代ギリシア・ローマに参照枠をもとめる。すなわち、思想的・批判的・学問的新機軸がうち出されると、しばしばそれは古代ギリシア研究に援用される。例えば、構造主義的な・フェミニズム的なギリシア悲劇の読解などが現れる。したがって、現代思想や批判理論などにも配視し、つねに現代にもリアルに示唆を与えうるものとして古代ギリシア文学を研究している。また、喜劇に注目するのは、喜劇が、ヒロイズムを拒否する点に、多く学ぶべきものがあるからである。人間は油断するとつい大きなことを考えてしまいがちである。そのほうが偉そうに思えるからであるが、喜劇は偉そうにすることがみっともないことであることを教えてくれる文学ジャンルだからである。</p> <p>また、古代研究のジャンルの一つに「古代の遺産の後代での展開」を追尋する研究がある。たとえば、ラプレーやモンテーニュによる「古典」の血肉化のあり方を分析したりする研究(例えばマイケル・スクリーチ教授の著作に典型的な研究)である。現在、アリストパネス・ルキアノス的な喜劇的精神を発揮したエラスムスに関して、少し予備的な勉強をしている。</p>
研究経歴	<p>1974年から1988年まで学部・大学院を国際基督教大学で過ごしたことが学問のスタンスを決めた。ICUでは、ギリシア語で書かれているのだから、ホメロスから新約聖書までギリシア文学であり、そこに人間の偉大と悲惨がリアルに描かれているものとして古代ギリシア文学を学んだ。またこの間ICUに居ながら当代の碩学(ケネス・ドーヴァー)や古典学の枠を越境して研究を進める本物のスカラー(G. ロイド)の講筵に列なれたことは僥倖であった。</p> <p>1987年から大学院の最後の1年をケンブリッジで送れたことで、生活・人生をあげて学問に奉仕する生き方を、そして学生と教師は「同僚」であるという姿勢を、わずかながら身につけられた(ように)思う。</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>2001年 5月刊 地中海文化と語る会編『ギリシア世界からローマへ: 転換の諸相』(彩流社) 所収「喜劇変容の一断面—ギリシアの喜劇からローマの喜劇へ」(121~159頁)</p> <p>2003年 4月刊 川島重成・高田康成編『ムーサよ、語れ—古代ギリシア文学への招待』(三陸書房) 所収「アリストパネス—『女の平和』における厳粛な茶番」(203~223頁)</p> <p>2009年 1月刊 岩波版『ギリシア喜劇全集3 アリストパネス III』所収「テモボリア祭を営む女たち」の翻訳・脚注・解説(103~198頁、343~358頁)</p> <p>2010年 2月刊 岩波版『ギリシア喜劇全集6 メナンドロス II』所収『ミーメシス(憎まれ者)』~417番までの断片の翻訳(226~352頁)</p> <p>(2) 学術論文</p> <p>2004年 3月刊 『日本西洋古典学会』52号(岩波書店) 所収『『蛙』の蛙についての一考察—「アゴーン」場面とのディオニュソスとの関連で』(32~44頁: 英文要約152~54頁)</p> <p>2006年 3月刊 『日本西洋古典学会』54号(岩波書店) 所収、書評 Colin Austin &amp; S. Douglas Olson, eds., Aristophanes, Thesmophoriazousae (Oxford, 2005) (121~124頁)</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>2010年7・8月: 日本西洋古典学会が刊行予定(2012年)の欧文雑誌創刊号に投稿されたメナンドロス</p>

実績研究	喜劇に関する論文の査読を大阪大学教授とともに担当した。	
競争的資金採択課題	2008年 4月～2011年3月 科研費基盤研究(B) 「リベラルアーツ教育における文学教育の歴史と可能性」(主宰:ICU大西直樹教授) 研究分担員	
学会等発表・役員参加	専門の学術研究は、様々な事由で数年来開店休業の様相を呈しているため、テクニカルな論文の発表は、 2003年 6月 日本西洋古典学会で、『蛙』の蛙についての一考察—「アゴーン」場面でのディオ ニュソスとの関連で— のみである。 学会役員等は、特になし。	
共同研究の実績・受託	特になし	
大学院生指導	特になし	
研究能力に対する評価	西洋古典学会から、アリストパネス喜劇の学術書書評の依頼を受けたり、メナンドロス喜劇に関する論文の査読の依頼を受けたり、あるいは、岩波版喜劇全集の翻訳を依頼されたりするので、一応は喜劇研究者の末席を汚していると(誤って)看做されている。 しかし、自分が「生半可以下」のスカラーであることは自分でよく分かっているつもりである。 内容のない自己卑下は私の趣味ではないので、「生半可以下」は正確な評価である。 まだスカラーであることを諦めてはいないので、これからも研鑽をつみたいと思っている。	

### サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2015年 4月～ 副学長(広報戦略担当)など 2014年 4月～ 副学長(社会連携担当)など 2012年 2月～ 副学長(学生サービス担当)、FD・SD推進委員会座長 2011年 4月～ 図書館長、学生委員会、エクステンション委員会 2010年 4月～ 入試部長 司書・学芸員過程委員会など 2009年 4月～ 入試部長 司書・学芸員過程委員会など 2008年 4月～ 入試実務委員長 司書・学芸員過程委員会など 2007年 4月～ エクステンションセンター長など 2006年 4月～ エクステンションセンター長など
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	特になし

社会 貢 献 活 動	(1)講演会 特になし
	(2)出前講座 特になし
	(3)公開講座 山梨英和大学エクステンションセンター(メイプルカレッジ)企画講座「片言隻語の西洋古典」(前期6回)
	(4)学外審議会・委員会等 特になし
	(5)その他 山梨英和学院理事・評議員(2012年4月～)

## 成果と目標

専門的 成果	<p>①アリストパネス『テスモポリア祭を祝う女たち』の翻訳・脚注・解説、またメナンドロスの断片の翻訳(出来栄に難がなくもないが)一応の専門的成果と言えるかもしれない。</p> <p>②現行カリキュラムでは、古代ギリシアの演劇を扱うレクチャは開講していないため、直接講義に反映させられないが、比較文化・思想論の枠組みで、モリエールやシェイクスピアの喜劇との対比をテーマにするなら教育にも活かせなくはないと思われる(狂言との対比でも可能だろう)。</p> <p>③古代ギリシア文化には現代にも示唆を与えうる多くの点をもつので、単発の講演などをすれば学生に資する面もあるかも知れない(例えば進路支援活動での古代ギリシアの「労働観」の紹介など)。</p>
専門的 目標	<p>①アリストパネス研究を確実に進捗させ、コンパクトな博士論文に結実させる。</p> <p>②アリストパネスの古喜劇、メナンドロスの新喜劇、(ルキアノスの喜劇的散文)、そしてプラウトウスの破天荒なき喜歌劇、テレンティウスの家庭的喜劇などを、「家」(オイコス、ファミリア)を軸に総合的に考察したモノグラフを仕上げる。</p> <p>③以上の論考を踏まえて、Popularizerとしてギリシア文化・ローマ文明の喜劇的側面を前景化した著作をつくりたい。ある文化が何を笑いの対象とするのかは、その文化が何を真剣に考えるかに劣らず重要であると考えからである。可能ならば、その成果を講義に反映させる方途も模索したい。</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
タシロ ジュン 田代 順	男	1956年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	教育学修士	専門分野	臨床心理学	
学歴	1975年	3月	東京都立千歳高等学校 卒業	
	1977年	4月	早稲田大学社会科学部社会科学科 入学	
	1978年	4月	明治大学文学部文学科演劇専修 入学	
	1979年	4月	和光大学人文学部人間関係学科2年次編 入学	
	1983年	3月	同上大学 卒業(文学士)	
	1984年	4月	国際基督教大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士前期課程 入学	
	1986年	6月	同上大学院修了(教育学修士)	
	1988年	4月	成城大学大学院文学研究科コミュニケーション専攻博士後期課程 入学	
	1992年	5月	同上大学院所定単位取得後 退学	
実務経験	1990年	4月	北沢保健福祉センター・精神障害者デイケア・グループワーカー(2004年3月まで)	
	1993年	4月	お茶の水医療秘書専門学校非常勤講師(精神保健等担当)(1995年3月まで)	
	1993年	4月	ISCカウンセリング研究所非常勤講師(カウンセリング)(2001年3月まで)	
	1993年	4月	神奈川県立平塚看護専門学校非常勤講師(医療と倫理担当)(2001年3月まで)	
	1995年	4月	文教大学女子短期大学部専任講師(人間関係論等担当)(1999年3月まで)	
	2001年	4月	府中看護高等専修学校非常勤講師((医療心理学担当)(2004年3月まで)	
	2002年	4月	横浜市教育委員会スクールカウンセラー(中学校派遣)(2005年3月まで)	
	2003年	4月	神奈川県藤野町教育委員会スクールカウンセラー(小中派遣)(2004年3月まで)	
	2005年	4月	神奈川県教育委員会スクールカウンセラー(県立高校派遣)(2007年3月まで)	
	2004年	4月	浜松学院大学現代コミュニケーション学部准教授(2009年3月まで)	
	2009年	4月	岩手大学教育学部・大学院准教授(2011年3月まで)	
	2011年	4月	山梨英和大学人間文化学部教授(大学院兼任)(現在まで)	
所属学会	1990年	1月	日本集団精神療法学会会員(現在に至る)	
	1990年	3月	日本心理臨床学会会員(現在に至る)	
	1995年	3月	日本ブリーフサイコセラピー学会会員(現在に至る)	
	1995年	4月	日本臨床死生学会会員(評議員)(現在に至る)	
	1995年	4月	日本保健医療社会学会会員(現在に至る)	
	2001年	9月	日本多文化間精神医学会会員(現在に至る)	
	2001年	9月	日本家族研究・家族療法学会会員(現在に至る)	
	2002年	4月	日本精神保健福祉学会会員(現在に至る)	
	2004年	10月	日本質的心理学会会員(編集委員)(現在に至る)	
	2007年	10月	日本コミュニティ心理学会会員(現在に至る)	
2010年	4月	日本人間性心理学会会員(現在に至る)		
受賞歴	年	月	特になし	
特免資格等	2000年	4月	臨床心理士資格取得(登録番号07853)	
	2000年	4月	精神保健福祉士資格取得(登録番号05828)	
	年	月		
e-mail	j.tashiro[atmark]yamanashi-eiwa.ac.jp			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>これまでの大学教育で行われてきたような、教員から学生への一方的な教授ではなく、大教室においても双方向で互いに「やり取り」できる授業を構成することを、自分の大学教育における理念、方針、方法としている。授業の流れの中で、学生同士に話し合っ欲しい／考え合っ欲しいテーマが出てきたら、積極的に受講生同士(そばに座っている人同士)で、2人1組やグループになり、話し合いをすることを学生に求める。その話し合いの結果を、指名された学生が教員にフィードバックし、それに教員がコメントを加えて返す。あるいは、話し合っっているうちに出てきた質問でも可とし、それに教員が回答するという形を基本として授業をすすめていく。このようにして、学生参加型の対話型授業を行い、学生自らも授業を構成し創っているという積極的・能動的な参加意識を培うことが、授業という教育実践に取って重要だと考えている。なぜなら、先述した他者との「やり取り」をとおして、コミュニケーションの稽古のみならず、(学生という、どちらかといえば一方的に)教育される側の受動性を低めて、このような対話型参加型の授業は、逆に学ぶ側の主体性・能動性を積極的に引き出すからである。</p> <p>このことの教育効果は、単に知識の(対話的)拡大のみならず、他者とのやり取り(対話)を通して、他者と関わり合うことで「生きること」全般についての能動性・積極性を引き出すと思われる。これは同時に、体感的、実感的にコミュニケーション能力を学生同士が相互にボトムアップすることにもつながるとと思われる。</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a、積極的な双方向・参加型授業の試み</p> <p>上記においても記述したが、ゼミなど少人数の授業はもとより、大教室の多人数の授業においても、教員と受講生が活発に「やりとり」できるコミュニケーションな授業構成を目指しており、それへの試行を(臨床面接のコミュニケーション技法を応用して)授業実践として展開している。</p> <p>b、コメント力／質問力＝コミュニケーション力を鍛える授業実践</p> <p>前回の授業のノートやテキストを見直させ、それを2人1組あるいはグループでの話し合いを通して対話型で「復習」させつつ、話し合いの結果を指名した学生にフィードバックしてもらおう。話し合いの流れで出てきた質問でも感想-コメントでも可としている。学生自身が他学生と対話することを通して、いわば他者の見方も含んだ「対話的知」と言うべきものが生成してきて「新たな知」が析出してくる。同時に日常会話では(ほとんど)話題にならないような「知的素材」が話し合われることによって、学生同士の(知的な)「考え」が双方に伝わるという利点もある。指名されてコメントあるいは質問をすることにより、コミュニケーションを支えるそれらの力が身につくという点も(授業を通しての)学生のコミュニケーション能力の育成につながる。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a、田代順、西田恵子、岡本多喜子、大島道子他「社会福祉要説」所収 第6章社会福祉の方法・援助技術の中の次の項目4節ケースワーク、5節グループワーク、8節その他の方法・援助技術の中の次の項目 5)心理療法／カウンセリング、6)家族への心理的援助、7)コンサルテーション、8)ネットワーキング、9)心理教育、10)セルフヘルプグループ、11)スーパービジョン(228p 担当部分88p～100p)</p> <p>b、田代順 千原美重子、津田尚子、田島佐登史他「発達のための臨床心理学」以下の担当部分 6章 発達のための心理臨床的な支援-7節 家族療法による支援 12章 精神障害と心理臨床-トピックス12「(境界性)人格障害」(210p 担当部分105-107p、189p)</p> <p>c、森岡正芳編 田代順、岸本寛史他「臨床ナラティブアプローチ」所収「いじめ魔王の冒険」</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a、リフレクティング・プロセスを事例検討／ミーティングに応用する；岩手県臨床心理士会スクールカウンセラー研修</p>

担当授業科目	2016年度: 学部(コミュニティワーク、グループワーク、グリーンワーク、卒業研究、基礎ゼミⅠ、卒業研究、生と死の臨床教育、専門ゼミナール) 大学院(生と死の臨床特論、臨床心理実習、臨床心理学特論Ⅱ、臨床心理事例研究)
代表的シラバス	演習・講義の方針としては、徹底的に双方向・参加型のコミュニケーションな授業をめざしている。授業はどれも冒頭、必ず、前回の授業の「見返し」を入れ、それについて学生同士が対話をするように求める。授業への頭の切り替えと動機付け／準備状態(レディネス)を高めていく。授業に入ると知識の(教員からの)一方的な教授ではなく、(授業の)流れの中で出てきたテーマについては、学生同士対話しながら考え合う方式で授業を構成している。つまり、こうして、他者とのコミュニケーション能力を磨きつつ、(教員が話し合いの結果を返すよう求めるので)コメント力、質問力も同時に鍛えられる授業構成となっている。
教育改善活動	家族療法の話し方をグループワークに応用した授業実践 「双方向授業にむけて」ということで授業のあり方の工夫をした。知識の一方的伝授ではない、教員と学生、学生同士の「やり取り」を活性化してのコミュニケーションな授業展開を可能にするものとして、家族療法由来の「話し合い方」を応用してのグループワークの仕方を授業に取り入れ、授業の双方向性と活性化を図った。
教育能力に対する評価	(1)学生による授業評価 演習・講義へのアンケート評価:対話型・参加型の授業実践に関し、学生の授業評価アンケートの自由記述において、下記のような評価をもらった。 ※新しいスタイルの授業形態だった。疑問・質問などフィードバックする形はとてもいいと思う。 ※興味が湧くよう話し合いの時間を設けていて良かった。 ※意見の交換が面白かった。聴く、話すのメリハリがあって、しっかりとした授業だった。 ※話し合いを大切にする授業で、自分以外の人の意見も聞けてとても良かった。 ※参加型の講義でみんなの意見が述べられるという点がとても良かった。 ※対話形式が新鮮だった。 このような授業形式を取る場合、仕方がないことだが、「指名されるのが怖くて緊張した」「みんなの前で発表するのがいやだ」との回答も(少数だが)見受けられた。コミュニケーション能力と発表力を高めるためにもぜひ、乗り越えてもらいたいところだ。 (2)同僚教員等による授業評価 前々任校の浜松学院大学において、専門の近い教員同士がそれぞれの授業に見学して、コメントしあうという試みをした。私の授業を参観した教員からは「徹底した双方向授業の展開で、学生がどんどん真剣に取り組んでいくのが手に取るようにわかった」と肯定的な評価をもらった。 現任校においては、個人的に同僚教員の授業を見学にいき、その教員のわかりやすい説明や話し方は、自分の授業の(学生への)「わかりやすさ」を促進する上で大変参考になった。

## 研究業績

研究の特徴	近年は主として「オープンダイアログ」という家族療法由来の、セラピストも含め、集まった人々が(ある意味)「よってたかって」対話を展開することを通して、「話し合う」構造をもつ集団コミュニケーション事例検討におけるグループスーパーヴィジョンの仕方、一般企業や専門職研修におけるミーティング(話し合い)の仕方、集団心理療法におけるナラティブなアプローチ等への応用として実践し、それへの検討を行っている。
研究経歴	1993年 東京大学医学部保健学科保健社会学教室 研究生 「死と死に逝くこと」および「子どもの死」についてのフィールドワーク調査と研究に従事(1995年3月まで) 1995年 文教大学女子短期大学部家政科 専任講師 「地域精神保健」および「ブリーフサイコセラピー」の臨床実践と研究に従事(1999年3月まで)

<p style="text-align: center;">研究 経 歴</p>	<p>2004年 浜松学院大学現代コミュニケーション学部 准教授 「精神障害者の社会復帰グループ」への臨床実践と研究、「死と死に逝くこと」および「トラウマ体験」へのインタビュー研究／臨床社会学的研究に従事(2009年3月まで)</p> <p>2009年 岩手大学教育学部 准教授 「学校現場におけるトラウマ」研究、「臨床実践およびコミュニケーションの仕方」としての家族療法技法・リフレクティング・プロセスの応用研究に従事(2011年3月まで)</p> <p>2011年 山梨英和大学 教授 「死と死に逝くこと」、「トラウマ」、「セクシュアリティ」についてのナラティブなアプローチによる臨床社会学的研究(サイコグラフィ作成＝精神誌的研究)</p> <p>2012年 同上 教授 前年度に引き続き、「死と死に逝くこと」「トラウマ」「セクシュアリティ」についてのナラティブなアプローチによる臨床研究(インタビューによる精神誌研究)</p> <p>2013年 同上 教授 「ナラティブなアプローチ」の研究の展開→「心理教育」と「グループアプローチ」における。また、「トラウマ」にたいする、インタビューベースの精神誌的研究を展開している</p> <p>2014年 同上 教授 「ナラティブ・セラピーおよびアプローチ」の研究展開→「事例検討」「カウンセリング」「グループスーパービジョン」。また、「オープンダイアログ」というナラティブカウンセリングの研究</p>
<p style="text-align: center;">研究 実 績</p>	<p>(1) 著書</p> <p>1; 別冊宝島279「わかりたいあなたのための心理学入門」所収 道又爾(編)田代順「「すべての男性は「女性」である」(他者という問題群②の章)」、95-98p 宝島社 1996年</p> <p>2; 「社会福祉要説」所収 今泉礼右(編)田代順「第6章社会福祉の方法・援助技術の中の以下の項目担当 4節ケースワーク、5節グループワーク、8節その他の方法・援助技術の中の次の項目; 5)心理療法／カウンセリング、6)家族への心理的援助、7)コンサルテーション、8)ネットワーキング、9)心理教育、10)セルフヘルプグループ、11)スーパービジョン」、88-100p 同文書院 2000年</p> <p>3; 「小児がん病棟の子どもたち」、田代順 1-200p 青弓社 2003年</p> <p>4; 「ナラティブからコミュニケーションへーリフレクティング・プロセスの実践ー」所収 田代順 矢原隆行編、以下の項目担当</p> <p>第2部; リフレクティング・プロセスの実践</p> <p>第5章; 学校コミュニティへのアプローチ</p> <p>第6章; 精神障害者家族グループへの応用実践</p> <p>第9章; 各実践へのリフレクションと振り返り</p> <p>あとがき、85~126p、173~178p、185~187p 弘文堂 2008年</p> <p>5; 「発達のための臨床心理学」以下の項目担当</p> <p>6章 発達のための心理臨床的な支援-7節 家族療法による支援</p> <p>12章 精神障害と心理臨床-トピックス12「(境界性)人格障害」</p> <p>105-107p、189p 保育出版社 2010年</p> <p>6; 「臨床ナラティブアプローチ」所収 森岡正芳編 田代順「いじめ魔王の冒険-学校コミュニティにおけるナラティブアプローチによる心理教育の試み 195-210p ミネルヴァ書房 2015年</p> <p>(2) 学術論文(2005年以降のものを提示)</p> <p>1、がんの子どもの母親支援-ナラティブなグループ・アプローチとコミュニティ心理学的視点を通して-「臨床心理学」第8巻6号(823p-828p)金剛出版2008年</p> <p>2、デイケアグループにおける「雑談」の治療的意義と効果-「物語ること」を通して「現実」へ-「精神療法」第36巻2号(84p-91p)金剛出版 2010年</p> <p>3、いじめ魔王の冒険-スクールカウンセリングにおけるいじめの「外在化」と「心理教育」-「精神療法」金剛出版 2012年</p> <p>4、ナラティブなグループアプローチを体験する「集団精神療法」第26巻2号(146p-150p)日本集団精神療法学会2010年</p> <p>5、ナラティブなグループアプローチを体験する(その2)-リフレクティング・プロセスを応用したグループはいかに震災に向き合ったか-「集団精神療法」第27巻2号(150p-154p)日本集団精神療法学会2011年</p>

<p style="text-align: center;">研究実績</p>	<p>6、ナラティブなグループアプローチを体験する(その3)-リフレクティング・プロセスを応用した事例検討とグループスーパービジョン-2012年</p> <p>7、(11)ナラティブなグループアプローチを体験する(その4)-as if work(アンダーソン)とリフレクティング・プロセスの応用 2014年</p> <p>8、ナラティブなグループアプローチを体験する(その5)-多声的多重対話グループの試み;オープンダイアログとアウトサイダーウィットネスの応用によるポリフォニックなアプローチを通して- 2015年</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)(2005年以降のものを提示)</p> <p>1、不妊症セルフヘルプグループにおける語りのポエティクス-病気/障害とグループ体験への語りとその変容を巡って 立教大学・ライフストーリー研究会(代表:桜井厚・立教大学教授・社会学)2007年</p> <p>2、私が、他者を通して、私に語り継ぐということ-「いじめ」というトラウマタイズされた体験とその語りを巡って- 立教大学・ライフストーリー研究会2007年</p> <p>3、ナラティブからコミュニケーションへ-リフレクティング・プロセスの実践- 日本心理学会ワークショップ企画(田代順-浜松学院大学 花田里欧子-京都教育大学 三澤文紀-茨城キリスト教大学 矢原隆行-広島国際大学)2008年</p> <p>4、質的研究のリフレクティング・プロセス、リフレクティング・プロセスの質的研究-その試論に向けて-日本質的心理学会・自主シンポジウム企画での報告(田代順-岩手大学 三澤文紀-茨城キリスト教大学 矢原隆行-広島国際大学)2009年</p> <p>5、グループの(会話のしくみ)を変える、臨床の場が変わる-ケース検討やグループ・ワークにおけるリフレクティング・プロセスの展開- 日本心理臨床学会自主シンポジウム報告2010年</p> <p>6、ナラティブなグループアプローチを体験する(その3)-リフレクティング・プロセスを応用した体験グループと事例研究-日本集団精神療法学会ワークショップ企画2012年</p> <p>7、ナラティブなグループアプローチを体験する(その4)-as if work(アンダーソン)とリフレクティング・プロセスの応用による事例検討・グループスーパービジョンの試み- 日本集団精神療法学会ワークショップ企画 2014年</p> <p>8、ナラティブなグループアプローチを体験する(その5)-多声的多重対話グループの試み;オープンダイアログとアウトサイダーウィットネスの応用によるポリフォニックなアプローチを通して-日本集団精神療法学会ワークショップ企画 2015年</p> <p>9、ナラティブなグループアプローチを体験する(その6) -多声的対話グループによるナラティブな「事例/自例」検討の試み-日本集団精神療法学会ワークショップ企画 2015年</p> <p>10、日本保健医療社会学会 査読委員 2012年～</p> <p>11、日本質的心理学会 編集委員(査読担当)2012年～</p>
<p>競争的資金採択課題</p>	<p>1、個人;科研費(リフレクティングプロセスについての共同研究)にほぼ毎年申し込んでいるが、最終採択候補まで残るのだが、残念ながら採択に至ったことはない。今後も積極的に外部資金獲得につとめるつもりである。</p> <p>2、学内共同;心理コースの教員との共同研究が科研費に採択されている。(中断事例の研究;研究代表黒田教授)研究分担者</p> <p>3、科学研究費補助金-2012年度採択(分担研究者) 共同研究;代表者 森岡正芳(神戸大) 基盤研究A「ナラティブアプローチによる生活史の構築」の研究分担者 臨床実践知の構成的枠組み 生活史の構成は物語を生み出すという人間の基本的な特徴が基盤である。研究の枠組みとしてAnderson,H.(Houston Galveston Institute)の協働アプローチ(collaborative Approach)を敷衍して研究を行う。研究グループのこれまでの交流で、Andersonとは、直接研究協力を依頼し、共同研究を進められる環境である。Andersonは臨床実践の知は関係のなかで、当事者とともに</p>

競争的資金採択課題	<p>作っていくものとする。関係性、コミュニティのなかで生まれた知こそ人を実際に活かし、支え、また人に変化を起こさせるものである。セラピーの場合は「クライアントから情報をもらってそれをセラピストの地図で整理するのではない。」クライアントは不確かであるが、何かを見せようとしている。それまでの知識や情報による地図が面接者の頭のなかにあるとこの何かが見えなくなってしまう。セラピストは無知(Not-Knowing)の姿勢で積極的な会話の参加者となる。この姿勢は、さまざまな実践場面で活用され、ナラティブアプローチの主軸の一つとなっている。</p> <p>2013年度における以上の科研費共同研究は、より具体的に展開し、研究者それぞれのフィールドにおける発表を展開している。筆者に関しては、「心理教育」の分野におけるナラティブアプローチの研究に従事している。その「内容」は、学校における「いじめへの心理教育」のナラティブな展開で、ナラティブなコミュニティへの心理教育の研究である。</p>
学会等発表・役員参加	<p>2005年以降を記載</p> <p>2005年 3月 1、小児がん病棟における母親のナラティブグループ-リフレクティング・プロセスを応用したナラティブプラクティスによる病棟「生活力」の回復- 日本ブリーフサイコセラピー学会 2005年</p> <p>2006年 5月 2、病棟での入院生活を支える-小児がん病棟における入院児の母親へのグループワークを通して- 日本保健医療社会学会</p> <p>2008年 9月 3、「いじめ体験」への語り 日本心理臨床学会</p> <p>2009年 9月 4、学校コミュニティへのナラティブ・アプローチ-「いじめ」に対するコミュニティへの予防的介入をめぐる 日本コミュニティ心理学会</p> <p>役員参加; 日本臨床死生学会(評議員として毎年参加)</p>
受託共同研究の実績	<p>2005年以降を記載</p> <p>2006年 リフレクティング・プロセス研究会(代表; 田代順、矢原隆行; 広島国際大学); 元々は家族療法技法であるこのアプローチ法を研修や事例検討、グループワーク等へ応用実践するための研究会。関連学会でのシンポジウム等主催。(継続中)</p> <p>2012年 毎月 科研費共同研究分担研究者として、研究代表者 森岡正芳氏が所属する神戸大学の共同研究報告会・討議会に参加(継続中)</p> <p>2014年 10月 「いじめ」の精神誌-「いじめ」というトラウマ体験への語りとアイデンティティ-日本人間性心理学会</p>
大学院生指導	<p>2011年～(現在)</p> <p>①臨床心理事例研究における事例指導</p> <p>②ケース・スーパービジョン</p> <p>③大学院ゼミにおける「死と喪失」に関わるテキストの講読授業を通しての指導</p> <p>④修士論文指導(主に死と喪失、セクシュアリティに関わるテーマでの修論指導)</p> <p>⑤臨床心理士の職域についての指導</p> <p>⑥電話相談実習のスーパービジョンと指導</p>
研究能力に対する評価	<p>①臨床実践・研究に関わる評価; リフレクティング・プロセスの「話し方」をベースにしたグループワーク、セラピスト、クライアント、コ・セラピスト(的な対話者)の3人でやる面接法を応用実践して、臨床コミュニケーションの深化とケアの進展など臨床的な効果をあげている。</p> <p>②臨床社会学領域; 臨床関連の事象(身内の死や喪失を経験した当事者、トラウマからのサバイバーが持つ「回復力」)に関わるインタビューを精力的に行っている。カウンセリングに技法(傾聴と共感等)を活用してのインタビューには定評があり、「ものの見事に本質を語らせる」(共同研究者の社会学者からの評価)と過大な評価をいただいた。その結果を人々の「精神誌(サイコグラフィ)」という形でまとめており、研究会での報告では「生き生きとした臨場感」あふれる報告との(ドキュメンタリストとしての)評価もあり、インタビューサイコグラフィという領域での(今後の)業績進展が期待されている。この流れ/評価から2つの学会からの「査読委員」の依頼がきて、主にナラティブなアプローチの論文審査に携わっている。</p>

## サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	<p>2009年 4月 岩手大学教育学部; 広報委員、学生委員(2010年3月まで)</p> <p>2010年 4月 国際交流委員、情報処理セキュリティ委員(2011年3月まで)</p> <p>2011年 4月 学生委員、進路支援委員(2012年2月まで)</p> <p>2012年 4月 大学院入学者選抜会議委員、大学院入試問題作成委員、心理コース出前講義担当コーディネーター</p> <p>2012年 8月 大学院オープンキャンパス・コーディネーター</p> <p>2013年 4月 大学院オープンキャンパス・コーディネーター</p> <p>2014年 4月 心理臨床センター統括責任者</p> <p>2016年 4月 電話相談事業(県の委託)統括責任者</p> <p>2016年 4月 大学院FD・SD委員会 委員長</p>
アドバイザー活動実績	<p>①担当の基礎ゼミナールの学生と茶話会を開催して、親睦に努めた。</p> <p>②メンタルな問題のある基礎ゼミ学生に対して、相談室と連携しての対応。</p> <p>③成績不振で欠席の多い留学生に対する面接指導</p> <p>④基礎ゼミナール所属の全学生に対しての面談と状況把握</p> <p>⑤担当留学生のケア(成績、出入国管理等に関わる)的面接</p>
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	<p>(1)講演会 以下2005年以降のものを掲載</p> <p>2005年 6月 神奈川県立高校; スクールカウンセラーとして勤務する高校において、教員を対象に高校生の精神保健の問題についての講演</p> <p>2005年 7月 神奈川県立高校→スクールカウンセラーとして勤務する高校において、生徒を対象にした、思春期、青年期に好発しやすい問題行動、精神疾患(摂食障害、リストカット、不登校、いじめなど)についての講演をグループワーク方式・体験学習講演を行った。</p> <p>2006年 5月 神奈川県立高校 →高校教員を対象とした、生徒の精神保健に関わる教育講演。思春期～青年期に好発しやすい統合失調症の兆候と病態を解説した。</p> <p>2006年 6月 神奈川県立高校→高校教員を対象とした、「不登校」をめぐる講演。</p> <p>2007年 10月 神奈川県公立中学教師対象→スクールカウンセラー先の中学教師を対象とした「不登校とイジメ」を巡る講演。</p> <p>2008年 11月 グリーフカウンセリングセンター→当該センターにおける秋期講座でのワークショップ型講義=リフレクティング・プロセスのスタイルでグループワークをしながらの体験学習講演である。</p> <p>2009年 6月 岩手県公立中学校→子どもとの対話や指導におけるコミュニケーションの取り方について、臨床的なコミュニケーションの技法を応用しての「やり方」について述べた。</p> <p>2010年 7月 岩手県臨床心理士会→スクールカウンセラー研修の講師として、学校コミュニティへのアプローチについての具体的実践とやり方についてのワークショップを行った。</p> <p>2011年 9月 グリーフカウンセリングセンター→死別経験者に対するグループワーク的講演</p> <p>2012年 9月 グリーフカウンセリングセンター→グリーフカウンセリング技法としてのナラティブなアプローチ</p> <p>2013年 9月 グリーフカウンセリングセンター→グリーフカウンセリング技法としてのナラティブなアプローチ</p>

社会貢献活動	2014年 9月	グリーフカウンセリングセンター→グリーフカウンセリング技法としてのナラティブなアプローチ
	2015年 3月	グリーフカウンセリングセンター→グリーフワークと死についてのワークショップ-体験学習授業
	2015年 11月	静岡県臨床心理士会主催(講師)→リフレクティング・プロセスとオープンダイアログを体験する -グループスーパービジョン(集団事例検討)におけるリフレクティング・プロセスの応用実践と「自例(悩み)」に対するオープンダイアログによるグループカウンセリングの試み
	2016年 3月	グリーフカウンセリングセンター→グリーフワークにおけるナラティブ・アプローチとその実践-社会構成主義、物語、リメンバリング
	2011年 10月	山梨県立甲府南高校→心理学入門の授業を高校2年生を対象に行った。
	2012年 5月	山梨英和学院高校→心理学についての初歩的授業を高校3年生を対象に行った。
	2013年 10月	山梨県立甲府西高校→心身のリラクセスに関わるワークショップ的授業を行った。
	(3)公開講座	
	2015年 10月	～哀しみと喪失の心理学(山梨英和大学メイプルカレッジ・公開講座)
	(4)学外審議会・委員会等	
2005年 4月	日本臨床死生学会評議員(現在に至る)	
2011年 4月	日本質的心理学会編集委員(現在に至る)	
2013年 4月	日本保健医療社会学会査読委員(現在に至る)	
(5)その他		
	年 月	

## 成果と目標

専門的成果	<p>①リフレクティング・プロセスの応用実践研究;臨床実践のみならず、コミュニケーション法として有効なナラティブアプローチのひとつ「リフレクティング・プロセス」を応用してのグループワーク/集団心理療法、心理療法面接や研修・ミーティング、事例検討等実践して多大な成果を挙げている。また、このアプローチに特化した「学際的」研究会を社会学者や臨床心理学者、社会福祉学者らと立ち上げ、様々な学会において、積極的にシンポジウム等を行って、このスタイルのコミュニケーションのあり方、様々な現場における応用実践の試み等について発表・討議して、研究と臨床実践を深めている。</p> <p>②精神誌研究;臨床の基礎研究につながると思われる「当事者研究(あるいは当事者との共同研究)」を積極的に行っている。それら、当事者の対象は、「小児がんの子供と家族」であったり、「いじめの被害のサバイバー」「長期にわたって看取りをおこなった家族メンバー」「脳梗塞後の片麻痺当事者」などであり、参与観察をメインとする現場へのフィールドワークや彼らへのインタビューを通して、「病棟」や「病気」の「社会的構成」、また、トラウマや「障害」とともに「生き延びること」の意味、関係者や社会との連関、トラウマや「障害」への思いの質的全体性を明らかにしてきた。</p> <p>③研究成果の発信等;学会報告や研究会活動ほか、実際の臨床場面や事例検討会等において、上記①の成果を応用実践している。②については、その記録と検討・考察を学術誌に掲載したり、また本として出版して社会に広く還元している。</p>
-------	--

<p>専門的目標</p>	<p>①リフレクティング・プロセスの応用実践研究;立ち上げた研究会(リフレクティング・プロセス研究会)をベースに、関連(かつ学際的)諸学会(質的心理学会、心理臨床学会、保健医療社会学会等)で積極的に(この応用実践の)シンポジウム等を開催して、その応用実践をより理論的、技法的に「洗練」させていくのを目標としている。また、リフレクティング・プロセスというコミュニケーション技法をベースにした一般向けの新書を書いて、この技法のミーティングや研修等への応用実践が社会的に拡がるようにして行く。</p> <p>②精神誌研究;心理臨床や社会福祉分野においては、「当事者(との共同)研究」がますます盛んになる傾向にある。また、当事者との「協働」というのが重要なキーワードとなりつつある。その状況を踏まえながら、インタビューを通し、(福祉分野も含む)当事者からの「病い／障害／トラウマ」についての語りを精神誌としてまとめる作業を今後も展開して、当事者自身のそれらへの「意味づけ／思い」を引き出しつつ、同時にそれらがどのように「社会的」にも構成されているのかを見ていく。以上を通して、臨床をする側の視座のみならず、「当事者」自身の視座も含みこんだ複眼的視座で(臨床実践の基礎的研究ともなり得る)臨床の精神誌をつくっていく。</p> <p>③震災被災、虐待、いじめなどを経験させられた「当事者」に対する聞き取り調査を行い、その実態を、その当事者の語りから描き出す精神誌的研究を実践し、トラウマ低減に対するアプローチの工夫とトラウマワークを行い、トラウマに対する社会学的・心理学的アプローチを充実させていく。</p>
--------------	--

<p>最新データ入力日</p>	<p>2016年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
カダ ヒロシ 黒田 浩司	男	1960年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	社会学修士	専門分野	臨床心理学	
学 歴	1979年	3月	岐阜県立大垣東高等学校卒業	
	1979年	4月	千葉大学人文学部人文学科心理学専攻入学	
	1983年	3月	千葉大学人文学部人文学科心理学専攻卒業	
	1983年	4月	慶応義塾大学大学院社会研究科社会学専攻修士課程入学	
	1985年	3月	慶応義塾大学大学院社会研究科社会学専攻修士課程修了	
	1985年	4月	慶応義塾大学大学院社会研究科社会学専攻博士課程入学	
	1989年	3月	慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程単位修得退学	
実 務 経 験	1984年	4月	千葉県柏児童相談所嘱託判定員(1988年3月まで)	
	1988年	4月	青山学院大学生相談センターカウンセラー(1994年3月まで)	
	1988年	5月	国立千葉病院精神神経科嘱託臨床心理士(1994年3月まで)	
	1989年	4月	産能短期大学通信教育部非常勤講師(2005年3月まで)	
	1994年	4月	茨城大学人文学部専任講師(1997年3月まで)	
	1996年	4月	茨城県スクールカウンセラー(1999年3月まで)	
	1997年	4月	茨城大学人文学部助教授(2004年9月まで)	
	1998年	4月	みとカウンセリングルームどんぐりカウンセラー(2009年3月まで)	
	2004年	4月	放送大学茨城学習センター兼任講師(2009年3月まで)	
	2004年	4月	茨城大学大学院教育学研究科学校臨床専攻兼任(2009年3月まで)	
	2004年	4月	常磐大学大学院人間科学研究科非常勤講師(心理療法特論2009年3月まで)	
	2004年	10月	茨城大学人文学部教授(2009年3月まで)	
	2005年	2月	英国Tavistock Clinic 思春期部門留学(文部科学省平成16年度海外先進教育実践による派遣 2006年2月まで)	
	2009年	4月	茨城大学大学院教育学研究科学校臨床専攻非常勤講師	
2009年	4月	山梨英和大学人間文化学部教授		
2009年	4月	山梨英和大学大学院人間文化研究科兼任		
受賞 歴	2007年	3月	茨城大学2006年度推奨授業受賞 教養科目「こころの科学」	
所 属 学 会	1986年	4月	日本心理臨床学会(現在にいたる)	
	1996年	4月	日本ロールシャッハ学会(現在にいたる)	
	2000年	4月	包括システムによる日本ロールシャッハ学会(現在にいたる)	
	2001年	4月	日本精神分析学会(現在にいたる)	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・ ・	1995年	4月	臨床心理士(日本臨床心理士資格認定協会 No04221)	
	年	月		
	年	月		
e-mail	h.kuroda[atmark]yamanashi-eiwa.ac.jp			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>大学教育において学問の基本を学ぶことは、その学問の理念や緒理論を理解するだけでなく、対象を多様な観点から考察しうる学問的態度を見につけることが肝要と考えられる。この学問的な態度には批判的な観点も同時に持ちつつ、机上の論理にならないように現実の事象や実際の場面とかかわることが含まれ、これが実践的な学問的能力となり、知識および良識ある社会人の育成につながるものとする。</p> <p>教養科目、専門科目、大学院科目のすべての領域において、この基本的な理念や緒理論と実際的な問題をつなぎ、授業の中で主体的考える機会を多く取り入れておく。教養科目においては心理学の基本的な実験や、心理テスト、カウンセリングの実習を取り入れ、なおかつ精神障害者に対する偏見については課題を出し、実践を通して考察をすることを求めており、受講生が心理学や精神病の現実を知り、社会の様々な事象を心理学的に考察することの面白さを体験できるように心がけている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a. 大学における精神障害に関する心理教育の試み 大学の教養科目において、偏見の少ない精神障害に対する正しい知識を習得してもらうために、受講生自身が心理教育を受けるだけでなく、最低2名の周囲の人(家族、友人など)に心理教育をおこなう実践を求め、その成果をレポート課題として提出を求めた。教室で受身的に聞くだけでなく、自らが心理教育活動に参加することによりこの問題に対する積極的な態度がより培われた。</p> <p>また、学部専門科目においてはその授業の中で、精神病院デイケアとの交流会や作業所ボランティアなどに学生に積極的に関与させ、精神障害を抱えている人との実際のかかわりを通して、この問題を深く考察されている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a.黒田浩司”臨床心理アセスメント(2)知能検査と質問紙法””臨床心理アセスメント(3)投映法””コミュニティ援助(1)危機介入とコンサルテーション””臨床心理学概説”馬場禮子(編著)p67-77、p78-88、p1140-149、放送大学教育振興会、1999/2003</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>黒田浩司 茨城大学2006年度表彰授業報告</p>
担当授業科目	<p>2016年度</p> <p>基礎ゼミナールⅡ、サービスマナーⅠ、サービスマナーⅡ、ココロの科学Ⅰ、専門ゼミナール、卒業研究(以上学部)</p> <p>心理療法特論Ⅰ、投映法特論、臨床心理査定演習、臨床心理事例研究 修士論文(以上大学院)</p>
代表的ス	<p>授業の方針としてはそれが講義であっても、演習であっても、授業の中に実習をできるだけ取り入れ、学生自身が深く問題に関与し、積極的に取り組むように努力している。そのためにかなりボリュームのある資料を用意し、受講生の提出したデータを授業の中でもちいるようにしている。卒業論文研究につながるようにレポートとして提出するように求めている。</p>
教育改善活動	<p>a. 教養教育科目人文分野専門部会長(2006年～2008年度、茨城大学) 茨城大学全学の人文分野の教養教育科目の専門部会長として授業の質を良くするために授業アンケートやFD研修会、シンポジウム、シラバス改善のための点検評価、などをおこなった。</p> <p>b. 山梨英和大学FD推進委員(2009年～現在) FD推進委員として、研究会の講師を務め、FD研修会の企画、開催、記録・報告などをおこなった。特に2014年度からはFD/SD推進委員長(2015年度は大学院FD委員長も務める)として、FD/SD研修会を積極的に企画し、講師・司会も務めている。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>授業への全体的評価(授業アンケートより):興味深く役に立つ資料が多く配布され、心理臨床や社会の現場の問題が授業の中でプレゼンテーションされることに対して学生は高く評価していた。精神障害の心理教育に関する課題が授業の中で課せられることについては負担が大きいと記述する学生も見られたが、自らが参加することでこのような問題の核心に触れたように感じる受講生も少なくなく、受講生の積極的にものごとに参加する姿勢や自己評価が高まった印象を受けている。</p> <p>改善してほしい点:受講生の多くが提出したレポートについてフィードバックを欲しいと希望していたが、すべてにコメントをつけて返却することができず、今後改善が必要であると思われる。現在は授業の最後の時間いくつかのレポートについてコメントし、代表的な質問に対してコメントを返しているのみとなっている。また、試験をおこなう科目についてはいくつかの科目で試験後の授業の中で問題の意図と解答例を解説しているが、受講生からは「どのように解答すれば良いかの参考になり、とても勉強になった」との評価が得られており、今後はなるべくすべての科目で実践してゆきたいと考えている。</p>

に教育 評価 する 力	(2)同僚教員等による授業評価 現在同僚による授業評価はおこなっていない、今後の課題である。
----------------------	---

## 研究業績

研究の特徴	<p>心理臨床におけるアセスメントと臨床心理学的地域援助が主な研究テーマになっている。アセスメントに関しては投射法のロールシャッハテスト、およびSCTをもちいての、クライアントの内面を精神力動的にアセスメントする技法について研究を継続しており、境界性人格、非行少年、発達障害者に関して多数の学会発表がある。臨床心理学的地域援助に関しては、精神障害に関する心理教育、思春期・青年期の臨床心理的問題の地域援助、地域がんセンターにおける他職種と心理臨床家の協働に関する研究を継続している。思春期・青年期の臨床心理学的問題の地域援助については、このテーマに関して1年間英国Tavistock Clinic思春期部門への留学経験があり、その後も毎年Tavistock Clinicを訪問して、英国の研究者との交流を続け、ロンドンでのアウトリーチ実践について日本での応用の可能性を探っている</p>
研究経歴	<p>2015年 山梨英和大学にて効果的なサービスマーケティングにおけるアクティブラーニングに関する研究(現在まで)</p> <p>2015年 地域におけるCCRCの展開と多文化共生コミュニティの創生に関する研究(現在まで)</p> <p>2014年 投射法心理検査における対象関係のアセスメントに関する研究(現在まで)</p> <p>2010年 山梨英和大学にて臨床心理士の効果的な教育訓練システムについて従事(現在まで)</p> <p>2005年 茨城大学にて授業を通じての精神障害や発達障害に関する心理教育の実践とその効果の測定の研究に従事(現在まで)</p> <p>2004年 地域がんセンターにおける臨床心理と他職種の効果的なコラボレーションに関する研究(現在まで)</p> <p>2004年 思春期・青年期の心理的問題に対する効果的な地域支援に関する研究(現在まで)</p> <p>1999年 投射法心理検査による心理臨床アセスメントに関する研究(現在まで)</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 黒田浩司”見立ての困難事例を心理アセスメントから理解する：SCT・描画法による総合的検討”『臨床のこころ』を学ぶ心理アセスメントの実際：クライアントの理解と支援のために」高橋靖恵(編著)p23-45、金子書房、2014</li> <li>2. 黒田浩司”SCT”『投射法研究の基礎講座』津川律子(編著)p139-152.遠見書房、2012</li> <li>3. 黒田浩司”現代の精神分析1-自我心理学の立場による精神分析的療法”『やさしく学べる心理療法の実践』窪内節子(編著)p1-22.培風館、2012</li> <li>4. 黒田浩司”はじめての人のための「学びのガイドライン」、”大学院修了後のスーパーヴィジョンの体験から”『臨床心理士の基礎研修』日本臨床心理士会(編)p5-17、p188-191.創元社、2009</li> <li>5. 黒田浩司”コンサルテーションに役立つ例(妄想反応)”、“ひきこもり青年の内面理解(分裂的性格)”、“SCT(文章完成法)”、“WAI(Who am I)”、“Barrier and Penetration Scales”、“クーパーの防衛尺”『心理査定実践ハンドブック』氏原寛・岡堂哲雄・亀口憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子(編)p34-37、p38-41、p231-235、p364-368、p379-382、p388-392.創元社、2006</li> <li>6. 黒田浩司”臨床心理アセスメント(2)知能検査と質問紙法””臨床心理アセスメント(3)投射法””コミュニティ援助(1)危機介入とコンサルテーション”『臨床心理学概説』馬場禮子(編著)p67-77、p78-88、p1140-149、放送大学教育振興会、1999/2003</li> <li>7. 黒田浩司・馬場禮子”ロールシャッハテスト”『臨床心理学大系第6巻人格の理解②』安香宏・大塚義孝・村瀬孝雄(編)、p25-51、金子書房、1992.</li> <li>8. 黒田浩司・山本和郎”コンサルテーション”『メンタルヘルスハンドブック』上里一郎・飯田眞・内山喜久雄・小林重雄・筒井末春(監修)56-6、同朋舎、1989</li> </ol> <p>(2)学術論文(最新のものから)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 黒田浩司:”すべての心理職が心理検査にできるというのは幻想である” ころの科学 第187号 pp12-14、2015.</li> </ol>

研究実績	<p>2. 黒田浩司：“神田論文へのコメント—クライアントの不安から理解できること” 岐阜大学心理教育相談研究 第12号 pp12-14, 2013.</p> <p>3. 黒田浩司：“境界パーソナリティのロールシャッハ反応：過剰病理化か、深い解釈か”『ロールシャッハ法研究』第15巻,pp.26-29,2012.</p> <p>4. 黒田浩司：“医療スタッフ・職員に癒しが生じるとき”『癒しの環境』(癒しの環境研究会), Vol.17,p.78-80,2012.</p> <p>5. 黒田浩司：“境界性人格のロールシャッハ反応：過剰病理化か、深い解釈か”『山梨英和大学心理臨床センター紀要』,Vol.7,p.6-11,2011.</p> <p>6. 黒田浩司“看護師の自己評価とプロ意識——臨床心理士からみた看護師のストレスと悩み——”『看護管理』、第18巻、第1号、p20-24.2008.</p> <p>7. 黒田浩司“コミュニティベースの臨床心理学的援助の新しい可能性”茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』、第1号、p23-39,2006</p> <p>8. 黒田浩司“ロールシャッハ・テストにおける力動的理解の現在”『臨床心理学』、第5巻第29号、P621-627.2005.</p> <p>など</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>1. Hiroshi Kuroda The Rorschach response of Borderline Personalities. Symposium:An Effect of Psychopathological Assessment in the Rorschach. The 20th Coference of International Society of the Rorschach and Projective Techniques. In Tokyo,Japan,2011.</p> <p>2. Chair Person for the Lecture:Suicide Prevention by Dr. Thomas Shaffer. The 20th Conference of International Society of the Rorschach and Projective Techniques. In Tokyo,Japan,2011.</p> <p>3. Hiroshi Kuroda “W Face Response on the Rorschach Test. Tthe 19th conference of International Society of the Rorschach and Projective Techniques.in Lueven,Belgium 2008.</p> <p>4. 学術雑誌「ロールシャッハ法研究」編集協力委員(2011年度、2013年度、2014年度)</p> <p>e.学術雑誌「心理臨床学研究」編集協力委員(2014年度、2012年度、2011年度、2010年度、および2009年度)</p> <p>f.学術雑誌「包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌」編集2006～2015年)</p> <p>g.学術雑誌「Rorschachiana」Editial Borad. (2004年より)</p>		
	競争的資金採択課題	<p>2011年10月～2012年9月</p> <p>平成23年度日本臨床心理士資格認定協会研究助成 『初学者のケース担当における体験をコンティンする教育・訓練システムの研究』代表</p> <p>2005年2月～2006年2月</p> <p>文部科学省平成16年海外先進教育研究実践プログラム</p>	
学会等発表・役員参加	2015年	11月	長田庸子・黒田浩司“SCT(文章完成法テスト)にあらわれる抑うつ傾向”日本ロールシャッハ学会第19回大会論文集 大正大学
	2015年	11月	土橋拓真・黒田浩司“精研式文章完成法を用いた自我発達水準の測定”日本ロールシャッハ学会第19回大会論文集 大正大学
	2014年	11月	黒田浩司“ロールシャッハ法の所見を心理療法に活用するのが難しかったケース”日本ロールシャッハ学会第18回大会論文集 p31 佛教大学
	2014年	8月	望月梨央・黒田浩司”ストーカー行為に関する基礎研究——複視経路・等至性モデル(TEM)を用いた加害者研究——”日本心理臨床学会第33回大会発表論文集P511

2014年	7月	Hiroshi Kuroda Rorschach responses of social withdrawal syndrome named “Hikikomori” in Japan.. The 21th Conference of International Society of the Rorschach and Projective Techniques. In Istanbul,Turkey.
2013年	11月	深澤桂樹・小林あずさ・手川真由美・黒田浩司 “統合失調症者に見られるSCTの特徴” 日本ロールシャッハ学会第17回大会抄録集 Pp48. 11月花園大学
2013年	8月	細川明子・黒田浩司”「看護師のやりがい」に関する臨床心理学的研究” 日本心理臨床学会第32回大会発表論文集 Pp360 パシフィコ横浜
2013年	8月	山本智美・黒田浩司 ”うつ病休職者のリワークプログラムにおける心理的变化” 日本心理臨床学会第32回大会発表論文集 Pp413 パシフィコ横浜
2013年	7月	細川明子・黒田浩司 ”「看護師のやりがい」に関するコミュニティ心理学的研究” 日本コミュニティ心理学会第16回大会発表論文集Pp64-65. 慶應義塾大学日吉キャンパス
2013年	6月	黒田浩司 ”包括システムに力動的解釈を統合する試み” 包括システムによる日本ロールシャッハ学会第19回大会発表論文集 Pp28-29. 山梨英和大学
2012年	9月	黒田浩司・森稚葉・奥村弥生 “効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(8)―初学者の体験をコンテインする教育・訓練システムの研究” 日本心理臨床学会第31回大会 愛知学院大学
2012年	9月	森稚葉・黒田浩司・奥村弥生 “効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(9)―初学者の体験をコンテインするためのスーパービジョンの検討” 日本心理臨床学会第31回大会 愛知学院大学
2012年	9月	高橋理恵・黒田浩司 “児童養護施設における施設心理士導入の実際Ⅲ” 日本心理臨床学会第31回大会 愛知学院大学
2012年	9月	小宮山志保・黒田浩司 “自死に関する臨床心理士の研修と自死のとらえ方の実態” 日本心理臨床学会第31回大会 愛知学院大学
2011年	9月	黒田浩司・森稚葉・小野綾子・篠原恵美 “効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(4)―ケースカンファレンスを学びの多いものにするためのアクションリサーチの試み―” 日本心理臨床学会第30回大会 福岡国際会議場(九州大学)
2011年	9月	高橋理恵・黒田浩司 “児童養護施設における施設心理士導入の実際Ⅱ” 日本心理臨床学会第30回大会 福岡国際会議場(九州大学)
2011年	9月	深澤圭樹・小林あずさ・手川真由美・黒田浩司 “SCTから見る対象関係―発達障害者・境界例者に特徴的な反応に着目して―” 日本心理臨床学会第30回大会 福岡国際会議場(九州大学)
2011年	7月	Hiroshi Kuroda W Face Response of Borderline personalities on the Rorschach Test. The 20th Conference of International Society of the Rorschach and Projective Techniques. In Tokyo,Japan.
2011年	7月	飯島文子・黒田浩司 “臨床の場で『人を育てる』ということ―プリセプターの新人看護師指導プロセス分析” 日本コミュニティ心理学会第14回大会上智大学
2011年	7月	国際ロールシャッハおよび投射法学会第20回東京大会組織委員
2010年	10月	黒田浩司”精神病的不安を抱える青年期事例” 日本ロールシャッハ学会第14回大会、帝塚山大学
2010年	9月	黒田浩司・森稚葉・小野綾子・田中健夫・馬場禮子”効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(3)” 日本心理臨床学会第29回大会、東北大学
2010年	7月	黒田浩司”地域がんセンター緩和ケアチームとのコラボレーション” 日本コミュニティ心理学会第13回大会 立教大学

学会等発表・役員参加	2009年	10月	黒田浩司”境界性人格のSCTにみられる対象関係”日本ロールシャツハ学会第13回大会、大妻女子大学
	2009年	9月	黒田浩司”変化することへの強い抵抗を示すクライアントの心理療法”日本心理臨床学会第28回大会、東京国際フォーラム
	2009年	7月	黒田浩司”医療現場におけるコミュニティ支援プログラムの展開の試み;地域がんセンター緩和ケアチームとのコラボレーション”日本コミュニティ心理学会第12回大会、東北大学
	2008年	10月	黒田浩司”自己臭恐怖を訴える青年期事例”日本ロールシャツハ学会第12回大会、新潟青陵大学
受託研究の実績	2015年	11月	山梨市生涯学習課 山梨市生涯学習計画調査
大学院生指導	大学院指導教員(山梨英和大学大学院)		
	2015年度 ORTによる対象関係の査定について		
	2014年度 1.SCT(文章完成法)にあらわれる抑うつ傾向 2.SCT(文章完成法)を用いた自我発達水準の測定		
	2013年度 1.ストーカー行為に関する基礎的研究 2.少年の動物虐待に関する基礎研究 3.緩和ケアに従事する医療従者の心理的苦悩に関する研究		
	2112年度 1.「看護師のやりがい」に関する臨床心理学的研究 2.痴呆性高齢者に対するコラージュ療法の導入が与える効果 3.うつ病を中心とした気分障害患者のリワークプログラムにおける心理的変化		
	2011年度 1.自死に関する臨床心理職の研修とスティグマの実態 2010年度 1.児童養護施設における心理的援助と他職種との連携:施設心理士の発展を目指して 2.臨床の場で『人を育てる』ということ:プリセプターの新人看護師指導プロセス分析		
研究能力に対する評価	<p>投映法心理検査によるアセスメントについては学界において中心的役割を果たすと期待されており、国際学会の組織員や国際学会誌の編集委員、ワークショップや基礎講座の講師の依頼を多く受けている。</p> <p>臨床心理的地域援助においてもこの領域の第一人者と評価されており、他大学や家庭裁判所調査官の研修などにおいて講演や研究報告の依頼を何度か受けている。</p>		

### サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2016年	4月	学長特別補佐(大学評価・地域連携推進担当)、FD・SD推進委員、山梨英和COC+推進室コーディネーター、COC+CCRCコース代表
	2015年	4月	学長特別補佐(大学評価・地域連携推進担当)、FD・SD推進委員長、大学院FD推進委員長、山梨英和COC+推進室コーディネーター、COC+CCRCコース代表
	2014年	4月	学長特別補佐(大学評価・地域連携推進担当)、FD・SD推進委員長
	2013年	4月	学長特別補佐(学生サポート担当)、FD・SD推進委員会委員
	2012年	4月	学長特別補佐(学生サポート・学生会館建設担当)、FD・SD推進委員会委員
	2011年	4月	心理臨床センター長、学生部長、広報委員会、進路支援委員会
	2010年	4月	心理臨床センター長、入試委員会、FD推進委員会

アドバイザー活動実績	2015年度は大学院生指導教員、卒業研究、専門ゼミナール、で総計49名の担当学生のアドバイザーを務めた。構成的エンカウンターグループなどの手法を用いて学生間のコミュニケーションを促進したり、異なった学年間の交流を活性化させる工夫をしている。また、希望する学生には地域連携活動にも積極的に送りだし、活動を支援している。
後進育成活動実績	学会におけるワークショップや家庭裁判所調査官の研修において、面接やアセスメントに関する研修の講師を務め、後進育成活動を行っている。また、2012年度より山梨ロールシャツハ研究会を主宰し、ロールシャツハ法を中心とした臨床心理アセスメントの専門家の育成を継続している。
社会貢献活動	<p>(1)講演会</p> <p>2016年 3月 黒田浩司「対話とカウンセリング:死にたいという人とともに歩む」山梨いのちの電話 2015年度相談員養成(公開)講座</p> <p>2016年 2月 黒田浩司「英国対象関係論の展開:投影同一化の理解と活用」岐阜大学大学院教育学研究科特別セミナー</p> <p>2015年 6月 黒田浩司「教育相談とは:現代の教育相談に必要とされる実践力」甲府市教育委員会研修会</p> <p>2015年 7月 黒田浩司「教員のためのカウンセリング入門」甲斐清和高等学校校内研修会</p> <p>2015年 3月 黒田浩司「生涯学習のための心理学入門」山梨県生涯学習センター生涯学習指導者養成講座</p> <p>2014年 6月 黒田浩司「教育相談とは:現代の教育相談に必要とされる実践力」山梨県教育相談センター研修会</p> <p>2014年 2月 黒田浩司「子どもたちと向き合うために」山梨県立塩山高等学校教育相談研修会</p> <p>2013年 11月 黒田浩司「子どもの笑顔をとりもどそう! いじめ・不登校・ひきこもり 解決とネットワーク」平成25年度峡東地区人権のための講演会</p> <p>2012年 10月 黒田浩司「現代社会の家族・若者の心理と諸問題～～カウンセリングの現場から」調停制度90周年記念講演 甲府家庭裁判所</p> <p>2012年 2月 黒田浩司「英国心理臨床の最新事情」岐阜大学総合メディアセンター</p> <p>2012年 1月 黒田浩司「テストバッテリー」家庭裁判所調査官養成課程第7期 後期合同研修 裁判所職員総合研修所(埼玉県和光市)</p> <p>2011年 4月 黒田浩司「被災者支援の基礎知識」山梨英和大学心理臨床センター 東日本大震災支援プログラム準備のための研修会</p> <p>2011年 2月 黒田浩司「テストバッテリー」家庭裁判所調査官補研修、裁判所研修委員研修所</p> <p>2010年 12月 黒田浩司「自殺企図の高いクライアントのリスクアセスメントとかかわり」山梨英和大学心理臨床センター地域貢献セミナー、山梨英和大学</p> <p>2010年 9月 黒田浩司「リーダーシップ能力と対人関係能力の育成」群馬県小児医療センター看護部リーダーシップ研修</p> <p>(2)出前講座</p> <p>2015年 11月 黒田浩司「入門心理学ー心理学で何がわかるのか?」山梨県立山梨高校</p> <p>2015年 10月 黒田浩司「入門心理学ー心理学で何がわかるのか?」山梨県立甲府東高校</p> <p>2014年 11月 黒田浩司「入門心理学ー心理学で何がわかるのか?」山梨県立山梨高校</p> <p>2014年 11月 黒田浩司「入門心理学ー心理学で何がわかるのか?」山梨県立甲府西高校</p> <p>2013年 9月 黒田浩司「入門心理学ー心理学とは?」山梨県立甲府第一高校</p> <p>2012年 8月 黒田浩司「精神分析の世界」山梨英和大学オープンキャンパス模擬授業</p> <p>2012年 9月 黒田浩司「入門心理学ー心理学とは?」山梨県立甲府第一高校</p> <p>2012年 9月 黒田浩司「心理検査の世界」山梨英和大学オープンキャンパス模擬授業</p> <p>2011年 10月 黒田浩司「入門心理学ー心理学とは?」山梨県立日川高等学校</p>

社会貢献活動	2011年	10月	黒田浩司“入門心理学ー心理学とは？” 山梨県立甲府昭和高等学校	
	2011年	7月	黒田浩司“こころの諸問題とその支援方法”山梨英和大学オープンキャンパス模擬授業	
	2010年	6月	黒田浩司“こころの諸問題とその支援方法”長野県立諏訪高等学校	
	2010年	8月	黒田浩司“こころの諸問題とその支援方法”山梨英和大学オープンキャンパス模擬授業	
	(3)公開講座			
	2015年	10月	黒田浩司”臨床心理学による自己探訪”山梨英和大学メイプルカレッジプログラム	
	2011年	10月	黒田浩司”現代のコミュニケーションの問題を臨床心理学的に考える”山梨英和大学メイプルカレッジプログラム	
	2011年	10月	黒田浩司“震災時にはどのようなことが起きるのか？” 大学コンソーシアムやまなし・県民コミュニティーカレッジ「こころのケア」ー臨床心理士にできること	
	2010年	10月	黒田浩司”現代のコミュニケーションの問題を臨床心理学的に考える”山梨英和大学メイプルカレッジプログラム	
	2009年	2月	黒田浩司”こころの病と不適應について学ぶ”放送大学茨城学習センター公開講座	
	(4)学外審議会・委員会等			
	2013年	8月	包括システムによる日本ロールシャッハ学会第20回記念大会組織委員(学生ボランティア委員長、プログラム副委員長2014年5月まで)	
	2013年	5月	日本心理臨床学会 代議員(甲信越・北陸地区 現在まで)	
	2012年	5月	包括システムによる日本ロールシャッハ学会第19回大会大会長(2013年6月)	
	2009年	4月	日本心理臨床学会選挙管理委員(2010年3月まで)	
	2009年	4月	国際ロールシャッハ及び投映法学会第20回日本大会組織員(財務担当 2011年8月まで)	
	2007年	4月	日本臨床心理士会研修委員(2009年3月まで)	
	2004年	4月	包括システムによる日本ロールシャッハ学会編集委員(現在まで)	
	(5)その他			
	2015年	12月	平成27年度甲府家庭裁判所調査官研修会 講師(事例検討会 TAT)	
	2015年	2月	平成26年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)	
	2014年	6月	平成26年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)	
	2013年	6月	平成25年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)	
	2013年	10月	平成25年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)	
	2012年	6月	平成24年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)	
	2012年	10月	平成24年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)	
	2011年	10月	平成23年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)	
2011年	6月	平成23年度家庭裁判所調査官専門研修 講師(事例検討)		

## 成果と目標

専門的成果	<p>テストバッテリーにおける文章完成法(SCT)の活用に関する研究:投映法心理検査の中では、比較的多く利用されるが、その解釈手続きや信頼性・妥当性が十分に検討されていなかった文章完成法(SCT)に関して、境界性人格、精神病患者、非行少年、発達障害者のデータを収集し、数量的文責と質的分析をおこない、そのアセスメントの有効性について実証的に考察をおこなった。また、ロールシャッハテストや描画法</p> <p>と組み合わせることによって多面的にクライアントを理解する手法についても検討し、より有効なテストバッテリーの活用について考察をおこなっている。</p> <p>臨床心理学的地域支援については地域における実践をいくつか継続しており、心理臨床家が関連する他職種をサポートすることにより、より効果的な地域援助が実践できる可能性を見出している。</p> <p>研究成果に関しては学会発表などを通じて発信しており、その結果、研究成果にもとづく専門家や関連する領域(例えば看護職、福祉職など)からの研修・講演いらいなど幅広く発信している。</p>
-------	---

<p>専門的目標</p>	<p>投映法によるアセスメントも臨床心理学的地域援助に関しても、研究成果の発表は国内にとどまっており、今後は国際学会での発表や国際的な学会誌への論文投稿を目標としている。今後は、この領域における国際学会にも深く関与してゆきたいと考えている。</p> <p>また、臨床心理学的地域援助や心理教育に関しては山梨の地を拠点とした活動をおこなってゆきたいと考えている。一つのテーマとして「自死問題」をとりあげ、この問題にどのような地域支援ができる可能性があるかについて検討している。</p>
--------------	---

<p>最新データ入力日</p>	<p>2016年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
小林 真理子	女	1962年	教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	修士(社会福祉学)	専門分野	臨床心理学	
学歴	1982年	3月	山梨県立都留高等学校 卒業	
	1982年	4月	山梨大学教育学部特殊教育学科 入学	
	1985年	3月	山梨大学教育学部特殊教育学科 卒業	
	2013年	4月	東北福祉大学大学院総合福祉学研究科社会福祉学専攻修士課程 入学	
	2015年	3月	東北福祉大学大学院総合福祉学研究科社会福祉学専攻修士課程 修了	
	2015年	4月	東北福祉大学大学院総合福祉学研究科社会福祉学専攻博士課程 入学	
実務経験	1985年	4月	医療法人回生堂病院 心理科 臨床心理技術者	
	1989年	6月	山梨県都留児童相談所 心理判定担当 非常勤心理判定員	
	1990年	4月	山梨県中央児童相談所 判定指導課 主事:心理判定員	
	1992年	4月	山梨県都留児童相談所 心理判定担当 主事・主任:心理判定員	
	1998年	4月	山梨県障害者相談所 知的障害担当 主任:心理判定員	
	2001年	4月	山梨県立精神保健福祉センター 副主査・主査:臨床心理技術者	
	2006年	4月	山梨県発達障害者支援センター 主査:臨床心理士	
	2009年	4月	山梨県中央児童相談所 診断育成課 課長	
	2011年	4月	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課地域移行・障害児支援室 発達障害対策専門官	
	2013年	4月	山梨県福祉保健部子育て支援課 児童対策企画監	
	2015年	4月	山梨県都留児童相談所 所長	
	2016年	4月	山梨英和大学人間文化学部教授	
	2016年	4月	山梨英和大学大学院人間文化研究科兼任	
受賞歴	年	月	特になし	
	年	月		
	年	月		
所属学会	1996年		日本心理臨床学会 正会員(現在に至る)	
	2009年		日本児童青年精神医学会 正会員(現在に至る)	
	2005年		日本思春期青年期精神医学会 正会員(現在に至る)	
	2000年		日本発達心理学会 正会員(現在に至る)	
	1998年		日本ロールシャッハ学会 正会員(現在に至る)	
特免資格等	2001年		臨床発達心理士(臨床発達心理士認定運営機構 No00222)	
	2004年		臨床心理士(日本臨床心理士資格認定協会 No11803)	
	年	月		
	年	月		
e-mail	m.kobayashi[atmark]yamanashi-eiwa.ac.jp			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>大学教育において、専門についての理論や必要な技術を習得することはまずは基本であり、重要である。一方、学校(school)は、古代ギリシア語で(schole スコレー)でその意味は暇であり、最高の暇つぶしの場所であるとも言える。最高の暇つぶしは、「学び」とは何かを問いながら、学び方を学ぶことであると考え、この二つのことに豊かな時間が費やせることが大切である。</p> <p>教育の方法としては、これまでの対人援助職としての実践知と培った技術を教育の場に取り入れ、生き生きとした実践と理論の統合を図れるようにしたい。また、実践の場での支援の現状と課題を明らかにし、学生たちが新しい発見をでき、研究内容への関心を深められるよう心掛けている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>基礎ゼミナールでは、講義中の配慮や個別による支援が必要な学生が複数名おり、保健室や学生相談室並びに図書室との連携をもって授業を進めている。グループ活動や実践的なワークなどアクティブラーニングを苦手としそのまま欠席する学生がおり、学生の取り組み状況をみながら授業の方法も適宜変化させていく必要がある。</p> <p>本年度からの採用であり、大学での教育は常勤では初めてであり、実践例として述べることはできないが、心理面接実習では、前半では多くのアクティビティを取り入れ、多様なコミュニケーションを体験してもらえるように配慮し、十分なウォーミングアップを行った。後半では、実践でも役立つようロールプレイや事例を多く取り入れての演習を行っている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>特になし。(「発達障害プラクティス ー子どもから大人までー」精神科治療学Vol29 増刊号 は今後、障害者(児)臨床心理学において、テキストとして利用する予定。)</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>(予定)2016年7月「思春期・青年期臨床を教えること 児童福祉領域の臨床」第29回大会 本思春期青年期精神医学会 大会テーマ「思春期・青年期臨床を学ぶことと教えること」</p>
担当授業科目	2016年度【学部】基礎ゼミナール、専門ゼミナール、心理面接実習、心理臨床実践、こころの科学、卒業研究【大学院】障害者(児)臨床心理学特論、臨床心理事例研究、臨床心理実習、修士論文
代表的シラバス	<p>本年度からの採用であるため、代表的シラバスは明記できない。心理面接実習においては、多くの学生が初めての面接演習体験であり、心身のバランスに留意しながら、面接理論や技術などは基本にとどめ、導入的ウォーミングアップを多く取り入れたうえでロールプレイを行い、心理面接に迎えるよう計画している。(今後は、大学院においては、障害のある事例への対応を踏まえた実践事例のアセスメントの必要性を盛り込んだシラバスづくりを検討していきたい。)</p>
教育改善活動	<p>【教員間情報提供による授業改善】</p> <p>○基礎ゼミナールにおいては、学生の「学び」への意欲、自主的な研究に向かうきっかけづくりを狙って、過去の授業計画・内容の精査を教員間で行い、それぞれの専門分野での授業提供を行う方向である。また、特別な配慮の必要な学生について、学生サービス部、保健室、学生相談室などと情報共有を行い、可能な限り適切な支援に向けて取り組む方向である。</p> <p>○大学院の事例検討について、アセスメントの重視、面接の構造・方法についても再検討していく必要があると感じており、それに基づく専門科目の講義内容を再構成していこうと現在検討中である。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>○本年度の採用によるため詳細については不明。専門ゼミナールでは、これまでの実践援助事例や支援の現状と結びつけた理論説明のため強い関心を示している。(が今後はこれまでの実践を体系化してテキストにしていきたい。)</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>○現在は不詳。</p>

## 研究業績

研究の特徴	1989年～2015年までは地方公務員(2011年～2012年国家公務員)心理専門職として、対人援助職や福祉行政に従事してきた。その業務の中で、対人援助サービスにおいて必要である支援技術や支援システムについて、実践事例を通して研究を行ってきた。
研究経歴	2005年～2010年 ひきこもりや発達障害(児)者に関する支援技術 2011年～2013年 発達障害(児)者の支援システム
研究実績	<p><b>(1)著書</b></p> <p>1. 萩原拓 内山登起夫 小林真理子他 (2015)発達障害にある成人たちの生活の現状と課題—二次的問題(二次障害)への予防的視点 『発達障害のある子の自立に向けた支援』金子書房 P47～52</p> <p>2. 本田秀夫 小林真理子 近藤直司他 (2014) 学齢期・思春期に利用できる制度と社会資源 『精神科治療学 Vol.29 増刊号 発達障害ベストプラクティス 子どもから大人まで』「精神科治療学」編集委員会 星和書店 P211～214</p> <p>3. 本田秀夫 小林真理子他 (2011) Q&amp;A 『こころのりんしょうà la carte Vol.30 No.2 子どものこころの病を診る』星和書店 P155,168,187</p> <p>4. 近藤直司 小林真理子他 (2009) アスペルガー症候群とひきこもり 『別冊発達30 アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助 榊原洋一編著』ミネルヴァ書房 P158～165</p> <p>5. 小林真理子 近藤直司他 (2007) 青年期のひきこもりと発達障害 『現代のエスプリ474 スペクトラムとしての軽度発達障害 I 石川元編集』至文堂 P212～217</p> <p>6. 小林真理子 近藤直司他 (2005) 発達障害とひきこもり 『現代のエスプリ別冊うつ時代のシリーズ ひきこもる若者たち 村尾泰弘編集』至文堂 P54～64</p> <p>7. 小林真理子 近藤直司他 (2002) ひきこもり 『いまを読み解く保健活動のキーワード 尾崎米厚他編集』医学書院 P182-184</p> <p><b>(2)学術論文</b></p> <p>1. 小林真理子 (2012) 発達障害に関連した法律と支援制度 小児内科Vol44 No5 文栄堂P789-793 (査読なし)</p> <p>2. 小林真理子 (2012) 発達障害者支援のこれまでと今後 LD研究 第12巻 第4号 P435-438 (査読なし)</p> <p>3. 近藤直司 小林真理子 宮沢久江 (2008) 広汎性発達障害をもつ青年期ひきこもりケースの心理療法について 思春期青年期精神医学 JSAP 2008 Vol.18 No2 P130-137 (査読なし)</p> <p>4. 近藤直司 小林真理子他 (2008) ひきこもりと広汎性発達障害 臨床精神医学 第37巻 第12号 アークメディア P1565-1569 (査読なし)</p> <p>5. 近藤直司 岩崎弘子 小林真理子 (2007) 青年期ひきこもりケースの精神医学的背景 精神神経学雑誌 第109号 第9号 P834-843 (査読あり)</p> <p>6. 近藤直司 小林真理子 有泉加奈絵 (2003) 青年期ひきこもりケースの精神療法的アプローチ 日本外来精神医療学会誌 第2巻 第1号 (査読なし)</p> <p>7. 近藤直司 小林真理子 (2002) 青年期ひきこもりケースの精神療法 星和書店 精神科臨床サービス 第2巻3号 (査読なし)</p>

研究実績	<p>8. 近藤直司 河西文子 小林真理子 (2002) 思春期不適応の予防を目的とした母子支援の試み 思春期青年期精神医学 第12巻第2号 (査読なし)</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>1. 日本発達障害ネットワーク(JDDネット)改訂版・発達障害児のための支援制度ガイドブック 唯学書房 (2015)</p> <p>2. 発達障害年鑑 日本発達障害ネットワーク(JDDネット)年報 Vol.5 発達障害をめぐる2012～2013野同項 発達障害の2012～2013年 (2014)</p> <p>3. 発達障害年鑑 日本発達障害ネットワーク(JDDネット)年報 Vol.4 発達障害をめぐる2010～2011年の動向 厚生労働省の取り組み P22-29 (2013)</p> <p>4. 家族療法研究 第29巻第2号 発達障害と家族支援 特集へのコメントー発達障害者への支援施策ー 金剛出版 P132-134 (2012)</p> <p>5. LD ADHD &amp; ASD10月号 情報最前線 発達障害支援の今後ーライフステージに応じたさまざまな支援と支援者の人材育成体制の整備 明治図書 P48-49 (2012)</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>2008年 11月 第49回日本児童青年精神医学会 症例検討7 PDD特性をもつひきこもり青年の心理療法的支援の一例 P113</p> <p>2002年 7月 第15回日本思春期青年期精神医学会 発達障害と背景とする不適応事例への支援の試みー相談中断・継続事例を通して</p>
受託共同研究の実績	<p>・2009～2010 厚生労働科学研究費補助金 障害保健福祉総合研究事業「青年期・成人期の発達障害に対する支援の現状把握と効果的なネットワーク支援についてのガイドライン作成に関する研究」主任研究者 近藤直司 『発達障害者支援センター・精神保健福祉センターにおけるネットワーク支援についての研究』 発達障害者支援センターにおける福祉・心理専門職・研究協力者として活動</p> <p>・2007～2009 厚生労働科学研究費補助金 障害保健福祉総合研究事業「ライフステージに応じた広汎性発達障害者に対する支援のあり方に関する研究 支援の有用性と適応の評価および臨床家のためのガイドライン作成」主任研究者 神尾陽子 『在宅青年・成人の支援に関する検討』 精神保健福祉センターにおける福祉・心理専門職・研究協力者として活動</p> <p>・2005～2006 厚生労働科学研究費補助金 こころの健康科学研究事業「思春期・青年期の「ひきこもり」に関する精神医学的研究」主任研究者 井上洋一 『ひきこもりの個人精神病理と治療的観点についての研究』 精神保健福祉センターにおける福祉・心理専門職・研究協力者として活動</p> <p>・2005～2006 厚生労働科学研究費補助金 こころの健康科学研究事業「発達障害(広汎性発達障害、ADHD、LD等)に関わる実態把握と効果的な発達支援手法の開発に関する研究」主任研究者 市川宏伸 『成人期広汎性発達障害者に対する効果的な地域支援に関する研究』 精神保健福祉センター・発達障害者支援センターにおける福祉・心理専門職・研究協力者として活動</p>
大学院生指導	本年度より、3名の大学院生の論文指導を開始している。今度は心理面接指導・心理検査方法指導・面接時のソーシャルワーク的視点などをSVや陪席などにより、実践に役立つ指導を行っていきたい。

研究能力に対する評価	2005年～2006年に関して行った、ひきこもりに関しての生理・心理・社会的アセスメントについて、厚生労働省におけるひきこもりの3類型とひきこもり地域支援事業等の事業の創設に繋がったと考える。2011～2013年においては、特に発達障害の支援についての支援システムの構築に向けて、厚生労働省において発達障害対策専門官として、特に発達障害の二次的問題について啓発するとともに、研究企画を助言することができた。
------------	---

### サービス活動業績

学部内委員会等活動・実績	2016年	大学院入試委員
アドバイザー活動実績		大学院修士課程1年生3名の修士論文指導およびアドバイザーを担当。
後進育成活動実績		<p>○1999年より、福祉担当の公務員に対して、カウンセリング理論(講師)や事例検討(SV)を実施してきており、現在も「月曜会」として月1回継続中。山梨県福祉プラザ内で、心理・福祉・教育・医療領域の対人援助に携わる社会人、大学院生など20人前後。</p> <p>○2016年より、中央・都留児童相談所において、児童心理司に対して、心理診断についての助言及び虐待事案などの家族再統合に向けての助言</p> <p>○2016年より、障害者入所施設において、月1回、多問題事例についての対応についてのスーパービジョンの実施</p>
社会貢献活動		<p><b>(1)講演会</b></p> <p>2016年 6月「家族における障害の理解」 富士北麓地区特別支援連携協議会</p> <p>2016年 5月「発達が気になる子の家族支援」 韮崎市要保護児童対策協議会</p> <p>2015年 5月 「基礎研修① 総論 山梨県の福祉の現状と課題 山梨県福祉専門職研究協会 2015年度</p> <p>2014年 発達障害・専門講座5「発達障害 成人期の生きづらさ」において「成人期の社会的支援」 公益財団法人 明治安田こころの健康財団</p> <p>2014年 発達障害・専門講座6「臨床児童青年精神医学入門」において、「ICFに基づく心理アセスメント」 公益財団法人 明治安田こころの健康財団</p> <p>2014年 「発達障害 医療と福祉の連携について」 山梨県総合教育センター</p> <p>2014年 子どもへの支援について「児童虐待と発達障害」 社会福祉研修事業 山梨県保育協議会保育所(園)長研修会</p> <p>2014年 発達障害おある方への支援 思春期・青年期に生きづらさ 第5回 特別支援教育に関するセミナー 高校生セーフティネット研究会 九州産業大学</p> <p>2013年 発達障害の支援についての講義 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所、国立特別支援教育総合研究所</p> <p>2012年 発達障害早期総合支援研修 発達障害支援精神医学研修 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター</p> <p>2012年 発達障害の理解と支援に関する基礎研修会 一般社団法人 日本臨床心理士会</p> <p>2011年 発達障害早期総合支援研修 発達障害支援精神医学研修 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター</p> <p>2011年 発達障害の理解と支援に関する基礎研修会 一般社団法人 日本臨床心理士会</p>

社会貢献活動	<b>(2) 出前講座</b>	
	特になし	
	<b>(3) 公開講座</b>	
	2016年	5月 発達障害(児)者の生きづらさや生活のしづらさ ー支援者としてできることー 山梨英和大学地域連携公開講演会
	<b>(4) 学外審議会・委員会等</b>	
2013年	6月 日本発達障害ネットワーク理事(2016年6月より 副理事長)	
2016年	6月 山梨県発達障害等に対する総合支援基本構想策定委員会委員	
2016年	6月 平成28年度韮崎市発達障がい児支援連携会議アドバイザー	
<b>(5) その他</b>		
2016年	6月 地域福祉論において「児童相談所の役割と機能」「児童虐待と家族支援」についての講義 山梨学院大学	

## 成果と目標

専門的成果	<p>①対人援助サービスにおいて、ひきこもり支援の現状理解を行い、ひきこもりを3つに分類することによって適切な支援方法を導き出した。このことにより、ひきこもりがさまざまな要因によって生じ、それとともに支援の方法も違うことを明らかにした。</p> <p>②発達障害支援のシステムに関して、三層による支援の必要性を導き出し、支援の仕組みやネットワークなどの整理を行い、現在、その有用性について地域支援のなかで実践中である。</p> <p>③現在、対人援助サービスの実践を行っている専門家に対して、生理・心理・社会的モデルに基づいて、実践知と実践に基づいた理論を活用して、助言及びスーパービジョンを行っている。またこれらのノウハウを生かして、院生への事例への指導を行っている。</p>
専門的目標	<p>①児童福祉領域の支援とそのシステムは、他の領域(高齢福祉領域、障害福祉領域など)と比較すると、未整備であり、点構造的な支援と言える。これまでの実践での現状と課題を整理し、児童福祉領域における支援とシステムについて整理し、新たな支援システムを構築し広く提案していきたい。</p> <p>②多問題事例への支援について、これまで困難事例として手立てがみつからずにいることがあるが、よりよい相談やサービスが必要な人に適切に提供できるようにするため、困難となる要因を探るとともに、多職種とのディスカッションを行いながら検討していき、困難事例への対応を検討していく。</p> <p>③②ともつながるが、相談の効果的な方法は、おそらく臨床心理学実践とソーシャルワーク実践の統合によるものであると思われる。そのことを多くの実践例をスーパービジョンを行う中で分析し、検討していきたい。そのため、今年度はスーパービジョンのあり方を探っていきたい。</p>

最新データ入力日	2016年	5月	1日
----------	-------	----	----

専任教員職務業績書

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
イシハシ 石橋 泰	男	1960年	准教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	修士(教育学)	専門分野	社会科学・心理学・臨床心理学	
学歴	1979年 3月 東京都 私立 開成高等学校 卒業 1980年 4月 東京大学 文科Ⅲ類 入学 1984年 3月 東京大学 教育学部 教育心理学科 卒業 1984年 4月 東京大学 教育学部 研究生 1985年 4月 東京大学大学院 教育学研究科 教育心理学専攻 修士課程 入学 1988年 3月 東京大学大学院 教育学研究科 教育心理学専攻 修士課程 修了 1988年 4月 東京大学大学院 教育学研究科 教育心理学専攻 博士課程 入学 1991年 3月 東京大学大学院 教育学研究科 教育心理学専攻 博士課程 単位取得退学			
実務経験	1987年 4月 市川市教育センター非常勤教育相談員(1991年3月まで) 1991年 4月 東京大学 学生相談所(本郷) 助手(2002年3月まで) 1994年 4月 関谷クリニック(東京都渋谷区)非常勤カウンセラー(1998年4月まで) 2002年 4月 山梨英和大学 人間文化学部 専任講師 2005年 4月 山梨英和大学 人間文化学部 助教授 2005年 4月 山梨大学非常勤講師(「現代青年の思想と文化」担当) 2005年 8月 山梨大学保健管理センター非常勤講師(2010年9月まで) 2007年 4月 山梨英和大学 人間文化学部 准教授(～現在) 2008年 5月 放送大学大学院客員准教授(臨床心理学)(2010年3月まで) 2015年 4月 放送大学非常勤講師(卒業研究担当)(2016年3月まで)			
受賞歴	年 月 年 月 特になし 年 月			
所属学会	1989年 月 日本心理臨床学会正会員 1996年 月 日本学生相談学会正会員 2000年 月 日本箱庭療法学会正会員 2003年 月 日本人間性心理学会正会員			
特免資格等	1996年 4月 日本臨床心理士資格認定協会認定臨床心理士(～2016年3月) 年 月 年 月 年 月			
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	現代は情報化が進んでいる。すべてよきものには影の面もあり、学生の中には他者との比較の中で自信を失い、自分の感じることや考えを信じられなくなっている人もいる。自分の感じていることを踏まえつつ、それを対象化し、広げていくために役立つ心理学的知識、技能を獲得し、自ら探求を進めていけることを教育理念としている。そのために、①自分や他者に関心を向けること、②自分の感じや考えを意識化すること、③②を言語化し他者に伝えること、④自分の考えをより広いコンテキストに置いて対象化できること、を目標としている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.箱庭療法、絵画療法等の体験的理解を含んだ授業実践</p> <p>少人数の演習科目において、学生の理解を増すために、箱庭療法、絵画療法等の体験的授業を積極的に行っている。授業の中で個人の心の秘密があらわにならないよう配慮しつつ、感じがつかめるように体験を持ってもらい、その体験を言語化させる。その後、上記を踏まえて、論文やビデオ等を通して理解を深めるという形で、授業を展開している。心理療法で展開される世界と学生の日常生活とのギャップがあるが、それを埋めることを目的としている。</p> <p>b.現代のアニメーションなどを題材とした授業の展開</p> <p>現代人の深層心理の様相は、臨床例から引き出されたものであるが、臨床例は個別性が高く、また守秘性の問題からも扱うことが難しい。一方、すぐれた表現者の表現には、現代人の集合的な心理的課題とその解決への道が示唆されている場合があり、題材を適切に選ぶなら臨床例以上により教材になりうる。こうした考えにもとづき、素材として、絵本や現代のアニメーションなどの作品を「深層心理学」「人格心理学」などの講義において有効に活用するよう工夫している。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>テキストを補う補助資料をプリントとして配付・活用してきているが、特にまとめてはいない。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし</p>
担当授業科目	2016年度（学部）パーソナリティ心理学、臨床心理学Ⅱ、心理面接実習Ⅰ、心理面接実習Ⅱ、基礎ゼミナール1、専門ゼミナールRS4、卒業研究RS3（大学院）臨床心理面接特論、人格心理学特論、臨床心理実習、臨床心理事例研究、修士論文
代表的シラバ	「臨床心理学Ⅱ」をあげる。近代の心理学は、自然科学の方法を応用することで成立した。一方で、臨床心理学は心理療法という実際の必要の基礎学問である。人間の生においては、歴史や文化といった側面、一回限りの実存という繰り返さない面も重要である。シラバスでは、夢分析や現代の映画作品などを素材にとりあげつつ、上に述べた臨床心理学の二面性、特に後者の面に触れていくことを示した。
善教活動改	教務委員(2003年～2008年)、心理臨床コース・コーディネーター(2009年～2010年)として、日常的な教育環境の改善につとめた。
教育する能力価に対	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>学生による授業評価によれば、平均を満たす水準は維持できている。学生の勉強時間が少ないことが伺われ、2014年度から小テストの導入を試みたが消化すべき授業内容が多く限界があり、授業内容を減らすして2016年度カリキュラムで対応した。</p> <p>同僚教員等による授業評価は実施されていない。</p>

## 研究業績

研究の特徴	<p>①心理臨床の実践に役立つよう体験的基盤をエビデンスとして重視している</p> <p>②体験的データを考察する客観的な基盤として、現代における統計的基準に加えて、人類の精神史を参照枠としている</p> <p>③②で述べた方法の特質と限界を明らかにするため、ユング心理学、レヴィナス哲学を参照し、同時にユング心理学、レヴィナス哲学の特質を明らかにしようとしている</p>
-------	--

研究経歴	<p>1987年 市川市教育センター(千葉県)において教育相談・相談体制について実践と研究に従事(1991年まで)</p> <p>1991年 東京大学学生相談所(本郷)において、学生相談活動の運営、個人心理療法、グループ療法の実践と研究に従事(2002年まで)</p> <p>2002年 山梨英和大学人間文化学部および同心理臨床センター(2003年から)において心理療法、ユング心理学の実践と研究に従事(現在にいたる)</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>a.“「他者」のために”,「こころの発達援助ー学生相談の事例からー」, 鳴澤實(編), pp.298-302, ほんの森出版, 1998:レヴィナス哲学と現代人の問題を結びつけて論じた。</p> <p>b.“遊戯療法”,「臨床心理リーディングガイド」, 松井豊, 林もも子, 井上果子, 沢崎達夫, 増茂尚志, 賀陽濟(編), pp.137-140, サイエンス社, 1991:遊戯療法は心理療法の中でも筆者の専門分野の一つである。</p> <p>(2)学術論文</p> <p>a.“ゲーテの『ファウスト』の心理学的研究1:ユング, 錬金術, 資本主義”, 山梨英和大学紀要, vpl.14, pp.18-33(2015):ゲーテの『ファウスト』についての経済学者ハンス・ビンズヴァンガーの論とユングの論はともに『ファウスト』と西洋錬金術との関係を扱っているが, 両者を比較し, 近代経済, 近代自我の肥大傾向という病について考察した。</p> <p>a.“一人の日本人として一神教を心にどのように迎え入れるか”, 山梨英和大学紀要, vpl.13, pp.30-44(2014):ユングの「自己実現」「全体性」の概念脱近代の可能性の中心におき, 日本人がそれらを実現するためには心の一神教的側面の理解が不可欠であることを, レヴィナス, 木田献一の業績を援用しながら臨床心理学的観点から論じた。</p> <p>b.“エリク・H・エリクソンと『野いちご』”, 山梨英和大学紀要, vol.12, pp.49-61(2013):エリクソンのペルイマン監督『野いちご』に関する理解を整理し直し, 再考察することで, 自我同一性についての理解と意味を深め, 宗教的課題と臨床心理学の橋渡しをしていくための準備的研究とすることを目的とした。</p> <p>c.“ユング心理学的視点から見た文化と自然の境界の一研究”, 山梨英和大学心理臨床センター紀要, vol.3, pp.12-21(2007):意識のあり方が日本人と西欧人の間では違うことが論じられてきているが, 現代日本人の意識の変化についての父性の影響に焦点をあてて分析した。</p> <p>d.“理性の運命あるいはアニムスについて”, 東京大学学生相談所紀要, vol.11, pp.25-38(2000):近代の理性的自我のインフレーションを乗り越える動きが19世紀から始まっていると考えられることをカントール、ゲーデル等の仕事を例に考察した。</p> <p>e.“世界と人間と&lt;神&gt;とーレヴィナスとユングⅡー”, 東京大学学生相談所紀要, vol.10, pp.51-67(1998):ユングの自己とレヴィナス哲学を比較研究し, 自己象徴に焦点をあてて分析をした。</p> <p>f.“レヴィナスとユングーひとつの問題提起ー”東京大学学生相談所紀要, vol.7, pp.40-54(1992):レヴィナス哲学を臨床心理学に生かす本邦で初の試みであると思われる。</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a.学術誌『学生相談研究』査読(2005年～)</p> <p>b.他大学院生の事例研究論文へのコメント執筆:岐阜大学心理教育相談研究, vol6, 宮崎論文へのコメント, 2007</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>2007年 9月 石橋泰, 清水隆善(企画者)“自主シンポジウム 不登校臨床の諸相と新たな視点”日本心理臨床学会第26回大会(於東京国際フォーラム)</p> <p>2000年 1月 “自分をアナクロニック(反時代的)だと語った男子学生の事例”第33回全国学生相談研究会議名古屋シンポジウム</p> <p>1999年 1月 石橋泰, 大山泰宏, 齋藤憲司, 成田諭“シンポジウム こころの時代の大学教育を考える”第32回学生相談研究会議東京シンポジウム</p> <p>1998年 1月 “アイデンティティを求めて”第31回全国学生相談研究会議宮崎シンポジウム</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>

共同研究の実績・受託研究	<p>1997年 12月 『大学教育における新しい学生相談像の形成に関する研究』平成9年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 吉良安之)研究協力者</p> <p>1991年 4月 『学生、院生、留学生の健康・体力の保持・増進に関する総合的研究』平成3年度文部省特定研究(研究代表者 宮下充正)研究分担者</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	<p>大学院生研究指導担当教員(山梨英和大学大学院)</p> <p>2015年度 1.青年期の目標の獲得との関係における諦めの意味の研究について</p> <p>2014年度 1.S-HTPの解釈方略の臨床経験の長さによる違い</p> <p>2013年度 1.アイデンティティの形成と伝達としてのジェネラティビティについての一研究:村岡花子の生涯と業績を中心に 2.高齢者の複数回コフージュ制作体験についての研究:作品と語りにも注目して 3.青年期における自我同一性と自己愛の関係に関する一研究</p> <p>2012年度 1.青年期の箱庭表現についての基礎的研究</p> <p>2010年度 1.怒りのコントロールに対する筆記の効果についての一研究 2.スクールカウンセラーの専門性に関する一研究 3. 地域子育て支援における臨床心理士の役割と機能に関する一研究</p> <p>など。毎年1~3名の指導を担当してきている。</p>
研究能力に対する評価	<p>専門は、心理療法、特にユング派的なアプローチを専門としている。臨床の実際や事例研究においては、仲間からの評価などから専門的な水準を満たしていると評価できる。</p> <p>また日本では河合隼雄が道を開いた神話・昔話・物語などの臨床心理学的研究を個人的にも学生とともにも行い、成果は紀要等に発表してきている。</p> <p>より専門性の高い領域として、ユングが「全体性」の名付けた元型を日本の現実を踏まえて実現できるかをテーマとしている。日本人にとっては全体性の元型の実現のためにユダヤ・キリスト教に実現されてきた心性の理解が不可欠である。同時に日本の現実を踏まえると葛藤が生じる領域がある。これは臨床例にみられることもあるが、心理臨床家自身が主体的にとりくみ解決すべき問題であると考え、取り組んできている。</p>

### サービス活動業績

学内委員会等活動実績	<p>2015年 4月 心理臨床センター長職務代行</p> <p>2013年 4月 大学院FD推進委員会委員長(2014年3月まで)</p> <p>2011年 4月 図書館運営委員会委員(2012年3月まで)</p> <p>2009年 4月 心理臨床コースコーディネーター(2011年3月まで)</p> <p>2007年 4月 学生委員会委員(2012年まで)</p>
アドバイザー活動実績	<p>例年30~40名を担当している。</p> <p>2015年度は32名を担当。2016年度は24名を担当。</p>
後進育成活動実績	<p>特になし</p>

社会貢献活動	(1)講演会
	2009年 9月 「日本人の心理と宗教性—法然・明恵—」山梨県県民コミュニティカレッジ(於山梨英和大学)
	2005年 7月 『『無意識の発見』と歴史』山梨英和大学公開講座など
	(2)出前講座
	2013年 11月 県立都留高校
	2013年 10月 県立甲府昭和高校
	2013年 6月 県立吉田高校
	2012年 9月 山梨県立韮崎高校
	2012年 7月 北杜市立甲稜高校
	2010年 11月 山梨県立白根高等学校
	2010年 6月 駿台甲府高等学校など
	など年2~3回県内の高校を中心に出張講義を行っている。
	(4)学外審議会・委員会等
	2006年 4月 山梨県問題を抱える子ども等の自立支援事業運営協議会委員(2010年3月まで。2008年から2010年は委員長)
	2003年 4月 山梨県臨床心理士会学校臨床心理士委員会委員(~現在)
	(5)その他
	2015年 9月 県立中央高校における大学院生による教育相談ボランティアのコーディネイト
	2015年 4月 山梨県総合教育センターにおける大学院生によるボランティアのコーディネイト
	2013年 6月 韮崎こすもす教室事例検討会講師
	2012年 6月 石和こすもす教室事例検討会講師
	2011年 9月 山梨県総合教育センター「教育相談における実践力を養う研修会」講師
	2011年 6月 石和こすもす教室事例検討会講師
	2010年 6月 石和こすもす教室事例検討会講師
	2010年 12月 山梨県総合教育センター学校教育相談実践研修会講師
	など

## 成果と目標

専門的成果	<p>①物語などのユング心理学的研究:臨床例に加えて、すぐれた表現者の作品を心理学的に分析することで現代人の心の課題と解決の方向を明らかにすることが研究テーマの一つであり、村上春樹、金原ひとみ、いしいしんじ等の作品を分析してきた。2015年度は、ゲーテの大作『ファウスト』に取り組み、近代自我の問題を再考した。</p> <p>②③の全体性の元型の意識化の前提として父性元型と取り組むことは不可欠である。臨床心理学に宗教的次元を適正に取り入れる準備として2013年度はエリクソンと超越的次元に関わる研究を行った。2014年度は、ユングの自己実現を中心に置きながら、日本人の心を前提として父性元型を取り入れていく試みとして、レヴィナス、木田献一の業績を取り入れ、見取り図を描く論文を発表した((山梨英和大学紀要)。</p> <p>③グローバリズムが浸透しつつある現代人にとって、ユングがいう自己の元型の実現は、未来に向けて不可欠であると考えられる。自己の意識化のためには、広範な心理学的体験を必要とし、青年よりも中年、相談者よりも心理臨床家が自ら成し遂げるのがふさわしい課題であると考え、実践的・理論的に取り組んでいる。</p>
-------	--

<p>専門的目標</p>	<p>①世俗的な現代の中の物語にも宗教的側面があり、②とリンクさせて取り組むことが課題である。</p> <p>②①で述べた「自己」の元型の実現のためには、ユング心理学を研究するだけでは不十分である。近代をだけにとどめず、それ以前のユダヤ・キリスト教も含めた西欧理解が、日本人として父性元型を統合することにつながると考え取り組んできている。レヴィナス哲学と臨床心理学をリンクさせた論文を2015年度中に一つ執筆する。</p> <p>③物語の心理学的分析は個別の事例はいくつか積み上げてきているが、方法論的な整備が不十分である。方法論とその意味について整理し、専門家の間での議論にのせられるようにすることが目標であるが、2014年度中は成果がなかったので引き続き目標とする。</p>
--------------	---

<p>最新データ入力日</p>	<p>2016年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
タカハシ 高橋 寛子		女	非公開	准教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	文学修士		専門分野	臨床心理学、心理療法、学生相談	
学 歴	1979年	3月	神奈川県立川和高等学校 卒業		
	1980年	4月	武蔵大学 人文学部社会学科 入学		
	1984年	3月	武蔵大学 人文学部社会学科 卒業		
	1987年	4月	上智大学カウンセリング研究所 専門カウンセラー養成課程 入学		
	1989年	3月	上智大学カウンセリング研究所 専門カウンセラー養成課程 修了		
	2000年	4月	大正大学大学院 文学研究科臨床心理学専攻 修士課程入学		
	2002年	3月	大正大学大学院 文学研究科臨床心理学専攻 修士課程修了 修士(文学)		
	2010年	4月	京都大学大学院 教育学研究科 臨床教育学専攻 博士後期課程入学		
	2013年	3月	京都大学大学院 教育学研究科 臨床教育学専攻 博士後期課程単位取得退学		
実 務 経 験	1984年	3月	株式会社 キッツ 入社		
	1987年	2月	株式会社 キッツ 退社		
	1987年	4月	東京家政大学 学生相談室 専任カウンセラー (2010年3月まで) (2005年4月～2010年3月 保健センター学生相談室 主任カウンセラーを拝命)		
	2000年	4月	東京家政大学臨床相談センター 相談員 (兼務、2002年3月まで)		
	2006年	4月	日本精神技術研究所 フォーカシング個別指導担当 (現在に至る)		
	2009年	6月	池袋カウンセリングセンター カウンセラー (現在に至る)		
	2010年	4月	法政大学 学生相談室 心理カウンセラー (2013年3月まで)		
	2010年	4月	山梨英和大学大学院人間科学研究科兼任講師 「臨床心理実習Ⅰ」「臨床心理実習Ⅱ」 (2013年3月まで)		
	2010年	4月	京都大学大学院教育学研究科ティーチングアシスタント 「心理テスト初級実習」「心理テスト中級実習」(2013年3月まで)		
	2011年	7月	最高裁判所 司法研修所 カウンセラー (2013年3月まで)		
	2012年	4月	高千穂大学 人文科学部 児童教育学科 兼任講師 「カウンセリング論Ⅰ」「カウンセリング論Ⅱ」(2013年3月まで)		
	2013年	4月	山梨英和大学 人間文化学部 准教授 (現在に至る)		
	2013年	4月	山梨英和大学大学院 人間文化研究科 准教授 (兼任) (現在に至る)		
	2013年	4月	山梨英和大学 心理臨床センター 相談員(兼務) (現在に至る)		
	2015年	4月	山梨大学 工学部 兼任講師 (現在に至る)		
2015年	4月	笛吹市子育て支援センターえいわ 臨床心理士 (現在に至る)			
受 賞 歴	2006年	5月	日本学生相談学会 奨励賞 (実践活動奨励賞)		
所 属 学 会	1987年	4月	日本カウンセリング学会 正会員(2012年まで)		
	1987年	4月	日本人間性心理学会 正会員(現在に至る)		
	1988年	4月	日本学生相談学会 正会員(現在に至る)		
	1992年	4月	日本心理臨床学会 正会員(現在に至る)		
	1993年	4月	日本臨床心理士会会員(現在に至る)		
	1998年	4月	日本フォーカシング協会 会員(現在に至る)		

特免資 許許格 等 . .	1984年	3月	中学校教諭1級・高等学校2級教諭普通免許状(社会科)
	1993年	3月	臨床心理士(日本臨床心理士資格認定協会/第3754号)
	1996年	3月	認定カウンセラー(日本カウンセリング学会/第0166号)
	2000年	2月	フォーカシング・トレーナー ((米)The Focusing Institute )
	2003年	6月	大学カウンセラー(日本学生相談学会/第040070号)
e-mail	非公表		

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

### ○最新データ入力日

## 教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>学生の主体性・自律性を育て育む教育を試み、かつ実践している。それは、自身の長年の心理臨床実践に基盤を置く人間理解ともつながるものである。殊に、青年期という過渡期にある学生たちの知ること・学ぶこと・理解することへの導入は、体験に根ざし実感の伴うものでなければならぬと考えている。したがって、学部生の導入期の学びも研究を深める上でも、かれらの体験過程を重視した授業を展開していく。実感からの自己理解や、自己表現を深めることにより、学生たちが真の自信を得て他者や社会とつながることができるよう、講義科目、演習科目、ゼミ、卒業論文などを通し学びの機会を提供している。さらに大学院生に対しては、自身の心理臨床実践を生かした授業展開や臨床実践指導、研究指導を試みながら、他者の痛みに深く共感することができ、社会にあって他者とつながり協働していくことのできる臨床心理士という高度な専門家の育成を目指している。</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>①学部1・2年生のための基礎ゼミナールでは、実践的グループワークをふんだんに取り入れることで、体験を通しての授業に取り組んだ。そこから身体的実感の賦活、他者とのコミュニケーション、自己表現能力の向上を図るとともに、情報教育とも連動しながら、将来社会に出ていくために必要とされる多面的なコミュニケーション能力の育成を行なってきた。また、毎回授業後に受講生自身の気づきや感動したことへの記述を促すことによって、生きた体験を重視し、各自が自信を得られるよう配慮や工夫を行った。それらの実践をもとに『学生相談から切り拓く大学教育実践 ―学生の主体性を育む―』（学苑社、編著）を著し、広く大学教育に携わる教職員への発信と共有を図った。</p> <p>②講義科目においては、心理臨床実践に基づく自身の体験も織り込みながら、映像や図などを用い視覚的にもわかりやすい授業を行なっている。毎回授業後にはリアクションペーパーを用い、双方向のコミュニケーションを図りながら学生からの質疑にも対応している。</p> <p>③専門ゼミナールでは、演習などを盛り込み体験を通して学びつつ、卒業研究を目指したきめ細かな指導を実践している。3年前期では広く文献を読みプレゼンテーション・ディスカッションを深めながら、後期では各学生の関心に取り組み専門学会誌の論文を読むなど、卒業研究に向けての土台作りを心がけている。2016年度現在、9名の卒業研究指導を行っている。2015年度は、「卒業期の学生における進路選択で生じる悩みや不安の要因とは何か」「青年期後期における心理特性ときょうだいの存在の関係性～障がい児・者きょうだいに焦点をあてて～」「大学生における援助要請スタイルと対人関係場面における認知のゆがみおよびハーディネスが与えるストレス反応への影響」「大学生のファン心理が自我同一性の発達に及ぼす影響―ファン対象の属性との関連―」「中学生の非行と家族関係が及ぼす影響―インタビュー調査による検討―」など青年期心理を中心とした多岐にわたるテーマ・研究法による指導を行った結果、ゼミ生11名全員（2014年度は5名）が卒業論文を完成させた。</p> <p>④大学院授業では、特に実践を重んじるとともに、将来臨床心理士として必要な人間的基盤づくりを図るための体験学習（演習）を積極的に取り入れている。各人の個別のテーマを把握しながら、心理臨床的個別指導の場であるスーパービジョンにおいても、知的側面のみならず情緒的側面での配慮もきめ細かく行いながら、実践的指導にあたっている。また、自ら臨床心理士として、山梨英和大学心理臨床センター・および民間の有料カウンセリング機関において、常に複数の事例を担当し、心理臨床実践を欠かさず行っている。心理臨床実践の担い手であり続けることを自らに課すことは、心理臨床教育が机上の空論に終わらないためにも、また臨床実践能力を維持しスーパーヴァイザーとして有効に機能していくためにも必要不可欠であると認識しているからである。高い専門性を有する教員であるために、今後も心理臨床実践の現場に身を置くことを自らに課しながら教育実践を行っている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>①高橋寛子. 2015. 「TAEを用いた体験の言語化への試み～大学院生の病院実習体験の深まりと限界～」. 暗在性哲学と質的研究の会（於：法政大学）口頭発表</p> <p>②高橋寛子. 2015. 大学院におけるスーパービジョンの現状と課題. 山梨英和大学大学院 FD研修会口頭発表</p> <p>③坂井新・○高橋寛子・日下紀子・田中久美子・北岡美世香・河本緑. 2012. “生きた体験”に基づく現場実習指導の在り方 ～心理臨床実践指導者へのインタビュー調査から考える～. 日本心理臨床学会第31回大会口頭発表.</p> <p>④高橋寛子. 2012. セラピストTAEによる実践から研究への推進過程 ―グループセラピストTAEを巡って―. 第1回TAE質的研究国際シンポジウム口頭発表.</p> <p>⑤高橋寛子. 2011. 「セラピストTAEの心理臨床実践研究への適用とその意義」. 日本ジェンドリン学会第1回大会ラウンドテーブル口頭発表.</p> <p>⑥高橋寛子・得丸さと子. 2011. セラピストの「実践知」を言葉に開く ―「象徴的的定位」(Symbolic-Orientation)が創出されるまで―. 日本人間性心理学会第30回大会口頭発表.</p>

教育能力	大学院における事例研究法などに応用できるあ新たな質的研究法としてTAE(Thinking At the Edge)に関する研究を行い、学会において発表した。
担当授業科目	<2016年度> 学部：専門ゼミナール、カウンセリング概論、心理療法論、ヒューマンケア、心理面接実習、卒業研究 大学院：臨床心理基礎実習、臨床心理実習、臨床心理事例研究、心理療法特論Ⅱ、修士論文
代表的シラバス	「心理療法論」では、心理療法とは何なのか、何を指して行われるものなのか、治療の機序(メカニズム)をどう考えるかについて学ぶ。心理療法にはさまざまな理論があるが、それらは、各学派の人間観によって大きく異なり、また今日の教育・福祉・医療など臨床実践領域に深い影響を及ぼしている。本授業では、関連科目である「カウンセリング概論」では扱うことのできなかった学派の理論や技法や現代の心理療法の動向について、さらに理解を深めていくことを目的としている。到達目標を、1. 心理療法の手続き、目標、枠組み等について基本的な理解することができる、2. 近年の心理療法の動向について関心を持ち、知識を深めることができる、3. 人が変化し変容するために必要とされること、その機序(メカニズム)について述べるなどなどに定め、教科書として「やさしく学べる心理療法の実践」(窪内節子(編)、培風館)を用いながら、各心理療法についての専門書を適宜引用・紹介し実践も交えながら学んでいく。特に、心理療法は実践の学であることから、授業内でワークも取り入れ、小グループでのディスカッションによって体験を共有しながら理解を深める。また、教員自らの心理臨床実践を踏まえながら、適宜実際の心理臨床現場における臨床心理士としての体験や、公刊されている心理臨床事例なども紹介し、学生自らが現代社会に生きる者として自らのこころのテーマについて向き合い、考えていくことのできる基礎知識と土壌を育んでいく。
教育改善活動	①FD研修会議に参加し、体系的に学ぶことによって、日々の授業へと還元することができた。特に、双方向の授業展開を心掛け、毎回授業ごとに配布し回収する感想シートを丁寧に読み返ししながら、授業展開に活かしていくことを心掛けている。さらに心理臨床教育やスーパーヴィジョンの在り方、またケースカンファレンスの持ち方などについて、検討する機会を持った。今後の心理臨床教育やスーパーヴィジョンの在り方や効果について、またケースカンファレンスの持ち方などについて、実践的研究を行いその知見を共有するための活動に積極的に取り組んでいる。 ②基礎ゼミナールにおける様々な情報共有や授業への工夫の共有：基礎的スタディ・スキルやコミュニケーション能力、さらには表現力を高めるために、様々なグループワークへの工夫や、国語能力の育成、またIT/情報教育との連動などについて、他の教員と連動し協力しながら情報共有をはかり、教員としてのスキルアップを共に担っている。特に、基礎ゼミナールでのいくつかの実践的工夫を「事例集」に提供し、学内教職員との共有を図った。 ③大学院の事例検討の持ち方、スーパーヴィジョンのあり方について大学院生への調査を実施し、結果をまとめて考察しFD研修会で発表した。また他大学の実践例や効果的授業形態などについての情報を入手し、学生への調査なども行いながら他の教員と協働しながら、教育改善にあたっている。
教育能力評価に対する	(1)学生による授業評価 授業評価アンケートにより、受講生の評価は5点満点中4点台であり、講義科目においても演習科目においても、その満足度が高いことが明らかになっている。学生・大学院生の自由記述欄に綴られる内容も、「深く考えさせられる授業であった」「難しいテーマだがわかりやすく説明されていた」など肯定的なものが多数であった。授業評価アンケート結果へのフィードバックについても、丁寧に言うよう心がけている。今後の検討事項としては、より学生同士のディスカッションが活性化するような工夫を行っていくことが必要であると考えている。

## 研究業績

研究の特徴	心理臨床において生じるプロセスについて、とくに体験過程理論(Gendlin.E.T.)からの考察を試みる実践的研究を行っている。また「フォーカシング」を軸として、暗在性(the implicit)へのかかわりから、心理臨床事例研究、心理臨床の基礎教育、体験の言語化や研究法における応用について検討するとともに、自ら心理臨床実践に励んでいる。長年携わってきた教育臨床現場での心理臨床実践を捉えつつ、それらの知見をどのように大学教育へ還元していくか、大学教育に向けての提言や提供できる方策についても研究を深めている。殊に、臨床心理実践を大学教育や実践的研究と連動させ、知的理解にとどまらない豊かな人間性・主体的自己感・身体的実感を備えた心理臨床実践者の育成は重要な課題である。そのために必要とされるシステムづくり、セラピスト・フォーカシングを用いた対人援助職(教員、保育士、福祉職、看護職)への支援活動についても実践的研究を行い、大学院におけ臨床心理士養成のための訓練・教育の軸ともなる事例検討やスーパーヴィジョンのあり方について、また臨床心理実習について、その教育方法や効果について検討・考察を行っている。さらに、山梨大学地域未来創造センター COC+部門 子育て支援コース担当者として研究・教育・支援活動に携わっている。実践としては、認定こども園での子育て支援活動に参加し、子育て中の母親への支援、またそこに関わる保育者への支援などを通して地域支援活動を行い、実践的研究活動にも携わり、研究成果を論文にまとめている。
-------	--

研究経歴	<p>1987年～2010年</p> <p>・大学学生相談専任カウンセラーとして、主に青年期の教育臨床における心理臨床実践と事例研究を行ってきた。また、個別支援にとどまらず、学内教職員にむけての啓蒙教育活動や、精神的健康における予防活動、学生支援システムの構築に向けて、さまざまな実践と研究とを積み重ねてきた。さらに、他職種(看護職、福祉職、教員)との連携システムづくりにおいて、特にキャンパス全体を視野に入れた実践活動を行い、それらについて研究発表や論文執筆を行った。</p> <p>2010年～2012年</p> <p>・京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 臨床実践指導学講座 に在籍し、長年の心理臨床実践を基軸としながら、臨床心理士養成に関わる諸問題について、特にスーパーヴィジョン・事例検討について研究を行ってきた。また、心理臨床事例の研究法に関する研究として、新たな質的研究としてのTAE(Thinking At the Edge)の適用について、実践研究を進め、数編の単著論文を執筆し公刊することに努め、さらに心理臨床実践と教育に関する共同研究を行い、学会発表を行った。</p> <p>・大学学生相談室心理カウンセラーとして、学生相談のシステムづくり、他職種との協働、発達障害に関する学生支援、学内啓蒙活動などに関与し、学生の主体的自己感を育て、身体的実感を賦活させるための数々の試みを推し進めてきた。これら実践的研究は、学生相談を体系づけ、現場からの理論化を図る基盤となり、論文や著書において長年の研究成果を発表するとともに、博士論文に向けての骨子を明確にし、体形的研究の基盤づくりが行われた。</p> <p>2013年～現在</p> <p>山梨英和大学専任教員として、これまでの教育臨床での実践や研究をさらに推し進め、学部教育や大学院の心理臨床実践教育へと連動し発展させていくための研究活動を展開している。青年期心理臨床や学生相談からの知見に基づく大学教育実践研究においては、青年期の身体的実感を賦活させ主体的自己表現、他者との関係の構築を促進するための手掛かりとして「体験過程やTAE(Thinking At the Edge)をいかに活用していくか」に関する研究を進め、論文や著書にまとめることを行ってきた。現在は、臨床心理士養成のための臨床心理実習、スーパーヴィジョン・事例検討などにおいて実践的教育法やその効果についての研究を積み重ねている。</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>1. 高橋寛子 (2016) 12章 心理臨床の「実践知」から言語化へのプロセス 『「主観性を科学化する」質的研究法入門』 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之編 金子書房 190-203.</p> <p>2. 高橋寛子 (2015) 第3章 身体的実感を育む -「隠す」関係から「感じあう」関係への心理教育的支援 『学生相談から切り拓く大学教育実践-学生の主体性を育む-』窪内節子監修 設楽友崇・高橋寛子・田中健夫編著 学苑社 43-64.</p> <p>3. 高橋寛子 (2012) 第6章 学外実習・留学・インターンシップ-教育機関としての責任と個人の学ぶ権利- 『学生相談と発達障害』高石恭子・岩田淳子編著 学苑社 115-135.</p> <p>4. 高橋寛子 (2010) 第5話 傷みの通過点 『12人のカウンセラーが語る12の物語』杉原保史・高石恭子編 ミネルヴァ書房 95-117.</p> <p>5. 高橋寛子 (2009) 風景構成法の事例研究第1節 「ある摂食障害女性の心理療法過程」 現代のエスプリ『風景構成法の臨床』皆藤章編 ぎょうせい 155-181.</p> <p>6. 皆藤章・○高橋寛子・川脊克哲 (2009) 風景構成法の事例研究 第2節 ケースカンファレンス 現代のエスプリ『風景構成法の臨床』皆藤章編 ぎょうせい 182-202.</p> <p>7. 高橋寛子 (2004) 『カウンセリング大事典』小林司編 新曜社 「イラショナル・ビリーフ」「内潜的条件づけ」 「キャリアガイダンス」「結婚」の項目を担当</p> <p>(2)学術論文</p> <p>1. 森稚葉・○高橋寛子(2016)子育て支援ボランティアスタッフにとっての臨床心理士との協働体験 山梨英和大学紀要第14号 34-42.</p> <p>2. 坂井新・○高橋寛子・日下紀子・田中久美子・北岡美世香・河本緑 (2015) 心理臨床実践指導者に必要とされるもの -実習指導から臨床実践へ- 心理臨床スーパーヴィジョン学創刊号 91-99.(査読あり)</p> <p>3. 高橋寛子 (2014) 『セラピストTAEによる実践から研究への推進過程 -グループセラピストTAEを巡って-』 TAE質的研究 国際シンポジウム報告書 .</p>

4. 高橋寛子 (2013) 学生相談における喪失との関わり ―親との死別体験を扱った複数事例からの実践的考察― 京都大学大学院教育学研究科紀要第59号 457-469. (査読あり)
5. 高橋寛子 (2013)「見えるもの」への関わりと「見えないもの」への関わり ―学生相談カウンセラーの「身体的実感」を手がかりとして― 法政大学学生相談室年報第44号 38-46.
6. 高橋寛子 (2012) 心理臨床における曖昧さとそこにとどまる能力―‘Negative Capability’と‘暗在性’ (The Implicit)からの考察― 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 第16号 65-76.
7. 高橋寛子 (2012)身体的実感と自律性とを育む学生相談 ―自己臭を訴える女子学生の喪失へのかかりから― 学生相談研究第33巻1号 1-12. (査読あり・原著)
8. 高橋寛子 (2011)セラピストの「実践知」を言葉へと開く試み ―「TAE」(Thinking At the Edge)の心理臨床実践研究への適用― 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 15号 69-82.
9. 高橋寛子 (2007)私の学生相談―21年間の歩みを振り返って― 学生相談研究 第28巻2号 143-156. (編集委員会依頼論文)
10. 上野容子・山本洋子・○高橋寛子 (2005) 学生相談の歩みと今後の展望 東京家政大学研究紀要第45集(1)人文社会科学 高橋寛子執筆分 192-196.
11. 高橋寛子 (2003)学生相談における“つなぐ場”としての役割 ―対人関係に障害をもつ学生とのかかりから― 学生相談研究 第23巻31号 253-263. (査読あり)
12. 高橋寛子 (2003) 現実的な問題と並行して内的課題に取り組んだ女子学生の事例 ―さまざまな“支え”を通して― 大正大学臨床心理学専攻紀要 第6号 35-55.
13. 高橋寛子 (1992) 女子学生におけるSelf-Imageと進路成熟との関連に関する一研究 上智大学カウンセリング研究所紀要第14号 8-21.

(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)

研究実績

【報告書】

2014年	3月	山梨英和大学 チャペルだより第17号 『人生への出立』 執筆
2013年	10月	山梨英和大学後援会報 『かけはし』 基礎ゼミだより執筆.
2013年	9月	セラピストの危機状況とセラピストフォーカシングによる変容プロセス 日本人間性心理学会第32回大会プログラム・発表論文集, 50-51.
2012年	3月	『事例から学ぶ技法と理論』. 第49回全国学生相談研修会報告書
2011年	3月	『コミュニケーション能力を高める心理教育』. 第48回全国学生相談研修会報告書. 28-29.
2010年	3月	『フォーカシングの基礎と応用』. 第47回全国学生相談研修会報告書. 34-35.
2010年	12月	「社会人大学院生から」. 京都大学大学院教育学研究科ニュースレター.
2009年	3月	『certification weeklong に参加して』. 日本フォーカシング協会ニュースレター.
2009年	3月	『北里大学薬学部学生相談室開室20周年に寄せて』. 北里大学薬学部学生相談室活動報告書20周年記念号. pp. 13.
2009年	3月	『事例から学ぶ技法と理論』. 第46回全国学生相談研修会報告書. 48-49.
2009年	3月	教員と学生相談室との連携事例について. 東京家政大学保健センター報告書第2号. 9-12.
2008年	3月	『インテーク』. 第45回全国学生相談研修会報告書. 28-29.
2008年	3月	高橋寛子・青井純子・鈴木陽子. 面接・受付・コミュニティルームの運動と協働. 東京家政大学保健センター報告書第1号. 47-50.
2008年	3月	学生支援における学内連携と協働に向けて. 東京家政大学保健センター報告書第1号. 9-17.

研究実績	2003年 3月	学生相談室と教職員との連携についてー狭山キャンパスにおける事例と教員へのアンケート調査からー. 東京家政大学保健センター学生相談室報告書第2号. .20-28.
	【国際会議発表、学術論文査読】	
	2015年度	『心理臨床学研究』(日本心理臨床学会誌) 研究論文、1論文の査読担当。
	2015年度	『京都大学大学院教育学研究科紀要』(京都大学)研究論文、1論文の査読担当。
	2013年度	『心理臨床学研究』(日本心理臨床学会誌)事例研究論文1論文の査読担当。
	2010年度	『学生相談研究』(日本学生相談学会誌) 事例研究論文、1論文の査読担当。
2008年度	『学生相談研究』(日本学生相談学会誌)事例研究論文、2論文の査読担当。	
競争的資金採択課題		特になし
学会等発表・役員参加	【学会発表】	
	2013年 9月	高橋寛子. (2013). 日本人間性心理学会第32回大会 自主シンポジウム 口頭発表 『危機対応におけるセラピストフォーカシングの可能性ーリスナー/ガイド体験からー』
	2013年 3月	木下直紀・天下谷恭一・堀川聡司・河野一紀・日下紀子・水野綾香・中藤信哉・坂井新 ・高橋寛子・田中久美子・山口昂一. (2013). 精神分析的な心理療法の効果研究についての展望. 卓越した大学院拠点形成支援国際フォーラム ポスター発表.
	2012年 12月	高橋寛子.(2012). セラピストTAEによる実践から研究への推進過程ーグループセラピストTAEを巡ってー. 第1回TAE質的研究国際シンポジウム口頭発表.
	2012年 9月	坂井新・高橋寛子・日下紀子・田中久美子・北岡美世香・河本緑.(2012). “生きた体験”に基づく現場実習指導の在り方ー心理臨床実践指導者へのインタビュー調査から考えるー. 日本心理臨床学会第31回大会口頭発表.
	2011年 12月	高橋寛子. 「セラピストTAEの心理臨床実践研究への適用とその意義」. 日本ジェンダー学会第1回大会ラウンドテーブル口頭発表.
	2011年 10月	高橋寛子・得丸さと子. (2011). セラピストの「実践知」を言葉に開くー「象徴的定位」(Symbolic-Orientation)が創出されるまでー. 日本人間性心理学会第30回大会口頭発表.
	2011年 5月	高橋寛子. (2011). 多彩な身体症状を訴える女子学生との面接過程ー母との一体感からの解放. 日本学生相談学会第29回大会ワークショップー実践から研究へー口頭発表.
	2009年 5月	高橋寛子. (2009)コミュニティルームを拠点とした学生支援活動の変遷と意義. 日本学生相談学会第27回大会ワークショップ事例発表
	2008年 1月	高橋寛子. (2008). 様々な身体症状を訴える女子学生の事例. 第41回全国学生相談研究会議 事例発表
	2007年 10月	高橋寛子・山本洋子・青井純子. (2007). 新入生に対するメンタルヘルスチェックリストの結果分析ー女子学生の19年間の変化についてー. 第45回全国大学保健管理研究集会ポスター発表.
	2007年 5月	高橋寛子. (2007). さまざまな自傷行為をくり返しながら成長を遂げた女子学生の事例. 日本学生相談学会第25回大会ワークショップ事例発表
	2006年 11月	高橋寛子. (2006). 気持ちとからだは切れていると訴える摂食障害の女子学生の事例 第44回全国学生相談研修会事例発表
	2002年 5月	高橋寛子. (2002). 学生相談における“つなぎの場”としての役割. 日本学生相談学会第20回大会口頭発表
2000年 5月	高橋寛子. (2000)復学学生を中心としたサポートネットワークへの試み. 日本学生相談学会第18回大会口頭発表	

学会等発表・役員参加	1996年 5月	高橋寛子・橋口英俊。(1996). REBTの効果に関する研究 I ー対人恐怖症の女子学生の事例ー(その1)(その2). 日本カウンセリング学会第29回大会口頭発表	
	1992年 5月	橋口英俊・山本洋子・○高橋寛子。(1992). メンタル・ヘルス・インベントリーに関する研究 (その1)(その2). 日本カウンセリング学会第25回大会口頭発表.	
	【学会等の役員参加】		
	2014年 5月	日本学生相談学会第32回大会 ワークショップ講師 『セラピストのためのフォーカシング』	
	2013年 9月	日本人間性心理学会第32回大会 研究発表座長	
	2010年 5月	日本学生相談学会第28回大会 研究発表座長	
	2009年 5月	第28回日本心理臨床学会春季大会 ワークショップ講師 『セラピストのためのフォーカシング』	
	2009年 5月	日本学生相談学会第27回大会 事例研究発表座長	
2008年 5月	日本学生相談学会第26回大会 研究発表座長		
共同研究・受託研究の実績	2015年 ～現在	高橋寛子他8名. 山梨大学地域未来創造センター COC+部門 子育て支援コース担当として共同研究・教育及び支援活動に携わっている。	
	2013年	木下直紀・天下谷恭一・堀川聡司・河野一紀・日下紀子・水野綾香・中藤信哉・坂井新 ・○高橋寛子・田中久美子・山口昂一。(2013). 精神分析的な心理療法の効果研究についての展望. 卓越した大学院拠点形成支援国際フォーラム.	
	2012年	坂井新・○高橋寛子・日下紀子・田中久美子・北岡美世香・河本緑。(2012). 共同研究。“生きた体験”に基づく現場実習指導の在り方についての研究を行い、心理臨床実践指導者へのインタビュー調査と質的分析とを行った。その成果について、日本心理臨床学会第31回大会(2012)において、共同発表を行った。	
	2012年	高橋寛子・田中久美子(2012)共同研究:セラピストTAEによる実践から研究への推進過程について共同研究を行い、「グループセラピストTAE」によって生じた様々なプロセスや相互作用について検討した。その成果を第1回TAE質的研究国際シンポジウム(2012)で発表した。	
	2011年	高橋寛子・得丸さと子。(2011). 共同研究:セラピストの「実践知」を言語化する試みを行い、共同研究としてセラピストTAE(Thinking At the Edge)を実施し、「象徴的地位」(Symbolic-Orientation)を中核とした独自の言語の創出と概念とが抽出された。その経過と新たな質的研究法についての考察を、日本人間性心理学会第30回大会において発表した。	
	2007年	高橋寛子・山本洋子・青井純子。(2007). 共同研究:大学新生に対するメンタルヘルスチェックリストの結果分析に関する共同研究を行った。女子学生の19年間の変化について統計的に分析し、その成果について、第45回全国大学保健管理研究集会(2007)においてポスター発表を行った。	
大学院生指導	<p>&lt;大学院研究指導・修士論文指導&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2016年度:現在、4名の修士論文指導を担当。</li> <li>・2015年度:「学校生活における“居づらい感”とその抱えの様式に関する研究」1編の修士論文指導。</li> <li>・2014年度:「青年期における日常的な解離体験の意味づけに関する研究」、「屈折した甘えが青年期の自立に及ぼす影響」2論文の研究指導を担当。</li> <li>・2013年度:「青年期における被受容感と対象関係の関係について:質問紙と母子画による検討」「一般女子学生における摂食障害傾向と家族関係に関する一考察」(副査として審査を行った)</li> </ul> <p>①山梨英和大学大学院において、心理臨床訓練中の大学院生および特別研修生、修了生に向けてスーパーヴァイザーとして面接1回ごとのケーススーパーヴィジョンを個別面談で実施し、1回1時間のスーパーヴィジョンセッションを毎週5～7セッション(5～7時間)担当し、心理臨床の実践的指導を行っている。これらの個別指導は毎年、年間合計で約300回(300時間)となる。これらスーパーヴィジョンセッションは、心理臨床家を育てるための中核となる臨床実践指導であるため、毎回大学院生個々の課題に沿い、ケースごとに合わせてきめ細かな指導を心掛けている。(2013年度～現在)</p>		

大学院生指導	<p>②2016年度は修士課程の大学院生4名の修士論文指導を行っている。また、2015年度は修士課程の大学院生4名の指導を、2014年度は修士課程1、2年生合わせて4名の研究についてゼミで指導し、各自の研究テーマを深め修士論文執筆に向けての研究指導を担当している。2013年度は、修士論文副査として2編の修士論文を審査した。(2013年度～現在)</p> <p>③2013年8月には、甲信・中部地方の5大学院(愛知教育大学大学院、岐阜大学大学院、信州大学大学院、静岡大学大学院、山梨英和大学大学院)大学院生約40名に対して心理臨床に活かすためのセラピストフォーカシングの指導・実習を行った。さらに、大学院修了生に向けても、個人スーパーヴィジョンや研修会などの機会を通して、後進の指導に当たっている。</p> <p>④山梨中央大学大学院において、「臨床心理基礎実習」「臨床心理実習」「事例検討」「心理療法特論Ⅱ」などの授業を担当し、臨床心理士としての基礎的知識、面接導入指導、倫理、精神科医療機関(住吉病院・峡西病院)での外部実習指導(2016年度2名、2015年度4名、2014年度1名、2013年度1名)を丁寧に行っている。加えて、カウンセラーに必要とされる傾聴訓練や面接技法に関する実習を行い、臨床心理士としての基礎的能力の向上と対人援助職に必要とされる基礎的人間力の育成を行っている。(2013年度～現在)</p> <p>⑤神奈川大学大学院において臨床心理スタッフとして臨床心理専攻の大学院生の臨床実践指導を3年間にわたって行った。「臨床心理実習Ⅰ・Ⅱ」の授業を担当し、毎回の面接に対する臨床指導に加えて、インテーク面接の陪席指導、ケースカンファレンス指導など実践指導によって臨床心理士としての基礎的能力の土台を築くための個別指導を行った。また、「臨床面接技法」に関する実践的教育を担当し、特に臨床心理士の受容力、傾聴力、自己理解のために「フォーカシング」「描画法」を用いた実践的な個別セッションによる指導を行った。</p>
	研究能力に 対する 評価

### サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2016年度	<p>以下の学内(外)委員会活動の委嘱を受け活動している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「サイコロジカル・サービス領域連絡者」</li> <li>・「宗教委員会委員」</li> <li>・「学長選考委員会委員」</li> <li>・「COC+ 子育て支援部門 担当」</li> </ul>
	2015年度	<p>学内では以下の役割の委嘱を受け、活動した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・心理臨床コース・コースコーディネータ</li> <li>・社会連携センター委員会委員</li> <li>・宗教委員会委員</li> <li>・学生サービス部委員会委員</li> <li>・COC+子育て支援部門 担当</li> <li>・大学院入試委員</li> </ul>
	2014年度	<p>「心理臨床コースコーディネータ」に加えて、「宗教委員会委員」「学生サービス部運営委員会委員」「入試委員会委員」など各種委員会の委嘱を受け、活動した。</p>
	2013年度	<p>「宗教委員会委員」、「大学院入試委員」、「大学院FD推進委員会委員」、「心理臨床センター紀要編集委員」として、学内各種委員会で活動した。その他、2013年11月「クリスマス点火祭のメッセージ」、2013年12月「クリスマス礼拝司式」を担当し、「チャペルだより」の執筆なども行った。</p>
アドバイザー 活動実績	2016年度	<p>学部学生では、留学生1名、4年生24名、計25名のアドバイザーを担当している。また、専門ゼミナール(3年生)1名、卒業研究ゼミナール(4年生)9名に対して、学業・研究だけではなく日常の学生生活を含めてきめ細かな指導や学生支援を行っている。さらに、大学院では、1年生1名、2年生3名に対して、学生生活支援と研究指導とを行い、就職活動支援も含め必要に応じてオフィスアワーなどを用いながら個別の面談なども随時行っている。</p>

アドバイザー活動実績	2015年度	学部学生では、留学生1年生1名、3年生24名、4年生14名のアドバイザーを担当し、とくに留学生への支援を丁寧に行っている。また、専門ゼミナール(3年生)13名、卒業研究ゼミナール(4年生)11名に対して、きめ細かな指導を行っている。さらに、大学院修士課程では、1年生3名、2年生1名に対してアドバイザーとして支援と教育とを行っている。以上のように、学部生40名ほどと大学院生4名の指導教員として日常生活も含め、個別面談を行いながら指導を行っている。	
	2014年度	学部では、基礎ゼミナールⅡで2年生(20名)のアドバイザーを担当、専門ゼミナール(3年生)では13名のアドバイザーを、また卒業論文研究(4年生)では7名のアドバイザーを担当している。また、大学院修士課程では1年生2名、2年生2名のアドバイザーを担当している。以上のように、学部生40名、大学院生4名に対して、ゼミで専門的関わりを持ちながらも、学業・研究指導と並行して、学生生活・進路など修学面でのサポートや指導のための個別面談もきめ細かく行っている。	
	2013年度	大学院修士課程1年生2名の修士論文指導・アドバイザーを担当、2名の修士論文の副査を務めた。	
後進育成活動実績		<p>①(2013年～現在) 山梨英和大学大学院において、大学院院生・特別研修生に向けてスーパーヴィジョンを年間約300時間担当している。さらに修了生に向けて個人スーパーヴィジョンやグループスーパーヴィジョン、研修会講師などを務め、後進の育成には全力で取り組んでいる。学部授業や学内業務の合間に月平均20時間(週当たり約5時間)の個人スーパーヴィジョンを行うことは時間的にも体力的にも厳しいが、心理臨床教育の要ともなる重要な個別教育を丁寧に行っている。後進の心理臨床家を育てる上で中核となる臨床実践指導であるため、大学院生自身の個別の課題をも見据えながら、丁寧な関与と指導とが必要となる。スーパーヴィジョンは時間や手間暇のかかる教育的関わりであるが、担当ケースが安全にまた意味あるプロセスをたどれるよう、実践的指導を行いながら、後進の育成に積極的に関与し、またそのための自身の心理臨床活動や研修にも時間を割くことを自らに厳しく課してきた。</p> <p>②神奈川大学大学院において、臨床心理士を目指す大学院生のスーパーヴィジョンを担い、臨床家としての基盤づくりに関与した。(2010年～2013年)</p> <p>③フォーカシング個別指導、セラピストフォーカシングセッション、フォーカシングワークショップ(ベーシックコース、アドバンスコースによって、臨床心理士を目指す大学院生や現役臨床心理士の育成やスーパーヴィジョンに携わってきた。(2002年度～現在)また、地域の臨床心理士や大学院卒業生に向けて、研修の機会を提供するなど、積極的に後進の育成に関与している。</p> <p>④民間カウンセリングセンターにおいて、臨床心理士へのスーパーヴィジョンやセラピストフォーカシングによるケース検討を行い、若手～中堅臨床心理士の育成に継続的に関与している。(2010年～現在)</p>	
社会貢献活動	(1)講演会		
	2016年	4月	高橋寛子。(2016) 山梨県笛吹市 保育所(園)職員研修 講演会講師。 『子育て支援・親支援 ～切らない支援・つなぐ支援に向けて～』と題して、笛吹市保育園園長・保育士ら約200名に向けて講演会講師を務めた。
	2011年	6月	高橋寛子。(2011). 埼玉県臨床心理士会 東日本大震災支援特別プロジェクト研修会講師 『震災支援者のためのセラピスト・フォーカシング』
	2010年	12月	高橋寛子。(2010). 埼玉県学校臨床心理士研究会 東部地区研修会講師 『スクールカウンセラーのためのセラピスト・フォーカシング』
	(2)出前講座		
	2015年	10月	山梨県立甲府昭和高校 模擬授業
	2015年	10月	山梨英和大学大学院生修了生研修会講師(『セラピストのためのフォーカシング』)
	2015年	8月	山梨英和大学大学院オープンキャンパスにおける模擬授業
	2015年4月～現在		山梨県笛吹市『子育て支援センターえいわ』を拠点とした支援活動に従事。臨床心理士として子育て中の母親への支援・心理面接・講演会・研究活動などを行っている。
	2014年	7月	山梨英和大学大学院オープンキャンパス模擬授業 「はじめてのフォーカシング」 京都大学 学際融合教育研究推進センター 分野横断プラットフォーム構築企画 『心理臨床の知・哲学の知からの創造的意味生成へのプロセス ー暗在性(the implicit)と出会い体験するワークショップー』 共同企画者および講師
2014年	2月		
2013年	11月	山梨県立山梨高校 模擬授業	

社会貢献活動

2013年	10月	山梨英和学院高校 模擬授業
2013年	9月	中部地区臨床心理5大学院研究会において臨床心理演習講師担当。『フォーカシングを臨床に活かす』
2012年	1月	日本聖書神学校において「青年期と摂食障害」についての講義
2011年	11月	第49回全国学生相談研修会講師 『事例から学ぶ理論と技法』
2010年	10月	第48回全国学生相談研修会講師 『コミュニケーション能力を高める心理教育』
2009年	11月	第47回全国学生相談研修会講師 『フォーカシングの基礎と応用』
2008年	11月	大正大学文学部臨床心理学科「臨床心理学技法演習」「技法テーマ研究B」ゲスト講師として、学部3年生のフォーカシング実習指導を行った。
2008年	11月	第46回全国学生相談研修会講師 『事例から学ぶ理論と技法』
2007年	11月	第45回全国学生相談研修会講師 『インテーク』
2005年～ 2003年		埼玉県入間市健康福祉センター精神保健技術者研修会講師として、年間を通じて初回面接、電話相談、ロールプレイ、リスニング訓練、家族面接、事例検討などの指導を精神保健福祉士・看護師・保健師らに向けて行った。
2003年	8月	日本聖書神学校において神学生に向けて「臨床牧会訓練」において「フォーカシング」に関する集中講義を行った。
(3)公開講座		
2015年	6月	山梨英和大学 メイプルカレッジ講師 『こころとからだの声を聴く 一初めてのフォーカシング体験講座ー』 連続講座
2014年	10月	山梨県県民コミュニティカレッジ(地域ベース講座)「サイコロジー・トゥデイ」講師 第5回「臨床と心理学の背景にあるもの」担当講師
2014年	10月	山梨英和大学 メイプルカレッジ講師 『こころのメッセージを聴く』 連続講座
(4)学外審議会・委員会等 なし		
(5)その他		
2012年	1月	「対人援助職のためのセラピストフォーカシング ワークショップ」講師 (主催:フォーカシングトレーナーズ)
2011年	3月～8月	東日本大震災緊急支援電話相談ボランティア相談員として活動。(日本臨床心理士会・東京臨床心理士会・日本精神衛生学会共催)
2011年	5月～	京都大学大学院教育学研究科 「こころの支援室」東日本大震災震災支援者のための電話相談相談員として活動
2009年	7月～現在	池袋カウンセリングセンターにおいて、臨床心理士としてクライアントへの心理面接を行い、臨床実践および若手臨床心理士へのスーパーヴィジョンをおこなっている。
2010年	5月	「対人援助職のためのセラピストフォーカシング ワークショップ」講師 (主催:フォーカシングトレーナーズ)
2003年	～現在	日本精神技術研究所フォーカシングセミナー(ベーシックコース・アドバンスコース)講師

## 成果と目標

専門的成果	<p>① 長年学生相談分野での心理臨床実践において、その立ち上げから組織づくりを担い、他職種との協働・連携システム・予防的活動・事例研究の蓄積などを行うことを通して、組織に生きる臨床心理士としての実践的活動と理解とを深めてきた。それはまた、個別的支援にとどまらず地域への支援や組織の活性化にもつながる知見へと発展し、体系だった実践研究の蓄積として論文や執筆によって公刊され広く共有してきた。</p> <p>② 学生相談臨床実践から得られた研究成果から、大学教育全体を視野に入れ大学教育に還元していくための授業づくりや人間教育への展開を模索している。これらの成果は、身体的実感を伴った学生・大学院生の主体性を伸ばす教育実践や研修システムとしての成果が期待され、大学教育における実践を『学生相談から切り拓く大学教育』などの著書の編著などによって、広く世に発信した。</p> <p>③ 教育臨床のみならず、司法・医療・福祉関連など多くの現場での実践や臨床心理士への教育、他職種との連携の蓄積は、心理臨床センターでの臨床実践、大学院生や研修生への教育、実習指導、センターの組織運営の実際に関与する際に、十分活かされている。「臨床実践指導学」という日本で唯一の博士後期課程講座での学びや研究の蓄積は、大学院教育のシステムづくりに関与する基盤として活かされるとともに、「スーパーヴィジョン学」としての展開がなされている。</p>
専門的目標	<p>① 学部教育においては、学力、コミュニケーション力の低下という課題に向けて「基礎ゼミナール」「専門ゼミナール」「卒業研究ゼミナール」における教育実践の展開が求められている。長年の心理臨床実践での知見をさらに活かしつつ、知識のみならず全人的に「育て、育む」大学教育への模索を試みつつ、他の教員との情報共有や共同研究に積極的に関与し、さらなる発信に努める。</p> <p>② 臨床心理士養成に関わる諸問題(事例検討の方法、スーパーヴィジョンシステム、実習指導、体験を含んだ教育、臨床家としての人間的基盤づくりなど)に対して、個別のきめ細やかな指導とともに、大学院カリキュラム全体を視野に入れつつ、改善点を挙げながら、効果的な教育システムづくりに寄与する。</p> <p>③ 自身の研究テーマである、「暗在性」(the implicit)と「体験過程理論」の臨床適用とをさらに推し進める。そこには、これまでの心理臨床実践にとどまらず、大学教育(心理臨床教育、学部教育)への活用や「体験の言語化」、さらに「対人援助職支援」などへの展開が含まれるが、これら実践からの研究を体系づけ、学位論文としてまとめるとともに、山梨英和大学・大学院の教育活動・実務実践などへの貢献なもちろんのこと、COC+・子育て支援など地域支援に向けて惜しみなく貢献することを目標とする。</p>

最新データ入力日

2016年 5月 1日

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
カン キョウ コウ 韓 暁 宏	男	1968年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(学術)	専門分野	経営学、中国経済	
学 歴	1987年 7月	中国遼寧省凌源市第一高等学校卒		
	1987年 9月	中国東北師範大学外国語学部日本語学科入学		
	1991年 7月	中国東北師範大学外国語学部日本語学科卒業 文学学士		
	1994年 9月	中国国家外国専門家局に派遣され、早稲田大学にて日本語研修		
	1995年 4月	桜美林大学大学院国際学研究科博士前期課程入学		
	1997年 3月	桜美林大学大学院国際学研究科博士前期課程修了 国際学修士		
	1997年 4月	桜美林大学大学院国際学研究科博士後期課程入学		
	2000年 3月	桜美林大学大学院国際学研究科博士後期課程修了 満期退学		
	2001年 8月	桜美林大学大学院学術博士学位取得 学術博士		
実 務 経 験	1991年 8月	中国東北電力大学にて勤務、専任講師		
	2001年 9月	中茂国際株式会社(商社)にて勤務、営業本部長		
	2007年 10月	山梨英和大学国際交流センター顧問		
	2008年 4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 准教授(現在に至る)		
受賞歴	2016年3月に中国日本語教学研究会・特定非営利活動法人日中友好市民倶楽部から、「日中友好中国大学生日本語科卒業論文コンクール」の運営への協力のため、感謝状を贈呈された			
所 属 学 会	2001年 4月	国際総合研究学会		
	2000年 5月	アジア経営学会		
	2000年 4月	経営行動学会		
特免資 許許格 等・・・	特になし			
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	グローバル化が進んだ現今、大学教育は国・地域を問わず、国際社会に対応する、国際感覚を持っている人材を育成していくのが教育機関としての大学の使命ではないかと考えている。このような理念のもとで、人へ、地域へ、そして世界へ貢献できる学生を育てることが心掛けている。グローバルな社会で、ビジネスパーソンになるためには、ビジネスに関する専門知識、コミュニケーション能力が求められている。このことを自分の専門分野の範囲で、講義・演習を通じて少しでも学生の一助けになりたい。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.双方向授業の実践 学生の顔を見て話をする直接的なコミュニケーション及びアンケートにより、勉学への意識や理解度をリアルタイムに把握している。また、授業計画や準備の段階で学生の意見等を多角的に聞き取り、指導案を作成する。こうした双方向授業に学生は素直に反応し動機づけにと繋がることで、講義が活性化していく。</p> <p>b.総合的なコミュニケーション能力の向上へ コミュニケーション能力を上げていくのに、言葉自体の勉強だけは不十分である。その言葉に関わる文化などの理解も必要である。「中国語3(生活の中の中国語)」と「中国語4(ビジネス中国語)」の授業においては、実際のシーンを設け、言葉の応用を身につけると同時に、言葉及び場面に関わる中国文化、伝統、習慣、歴史等も触れる。最終的に総合的なコミュニケーション能力が高められる。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	2016年度: グローバル経済論、経営学Ⅰ、アジア短期留学Ⅰ、ビジネス日本語、中国語1&2、中国語3&4、民族と社会Ⅰ、基礎ゼミナール、専門ゼミナール、コミュニケーションスキル、サービ斯拉ーニング、卒業研究
代表的シラバス	<p>a.講義としては、「グローバル経済論」である。 国家を一括りとする国民経済を基本とするこれまでの枠組は、グローバル社会の進展に伴い、国境を超えたモノ・カネ・ヒト・情報などの基礎的な生産要素や財が頻繁に移送している。所謂、国際貿易は一国の国民経済にとって必要不可欠な一部分となり、重要な役割を果たしている。この講義では、国際貿易に関する制度・協定から契約締結、通関、輸送、保険、為替決済、クレーム対応などまでの貿易取引に関する仕組みを体系的に学ぶ。詳細の授業計画は本学のホームページを参照されたい。</p> <p>b.演習としては、「卒業研究」である。 卒業研究は、大学で学んできたことを総仕上げ、一本の論文に理論的かつ体系的に纏める。受講生は、3年次までの学習から形成されてきた関心領域に対して、文献収集と精読を通じて、問題意識を明確化し、研究テーマを決定する。各自の研究テーマに基づき、経営学の視点から、研究計画を立て、理論的に分析し、その内容を纏め、卒業論文を完成する。詳細の授業計画は本学のホームページを参照されたい。</p>
教育改善活動	<p>a. 新教育課程検討会への参加 2009年度開設予定の新たなカリキュラムを検討するうえで、従来なかったビジネス関連のコース設置に向けて各種提案を行った。</p> <p>b. 留学生教育体制点検委員会への参加 2009年11月に留学生教育体制点検委員会で、留学生教育に関する多様な提案を行った。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 <u>講義・演習の全体評価(講義アンケートより)</u>:講義・演習については、シラバスの通り、分かりやすく授業を進めたとのことである。講義は学生たちの意見・レベル等を考慮して、学生の勉強意欲を最大限に引き出すことに配慮した。授業中に内容を理解するため、映像などを通じて、関連する知識も触れた。演習は、学生自身が自主的に課題への取り組みが出来るように心掛けている。学生たちの一人一人の特徴、関心を持っている分野に合わせ、研究のスタンス、課題への解決に力を入れた。</p> <p><u>良い点・改善してほしい点(講義アンケート自由記述欄より)</u>:全体的には授業内容よりも、授業の方式(例えば、板書や字の大きさ等)に指摘された意見が多かった。また、科目の人数の関係で、学生たちに質問を与えるチャンスが少なかったという意見もあった。</p>

対教 す育 る能 評力 価に	<p>改善に向けた今後の方針: 学期末の学生からの授業評価を真摯に受け止め、改善してほしい点を克服しながら、よい点を次年度に生かしていきたい。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員などによる講義評価は行っていない。</p>
----------------------------	---

### 研究業績

研究の特徴	<p>主に中国の国有企業の改革について、“現代的”企業の育成の視点から、企業のガバナンス及び経営メカニズムを研究している。計画経済から市場経済へ移行している中国に、企業の改革は外国(先進国)の公企業の改革が参考となるが、その経済システムや経営環境が異なっている。そこに、如何にマッチして、中国の国有企業を効率的に改革していくかは研究の中心所在である。</p> <p>また、グローバル社会の中で、日本企業の海外への進出戦略及び農業の6次産業化(特に山梨県の農業の6次産業化)のあり方も研究している。</p>
研究経歴	<p>2000年 中国国有企業の民営化に関する研究に従事</p> <p>2001年 中国国有企業の改革の実態に関する現地調査(凌源鋼鉄集団公司を中心に)</p> <p>2002年 中国の私営企業の経営メカニズムに関する研究</p> <p>2011年 中国企業の現代的企業への育成における経営者市場の育成に関する研究</p> <p>2013年 日本企業の海外への進出に関する研究(進行中)</p> <p>2016年 日本の農業の6次産業化(特に山梨を中心に)の研究(進行中)</p>
研究実績	<p>(1) 著書 特になし</p> <p>(2) 学術論文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「中国における日本企業の現状と今後の発展についての研究」『異文化交流と地域経済発展』光明日報出版社 2015年8月</li> <li>2. 「企業文化から見る企業経営—日本を中心に—」『桜美林大学産業研究所年報』第32号 2014年3月</li> <li>3. 「中国の経済発展と外国直接投資」『山梨英和大学紀要』第10号 2011年</li> <li>4. 「中国の企業改革の実例研究—福建実達コンピュータ株式会社を中心に—」『山梨英和大学紀要』第9号 2010年</li> <li>5. 「中国の国有企業改革について—凌源鋼鉄集団公司の実例研究—」『山梨英和大学紀要』第8号 2009年</li> <li>6. 「中国国有企業の改革の研究—“現代的”企業の育成を目指して—」博士学位論文 2001年7月</li> <li>7. 「中国の企業改革とコーポレート・ガバナンス—経営者インセンティブの視点からのアプローチ」『アジア経営研究』アジア経営学会 2001年6月第7号 pp37~42</li> <li>8. “The Foundation of Corporate Governance in Chinese Enterprises During the Transitional Period” China Newsletter 2001 Vol.1 No.150 pp2~14(翻訳版)</li> <li>9. 「移行期における中国企業のコーポレート・ガバナンス」『中国経済』日本貿易振興会 2000年11月 pp34~54</li> <li>10. 「中国企業の経営者の実像と課題—中国企業家調査から—」『日中経協ジャーナル』 No.72 日中経済協会 1999年12月号 pp6~15</li> <li>11. 「中国国有企業の株式制改革とイタリアの国家持株機関」『日中経協ジャーナル』 No.65 日中経済協会 1999年4月号 pp79~88</li> <li>12. 「中国企業の経営者に関する一考察」『桜美林国際学論集』No.4 桜美林大学大学院国際学研究所 1999年12月 pp47~62</li> <li>13. 「中国国有企業の株式制改革について」『桜美林国際学論集』No.3 桜美林大学大学院国際学研究所 1998年12月 pp99~112</li> </ol> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第5回 中・日・韓日本語文化研究国際フォーラムにて、「文化から見た日本の経営」を口頭発表 中国大連大学に於いて 2013年9月</li> <li>2. 公益財団法人やまなし産業支援機構機関誌サポートネット連載「中国における日本製造業の近況と今後の進出に向けての考察(第1回)」2014年2月</li> </ol>

研究実績	<p>3. 公益財団法人やまなし産業支援機構機関誌サポートネット連載「中国における日本製造業の近況と今後の進出に向けての考察(第2回)」2014年3月</p> <p>4. 「異文化交流と地域経済発展」国際シンポジウムにて、「中国進出への日本企業の近況と今後の発展について」を口頭発表 貴州财经大学に於いて 2014年7月5日</p>	
学会等参加発表・役員	2000年 10月	「中国の企業改革とコーポレート・ガバナンス」アジア経営学会第7回全国大会 創価大学において
	1999年 3月	「中国国有企業の株式制度とイタリア混合経済との比較研究」日本国際開発学会 専修大学において
受託研究の実績	桜美林大学産業研究所の客員研究員として、当研究所に所属されている先生方と共に「日・中・台の商品化農業経営に関する研究を行っている。	
大学院生指導	特になし	
研究能力に対する評価	<p>計画経済の体制のもとで運営されてきていた中国の国有企業は、市場経済への移行にあたって、色々な課題が直面している。それを克服しながら、“現代的”企業を目指して改革していくには、“漸進的”な改革が必要である。また、経済環境・経営環境の変化につれ、最終的に国有企業の“民営化”以外にはほかの道はない。国有企業の“民営化”への改革は、業種によって、漸進的民営化と完全的民営化に分けるべきである。国有企業の漸進的民営化は外国(先進国)の公企業の改革が参考となる。先進国の公企業と中国の国有企業の状況を分析し、効率的に改革していく方法の模索が期待されている。“混合経済の企業改革モデル”はその改革の一つの方法である。“混合経済の企業改革モデル”はすでに、学術論文を通じて発表されている。また、“現代的”企業を目指している中国の国有企業の改革において、経営メカニズムを機能するには経営者市場、資本市場の育成が不可欠である。この点は今後の中国の国有企業の改革に示唆を与えていることが期待されている。</p>	

### サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2007年 10月	国際交流センター顧問(2008年3月まで)
	2007年 10月	海外の教育機関との交流を促進し、大学の国際化に取り組む(現在に至る)
	2008年 4月	国際交流委員会委員(2012年2月まで)
	2009年 11月	留学生教育体制等点検委員会委員(2010年3月まで)
	2009年 4月	教務委員会委員(2011年3月まで)
	2009年 4月	ビジネス・コミュニケーションコースコーディネータ(2011年3月まで)
	2011年 4月	入試委員会委員(2012年2月まで)
	2011年 4月	進路支援委員会委員(2012年2月まで)
	2011年 4月	図書館運営委員会委員(2012年2月まで)
	2012年 2月	広報戦略部運営会委員(現在に至る)
	2012年 2月	学長特別補佐(国際交流中国担当)(2014年3月まで)
	2014年 4月	学長特別補佐(国際交流・学生生活(中国)担当)(2018年3月まで)
	2014年 4月	学生サービス部運営会議委員(現在に至る)
2015年 4月	ビジネス・コミュニケーションコースコーディネータ(2016年3月まで)	
アドバイザー活動実績	2008年	1年次の学生の教養演習を担当した(2009年3月まで)
	2009年	3年次の学生の専門ゼミナールを担当する(現在に至る)
	2010年	4年次の学生の卒業研究を担当する(現在に至る)
	2010年	1年次・2年次の学生の基礎ゼミナールを担当する(現在に至る)
	2008年	1年次から4年時までの留学生の世話役(現在に至る)

後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	(1)学外審議会・委員会等 2011年 4月 山梨県総合計画審議会委員(第3期 任期2年、2013年3月まで) 2013年 11月 山梨県総合計画審議会委員(第4期 任期2年、2015年11月まで) 2011年 4月 公益財団法人 山梨総合研究所アジアフォーラム21研究会会員 2013年 4月 桜美林大学産業研究所客員研究員
	(2)講演会 特になし
	(3)その他 2010年 12月 山梨県にある地元中小企業(株式会社ニスカ)の海外赴任人員の語学研修の企画・実践 2012年 10月 やまなし産業支援機構と協力し、産学連携企業支援講演会の企画に参加 2012年 12月 やまなし産業支援機構中国研究会の企業メンバーと留学生との交流に積極的に取り組んでいる 2012年 9月 山梨県知事の中国へのトップセールスのため、仲介役として活動していた 2013年 11月 日本貿易振興機構(ジェトロ)が主催された「アジア貿易振興機関との交流会」に協力 2015年 4月 山梨県と中国蓬萊市との友好交流に架け橋となる役割を果たしていた 2015年 6月 山梨県笛吹市の「外国人1人街歩きマップ」作成に意見交換への協力 2016年 6月 山梨県にある株式会社佐藤農園への学生の体験学習(社会奉仕活動)への企画・実践

## 成果と目標

専門的成果	<p>計画経済から市場経済への移行にあたって、“現代的”企業を目指している中国の国有企業の改革は、業種によって、漸進的民営化と完全民営化が必要である。その漸進的民営化の手法は外国(先進国)の公企業の改革が参考となる。外国(先進国)の公企業の改革について、日本の国鉄とイタリアの公企業の改革を参考にして、“混合経済の企業改革モデル”を構築した。この研究について、学術論文を通じて、発表されている。</p> <p>また、“現代的”企業を目指している中国の国有企業の改革において、経営メカニズムを機能するには、経営者市場、資本市場の育成が至急な課題になっている。中国の国有企業の改革に、あまり触れていない経営者市場の育成について、学術論文を通じて、発表されている。特に経営者のインセンティブ付与について、主張し続けているストックオプション制度を導入する点が最近盛んに議論されている。</p>
専門的目標	<p>中国の国有企業の改革において、業種によって、移行経済に適用する漸進的民営化モデルと完全民営化モデルを更に具現化しなければならない。また、“現代的”企業を目指している国有企業の経営者市場の育成について、中国にある他業種の企業の実態調査を通じて、今までの改革案を更に検証する必要がある。</p> <p>以上の点を踏まえ、最終は中国の国有企業の改革における現実に近い改革モデルを構築していきたい。</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
イ サンジン 李 尚珍	女	非公表	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(人文科学)	専門分野	日韓文化交流史(近代)、近代思想史	
学 歴	1995年	4月	宇都宮大学国際学部国際文化学科入学	
	1999年	3月	宇都宮大学国際学部国際文化学科卒業(国際学学士)	
	1999年	4月	宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程入学	
	2001年	3月	宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程修了(国際学修士)	
	2001年	4月	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程入学	
	2008年	3月	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了(人文科学博士)	
実 務 経 験	2005年	10月	宇都宮大学国際学部非常勤講師(2011年3月まで)	
	2008年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科助教	
	2012年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科准教授(現在に至る)	
	2014年	10月	放送大学非常勤講師(2015年3月まで)	
受 賞 歴	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
所 属 学 会	2001年	4月	日本朝鮮学会会員(現在に至る)	
	2002年	4月	日本韓国・朝鮮文化研究会会員(現在に至る)	
	2002年	10月	日本朝鮮史研究会会員(現在に至る)	
	2011年	4月	日本比較文化学会会員(現在に至る)	
	2011年	4月	韓国東アジア日本学会会員(現在に至る)	
	2015年	8月	韓国日本文化学会会員(現在に至る)	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	年	月		
	年	月	特になし	
	年	月		
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>教育理念は創造力・豊かなコミュニケーション力・グローバルな視野を持つ人間性豊かな人材を育成することである。具体的な方針・方法として2つの分野にわけて考えている。</p> <p>(1)まず、文化・歴史に関する教育においては、これまでの教育の中で得られた成果をもとに受講生が「文化」と「歴史」の概念を理解したうえで、日本と韓国における思想の特殊性と相関性、過去と現状を正確に認識し、一方的ではなくて複眼的・多角的な見方ができるように指導する。</p> <p>(2)次に、韓国語に関する教育においては、「読む・書く・聞く・話す」の基本学習の他、会話と講読の演習を行い、韓国語文献の講読から作文などの表現力・応用力を身につけるように指導し、さらに韓国語の誕生と使用の背景を含む韓国の歴史や社会、文化などの学習内容を取り入れて、専門分野の研究に取り組めるアカデミックな環境の整備・充実に取り組む。</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.山梨英和大学の担当科目の授業において、①身近にある映画やドキュメンタリー、新聞記事、書籍などを通して、日韓の文化・歴史・思想がテーマとなる具体的な事案を学生たちと一緒に考えながら、学生自らが自分の興味を持つことを見つけて、積極的に研究できるような環境を提供している。また、②資料収集、文献調査・分析、レジュメ作成、発表、討論、レポート作成などによって、各自の問題意識を明確にし、その疑問を解明していく姿勢を身につけるようにしている。</p> <p>b.海外短期研修(体験としての異文化理解・韓国)においては、本学の参加学生たちと協定校の忠南大学校在生(日本語学習者)との積極的な交流(マンツーマンサポート)を行い、勉学意欲を高めている。そして、異文化間のコミュニケーション方法として語学学習の重要性を認識し、全体的な学習意欲につながっていくように指導している。なお、2010年度の参加学生のうち、1名の1年生が2011年度3月より、2011年度の参加学生のうち、1名の3年生が2013年度3月よりプログラム実施校の韓国の国立忠南大学校人文大学日本語学科に1年間の交換留学生として派遣されていて、短期プログラムから両校の学生たちの学術的・国際的交流につながっている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a.「国際交流とは何かを考える」栃木県立栃木南高等学校教育講演会(2005年6月)</p> <p>b.「人権教育とは何か」栃木県立高根沢商業高等学校教育講演会(2005年9月)</p> <p>c.「平和をどう考えるか」茨城県立八千代高等学校総合的学習の時間の講演(2005年12月) ⇒これら3つの講演会では、大学進学や就職を希望する高校生が、どのように「国際理解や国際交流を深める」べきか、あるいは「外国人から見た人権教育とは何か」、「平和とは何か」という問題について、私自身の体験をもとに講演した。また、高校生や大学生が、身近にいる留学生との交流を通して「平和」と「共存」について理解し、自らできることは何か、を考え、見つけ、行動することが「国際理解」の出発点であることについて質疑応答などをまじえて議論した。</p> <p>d.「朝鮮を愛した甲州人・浅川巧—その心の軌跡—」山梨県立農林高等学校PTA・教職員研修会(2010年7月)⇒2009年6月15日に山梨県立農林高校の全校生向けに卒業生浅川巧と韓国について話したが、保護者と教職員が生徒たちと共有できるような話題が提供できるように話した。</p> <p>e.「朝鮮の土となった日本人・浅川巧が現代の私たちに問いかけるもの」未来をひらく歴史～東アジア3国の近現代史第16回学習会(2010年7月)⇒主に中学校高校の教員たちが参加し、歴史教育に関する話や浅川巧のような明るいテーマが及ぼす教育上の影響について話し合った。</p>
<p>担当授業科目</p>	<p>2016年度: アジア短期留学Ⅱ、卒業研究、国際交流論、基礎ゼミナール、専門ゼミナール、民族と社会Ⅱ、韓国語1、2、3、4</p>
<p>シラバスの代表的</p>	<p>科目:国際交流論</p> <p>・概要:なぜ、日韓両国の間に「歴史認識」や「歴史教科書」等が繰り返し問題とされるのでしょうか。両国の文化交流に長い歴史があるとは言え、過去の一時期における植民地統治の出来事が、それぞれの国民に否定的なイメージや先入観を与えてきたからではないでしょうか。韓国の高校の歴史教科書に「肯定的」に紹介された日本人もいます。韓国が日本の植民地であった時代に韓国の陶磁器や民芸品の美術的価値を見出して世に知らしめた柳宗悦や浅川伯教・巧兄弟(山梨県出身)です。この授業では、現代から近世へと時代を遡りながら、日韓文化交流における「明るいテーマ」を見つけていきます。</p>

代表的シラバス	<p>・授業展開方法:①毎回グループワークを行い、各自の意見や疑問点等をまとめて発表してもらう。②受講生が自主的に興味のあるテーマについて調査・発表する時間を設ける。そして、その内容について意見交換をし、討論する。資料収集・発表方法についてはサポートする。</p> <p>・到達目標:①これまでの日韓関係について理解することができる。②日韓交流における明るいテーマに関心を持ち、今後のあり方について認識することができる。③国際的な視野を広げ、異文化理解とその方法について関心を持つことができる。</p>
教育改善活動	<p>2009年度、2010年度には教育改善(FD)委員会の委員として学内におけるFD活動に携わった。具体的には授業評価アンケートの結果を分析し、全体の問題改善に取り掛かり、評価の高かった授業を公開してもらい、参考とした。そして、アンケート実施方法の改善を図り、客観性の確保と効果的なフィードバック方法を確立した。さらに、外部の専門家を招いてFD講演会・研修会を開き、全教職員が共有できるモデルを作った。その活動は現在も続いている。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>a.授業全体の評価(授業評価アンケートより): 担当する全科目において5点満点のうち、平均4.5点以上の評価が得られて、受講生の満足度が高かったと考えられる。</p> <p>①「先生の熱意が伝わった」、 ②「1週間で一番楽しみな授業だった」、 ③「授業を受ける人全員の感想を発表させたのがよかった」、 ④「外国人の眼で見た韓国についての話を聞いてよかった」、 ⑤「視聴覚教材が多くてわかりやすくよかった」などのような評価の意見が多くあった。</p> <p>b.良い点・改善してほしい点(授業評価アンケートより): 受講の前に予備知識を持てるように課題を出し、自由調査をしてもらったり、各自の考えをまとめるレポートを作成してもらったりして、授業内容の理解度を高めた。簡単なまとめの形式であったので、受講生の負担も少なく授業にも興味を持ってもらうことができた。今後も続けていきたい。なお、「いろんなことをいろんな形で知れた」という意見に注目し、視聴覚教材やグループワークの進行に工夫しながら、興味を持って参加できる授業にしていきたい。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 現在行われていない。</p>

## 研究業績

研究の特徴	<p>a.在朝鮮日本人浅川伯教・巧兄弟に関する研究を続けている。この研究は、浅川兄弟の朝鮮伝統工芸研究の特質を分析し、そこから異文化としての朝鮮理解の方法の今日的意義を検証するものである。その具体的内容は、兄弟の朝鮮移住の動機、在朝鮮日本人としての当時の植民統治期の特殊な時代状況の認識、さらに兄弟の伝統工芸研究を通しての朝鮮理解の方法とその背景を探究するものである。また、明治から昭和の激動する社会的背景の中での兄弟の思想的基盤の歴史的特質についても研究を進めている。本研究の重要な方法論的特徴として、兄弟のフィールドワーク研究の方法(Field-oriented Approach)及びその特質を検証することによって、彼らの朝鮮伝統工芸研究の朝鮮理解における位置づけについての研究成果をあげることにあ</p> <p>b.植民地期以後の日本と朝鮮半島の諸問題に関心を持ち、帰国問題の始まりについて1955年後の日朝関係を再検討することで、北朝鮮が帰国事業を始めた主な理由が、これまで言われていたような労働力の移入ではなく、対日国交正常化のためのパイプ作りにあったこと等を明らかにし、日朝協会や韓国マスコミなど、これまで正面から取り組まれたことのなかったテーマについて研究している。</p>
研究経歴	<p>1999年 宇都宮大学大学院国際学研究科博士課程前期の在学中より現在まで在朝鮮日本人浅川伯教・巧兄弟)研究に取り組んでいる。</p> <p>2005年 『帰国運動とは何だったのか—封印された日朝関係史—』(共著、平凡社、2005年5月)の執筆より現在まで在日韓国人に関する研究に取り組んでいる。</p>

研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>a. 共著『帰国運動とは何だったのか—封印された日朝関係史—』平凡社、高崎宗司・朴正鎮編著、2005年5月pp.235-267、pp.325-339。</p> <p>b. 共編『回想の浅川兄弟』草風館、高崎宗司編、2005年9月、pp.296-305。</p> <p>c. 共訳『韓洪九の韓国現代史Ⅰ—韓国とはどういう国か』平凡社、2003年12月pp.252-292。</p> <p>d. 共訳『韓洪九の韓国現代史Ⅱ—負の歴史から何を学ぶのか』平凡社、2005年7月、pp.286-318。</p> <p>e. 共編『韓国民芸の旅』草風館、2005年12月。</p> <p>f. 共著「浅川兄弟、その魂の源流を訪ねて」『浅川伯教の眼+浅川巧の心』里文出版、2011年7月、pp.63-89。</p> <p>g. 共著(韓国語)「浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解」『柳宗悦と韓国』ソミョン出版、2012年12月、pp.91-125。</p> <p>h. 共訳(韓国語)『浅川巧の日記と書簡』草風館、山梨県北杜市刊行、2014年3月。</p> <p>(2) 学術論文</p> <p>a. 「浅川巧の朝鮮観—植民地時代におけるその業績を中心に—」『人間文化論叢』第4巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2002年3月、pp.289-299。</p> <p>b. 「浅川巧—その異文化理解モデルの今日的意義—」『人間文化論叢』第5巻(お茶の水女子大学 大学院、外部審査有)2003年3月、pp.243-252。</p> <p>c. 「キリスト者浅川巧の苦悩—その宗教観を中心に—」『人間文化論叢』第6巻(お茶の水女子大学 大学院、外部審査有)2004年3月、pp.177-186。</p> <p>d. 「浅川伯教と朝鮮—植民地期の朝鮮陶磁研究を中心に—」『人間文化論叢』第7巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2005年3月、pp.315-324。</p> <p>e. 「浅川伯教の朝鮮工芸論」『人間文化論叢』第8巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2006年3月、pp.249-258。</p> <p>f. 「在朝鮮日本人浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解—植民地期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を中心に—」『朝鮮学報』第205輯(朝鮮学会)、2007年10月、pp.137-170。</p> <p>g. 「浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解の意義」『人間文化論叢』第10巻(お茶の水女子大学大学院、外部審査有)2008年3月、pp.1-10。</p> <p>h. 『浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解に関する研究—植民統治期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を素材として』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人文科学博士学位論文、2008年3月、pp.1-200。</p> <p>i. 「柳宗悦の朝鮮伝統芸術研究—浅川伯教・巧兄弟との繋がりをを中心に—」『山梨英和大学紀要』第8号(山梨英和大学)2010年2月、pp.51-64。</p> <p>j. 「浅川巧の異文化理解モデルに関する一試論」『山梨英和大学紀要』第9号、2011年2月、pp.53-68。</p> <p>k. 「朝鮮美術展覧会の実相に関する一考察」『(韓国)東アジア日本学会』2011年10月、pp.431-453。</p> <p>l. 「柳宗悦と浅川伯教の『朝鮮美術観』に関する一考察—「朝鮮民族美術館」の設立過程を中心に—」『比較文化研究』No.116、日本比較文化学会、2015年4月30日、pp.55-68。</p> <p>m. 「植民統治期の朝鮮社会における朝鮮美術展覧会の受容に関する一考察」『比較文化研究』No.118、日本比較文化学会、2015年10月31日、pp.23-37</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a. 「日韓文化交流のモデルとなる日本人・浅川巧」富士ゼロックス小林節太郎記念基金2004年研究調査報告書</p> <p>b. 「植民地朝鮮における浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の民芸運動—その今日的意義を中心に—」お茶の水女子大学大学院「魅力ある大学院教育」イニシアティブ・プログラム調査報告書</p> <p>c. 宇都宮大学国際学部国際シンポジウム「多文化公共圏を考える—国際学の構築に向けて&gt; パネルディスカッション「多文化公共圏における異文化理解モデルとしての浅川巧」2009年11月</p>
	競争的資金採択課題

競争的資金採択課題	<p>c.2005年12月～2006年3月お茶の水女子大学大学院&lt;魅力ある大学院イニシアティブ: &lt;対話と深化&gt;の次世代女性リーダーの育成プログラム&gt;研究題目「植民地朝鮮における浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の民芸運動—その今日的意義を中心に—」30万円</p> <p>d.2014年4月～2016年3月 科学研究費助成事業・基盤研究(C) 研究題目「朝鮮美術展覧会の工芸部新設と郷土性議論」</p>	
学会等発表・役員参加	<p>2001年</p> <p>2002年</p> <p>2002年</p> <p>2002年</p> <p>2010年</p> <p>2013年</p> <p>2014年</p> <p>2015年</p> <p>2015年</p> <p>2015年</p> <p>2016年</p> <p>2016年</p> <p>2016年</p>	<p>10月「浅川巧の民芸観—植民地期の朝鮮におけるその業績を中心に—」 第52回朝鮮学会全国大会</p> <p>2月「浅川巧の朝鮮観」第30回インター・ユニ哲学研究会</p> <p>10月「浅川巧と日韓文化交流」第3回韓国・朝鮮研究会</p> <p>10月「浅川巧—その異文化理解モデルの今日的意義」第53回朝鮮学会全国大会</p> <p>10月「浅川伯教と朝鮮美術展覧会」第61回朝鮮学会全国大会</p> <p>10月「朝鮮美術展覧会における『工芸部』と『郷土性』」第64回朝鮮学会全国大会</p> <p>6月「日本人の『朝鮮美術論』に関する一考察—植民地期における柳宗悦と浅川伯教の「朝鮮美術論」の比較を中心に—」第36回日本比較文化学会全国大会</p> <p>6月「朝鮮美術展覧会に関する一考察—本展覧会は植民統治期の朝鮮社会にどのように受容されたか—」第37回日本比較文化学会</p> <p>10月「柳宗悦の朝鮮認識—初期の活動を中心に—」第66回朝鮮学会全国大会</p> <p>10月「朝鮮美術展覧会における「郷土色」議論に関する一考察」第49回韓国日本文化学会学術大会</p> <p>3月「朝鮮美術展覧会における「郷土色」に関する一考察」日本比較文化学会第43回関東支部例会</p> <p>4月「朝鮮美術展覧会における「工芸部」と「郷土色」に関する一考察」第50回韓国日本文化学会学術大会</p> <p>5月「朝鮮美術展覧会と表象—作品における「郷土色」表現を中心に—」第38回日本比較文化学会国際学術大会</p>
受託共同研究の実績	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>	
大学院生指導	特になし	
研究能力に対する評価	特になし	

## サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	<p>2008年 4月 入試委員会、入試実務委員会、国際交流委員会の委員(2011年3月まで)主に外国人留学生の入試と韓国の協定校の現地入試に関わってきたが、入試に限らず、入学後の両国の学生たちの積極的な国際交流にも繋がっていき、交換留学・短期研修などの学術交流にも発展していけるように努めた。</p> <p>2009年 4月 FD委員会の委員(2010年3月まで) 授業アンケートの有効的な活用とFD研修会の効率化のために努めた。</p> <p>2011年 4月 図書館運営委員会、紀要委員会の委員(2012年3月まで)</p> <p>2011年 4月 宗教委員会の委員(2013年3月まで)、広報戦略部の委員(現在に到る)</p> <p>2014年 4月 学生サービス部(現在に至る)</p>
アドバイザー活動実績	<p>外国人留学生たちのアドバイザー(2008年4月～現在)、国際交流サークルの顧問(2012年3月～現在)、1年次・2年次の日本人学生と外国人留学生のアドバイザー(2012年4月～現在)として学習や進路に関する指導を行っている。オフィスアワーの設定、メールによる学生の申し入れ(日程や相談内容など)によって、一人一人の時間の都合や面談内容に対応できるように努めている。</p>
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	<p>(1)講演会</p> <p>韓国の日本大衆文化開放や日本の韓流ブームが始まり、各界の活発な交流が行なわれているが、こういう時にこそ両国のしっかりした歴史学習が必要である。両国民の歴史認識には曖昧かつ偏見的なものがいまだ残っていることが否定できないからである。ここで、韓国の文化と人々を愛し、韓国の人々に愛され、さらにいま日韓両国の多くの人々に敬愛されている日本人浅川伯教・巧兄弟の行跡を通して、当時の時代背景を再認識した。なお、当時、兄弟と付き合い合った韓国人の子孫たちがソウル市にある巧の墓を管理していることから、代々に受け継がれている歴史の明るい一面を共有し、歴史の学問領域に対する関心を高めるとともに、私自身の研究成果の公開の場となった。</p> <p>2004年 2月 「浅川巧—その人と業績—」日本コリア協会・大阪第46回総会記念講演</p> <p>2005年 7月 「浅川巧—韓国教科書に載った日韓相互交流のパイオニア」 宇都宮大学教科書問題を考える講演会</p> <p>2006年 6月 「回想の浅川巧」平成18年度浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会記念談話</p> <p>2008年 6月 「浅川兄弟の異文化理解」平成20年度浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会記念談話</p> <p>2009年 5月 大阪市立東洋陶磁美術館テーマ展「浅川伯教が愛した韓国のやきもの」 記念講演会</p> <p>2009年 6月 「日韓文化交流における知られざる若きヒーロー—浅川巧の生涯」 浅川巧・山梨県立農林高等学校卒業100周年記念事業講演会</p> <p>2009年 11月 「宇都宮大学ブランドを考える—宇都宮大学のさらなる発展と創造へ向けて—」 宇都宮大学創立60周年記念シンポジウム</p> <p>2010年 2月 「浅川巧の眼と心」山梨県立美術館日韓交流エコアート特別シンポジウム講演</p> <p>2010年 6月 「浅川兄弟研究の歩み」山梨平和ミュージアム山梨平和を願う戦争展記念講演</p> <p>2010年 9月 「柳宗悦と浅川兄弟」我孫子市制40周年記念・雑誌「白樺」創刊百周年記念講演</p> <p>2012年 2月 「浅川伯教・巧兄弟と朝鮮・韓国—ひと・自然との出会いから工芸研究まで—」 栃木県立美術館浅川巧生誕120周年記念展覧会記念講演</p> <p>2013年 11月 『『浅川巧日記』を翻訳して』山梨民芸協会講演会</p> <p>2014年 3月 『『浅川巧日記と書簡』を韓国語に翻訳して』山梨平和ミュージアム講演会</p> <p>2015年 10月 「甲州人浅川巧と韓国」韓国領事館主催「韓国との出会い～韓国について理解を深めよう!～」</p>

(2) 出前講座

人権と日韓交流をテーマとする講座で、外国人としての私の日本生活・体験と研究テーマの浅川兄弟にみる異文化＝韓国理解について話し、「共に生きる」ことについて参加者たちと議論した。

- 2006年 2月 「開かれた韓国・朝鮮の今」東大和市歴史講座5回
- 2008年 10月 「日韓文化交流における知られざる若きヒーロー」韭崎高等学校「個性を育てる学習サポート」
- 2009年 9月 「私の自分史を語る」東大和市職員組合主催「人権&国際交流講座」
- 2011年 11月 「神を信じ、平和を作り出した人々に学ぶ—浅川巧」山梨英和中学校
- 2012年 10月 「韓流ブームっていつから？日韓関係を遡って見れてくるものは？」山梨県立甲府東高校
- 2014年 1月 「甲州人・浅川巧にみる日韓交流」関東甲信越静地区高等学校国際教育研究協議会

(3) 公開講座

この6つの講座では、博士論文『浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解に関する研究—植民統治期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を素材として—』において解明した兄弟の朝鮮伝統工芸研究の特質とその展開過程、そこから異文化としての朝鮮理解の方法論について話し、高校生から社会人までの講座参加者たちと、今後の日韓相互理解について議論し、歴史認識を高める内容とした。

- 2005年 2月 「朝鮮の風土を愛し、朝鮮の土となった日本人～浅川巧」東京東大和市公民館歴史講座：人物史から見た韓国・朝鮮と日本の友好
- 2006年 10月 「浅川巧の朝鮮観」浅川伯教・巧兄弟記念講座（浅川伯教・巧兄弟資料館）
- 2009年 1月 「浅川兄弟にみる異文化理解」浅川伯教・巧兄弟記念講座（浅川伯教・巧兄弟資料館）
- 2011年 2月 「浅川伯教・巧兄弟にみる異文化理解」NPO法人高麗博物館文化講座
- 2011年 8月 「浅川巧と兄伯教—日本と韓国のマウメダリ（心の架け橋）」高麗美術館研究講座
- 2012年 10月 「浅川伯教・巧兄弟について」公益社団法人甲賀・湘南人権センター  
＜人権・平和・環境を考える講座＞
- 2013年 10月 「甲州人・浅川巧の日記にみる『日韓物語』」県民コミュニティーカレッジ・大学コンソーシアムやまなし

(4) 学外審議会・委員会等

- 2006年 4月 宇都宮大学大学院国際学研究科外部評価委員(2007年3月まで)

(5) その他

- 2005年 3月 書評「安達義弘—民芸運動による日韓共生の実現を求めて」『民藝』第627号、pp.58-59。
- 2005年 5月 書評「金希貞—朝鮮における柳宗悦の受容」『民藝』第629号、pp.56-57。  
書評「金容菊—柳宗悦と朝鮮芸術論」『民藝』第629号、pp.57-59。
- 2005年 6月 書評「丁貴連—もう一つの旅行記—柳宗悦の朝鮮紀行をめぐる」『民藝』第630号、pp.57-58。
- 2005年 7月 書評「加藤利枝—3・1独立運動後の朝鮮芸術観と柳宗悦」『民藝』第631号、pp.64-65。
- 2005年 8月 書評「朴桂利—柳宗悦と朝鮮民族美術館」『民藝』第632号、pp.47-48。
- 2005年 9月 書評「李秉鎮—光化門と柳宗悦」『民藝』第633号、pp.55-56。
- 2005年 10月 書評「李秉鎮—『白樺派』における他者としての＜朝鮮＞—柳宗悦と浅川巧の場合」『民藝』第634号、pp.61-63。
- 2006年 6月 随筆「浅川伯教・巧兄弟、柳宗悦の足跡を訪ねる韓国の旅を終えて」『民藝』第642号、pp.57-59。
- 2006年 8月 随筆「松本民藝館—日本の中の朝鮮美術・工芸品(15)」『民藝』第644号、pp.52-53。
- 2006年 12月 書評「朴裕河著・佐藤久訳『和解のために—教科書・慰安婦・靖国・独島』」  
平凡社、『南日本新聞』『信濃毎日新聞』など数紙(共同通信配信)
- 2010年 8月 コラム「日韓理解の礎・浅川巧に学ぶ」『山梨日日新聞』
- 2011年 4月 コラム「異文化理解モデル—日韓交流に橋を懸けた浅川兄弟」『聖教新聞』
- 2011年 11月 テレビ山梨「ウッティ発！かけはし 浅川兄弟からのメッセージ」収録

社会貢献活動	2012年	6月	テレビ山梨「ウツティ発！山梨も韓国が熱いセヨ！」収録
	2012年	9月	「浅川巧と兄伯教—日本と韓国のマウメダリ(心の架け橋)」高麗美術館館報第93号 (2011年8月研究講座抄録)
	2013年	1月	富士ゼロックス小林節太郎記念基金助成対象者OB・OG寄稿 「共に生きる—浅川伯教・巧兄弟に見る日韓両国の歩み、そして私の歩み」
	2013年	10月	2013年県民コミュニティーカレッジ講座 大学コンソーシアムやまなし「〈ことば〉の力を見つめなおす」
	2014年	4月	やまなし留学生スピーチコンテスト実行委員会委員(現在に至る)
	2015年	2月	「大学教員とのガールズトーク」山梨大学男女共同参画推進室(於、山梨県立図書館)
	2016年	3月	随筆「日本と韓国の柳・浅川兄弟研究—現在までの動き—」『民藝』第759号、pp.23-27

## 成果と目標

専門的成果	<p>①これまでの異文化理解・グローバル化に関する問題点としては、①「歴史」認識と国民レベルの文化交流の具体的な提案がないこと、②学術的な位置づけが行われていないことが挙げられる。私の研究は浅川兄弟と柳宗悦が示した異文化理解の方法に含まれている科学・哲学・宗教・芸術的要素について、未発掘の資料を掘り起こして、理論的・学術的な検証を行った。この検証は、これまでの日韓関係のみならず、グローバル化における異文化理解・文化交流論に関する問題点の改善方法と将来への提案を含んでいることにおいても重要な意義がある。</p> <p>②私が実施してきた日韓両国におけるフィールドワークはこれまでの歴史研究の文献研究にみられる限界を克服する有意義かつ効果的な手法である。このような特色を有する私の研究は様々な認識の相違点を内包している日韓近代史研究の中にあつて、際立って日韓文化交流の「特殊性」「相互関係性」「積極性と実践性」を明示し、さらに単に日韓関係に限らず、人間と歴史の「連続性」「普遍性」にも視角を拡大させる可能性を持っている。</p> <p>③私の研究成果として提示できた浅川兄弟にみる新時代の「異文化理解モデル」は、日韓歴史教育における新たな視点を提供できるとともに両国の若い世代の交流に具体的なモデルを示すことができる。そして、本学が求めている「国際的な視点でものを考え」、「自らの立脚点をしっかりと見据えて地域社会と密接に連携しつつ」、「世界の平和と安定のために活躍する」人材の育成のための教育指導にも活かしていけることと確信している。</p>
専門的目標	<p>①これまで一貫して研究してきた浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の韓国＝異文化理解の方法は、今後の研究計画においても「多文化共生」・「異文化理解」にとって実践的に生成・発展させていく可能性を持っている。また、今後の研究から予想される成果は、「浅川モデル」を東アジアから世界へ提唱できる「グローバルな文化交流モデル」として構築することである。これらは歴史研究及び人物研究、日韓の伝統文化研究分野における新たな視点を提供することができる。さらに、日韓近代史研究分野の活発な議論を促し、学会発表やシンポジウム、講演会、公開講座などにおける研究成果発信を積極的に行う。なお、科学研究費等の競争的資金・外部研究費の獲得のために、研究内容の独自性を図り、質の向上に努めていく。</p> <p>②文化・歴史に関する教育においては、これまでの教育の中で得られた成果をもとに国際的な人材育成・教育指導を目指し、歴史的な背景から現在に至るまでの文化交流の現状を認識し、複眼的・相対的探究ができるように指導していく。各科目に対応できる効率的な教材制作に取り組んでいく。</p> <p>③韓国語に関する教育においては、「読む・書く・聞く・話す」の基本学習のほか、会話と講読の演習を行い、韓国語文献の講読から手紙や作文作成などの表現力・応用力・コミュニケーション力を身につけて、グローバルな人材として育成することを目指す。さらに、協定校への短期研修・交換留学にもつながるようにレベルアップのための教授法を工夫し、教材制作にも力をいれていく。</p>

最新データ入力日

2016年 5月 1日

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
サヤナギ ノブオ 佐柳 信男	男	1970年	准教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(教育学)	専門分野	発達心理学・教育心理学・社会心理学	
学 歴	1989年	3月 埼玉県立松山高等学校 卒業		
	1989年	4月 国際基督教大学教養学部理学科 入学		
	1991年	4月 国際基督教大学教養学部教育学科へ転科		
	1993年	3月 国際基督教大学教養学部教育学科 卒業		
	1993年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士前期課程 入学		
	1995年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士前期課程 修了		
	2000年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程 入学		
	2007年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程 修了		
実 務 経 験	2002年	4月 NTT東日本関東病院附属高等看護学院 非常勤講師(至 2007年3月)		
	2006年	4月 国際基督教大学 COEリサーチ・アシスタント(至 2007年3月)		
	2007年	4月 国際基督教大学 COEリサーチ・フェロー(至 2009年3月)		
	2007年	4月 国際基督教大学教育研究所 研究員(現在に至る)		
	2007年	9月 実践女子大学教職課程 非常勤講師(至 2012年3月)		
	2008年	4月 明星大学人文学部 非常勤講師(至 2012年3月)		
	2008年	4月 明星大学通信教育部 非常勤講師(至 2012年3月)		
	2008年	4月 国際基督教大学社会科学研究所 研究所助手(至 2012年3月)		
	2009年	4月 山梨英和大学人間文化学部 非常勤講師(至 2012年3月)		
	2012年	4月 山梨英和大学人間文化学部 准教授(現在に至る)		
	2012年	4月 山梨英和大学大学院人間文化研究科 准教授(兼任)(現在に至る)		
	受 賞 歴	年	月	特になし
年		月		
所 属 学 会	2001年	1月 アメリカ心理学会 Student Affiliate -2008, International Affiliate 2009-		
	2002年	4月 日本教育心理学会 会員(現在に至る)		
	2003年	4月 日本心理学会 会員(現在に至る)		
	2004年	4月 日本発達心理学会 会員(現在に至る)		
		同 ニュースレター委員会 委員(2008年1月~2009年12月)		
		同 ニュースレター委員会 副委員長(2009年1月~2009年12月)		
		同 国際研究交流委員会 委員(2011年1月~2012年12月)		
		同 ソーシャル・モチベーション研究分科会 理事(2011年4月~現在に至る)		
	2007年	4月 日本応用心理学会会員(現在に至る)		
	2009年	4月 日本子育て学会(現在に至る)		
		同 広報委員会 委員(2010年4月~現在に至る)		
	2011年	4月 日本社会心理学会(現在に至る)		
	2013年	4月 日本パーソナリティ心理学会(現在に至る)		
		同 第23回大会実行委員会 委員(2013年11月~2014年10月)		
	2014年	2月 国際開発学会(現在に至る)		
2015年	1月 Human Development and Capability Association(現在に至る)			

特免資格等・・	年 月 年 月 特になし 年 月
e-mail	非公表

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法  
教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

担当授業方法や実践に関する発表、講演等

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

競争的その他の研究活動

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>学生の自律性を育てることを目指して指導に取り組んでいる。「自律性」とは、自分にとって意義のある目標・目的を設定し、それを達成するために必要な手段を検討して実行することだと考える。日頃の教育でいえば、授業内容は学生に手段を伝達することに該当し、学生の理解度を確認しながら理解のしやすさと挑戦のバランスを図っている。目標・目的の設定についても、学生のニーズを確認しながら、教育内容としても十分のものになるよう心がけている。また、大学においては課外活動も自律性の育成に重要な役割を果たすと考えており、部活動やサークル活動の顧問を引き受け、活動を通して学生が有意義な教育的体験を得られるよう支援しているつもりである。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例  「異文化交流の心理学」の受講生は毎年100名を越えるが、このような大人数の講義において受講生との双方向性を確保するために、独自のコメントシートを作成して使用している。受講生のコメントを熟読し、次回の授業で理解不足の点を補足し、理解の広がりにつながるような質問や疑問にも答えることで学生の興味・関心を把握し、さらにそれに基づいて授業計画へ適宜修正を加えている。この他、インターネット上で公開されている授業内容と関連するビデオを適宜紹介することで授業内容への興味を喚起するとともに理解を補足し、興味を持った学生がさらに深く学べるよう授業内容と関連する書籍も多く紹介している。受講生による授業評価も高く、出席率が最後まで9割前後を維持することから、狙いはある程度成功していると思われる。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等  多くの授業において市販されている教科書も利用しているが、独自の補助教材も作成している。講義においてはパワーポイントを利用し、文字情報だけでなく、オーディオ、画像、ビデオなどのマルチメディアを活用している。また、その日のレジュメには授業内容の他に、授業内容と関連した発展学習のための書籍やホームページを紹介し、受講生が理解度を確保するために利用できる練習問題も掲載している。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等  佐柳信男. (2015). 発達心理学の実践に資する学びを促進する授業および成績評価のあり方. 日本発達心理学会第26回大会ラウンドテーブル「発達心理学の「理論」と「実践」を結ぶ: 教育実践において「教え」と「学び」をいかにつなぐか?」話題提供.</p>
担当授業科目	<p>2016年度:  【学部】基礎ゼミナールⅡ, サービス・ラーニングⅠ, 心理学研究法Ⅰ・Ⅱ, 心理学実験Ⅰ・Ⅱ, 乳幼児心理学, 異文化交流の心理学, 専門ゼミナール, 卒業研究  【大学院】修士論文, 心理学研究法特論, 社会心理学特論</p>
代表的シラバス	<p>異文化交流の心理学  【概要】“異文化”と聞いたとき、多くの人は“外国”を思い浮かべることでしょ。しかし、“異文化”の本質はどういうことでしょうか。たしかに、生まれ育った国が違う者どうしは、感じ方や価値観が異なる“異文化”のことが多いでしょう。しかし、近所で育った者どうしでも感じ方や価値観が違う場合もあります。これも“異文化”と呼べるでしょう。逆に異国人どうしでも同じ文化を共有していることがあります。そう考えると“文化”は、必ずしも国や地域に縛られるものではなく、どんな集団でも持っているものだと理解した方が自然です。いずれにしても、“文化”の異なる者どうしは交流する際に誤解が生じやすく、そのために様々なトラブルが起きることもあります。講師は日本と海外で育ったバイリンガルかつバイカルチュラルで、プロの翻訳や通訳の経験も長く、個人的な経験も交えて講義する予定です。</p> <p>【到達目標】この授業では、次の4点を到達目標とします。①心理学において“文化”が意味することが何かを理解し、授業の外でも人に説明できるようになる。②特に、“文化差”と呼ばれるものの本質について考えられるようになり、人の様々な振る舞いのどこまでが“文化”によるもので、どこからがそれ以外の要因によるものなのか、冷静に説明できるようになる。③差別、偏見、カルチャーショックなど、異文化の接点で生じる問題に関する心理学的な考え方を理解し、これらの問題に自分としてどのように行動できるかを討論できるようになる。④これらの知識を踏まえ、“よりよい異文化交流”のための条件についての自らの考えを形成し、行動に移せるようになる。心理学では、異文化交流の諸問題について研究が必ずしも十分に進んでいるとは言えません。異なる文化の者どうしが相互理解に基づいて交流するために必要な条件について一緒に考えましょう。</p> <p>【授業計画】(概略)  “人間らしさ”および“文化”を形成する要因とは? : 環境と遺伝  心理学における“文化”の考え方  人間の発達における普遍性と文化差  道徳性発達の異文化交流へのヒント  ステレオタイプと偏見</p>

代表的シラバス	<p>偏見を生じさせ、維持する要因</p> <p>差別: 差別意識, ヘイトクライム, 潜在的差別</p> <p>偏見・差別を受ける側の心理</p> <p>カルチャーショックと適応</p> <p>より良い異文化交流のために</p>
教育改善活動	<p>毎回の授業において独自に作成したコメントシートを配布している。質問では、①当日の授業内容の確認、②当日の授業内容についてわかりにくかった箇所、および③授業内容と関連して現在興味を持っているトピックを尋ねている。</p> <p>①と②については、授業内容の教授方法が適切だったかどうかを確認する役割を果たす。伝わり方が不十分だった場合や受講生の誤解が多い場合は、次回の授業において補足をするとともに、次年度以降の授業内容にも修正を加える。</p> <p>③については、受講生の興味・関心を確認する役割を果たす。受講生から見てより関心の持てるトピックやエピソードの発掘や、より受講生が興味を持てる伝え方の考案に役立っている。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>授業評価アンケートでは、どの授業のほぼすべての評価項目において高い評価を得てきた。自由記述の内容も概ね好評である。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>これまで同僚教員による評価を受けたことはなく、今後の課題である。</p>

## 研究業績

研究の特徴	<p>自律的な動機づけを促進する要因について研究している。これまでは特に小中学校および学習塾における目標構造が学習動機づけに与える影響を中心に取り組んできた。現在は、引き続き学習塾の学習動機づけへの影響についての共同研究に参加しているほか、学業に対する自律的動機づけの観点から留学生の適応についての個人研究や、発展途上国での開発援助事業における被援助者の行動変容についての研究に取り組んでいる。</p>
研究経歴	<p>2004年 研究課題『こころの平和と安全に寄与するコンピテンスと自律性支援の役割』で2004年度国際基督教大学COE大学院生研究奨励金を受領(50千円)</p> <p>2005年 研究課題『こころの平和と安全に寄与するコンピテンスと自律性支援の役割』で2005年度国際基督教大学COE大学院生研究奨励金を受領(300千円)</p> <p>2006年 国際基督教大学COEリサーチ・アシスタント 小学生の学習における自律的動機づけを促進する要因としてのコンピテンスと自律性支援に関する研究に従事(至 2007年)</p> <p>2007年 国際基督教大学COEリサーチ・フェロー 小・中学生の学習塾通いが学習動機づけにおよぼす影響に関する研究に従事(至 2009年)</p> <p>2007年 国際基督教大学教育研究所研究員 大学生の自律的な学習動機づけを促進する要因に関する研究に従事(現在に至る)</p> <p>2008年 研究課題『塾へ通うことの個人的・社会的効用』で2008年度日本教育大学院大学特定研究費助成金を共同で受領(黒石憲洋・佐柳信男・高橋誠: 150千円)</p> <p>2009年 研究課題『学校教師および塾講師の比較研究: サービス受給者と経営者の視点を通して』で2009年度日本教育大学院大学特定研究費助成金を共同で受領(黒石憲洋・佐柳信男・高橋誠: 150千円)</p> <p>2012年 山梨英和大学人間文化学部准教授 学習塾の学習動機づけへの影響に関する研究, 大学生の自律的な学習動機づけを促進する要因に関する研究, 留学生の異文化適応に関する研究についての研究に従事(現在に至る)</p> <p>2013年 国際協力機構JICA研究所「主体性醸成のプロセスと要因にかかる学際的研究: 中南米における事例を中心に」において研究分担者(現在に至る)</p> <p>2013年 厚生労働省平成25年度セーフティネット支援対策等事業費補助金社会福祉推進事業「コミュニティー・カルテ・システムを利用した生活困窮者の実態把握と政策効果測定」(㈱オープン・シティ・研究所受託事業)政策効果測定事業担当者(至2014年3月)</p> <p>2015年 国際協力機構(JICA)農村開発部「自己決定理論に基づく市場志向型農業振興アプローチにおける心理面・行動面の変容分析～ケニア国地方分権下における小規模園芸農民組織強化プロジェクト(SHEP+)を通して～」主研究者(現在に至る)</p>

## (1) 著書(いずれも分担執筆)

- a. 佐柳信男(著・監修), 首藤久美子・相川次郎・浅岡真紀子(著). (2016). 人が動き, 育つ農業・農村開発プロジェクト: 心理学・自己決定理論を参考にした効果的な能力開発のための事例集. 独立行政法人国際協力機構農村開発部.
- b. 佐柳信男. (2016 予定). 第3章 Whiteの視点: コンピテンスとエフェクタンズ動機づけ. 宮本美沙子・山内弘継(監), 寺澤美彦・田中あゆみ・黒石憲洋(編)『ヒューマン・モチベーション(理論編)』. 京都: ナカニシヤ出版. (印刷中)
- c. 佐柳信男. (2008). 第2章 エフェクタンズと自律性. 小谷英文(編)『ニューサイコセラピーグローバル社会における安全空間の創成(ICU COEシリーズ第3巻)』. 東京: 風行社, 29-46.

## (2) 学術論文(単著もしくは第一著者であるもののみ)

- a. 佐柳信男. (2016a). 山梨県内における養育者の子育てに関する悩みと要望: テレビ番組視聴者アンケートの自由記述から. 山梨英和大学紀要, 14, 43-53.
- b. 佐柳信男. (2016b). そろそろ学習塾に通わせるべきなの?: 学習動機づけの調査研究から考える. 児童心理, 70, 111-115.
- c. Sayanagi, N. R., & Aikawa, J. (2016). The motivation of participants in successful development aid projects: A self-determination theory analysis of reasons for participating. JICA Research Institute Working Paper, 121. (<http://jica-ri.jica.go.jp/publication/assets/JICA->
- d. 佐柳信男. (2015). 農業普及における自律的動機づけの役割: 効果的な技術移転のために. 農業普及研究20, 29-34, 58-64.
- e. 佐柳信男・市川健. (2012). 学習動機づけと学習行動との関係を調整する要因としてのマインドフルネス. ソーシャル・モチベーション研究6, 28-39.
- f. 佐柳信男. (2009). 学習塾通いが小学生の勉強に対する動機づけにおよぼす影響. 国際基督教大学学報 I-A教育研究51, 55-63.
- g. 佐柳信男. (2007a). 日本の小学生の勉強における認知された因果性の所在を測定する質問紙尺度の作成. ソーシャル・モチベーション研究4, 63-82.
- h. 佐柳信男. (2007b). 自律性を促進・調整するコンピテンスの役割: 小学生の勉強行動と動機づけに着目した実証的検討. 国際基督教大学教育学研究科提出博士論文.
- i. 佐柳信男・小谷英文・川村良枝. (2005). 児童の日常課題に対する認知された因果律の所在及び児童-教師関係. 国際基督教大学学報 I-A教育研究47, 67-86.

## (3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)

## 【国際会議発表】

Fujikake, Y. & Sayanagi, N. R. (2016). A model of subjective empowerment evaluation and its extension by psychological analysis. Paper presented at 2016 Human Development & Capability Association at Hitotsubashi University.

Sayanagi, N. R. (2015). Breaking the poverty trap: Facilitating autonomous motivation for sustainable behavioral change in developmental aid beneficiaries. Paper presented at 2015 Human Development & Capability Association at Georgetown University.

Sayanagi, N. R., Aikawa, J., & Asaoka, M. (2016). The relationship between motivation and outcomes in developmental aid projects: Implications from an SDT-based approach in Kenya. Paper presented at 6th International Conference on Self-Determination Theory at Victoria Convention Centre, Victoria, BC, Canada.

## 【報告書】

- a. 佐柳信男. (2014). 失業者が求職する動機づけ: 求職をする理由と抑制する理由からの検討. 平成25年度セーフティネット支援対策等事業費補助金社会福祉推進事業「コミュニティー・カルテ・システムを利用した生活困窮者の実態把握と政策効果測定」(株式会社オープン・シティ研究所), pp. 25-33.
- b. 佐柳信男. (2008). 小学生の勉強における自律性を高める教師の働きかけ(第30回ICU教育セミナー研究報告). ICU教育セミナー30周年記念誌, 107-110.

## 【学術誌編集】

- a. 『社会科学ジャーナルCOE特別号』(国際基督教大学社会科学研究所発行) 編集助手: 2006年4月~2008年3月
- b. 『国際基督教大学21世紀COEプログラム 最終報告書』編集助手: 2007年4月~2008年3月
- c. 『ソーシャル・モチベーション研究』(日本発達心理学会 Social Motivation 研究分科会発行) 編集委員(2008年4月~現在に至る), 編集委員長(2012年4月~現在に至る)

## 【学術的な通訳】

- a. Creativity Conference 2: 音楽教育におけるCreativityの未来を考える. (2015年6月, 日本女子大学目白キャンパス). アイ・ガール・タン(Ai Girl Tan) National Institute of Education, Singapore教授の基調講演およびシンポジウムの通訳.

<p>研究実績</p>	<p>b. 日本心理学会第78回大会招待講演. (2014年9月, 同志社大学今出川キャンパス). リチャード・M・ライアン(Richard M. Ryan)オーストラリア・カトリック大学「Autonomy and Control in Human Behavior: Research on Motivation and Wellness from Self-Determination Theory」の通訳.</p> <p>c. 発達心理学会国際ワークショップ. (2013年8月, 東京学芸大学). ジル・ドヴィリエ(Jill de Villiers)スミス大学教授, ピーター・ドヴィリエ(Peter de Villiers)スミス大学教授「言語と心の理論のインターフェイス」の通訳.</p> <p>d. 早稲田大学公開講演. (2008年10月, 早稲田大学). アンドリュー・エリオット(Andrew Elliot)ロチェスター大学教授講演「Achievement Goals: Competence and Valence(達成目標: 有能感と誘発性)」の通訳.</p> <p>e. 日本臨床心理士会主催「心理専門職の国資格に関するシンポジウム」. (2006年10月, 東京大学). ①国外招待講演者の講演の通訳, ②日本人講演者の講演内容を招待講演者のために英訳, ③シンポジウムの成果を評価する「評価会議」における討議の通訳, ④通訳チームの指揮・指導.</p> <p>f. 第17回日本集団精神療学会. (2000年3月, 安田生命アカデミア). 特別ワークショップ「システム・センタード・グループセラピー」, エリック・シュナイダー(Eric Schneider)によるスーパービジョンの通訳を担当.</p> <p>g. International Association of Group Psychotherapy 4th Pacific Rim Regional Conference. (1999年9月, 安田生命アカデミア). 国際集団精神療学会サバー・ラストムジー(Sabar Rustomjee)会長の招待講演およびワークショップの通訳を担当.</p> <p>【翻訳書】</p> <p>a. White, R. W. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. <i>Psychological Review</i>, 66, 297- 333. (ホワイト, R. W. 佐柳信男(訳). (2015). モチベーション再考: コンピテンス概念の提唱. 東京: 新曜社.)</p> <p>b. Pepperberg, I. M. (2008). <i>Alex and Me: How a Scientist and a Parrot Uncovered a Hidden World of Animal Intelligence - and Formed a Deep Bond in the Process</i>. New York: Harper Collins. (ペーパーバーグ, I. M. 佐柳信男(訳). (2010). アレックスと私. 幻冬舎.)</p> <p>c. Atalay, B. (2004). <i>Math and the Mona Lisa: The Art and Science of Leonardo da Vinci</i>. Washington D. C.; Smithsonian Books. (アータレイB. 高木隆二・佐柳信男(訳). (2006). モナ・リザと数学—ダヴィンチの芸術と科学. 京都: 化学同人.)</p>
<p>競争的資金採択課題</p>	<p>特になし</p>
<p>学会等発表・役員参加</p>	<p>【学会発表】(最近3年間の単独発表もしくは第一発表者の業績のみ)</p> <p>2016年 6月 Sayanagi, N. R., Aikawa, J., &amp; Asaoka, M. The relationship between motivation and outcomes in developmental aid projects: Implications from an SDT-based approach in Kenya. Paper presented at 6th International Conference on Self-Determination Theory at Victoria Convention Centre, Victoria, BC, Canada.</p> <p>2015年 9月 Sayanagi, N. R. Breaking the poverty trap: Facilitating autonomous motivation for sustainable behavioral change in developmental aid beneficiaries. Paper presented at 2015 Human Development &amp; Capability Association at Georgetown University.</p> <p>2015年 3月 佐柳信男. 発達心理学の実践に資する学びを促進する授業および成績評価のあり方. 日本発達心理学会第26回大会ラウンドテーブル「発達心理学の「理論」と「実践」を結ぶ: 教育実践において「教え」と「学び」をいかにつなぐか?」話題提供.</p> <p>2015年 3月 佐柳信男. 国際開発援助における動機づけ理論の実践的応用からの検討. 日本発達心理学会第26回大会自主シンポジウム「動機づけ研究の悪用を防ぐには: 所与性と価値の観点から」企画・話題提供.</p> <p>2015年 3月 佐柳信男. 農業普及における自律的動機づけの役割: 効果的な技術移転のために. 日本農業普及学会平成26年度春季大会シンポジウム「新時代の普及方法を切り拓く: 農業・農村イノベーションへ向けたAKISをめぐる」報告.</p> <p>2014年 11月 佐柳信男・宮崎汐莉・中山辰則・世古須美日・清水明子. 若年不就労者の就労意欲を抑制する要因: 自由記述データからの予備的検討. 日本教育心理学会第56回大会ポスター発表.</p> <p>2014年 9月 佐柳信男. 若年成人不就労者の求職動機づけ: 自己決定理論に基づいた予備的検討. 日本心理学会第78回大会ポスター発表.</p>

学会等 参加発表・ 役員	2014年	6月 佐柳信男・相川次郎. 開発援助プログラムにおける普及員と参加者の動機:ケニアと日本の成功事例の心理学的検討. 国際開発学会第15回春季大会セッション「自ら動くための条件:開発・援助における主体性の涵養」発表.
	2014年	3月 佐柳信男・相川次郎. 開発援助プログラムに参加する動機づけ:普及員および受給者の参加理由の自己決定理論的観点からの分析. 日本発達心理学会第25回大会ポスター発表.
	2014年	3月 佐柳信男. 学校で子どもの動機づけはどのように扱われているのか. 日本発達心理学会第25回大会ラウンドテーブル企画責任者・司会.
共同研究・ 受託研究の 実績	2005年	4月 「行為の記述・推測・判断における文化的要因:国際比較と国内変動の総合的研究」平成17～18年度文部科学省科学研究補助金(基盤B, 研究代表者:東洋)における研究協力者(至2007年3月)
	2013年	4月 国際協力機構JICA研究所「主体性醸成のプロセスと要因にかかる学際的研究:中南米における事例を中心に」における研究分担者(現在に至る)
	2013年	厚生労働省平成25年度セーフティネット支援対策等事業費補助金社会福祉推進事業「コミュニティー・カルテ・システムを利用した生活困窮者の実態把握と政策効果測定」(株オープン・シティ・研究所受託事業)政策効果測定事業担当者(至2014年3月)
	2015年	国際協力機構(JICA)農村開発部「自己決定理論に基づく市場志向型農業振興アプローチにおける心理面・行動面の変容分析～ケニア国地方分権下における小規模園芸農民組織強化プロジェクト(SHEP+)を通して～」主研究者(現在に至る)
大学院生 指導	山梨英和大学大学院人間文化研究家臨床心理学専攻 修士論文担当教員(2012年度～現在に至る) 提出指導論文題目 『心配の個人差と精神的健康の関係:心配の内容と時間の検討を通して』 『小学生における教員とスクールカウンセラーが持つ連携に対する期待とその実態』 『大学生の友人関係における過剰適応:精神的健康および本来感との関係に着目して』 『老年期コミュニケーション:リタイア後の対人関係の進展・維持・後退のプロセス』 『身体醜形懸念と母親の養育態度の関連:自己愛に注目して』 『高校生のインターネット依存傾向と適応感との関連』	
研究能力 に対する 評価	これまでの小中学生における学習動機づけの研究では,信頼性の高い質問紙尺度を開発し,それを用いて自律的動機づけの促進要因を明らかにする研究で一定の成果を上げたと考えている。また,その成果を応用して実施してきた大学生を対象とした学習動機づけの研究でも一定の成果が上がっている。一方,これらの成果はまだ主要な学会誌に採択されておらず,外部の競争的研究費にも応募はしているものの未採択であることから,今後はこれらの成果がより広く評価を受けるためにより質の高いデータを得ることが課題である。 国際協力機構JICA研究所の研究プロジェクトへや厚生労働省の政策効果測定研究への参加は,研究が一定の評価を得たためだと考えている。これらの新たなフィールドで実績をあげていくことが今後の課題である。	

## サービス活動業績

学内委員会・ 等活動実績	2012年	4月 山梨英和大学人間文化学部 心理社会コースコーディネーター (現在に至る)
	2013年	3月 山梨英和大学セキュリティ・ポリシー ワーキング・グループ(現在に至る)
	2014年	4月 山梨英和大学宗教委員会委員(現在に至る)
	2014年	4月 山梨英和大学FD・SD推進委員会委員(現在に至る)
	2014年	4月 山梨英和大学大学院FD・SD推進委員会委員長(至2015年3月)
	2016年	6月 山梨英和大学FD・SD推進委員会委員(現在に至る)
アドバイザー活動実績	これまでに指導した卒業論文の題目:『血液型ステレオタイプにおける外集団均質化効果について』『青年期におけるSNS利用状況とアイデンティティの関連性:全般的な傾向と性差と文化差の検討』『講義時にSNS及びゲームを使用する動機』『高校時代のクラスおよび部活の目標構造が大学生の動機づけに与える影響』 2016年度は基礎ゼミナールⅡ再履修クラスで15名,専門ゼミナールで3年生を4名,卒業研究で4年生6名を指導している。	
後進育成活動実績	日本発達心理学会ソーシャル・モチベーション研究分科会理事として,若手研究者の発表・育成の場として月例の研究会および運営委員会に参加(2012年4月～現在に至る)	

社会 貢 献 活 動	(1)講演会	
	2013年	6月 山梨県私立中学高等学校PTA連合会 平成25年度PTA研修会において講演『自発的なモチベーションを引き出すには』
	2014年	8月～ JICA「Market-Oriented Agriculture Promotion for Officers in Africa」コー 年5-6回 ス講師『Facilitating Intrinsic and Autonomous Motivation in Program Participation: The Theoretical Bases and Practical Applications of SHEP's Psychological Approach.』
	2014年	12月 JICA能力強化研修「市場志向型農業(SHEP)推進フォローアップ」コース講 師 『SHEPにおける心理学的側面:自律的動機づけ促進のしかけ』
	2015年	12月 JICA能力強化研修「市場志向型農業(SHEP)推進フォローアップ」コース講 師 『SHEPにおける心理学的側面:自律的動機づけ促進のしかけ』
	2015年	5月 山梨県芸術文化協会 平成26年度会員研修会において講演 『芸術活動の教育と伝承におけるモチベーションの役割』
	2015年	6月～ 山梨英和プレストンこども園／笛吹市子育て支援センターえいわ子育て講 年3回 演会
	2016年	7月 全国稲作経営者会議 第32回若い稲作経営者研究会夏期研修会講師 『農業従事とモチベーション:自己決定理論の考え方』
	(2)出前講座	
	2012年	6月 山梨英和高等学校 大学模擬授業『道德ってどういうこと? -心理学の考え 方-』
	2013年	10月 山梨県立甲府東校等学校ミニ大学模擬授業『どうすれば“やる気”が出る の?』
	2015年	10月 長野県赤穂高等学校 模擬授業『どうすれば“やる気”が出るの?』
	2016年	10月 長野県赤穂高等学校 模擬授業『道德心の発達心理学』
	(3)公開講座	
	2013年	5-7月 山梨英和大学メイプルカレッジ『心理学入門講座』
	2014年	5-7月 山梨英和大学メイプルカレッジ『心理学入門講座』
	2014年	6-7月 山梨英和大学メイプルカレッジ『はじめての心理学』
	2015年	5-6月 山梨英和大学メイプルカレッジ『はじめての心理学』
	(4)学外審議会・委員会等	
	年	月
	(5)その他	
	2007年	4月 ICU教育セミナー世話人会 世話人(現在に至る)
	2010年	4月 国際基督教大学同窓会 評議員(現在に至る)
2010年	8月 国際基督教大学第二男子寮OB会 会長(現在に至る)	
2013年	7月 YBSテレビ『子育て日記』コメンテーター(現在に至る)	

## 成果と目標

専門的 成果	<p>① 従来、学業においては自律性支援的な働きかけが一律に自律的動機づけを促進するとされてきたが、コンピテンス(習熟度)の低い者には自律性支援は効果が薄く、むしろコンピテンスを高める支援することが必要であることを示唆する実証的資料を得た。</p> <p>② 学習塾の動機づけへの影響についてはこれまでに実証的な研究は行われていなかったが、学習塾通いが動機づけに大きな影響を与えておらず、むしろ家庭の影響が大きいとの実証的資料を得た。</p> <p>③ 小学生における内発的動機づけの発達過程についての実証的資料を得た。</p>
-----------	--

<p>専門的目標</p>	<p>① 教育およびその他の文脈における自律的動機づけの促進要因をさらに明らかにすること。特に、コンピテンス(習熟度)の低い対象における自律的動機づけの促進要因の究明が大きな課題である。</p> <p>② 自律的動機づけの促進に関連する心的メカニズムの究明。</p> <p>③ 実践的な志向を持つ研究者の育成。</p> <p>④ 開発援助事業に資する動機づけ仮説の提出および検証。</p>
--------------	--

<p>最新データ入力日</p>	<p>2016年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
モリ 森 稚葉	女	1972年	准教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	修士(人文科学)	専門分野	発達臨床心理学	
学歴	1990年	3月	東京都立西高等学校 卒業	
	1990年	4月	慶應義塾大学 法学部法律学科 入学	
	1994年	3月	慶應義塾大学 法学部法律学科 卒業 学士(法学)	
	1999年	4月	お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科発達臨床学講座 3年次編入学	
	2001年	3月	お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科発達臨床学講座 卒業 学士(生活科学)	
	2001年	4月	お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科発達社会科学専攻 博士前期課程入学	
	2003年	3月	お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科発達社会科学専攻 博士前期課程修了 修士(人文科学)	
	2003年	4月	お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科人間発達科学専攻 博士後期課程入学	
2007年	3月	お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科人間発達科学専攻 博士後期課程単位取得退学		
実務経歴	1994年	4月	キリンビール(株)九州支社 福岡営業部(1997年10月まで)	
	2002年	10月	お茶の水女子大学大学院 ティーチング・アシスタント(心理臨床実習)(2003年2月まで)	
	2003年	4月	社会福祉法人相友会 浅川保育園 相談員 (2010年3月まで)	
	2004年	4月	お茶の水女子大学学生相談室 カウンセラー(2006年3月まで)	
	2004年	4月	和泉短期大学児童福祉学部 非常勤講師 (保育臨床) (2006年3月まで)	
	2004年	4月	お茶の水女子大学大学院 COE研究員(平成16・17年度)(2006年2月まで)	
	2005年	5月	お茶の水女子大学大学院 ティーチング・アシスタント(心理臨床実習)(2006年2月まで)	
	2006年	4月	社会福祉法人相友会 長房西保育園 相談員 (2010年3月まで)	
	2006年	4月	山梨英和大学 人間文化学部 非常勤講師 (発達心理学)(2007年3月まで)	
	2006年	4月	武蔵大学 非常勤講師 (青年心理学Ⅰ・青年心理学Ⅱ)(2007年3月まで)	
	2006年	10月	青山学院短期大学 児童教育学科専攻科 非常勤講師 (児童臨床心理学)(2007年3月まで)	
	2007年	4月	山梨英和大学 人間文化学部 専任講師 (2014年3月まで)	
			山梨英和大学大学院 臨床心理学専攻 専任講師(兼任) (2014年3月まで)	
			山梨英和大学 心理臨床センター 相談スタッフ(兼任) (現在に至る)	
	2007年	4月	山梨県適応指導教室(石和こすもす教室)カウンセラー(2010年3月まで)	
	2007年	4月	山梨県特別支援教育体制推進事業 中・西部地域LD等専門家チーム委員 (2010年度より、山梨県特別支援教育専門家チーム委員に改名)(2014年3月まで)	
	2007年	4月	発達障害早期総合支援モデル事業に関わる発達障害の早期発見に関する健診方法研究委員(平成19/20年度)	
	2008年	4月	発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業 LD等巡回相談員(2013年3月まで)	
	2009年	9月	山梨県適応指導教室(韮崎こすもす教室)カウンセラー(2010年3月まで)	
	2010年	4月	私立かほる保育園(山梨県甲府市) カウンセラー(現在に至る)	
	2011年	4月	山梨県立大学 非常勤講師(コミュニケーション基礎)(2013年3月まで)	
	2012年	12月	笛吹市適正就学指導委員会委員(現在に至る)	
	2013年	4月	こころのひかりメンタルクリニック カウンセラー(現在に至る)	
2014年	4月	山梨英和大学 人間文化学部 准教授 (現在に至る)		
		山梨英和大学大学院 臨床心理学専攻 准教授(兼任) (現在に至る)		
2015年	4月	山梨英和プレストンこども園・笛吹市子育て支援センター相談員(現在に至る)		

経 実 験 務	2015年	6月	甲府市総合計画審議会委員(2016年3月まで)
	2015年	8月	山梨県社会福祉審議会児童福祉専門分科会委員(現在に至る)
受 賞 歴	年	月	
	年	月	特になし
	年	月	
所 属 学 会	2001年	月	日本心理臨床学会会員
	2003年	月	日本発達心理学会
	2004年	月	日本臨床心理士会会員
	2004年	月	日本心理学会会員
	2006年	月	日本教育心理学会会員
	2006年	月	日本コミュニティ心理学会会員
	2011年	月	包括システムによる日本ロールシャッハ学会
	2011年	月	日本保育学会
2013年	月	日本精神分析学会 等	
特 免 資 許 許 格 等 . .	2004年	4月	臨床心理士(登録番号 12374)
	年	月	
	年	月	
e-mail	非公表		

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>基礎教育においては、「知る」こと「学ぶ」ことの楽しさ(と自らの無知を知ることの痛み)を伝えたいと考えている。自分なりの疑問・課題意識を持ち、その疑問を解決するために調査を行うワークを行い、そのプロセスを支えるような機会と時間を作っている。また、自身の「考え」を効果的に他者に伝えるワークとフィードバックを重ねて行い、表現し、伝達する力を育むことを目指している。</p> <p>専門教育においては、学生が心理学を学ぶことを通して、自己理解を深めるとともに、自らの体験を離れてより広く人間について「考えつづける」姿勢を培うことを目指している。講義・演習ともに、学生からのリアクションにできる限り応え、共に考えることを通して、主体的に考える姿勢を育み、人間の多様性に心が開かれるように心がけている。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>①心理臨床実践にかかわる演習科目における工夫 心理臨床実践は、知識を習得するだけでなく、自らの体験を通して習得することが求められる。演習では、心理検査のロールプレイ、グループワーク、実習を通して、個々人が心理検査について、体験的に理解できるよう、工夫をした。具体的には、①共通した観点から体験を振り返ることができるようワークシートの構成を工夫し、②事例についてのディスカッションを充実させることを通して、人間の多様性を実感できるよう、演習を組み立てている。</p> <p>②講義科目における教育方法の工夫 目標への到達度を確認するために、毎回のリアクションペーパー、複数回の小テストを行っている。履修人数が100名を超える場合にも、双方向的な講義が展開するようにリアクションペーパーを用いて、質疑に答えるなどの工夫を行っている。</p> <p>③地域活動を通じた学びの機会を提供 保育園・幼稚園へのボランティア派遣とその事前事後指導、地域のフィールドワークを通じた卒業研究指導を行っている。2015年度現在は4名の保育ボランティア派遣(学部2名、大学院2名)、2名のフィールドワークによる卒業研究を指導している。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 心理臨床の初学者を大学院でどのように教育・訓練することが有効であるのか、学生にとっての実践教育の体験について共同研究し、学会で継続的に発表した。[森稚葉・黒田浩司・小野綾子・田中健夫・馬場禮子(2010) 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(2)いわゆる「中断・早期終了」ケースの要因に関する分析研究 第27回日本心理臨床学会大会(東北大学)他] 2014年度より、親面接者としての機能が大学院生の学びにどのような影響を与えるか、共同研究を行い、2015年度心理臨床学会にて発表を行った[小野綾子・長田由布紀・手川真由美・森稚葉 親子平行面接における親面接者と子面接者の協働について:情報共有の役割に着目して 第34回日本心理臨床学会大会(神戸国際会議場)] さらに、英国タビストックセンターでの教育訓練に携わるスタッフ、および訓練経験のある臨床家へのインタビューを行い、日本の大学院に活かせるポイントについて検討、発表している。[森稚葉・黒田浩司・奥村弥生(2012) 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(9) 初学者の体験をコンテンツするためのスーパービジョンの検討 第29回日本心理臨床学会(愛知学院大学)他]</p>
担当授業科目	2016年度〈学部〉ライフデザインⅠ、発達障害の心理学、子どもと文化、心理検査実習、心理臨床実践演習Ⅰ、専門ゼミナール、卒業研究〈大学院〉臨床心理査定演習、発達臨床心理学特論、臨床心理事例研究、臨床心理実習、修士論文
代表的シラバ	いずれの科目においても、当該科目が扱う領域の位置づけ、周辺専門領域との関係を理解するためのオリエンテーションを行い、他の講義科目・演習科目とのつながりを意識させる。講義科目では、基礎概念に一通り触れ、それらの考え方が実際の支援にどのように活用されているかを考えることができるよう、講義を計画している。演習科目では、学生が主体的に取り組み課題意識を持てるよう、演習や課題に取り組むプロセスに関与している。取り組みやすい課題からはじめ、徐々に手続きの困難な課題へと進むよう、計画している。
教育活動改善	【FD研修】:2008年8月、平成20年度FD推進会議(新任専任教員向け)に参加。講義構成、到達目標の提示と達成度の確認、資料作成について学び、授業改善に活かした。2014年10月、学内FD研修会にて「学生の学びに関するアンケート結果」を報告し、本学の学生の特徴と今後の改善課題を示した。

教育改善活動	<p>【教員間情報共有による授業改善】: 複数教員でクラス担当した授業(心理臨床演習、心理検査演習)について、ねらいと教授方法について検討を行い、授業改善を行った。2009年度から、大学院進学希望者クラスを新設した。オムニバス授業(臨床心理基礎実習)では、他教員の担当時間に同席し、他教員の演習の運営方法を学び、自らの演習の改善に活用した。</p> <p>【研究結果を活用した教育改善活動】: 大学院における研修・教育システムに関する研究結果から、授業改善の課題を見出し、臨床心理基礎実習・臨床心理実習・臨床心理事例研究の授業改善を進めてきた。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>授業評価アンケートの結果: 演習科目においては、4点代後半の高い評価が得られた。特に、心理検査演習、基礎ゼミナール、卒業研究での評価は高い。自由記述には、実体験を通じた学び、小レポートを通じた理解の深まりに対する評価が書かれている。また、個別指導に対する評価も得られている。講義科目においては平均4点以上の評価が得られた。自由記述には、質問・コメントに対して授業中に応答すること、具体的な事例を含めて説明を行うことが評価される一方、シラバス通りの進行とならず全体的に進度が遅いことに対する批判・要望も出されている。100人程度の講義において、適宜、到達度を確認し、修正できるよう、授業途中で行った小テストを自己採点させ、学生自身の復習を促すよう工夫している。</p> <p>今後の課題: 授業進度を守りつつ、学生への質問コメントへの応答が可能となるよう、演習科目ではGoogle Classroomを活用し、学生の質問に対するフィードバックを行い、時間の有効活用が図られている。大人数のクラスでは全員が登録していない(できない)などの運用上の課題を感じている。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>同僚教員による授業評価は実施しておらず、今後の課題である。</p>

## 研究業績

研究の特徴	<p>主に、下記3テーマに関する心理実践研究を行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 保育・教育現場における実践研究: 保育・教育現場において心理的困難を抱える子どもの発達を促進する心理臨床的支援の方法について、他専門家との協働をおとした実践研究を続けている。発達臨床心理学の観点から、子どもの主観的な体験・養育者との相互作用を理解し、関係者と共有するための枠組みや方法について検討している。特に、精神分析の訓練初期に行われる乳幼児観察やワーク・ディスカッションの手法を保育現場で応用することに関心がある。また、保育士の専門性発達や研修、地域における予防的支援(地域における子育て支援や心理教育)に関する実践と研究を行っている。2013年3月にCircle of Security Parenting Program TM (「安心感の輪」子育てプログラム)講師のライセンスを取得し、アタッチメント(愛着)の考えをベースとした心理教育を、養育者および保育に関わる人々に実践している。</li> <li>2. 臨床心理士養成大学院における研修・教育に関する研究: 養成大学院における研修・教育の在り方について、修了生へのインタビュー、他機関への視察を行うなど、本学教員・センタースタッフと共同研究を行っている。</li> <li>3. 子育て支援における親支援について、本学院のこども園において、実践と研究を行っている。</li> </ol>
研究経歴	<p>2003年 社会福祉法人相友会浅川保育園相談員として、私立保育園障害児等研修会の運営スタッフの一員として、実践研究に参加(2010年3月まで)。</p> <p>2004年 お茶の水女子大学大学院 COE 研究員(2004・2005年度)として、附属園・学校における幼児・児童・生徒のメンタルヘルスと園・学校における心理的支援に関する養護教諭との実践協働研究に従事。並行して、地域子育て支援に関するアクションリサーチに従事(2007年3月まで)</p> <p>2007年 山梨英和大学人間文化学部専任講師として、①保育・学校場面における「気になる」子どもとその保護者への支援に関する保育士・教師との協働実践研究、②臨床心理士養成大学院における効果的な心理臨床教育研修システムに関する研究に従事(現在に至る)</p> <p>2007年 発達障害早期総合支援モデル事業に関わる発達障害の早期発見に関する健診方法研究委員(2007・2008年度)として、保育園・幼稚園における発達障害児(または発達障害が疑われる幼児)に対する個別支援シートの開発研究に参加(2008年3月まで)</p>

研究実績	<p>(1)著書</p> <p>森稚葉(2015) 心の病 井梅由美子・渡辺千歳 編著 『はじめて学ぶ心理学』 大学図書出版 第15章 pp.102-109</p> <p>森稚葉 (2012) 地域子育て支援事業における保育相談支援 小田豊編 吉田ゆり・若本純子・丹羽さかの編著『保育相談支援(保育士養成課程)』 光生館 第5章第2節 pp89-110</p> <p>森稚葉 (2011) 児童期の子どものメンタルヘルス 伊藤亜矢子編著 『エピソードでつかむ児童心理学』 ミネルヴァ書房 第10章第1節 pp188-191</p> <p>森稚葉 (2011) 児童期に多い問題 伊藤亜矢子編著『エピソードでつかむ児童心理学』 ミネルヴァ書房 第10章第2節 pp192-195</p> <p>分担執筆 (2008) 青木紀久代・神宮英夫編著 『心理学:生活と社会に役立つ心理学の知識』 新星出版社 pp114-117, pp198-199, pp210-211 (発達障害、心理教育プログラム、メンタルヘルスのセルフマネジメント、被害者支援に関する、初学者向けの概説と図説)</p> <p>(2)学術論文</p> <p>[論文]</p> <p>森稚葉・高橋寛子(2015)子育て支援ボランティアスタッフにとっての臨床心理士との協働体験 山梨英和大学紀要14, 34-42</p> <p>森稚葉(2013)保育者と発達障害のある子どもとの関わり:専門性発達の観点から 山梨英和大学紀要12, 8-17.</p> <p>小野綾子・森稚葉(2011) 心理臨床センターにおけるいわゆる「中断・早期終了」事例の検討 山梨英和大学心理臨床センター紀要 第6巻 2-10.</p> <p>森稚葉(2008) 保育場面でのコンサルテーションにおける行動観察に関する検討 山梨英和大学心理臨床センター紀要 第3巻, 22-31</p> <p>森稚葉(2007) 学級観察ビデオを用いたカンファレンスの有用性に関する探索的検討 平成16・17・18年度公募研究成果論文集 お茶の水女子大学21世紀COEプログラム誕生から死までの人間発達科学, 51-60</p> <p>[研究報告書]</p> <p>森稚葉(2007) 地域の親ピアサポーターリーダー養成プログラム 財団法人子ども未来財団 平成18年度児童関連サービス調査研究等事業報告書(研究課題:子育て支援におけるコミュニティディベロップメントを目指したアクションリサーチ).62-79..</p> <p>森稚葉(2007) 学校メンタルヘルス尺度 幼稚園・小学校低学年用の検討 21世紀COEプログラムプロジェクトⅡ「幼児期から青年期までのメンタルヘルス縦断研究～心理的援助のためのアウトリーチプログラムの構築～」最終報告書(お茶の水女子大学),129-134.</p> <p>h.森稚葉(2006) 子育て広場担当者からの評価 財団法人子ども未来財団 平成17年度児童関連サービス調査研究等事業報告書(研究課題:インターネットによる子育てサークルのネットワーク化に関する調査研究</p> <p>[その他]</p> <p>森稚葉(2015) 営業経験と心理臨床の学びの間で 心理臨床の広場 14, p44</p> <p>森稚葉(2013) 「学生支援」について感じていること 山梨英和大学学生相談室報告書 6, 13-14.</p> <p>森稚葉(2011) 国際ロールシャッハ及び投映法学会第20回日本大会参加印象記 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌 15(1),61-62</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>Chiyo Mori, Kikuyo Aoki, Kazuo Shimamoto, Kiyoko Tomita &amp; Masako Yatsuda. (2008) "Collaboration with nursery specialists and psychologists on child-care support service in Japan - Effect of training of nursery specialists with psychologists on 'noticeable children' " The 11th World Congress of the world association of Infant Mental Health (Yokohama), Poster Session, <i>Infant Mental Health Journal</i>, 29(3A)Supplement</p> <p>Chiyo Mori, Kikuyo Aoki, Hiromi wafuji, Sumiko Yamawaki, &amp; Yumiko Iume (2004) "The assessment of child mental health at transition to elementary school."The 28th International Congress of Psychology (China) ,Poster Session, Abstract Book. p961</p>
競争的資金採択課題	<p>2004年4月-2005年3月 平成16年度お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「誕生から死までの人間発達科学」公募研究 研究課題「学級場面におけるビデオ観察を用いたフィードバックの有用性に関する検討」(金額42万円)</p>

学会等発表・役員参加	2015年	9月	自主シンポジウム「乳幼児観察の実際—発達初期の母子関係を生き生きと知る体験—」(上田順一・田中健夫・森稚葉・橋本洋子・鈴木龍) 話題提供者 第34回日本心理臨床学会大会(神戸国際会議場)
	2015年	9月	小野綾子・長田由布紀・手川真由美・森稚葉 親子平行面接における親面接者と子面接者の協働について:情報共有の役割に着目して 第34回日本心理臨床学会大会(神戸国際会議場)
	2013年	6月	シンポジスト「発達障害が疑われるケースの査定をめぐって」, 大会準備委員会事務局 第19回包括システムによる日本ロールシャッハ学会(山梨英和大学)
	2012年	9月	森稚葉・黒田浩司・奥村弥生 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(9)初学者の体験をコンテインするためのスーパービジョンの検討 第29回日本心理臨床学会(愛知学院大学)
	2011年	9月	黒田浩司・森稚葉・小野綾子・篠原恵美 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(4) ケースカンファレンスにおけるアクションリサーチ 第31回心理臨床学会大会(九州大学)
	2010年	9月	森稚葉・黒田浩司・小野綾子・田中健夫・馬場禮子 効果的な心理臨床教育・訓練システムに関する研究(2)いわゆる「中断・早期終了」ケースの要因に関する分析研究 第27回心理臨床学会大会(東北大学)
	2007年	9月	朝日香栄・青木紀久代・高木悦子・森稚葉 保健分野「心の発達と健康」における、仲間関係の変化に重点をおいた回想型授業の実践 第54回日本学校保健学会講演論文集(和洋女子大学)
	2007年	7月	森稚葉 保育園子育てひろばにおけるコミュニティワークの展開(事例発表) 日本コミュニティ心理学会研修委員会主催平成19年度7月研修「教育組織へのコミュニティ心理学的介入を考える」(九州大学)
	2006年	11月	森稚葉・青木紀久代・富田貴代子・矢野由佳子 保育における心理臨床研修の実践(6)—研修参加歴・保育歴から見た研修効果の検討 日本心理学会第70回大会(九州大学)
	2006年	7月	森稚葉・青木紀久代・富田貴代子・村木紘子・平山敦子・谷田征子 インターネットによる親ネットワーク形成の試み—保育園との協働を軸として—(2)ひろば担当者から見た実践評価 日本コミュニティ心理学会第9回大会発表論文集(お茶の水女子大学)
2005年	9月	森稚葉・青木紀久代・武田(六角)洋子・山脇澄子・井梅由美子 学校コミュニティにおける発達臨床心理学的支援(8)—ビデオを用いたフィードバックカンファレンスの意義について 日本臨床心理学会第24回大会発表	
共同研究・受託研究の実績	2011年	10月	(財)日本臨床心理士資格認定協会 第4回研究助成課題『初学者の体験をコンテインする教育・訓練システムの研究』(代表者:黒田浩司)における共同研究者
	2009年	12月	山梨英和大学大学院・心理臨床センター協同研究 研究課題「臨床心理士養成大学院における効果的な心理臨床教育研修システムに関する研究」(研究代表者:馬場禮子)における共同研究者
	2007年	4月	山梨県教育委員会 発達障害早期総合支援モデル事業に関わる発達障害の早期発見に関する健診方法研究委員(2007・2008年度)として、保育園・幼稚園における発達障害児(または発達障害が疑われる幼児)に対する個別支援シートの開発研究に参加(2008年3月まで)
	2006年	4月	財団法人子ども未来財団 平成18年度児童関連サービス調査研究等事業(研究課題:子育て支援におけるコミュニティディベロップメントを目指したアクションリサーチ 研究代表者:青木紀久代)における研究協力者(2007年3月まで)
	2005年	4月	財団法人子ども未来財団 平成17年度児童関連サービス調査研究等事業(研究課題:研究課題:インターネットによる子育てサークルのネットワーク化に関する調査研究 研究代表者:青木紀久代)における研究協力者(2006年3月まで)

<p>大学院生指導</p>	<p>[臨床指導]          ① 定期的に(原則として、1回の面接ごとに1回)、1回1時間の個人スーパーヴィジョンを行う。          ② ウェクスラー式知能検査、発達検査の所見作成に関する個別指導を行う。          ①、②を合わせて、2015年度は計176.5時間(担当ケース:16ケース)の指導を行った。          ③ インテーク面接担当者として、受理面接への研修生の陪席、発表用資料作成の個別指導を行う。          ④ 親子並行面接共同治療者として、コミュニティにおける環境調整支援のあり方を伝達し、大学院生が子ども治療者として自立した姿勢で事例に関与する姿勢を学びとれるよう、個別に情報共有の時間を設ける。2015年度、大学院生と組んで担当した事例は3事例であり、月1~2回の面接、学校との連携、学生との情報共有を行った。</p> <p>[研究指導] 2007年度修了生より副査を担当、2014年度入学生より、主査を担当する。          2015年度「音のやり取り場面におけるセラピストと障害を持つ子どもの間主観的体験:調律のプロセスを手がかりとして」(主査)          2014年度「自己愛の脆弱性に注目した不登校傾向の生徒に関する研究」(副査)          2013年度「教員の援助要請行動における意思決定に関する研究:援助要請回避に着目して」          「動物虐待行為とその攻撃行動の意味に関する研究:高校生と大学生の比較から」(副査)          2012年度「「看護師のやりがい」に関する臨床心理学的研究」「自我体験に関する一考察-体験時のイメージ、体験への“とらわれ”を通して」「発達障害を抱えた生徒との出会いと関わりに関する高校教師の体験過程」(副査)          2011年度「心理臨床家の職業アイデンティティ形成過程についての研究」「不登校の子どもを持つ母親のセルフヘルプグループに関する一考察」(副査)</p> <p>2010年度「日本版IFEEL-Picturesを通して見た母親の関係性評価の研究」「児童養護施設における心理的援助と他職種との連携-施設心理士の発展を目指して-」(副査)          2007年度「虐待児の身体的・心理的発達の特徴-虐待が発達におよぼす影響について」          「障害児の親の障害不認・受容に関する一研究」(副査)</p>
<p>研究能力に対する評価</p>	<p>① 保育・学校場面における「気になる」子どもとその保護者への支援に関する保育士・教師との協働実践研究:主に保育園・学校をフィールドとして、他専門家との協働実践を継続して行い、山梨県内での研修会において、その実践成果をもとに専門家への研修活動を行っている。研修後のアンケートによると、保育や教育実践における研修効果が認められ、現場の専門家との間で継続してきた協働実践の一定の成果があると考えている。これらの実践の成果をまとめ、対外的に発信することが課題である。</p> <p>② 臨床心理士養成大学院における効果的な心理臨床教育研修システムに関する研究では、心理面接に関する教育の課題が見出されている。その結果は、教育改善活動にも活かすことができている。対外的にその成果を発信しており、今後も研究を推進していくことが求められる。</p>

### サービス活動業績

<p>学内委員会・作業部会等 活動実績</p>	<p>2007年 4月 教務委員会、入試委員会、入試実務委員会 委員(2008年3月まで)          2007年 10月 新教育課程カリキュラム検討委員会 委員(2009年3月まで)          2008年 4月 入試委員会、入試実務委員会 委員(2009年3月まで)          2009年 4月 心理社会コースコーディネーター、教務委員会、ハラスメント相談員(2011年3月まで)、ハラスメント防止委員会 委員(2010年3月まで)          2009年 12月 留学生教育体制等点検委員会 委員(2010年4月まで)          2010年 4月 広報委員会 委員(2011年3月まで)、図書館運営委員会、紀要委員会 委員(2012年2月まで)          2010年 9月 スポーツ・学芸特待生制度検討会 委員(2010年12月まで)          2011年 4月 国際交流委員会 委員(2012年2月まで)          2012年 2月 心理臨床コースコーディネーター(2014年3月まで)          2012年 2月 学生サービス部 委員(現在に至る)          2012年 5月 カリキュラム検討ワーキンググループ          2014年 4月 学長特別補佐(学生生活担当)(現在に至る)          2016年 4月 フルーエンシー領域連絡担当者(現在に至る)</p>
-----------------------------	--

アドバイザー活動実績	<p>2015年度は、2年生19名、3年生名、4年生8名のアドバイザー（ゼミ所属学生）を担当（例年、同数程度を担当）。週1回1コマのオフィスアワーの他、個別面接の時間を設け、履修、学業、生活、進学、就職に関する相談に応じ、適切な相談窓口（学生相談室、保健室、学生部）への紹介を行う。</p> <p>各ゼミナールでは、懇親を広げる（または深める）ための時間を複数回とり、対人関係形成の機会を設けている。また、3年次以降は、専門教育の理解を深めるために、教員が実践で関わっているフィールド（保育園）への参加体験、ボランティアの紹介を行っている。</p>
後進育成活動実績	<p>2009年度は、大学院修了生（希望者）に、保育士との自主研究会への参加を通して、保育園でのコンサルテーションに関する卒業指導を行った。</p> <p>2011年度～2013年度、大学院修了生（希望者15名程度）と知能検査・発達検査に関する研究会を立ち上げて、指導を行った（年6回）。</p>
社会貢献活動	<p>(1)講演会</p> <p>2015年 12月 山梨県臨床心理士会子育て支援委員会主催 子育て支援研修会において、一般向けに「子育て支援について学ぶ～親子のきずなを育むために～」という演題で講演を行い、その後臨床心理士向けに「子育て支援の心理臨床」という演題で事例検討を交えた講演会を行った。</p> <p>2015年 11月 山梨県立ろう学校において、「発達障害の子どもの発達過程―「非定型」な発達過程をいかにして理解するのか」という演題で講演を行い、事例検討会を行った。</p> <p>2015年 8月 甲斐市教育委員会主催「授業力養成講座」において、「発達障害を持つ子どもの心理的理解と授業での配慮について」という演題で研修講演をつとめ、参加者の事例について検討を行った。</p> <p>2015年 7月 山梨市保育士研修会において「保育園における保護者支援」という演題で研修講演を行った。</p> <p>2014年 2月 児童養護施設あいむにおいて、職員研修会「愛着問題とは何か-理解と対応を考える」の講師を務めた。</p> <p>2013年 7月 山梨県総合教育センター主催 特別支援教育専門研修会において、講師をつとめ、WISC-Ⅲの解釈の実際について、特別支援担当教員を対象とした研修を行った。</p> <p>2013年 2月 山梨市保育士研修会において、講師をつとめ、「“気になる”子どもの保護者との関係について」講演を行った。</p> <p>2012年 12月 甲府市保育士会 理論研修会において、講師をつとめ、「“気になる”子どもの理解と対応―保護者への支援」という演題で、講演を行った。</p> <p>2012年 8月 地域療育等支援事業保育所等職員研修会において、講師をつとめ、「子どもの”障害”をめぐる保護者の心理的体験について考える」という題で、講演を行った。</p> <p>2011年 2月 山梨ことばを育む親の会主催 教育講演会 講師：言語障害を持つ子どもの保護者、ことばの教室担当教員、保育士を対象に、「子どもと言葉と発達 ～臨床心理士の立場からみえてくるもの～」という題で、言語発達と情動発達との関連について、講演を行った。</p> <p>2011年 1月 地域療育等支援事業保育所等職員研修会 講師：親子の関係性の問題を抱え、発達面での偏りがみられる子どもの理解と対応について、「『気になる』子どもの理解と対応」という演題で2回、講演を行った（2011年1月：大月、2010年11月：甲府）</p> <p>2010年 10月 甲斐市愛育会主催 子育て講演会 講師：未就園児を子育て中の親を対象として、「子育てに正しい“答え”はあるの？」という演題で、講演を行った。</p> <p>2010年 6月 山梨県義務教育課主催 山梨県園長等運営管理協議会 講師：特別支援教育における保護者支援の考え方と留意点について、「特別支援教育における保護者支援」という題で講演を行った。</p> <p>2010年 3月 山梨県言語聴覚士会主催 学術講演会 講師：障害を持つ人の心理的体験と支援者との関係について「患者―支援者間のコミュニケーションを考える ～心理臨床の実践から～」という題で講演を行った</p> <p>2009年 10月 山梨県情緒障害教育研究会講師：不登校の心理的理解と保護者へのカウンセリングの基本姿勢について「不登校の子どもと親へのカウンセリング」の演題で講義を行った。</p> <p>その他、保育実践・母子保健・発達障害に関する研修会、子育て講演会、事例検討会を複数担当</p>

- (2) 出前講座
- 2010年 3月 南アルプス市子育て支援課主催 ファミリーサポート講習会：ファミリーサポーター候補者に対し、子育てをめぐる社会的変化と保護者の心理的特性、関与の仕方について、「いまどきの子育て事情とコミュニケーション」という題で、講習会を行った。(2008年～計4回)
  - 2008年 12月 山梨県発達障害者支援センター主催 発達障害児(者)サポーター養成講座：発達障害を持つ生徒への家庭訪問を行う大学生ボランティアを養成するための基礎講座を実施。
- (3) 公開講座
- 2014年 10月 大学コンソーシアムやまなし・県民コミュニカレッジにおいて「サイコロジー・トゥデイ」第4回「赤ちゃんの心の世界と親子関係」を担当
  - 2014年 5-7月 山梨英和大学メイプルカレッジにおいて、子育て中の母親によるグループワーク講座「子どもとの関係を学ぶ～安心感の輪子育てプログラム」を担当(2014年度、2015年度実施)
  - 2011年 11月 東日本大震災後の市民への情報提供として、震災後の子どもの心を理解し、ケアするための基本的知識に関する講座を担当(大学コンソーシアムやまなし・県民コミュニティーカレッジ「心のケアー臨床心理士としてできること」第3回「子どもの心のケア」担当)
  - 2008年 5-7月 山梨英和大学メイプルカレッジにおいて、子育て中の母親によるグループワーク講座「子どもの育ちと親子の関わり」を担当。
  - 2007年 9月 山梨英和大学主催 公開講演会(長野) 講師：「子どもの心を理解する：心の発達とメンタルヘルス」という題で、中学生・高校生のメンタルヘルスとその支援に関する講演を実施。
- (4) 学外審議会・委員会等
- 2015年 8月 山梨県社会福祉協議会内の児童措置部会、養護母子審査部会、児童福祉施設審査部会委員として、年複数回実施される虐待事案の措置、里親認定、児童福祉施設の新設に関わる審査会に参加(現在に至る)
  - 2015年 6月 甲府市総合計画審議会委員として、(仮称)第六次甲府市総合計画の策定基準となるべき事項に関する審議会に参加(2015年11月審議終了)
  - 2012年 12月 笛吹市適正就学指導委員会委員として、特別支援学校進学児童・生徒について、年1回開催される検討会に参加(現在に至る)
  - 2007年 4月 山梨県特別支援教育体制推進事業 中・西部地域LD等専門家チーム委員(2010年度より、山梨県特別支援教育専門家チーム委員に名称変更)として、依頼児童・生徒に関して心理的な特性理解と適切な支援プランを検討し、学校現場に提案。事例に応じて、本学心理臨床センターにて、継続的な心理療法を提供(2013年3月まで)
- (5) その他
- 2012年 2月 平成23年度 生徒指導・進路指導総合推進事業 こすもす教室(山梨県適応指導教室)訪問指導実践事例集(山梨県教育委員会)の編集協力。不登校のため自宅から出られない児童・生徒に対するアプローチについて、こすもす教室の教員と事例集を作成。
  - 2012年 2月 リンキッズやまなし「心理研究室 立ち止まって考えてみる ～どうしてこうなの？親子の関係～」にて、子育て相談を連載(隔月発刊、現在に至る)。読者の悩みを元に、家庭の中で実践しうる関わりを提案。
  - 2010年 8月 山梨日日新聞「虐待-子育て一人で背負わずに」(2010年8月14日13面)、虐待が疑われる親に対する予防的支援の必要性に関する意見を掲載。
  - 2008年 10月 山梨県中北保健所長期療養児療育事業におけるピアサロン(新生児集中治療室に入院した経験を持つ子どもを育てる母親同士が集まり、悩みを語り合う場)に参加し、グループカウンセリングを実施(年2回出席)(2013年2月まで)
  - 2008年 4月 山梨県発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業 LD等巡回相談員(2010年度より、山梨県特別支援教育巡回相談員に名称変更)として、複数の小中学校への巡回相談を実施。(2013年3月まで)
  - 2007年 7月 山梨市公立保育所保育士研修担当として、定期的に園訪問とコンサルテーション、研究会を開催し、毎年2回程度の研修会を実施。(2014年3月まで)
  - 2007年 4月 山梨県適応指導教室(石和こすもす教室)カウンセラーとして、教室内での事例検討会、学習講演会講師、「訪問指導の手引」作成時の助言を行った(2010年3月まで。事例検討会担当は2013年度まで)

## 成果と目標

専門的成果	<p>① 山梨県内において複数の保育園での心理的支援実践を継続することを通して、支援の方略に関する実践的な理解を深めてきた。支援実践の過程に学生や修了生を参与させる機会を作り、教育上の効果も得られたと考えている。実践から得られた理解を活かし、保育・教育の場における支援に関する研修会を複数を行い、参加者・運営者より一定の評価と成果が得ることができた。</p> <p>② 臨床心理士養成大学院の心理臨床センターにおける研修、教育のシステムについての研究において、調査分析の役割を担った。その成果として、心理面接の研修過程で、面接中断に至りやすい条件が一部明らかとなった。さらにその結果を活かし、心理臨床基礎実習のシラバスの見直しを進めた。</p> <p>③ 心理臨床センターにおいて、発達に困難を抱える子どもの保護者に対する心理面接を複数担当し、園・学校との連携を通じた支援を行うとともに、共同治療者として研修生と関わった。このことを通し、研修生にコミュニティ支援の実際を伝えることが可能になったと考えている。また、こども園の子育てひろばに相談員として勤めながら、学生ボランティアの受け入れについて、現在検討中である。</p>
専門的目標	<p>① 保育園・幼稚園・こども園における心理的支援に関する実践事例を集約し、保育コンサルテーション、保育カウンセリング、子育て支援に関する実践的に役立つ支援の枠組みに関する知見を発信する。保育現場に、精神分析の訓練の1つである幼児観察の手法を導入することの意味について、実践を通して検討を深める。</p> <p>② 臨床心理士養成大学院の心理臨床センターにおける研修、教育のシステムについての研究を進める。その知見を活かして、大学院カリキュラム、および個別指導のあり方を改善する。</p> <p>③ 発達に困難を抱える子どもとその保護者に対する心理療法技術を向上させる。自らが心理療法を担当するとともに、より適切な臨床指導を研修生に提供することを可能とし、心理臨床センターの臨床活動の充実と地域社会への貢献に寄与したい。</p>

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
イノウエ セイゴウ 井上 征剛	男	1974年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	学術(博士)	専門分野	音楽史・音楽学、児童文学、西洋文化論	
学歴	1999年	3月	東京大学教養学部教養学科第一(比較日本文化論分科)卒業	
	2002年	3月	東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程(比較文学・比較文化)修了	
	2004年	3月	一橋大学大学院言語社会研究科言語社会専攻修士課程修了	
	2006年	9月	ドイツ・ライプツィヒ大学留学(2009年3月まで)	
	2012年	3月	一橋大学大学院言語社会研究科言語社会専攻博士課程修了	
実務経験	2012年	4月	山梨英和大学非常勤講師(ドイツ語、音楽の表現: ~2014年3月)	
	2013年	4月	一橋大学非常勤講師(ドイツ語: ~2015年3月)	
	2014年	4月	山梨英和大学人間文化学科准教授	
	2015年	4月	山梨英和高校非常勤講師(ドイツ語)	
受賞歴	年	月	特になし	
	年	月		
	年	月		
所属学会	2004年	4月	日本児童文学学会会員(2013年11月より運営委員)	
	2012年	8月	日本音楽学会会員	
	2013年	9月	日本イギリス児童文学学会会員	
	年	月		
特免資格等	2005年	2月	ドイツ語中級(Zentrale Mittelstufenprüfung=ZMP)	
	2007年	7月	大学入学のためのドイツ語(Deutsche Sprachprüfung für den Hochschulzugang = DSH)	
	2000年	2月	高等学校教諭1種免許(地理・歴史)	
年	月			
e-mail	sei-inoue[atmark]yamanashi-eiwa.ac.jp			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>大学の教育では、学生が他者や社会・文化事象に対して幅広い興味を持つための、また彼らがそのような事柄に関する情報を集め、把握することを通して、自分自身の考えていることについて再認識し、その考えを自ら発信する方法を学ぶための手助けをすることが必要と考えている。そのために、語学、文化、学問の基礎のいずれにおいても、専門的な知識への扉を開く基礎とともに、それらの分野の根幹となる社会事象について十分な情報伝達を行い、専門的な知識が自分たちの身の回りのできごとや状況と結びつき得ると認識してもらうこと、さらにそのような認識を手がかりに、自分たちの目の前にあるものごとを自分なりにとらえ、消化し、その際に感じたこと、考えたことを自分の言葉として発信する経験を積んでもらうことに重点を起きたいと考えている。したがって、専門的知識や論理的思考、さまざまなレベルでの好奇心に加え、他人に理解しやすい文章を書く力の育成も重視したい。</p> <p>また、音楽と児童文学を中心とした文化事象に数多く触れてもらい、興味を喚起することも目指す。その際、いわゆる「マイナーなもの」に注目する価値についても気づいてもらうよう、知られていないがすぐれた作品の紹介に力を入れることを重視している。</p> <p>語学教育にあたっては、「辞書を引いて内容をしっかり考えた上で把握する」ことが非常に重要と認識している。したがって、時間をかけて読む価値のある文章を、単語の意味や文法に留意しながらいねいに読んでいき、次第に長い文章を速く読めるようになる、というのが理想。ドイツ語教育では、留学時の経験に基づき、「外国で外国の言葉に囲まれて生きる感覚」を伝えることも重視している。</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1)教育方法実践例 「音楽史・音楽学」の場合：①テーマとする作品について、作曲家の活動史や作曲当時の社会状況を念頭に置いた上で、作品分析を行う。 ②同じジャンルや類似した内容をもつ作品を紹介し、共通点やそれぞれの作品だけに見られる特徴を把握する。／なお、CDやDVDでの作品紹介やピアノ演奏を交えた解説によって、音楽経験の浅い受講者でも、内容を自分なりに興味をもって受けとめられるように心がけている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし(多くの科目では、毎回必要な情報を掲載したプリントを作成・配布している)。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 2016年2月4日：一橋大学キャリア支援室(大学院生担当)2015年度第5回アカデミックキャリア講習会「大学で教えるということ―地方私立大学の教育現場から―」で、大学院修了後2～3年の教員による授業づくりについての講演を行う。</p>
<p>担当授業科目</p>	<p>2016年度： 音楽史・音楽学(前期)、児童文学講読(後期)、比較文化・思想論(第2Q)、子どもと文化(第3Q:共同)、地域研究・実践論(後期)、英米の文化(第1Q)、世界の文化(第4Q:共同)、英語1aD(第1Q)、英語1bD(第2Q)、英語1cC(第3Q)、英語1dA(第4Q)、English Reading I(前期)、ドイツ語1(前期)、ドイツ語2(後期)、基礎ゼミナール(通年)、専門ゼミナール(通年)、卒業研究(通年)</p>
<p>代表的シラバス</p>	<p>以下、比較文化・思想論(2016年度第2Q)のシラバスから抜粋。</p> <p>概要 ウィーダの小説『フランダースの犬』を読み、関連した内容を持つ作品や、この作品に関わる事柄(主に芸術論)について認識しつつ、芸術家物語という観点から考察します。</p> <p>到達目標 (1)ひとつの文学作品について、自分なりの考えを持って読み、複数の切り口から考察すること。 (2)自分の考えをまとめ、具体的に語り、建設的に議論を行う技術を磨くこと。 (3)芸術や芸術家の在り方、またその表象について、具体的に考察すること。 (4)文学作品について、物語そのものに加えて、扱われているテーマ(ここでは「芸術家の運命」と結びつけて、より深く理解すること。 (5)文学作品の背景となる情報を、その作品のより深い理解に役立てること。</p> <p>授業計画 (1)小説『フランダースの犬』を、記述された内容や人物描写などを手がかりに、詳細に考察する。 (2)ウィーダの別の作品や、他の作家による、ハッピーエンドを志向する芸術家物語などについて検討し、『フランダースの犬』における「もうひとつの結末」は可能だったのかどうかについて考察する。 (3)小説・絵画・音楽・映画などで描かれる「(天才)芸術家像」について幅広く検討し、社会において「芸術家のイメージ」がどのようにとらえられ、「活用」されているかについて、またそのような「芸術家像」の在り方が含む問題点について考察する。 (4)(1)～(3)をふまえて、芸術家物語としての『フランダースの犬』について、再度検討する。</p>

代表的シラバ	<p>成績評価 平常点・授業内課題40%、レポート60%。</p> <p>教科書・参考書 『フランダーズの犬』、ウィーダ(村岡花子訳)、新潮文庫。 『聴衆の誕生——ポスト・モダン時代の音楽文化』、渡辺裕、中公文庫。 『日本児童文学 2011年11・12月号』、日本児童文学者協会(編)、小峰書店。 その他、必要に応じてプリントを配布する。</p>
教育改善活動	<p>(1)一橋大学・大学教育研究開発センター研究補助員として、レポート作成の指導と指導法に関する研究などを行う(2010年11月～2011年2月)。(2)山梨英和大学学内WGで、新カリキュラム構築に取り組む(2015年2月～2016年3月)。2016年度からは新たに発足した「グローバル・スタディーズ領域」の連絡係を務めている。(3)2015年度に英語・英語圏文化コースのコーディネーターを務めたことをきっかけに、同コースの専門教育制度の変更(卒業研究の最終発表会を新たに開催する、など)及び、英語基礎教育体制の整備を行っている。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>全般的に高い評価を頂いている。個別の記述では、「絵本は子どもだけでなく大人になってからでも違う見方で楽しむことが出来るということを知れた」「様々な種類の絵本を多角的に読むことが出来た」「親になったらこんな絵本を読ませようなど想像を膨らますことが出来た」「子どもと文化」、「ヘンゼルとグレーテルについて細かくやってくれて新たな面白さを発見できた」「(教科書として扱った本が)良質なパロディーで深く考えさせられた」「(比較文化・思想論)」、「ドイツについて興味がわき、もっと学んでいきたいと思えた」「(ドイツ語2)」、「オペラの楽しさや面白さを知ることができた」、「演目選択も、講義も、プリントや映像資料も分かりやすく、オペラの内容がよく理解でき面白かった」「(音楽の表現)」、「学生の発言に価値を見出そうとしてくれているため気軽に発言できた」「(児童文学の奥深さを知ることができた)」「(英米の児童文学)」、「細かく説明してくれるので授業を受けていてとても楽しかった」「英語に関して苦手意識をもっていたが、すこしずつ楽しんで受けられるようになった」、「調べる課題によって日本語に訳しても意味がわからないものことも詳しく知ることができ、学習意欲が高まった」(英語)、「大学生活で役に立つ授業だと思った」(基礎ゼミナール:2014年度)などのコメントがあった。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>荒井直先生のシラバス(2014年度)によれば、「リベラル・アーツ系」の授業とのこと(つまり、教養の観点から意味のある授業というふうに認識してもらっているようである)。なお、同先生の専門ゼミナールのシラバス(今年度)では、同ゼミナールの関連科目として、私が担当している2つの科目が挙げられている。</p> <p>一橋大学では、ティーチング・アシスタントを務めた後、その際の仕事から授業を行う能力があるという評価を得て、非常勤講師や臨時的講師を務めることができた、という経緯がある。</p>

## 研究業績

研究の特徴	<p>音楽史・音楽学研究では、作品の詳細な分析(作曲のための基礎知識による)と、その作品が生まれた社会的脈絡の考察を合わせて行うことで、多面的な作品理解を行っている。このような多面的なとらえ方を通して、作曲家にとって、また現代において音楽作品を受容する私たちにとって、その作品がどのような意味を持ち得るのかを明らかにすることを目指している。</p> <p>児童文学研究では、物語で描かれるできごとを詳細に分析し、主に現代の読者にとって、その作品を読むということがどのような意味を持ち得るのかを常に視野に置いて論じることを重視している。社会に対して、また児童文学を軽視する少なからぬ論者にはいかに対峙するか、ということも重要なテーマである。</p> <p>音楽をテーマとする児童文学作品の研究など、複数のジャンルにまたがった研究も重点的に行っている。音楽・児童文学作品についてその面白さを具体的に伝えること、また(主に社会に対して)批判精神を持ち続けることを強く意識している。</p>
研究経歴	<p>2006年 2009年まで、ドイツのライプツィヒに留学。音楽史に関する調査・研究のほか、ドイツのオペラ劇場や児童文化(音楽、図書館、演劇など)の取材を行う。</p> <p>2011年 一橋大学・組織的な若手研究者海外派遣プログラム(独立行政法人日本学術振興会「組織的な若手研究者海外派遣プログラム」採択事業)により、ライプツィヒ大学で調査研究を行う(劇場などの取材も行った)。(2013年まで、2回・計5か月。)</p>

<p style="text-align: center;">研究実績</p>	<p>(1) 著書 まだない(博士論文を出版したいと考えてはいる)。</p> <p>(2) 学術論文 博士論文:『アレクサンダー・ツェムリンスキーの《夢見るゲルゲ》——現実ともうひとつの世界をめぐる歌劇』(2011年提出、2012年合格) 依頼論文1:「作者のまなざしと翻訳の役割——ヴァージニア・リー・バートン『せいめいのれきし』改訂版をめぐって——」(今田由香・大島丈志編『絵本ものがたりFIND 見つける・つむぐ・変化させる』朝倉書店、2016) 依頼論文2:「音楽を描く児童文学、その諸相」(『日本児童文学』、2011年12月) 学術雑誌投稿掲載論文1:「オペラに描かれた子ども像——フンパーディンクのオペラ『ヘンゼルとグレーテル』の場合——」(『一橋論叢』2004年9月号) 学術雑誌投稿掲載論文2:「ベンジャミン・ブリテンのオペラ『ねじの回転』にみる、子ども観への問題提起」(『児童文学研究 第37号』(2004年)) 学術雑誌投稿掲載論文3:「ベンジャミン・ブリテンのオペラ『小さな煙突掃除』——子どもオペラの可能性と問題点」(『一橋論叢』2006年3月号) 海外の研究書籍(論文集)掲載論文については、(3)の項目で触れている。 (3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 国際児童文学学会(IRSCL)で4回発表(京都(2007)、フランクフルト(2009)、マーストリヒト(2013)、ウスター(2015))。カッセルでの、グリム・メーメルヒェンをテーマとした学会(2012)でも発表を行った。どの学会でも、クラシック音楽を扱う発表としてはほぼ唯一のものだった。カッセルでの研究発表は、その後ドイツ語論文として学会論文集(Brinker-von der Heyde, Claudia / Ehrhardt, Holger / Ewers, Hans-Heino / Inder, Annekatrin (Hrsg.) Märchen, Mythen und Moderne. 200 Jahre Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Teil 1 und 2. Frankfurt am Main u. a.: 2015.)に提出・採用収録された。</p>																					
<p>競争的資金採択課題</p>	<p>特になし</p>																					
<p style="text-align: center;">学会等発表・役員参加</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="322 1137 466 1205">1999年</td> <td data-bbox="466 1137 587 1205">6月</td> <td data-bbox="587 1137 1420 1205">日本児童文学学会の東京例会で、「19世紀後半の西洋児童文学にみる芸術への関心」というテーマで研究発表を行う。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="322 1216 466 1283">2004年</td> <td data-bbox="466 1216 587 1283">11月</td> <td data-bbox="587 1216 1420 1328">日本児童文学学会第43回研究大会(東京学芸大学)で、ベンジャミン・ブリテンのオペラ《小さな煙突掃除》について発表を行う(「オペラと児童文学の接点——ブリテンのオペラ『小さな煙突掃除』をめぐって——」)。子どもをテーマとするオペラ作品についての発表は、このときが初めて。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="322 1350 466 1417">2005年</td> <td data-bbox="466 1350 587 1417">10月</td> <td data-bbox="587 1350 1420 1417">日本児童文学学会第44回研究大会(同志社大学)で、研究発表「1930年代の「学校オペラ」——子どもの主体性をめぐって」を行う。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="322 1440 466 1507">2007年</td> <td data-bbox="466 1440 587 1507">8月</td> <td data-bbox="587 1440 1420 1574">国際児童文学学会第18回研究大会(京都)で研究発表(英語)。“How can music depict the relationship between the power of the society and children? – in the case of Benjamin Britten” (音楽はどのようにして社会の力と子どもの関係を描くことができるか——ベンジャミン・ブリテンの場合)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="322 1585 466 1653">2009年</td> <td data-bbox="466 1585 587 1653">8月</td> <td data-bbox="587 1585 1420 1720">国際児童文学学会第19回研究大会(ドイツ、フランクフルト)で、ドイツのオペラ上演に見る、子どもについての新しい発想をテーマに研究発表を行う(ドイツ語)。“Kinder im Musiktheater: Neue Gedanken über Kinder bei deutschen Opernaufführungen” (オペラ劇場の子どもたち——ドイツのオペラ上演に見る、子どもについての新しい発想)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="322 1742 466 1809">2009年</td> <td data-bbox="466 1742 587 1809">12月</td> <td data-bbox="587 1742 1420 1809">日本児童文学学会の東京例会で、研究発表を行う。「ドイツの子ども向けオペラと演劇の現在 ——旧東独圏の劇場の活動を中心に——」</td> </tr> <tr> <td data-bbox="322 1832 466 1899">2012年</td> <td data-bbox="466 1832 587 1899">12月</td> <td data-bbox="587 1832 1420 2078">ドイツのカッセルで行われた、グリム兄弟メーメルヒェン集200周年記念学会(BRÜDER-GRIMM-KONGRESS 2012 “Märchen, Mythen und Moderne: 200 Jahre Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm”)で、フンパーディンクのオペラ《ヘンゼルとグレーテル》について発表。“Wenn Kinder eine Grenze zwischen zwei Welten überqueren: Engelbert Humperdincks „Hänsel und Gretel“ als „Fantasy-Oper””(子どもたちがふたつの世界の境界を渡るとき——「ファンタジー・オペラ」としてのエンゲルベルト・フンパーディンク《ヘンゼルとグレーテル》)</td> </tr> </table>	1999年	6月	日本児童文学学会の東京例会で、「19世紀後半の西洋児童文学にみる芸術への関心」というテーマで研究発表を行う。	2004年	11月	日本児童文学学会第43回研究大会(東京学芸大学)で、ベンジャミン・ブリテンのオペラ《小さな煙突掃除》について発表を行う(「オペラと児童文学の接点——ブリテンのオペラ『小さな煙突掃除』をめぐって——」)。子どもをテーマとするオペラ作品についての発表は、このときが初めて。	2005年	10月	日本児童文学学会第44回研究大会(同志社大学)で、研究発表「1930年代の「学校オペラ」——子どもの主体性をめぐって」を行う。	2007年	8月	国際児童文学学会第18回研究大会(京都)で研究発表(英語)。“How can music depict the relationship between the power of the society and children? – in the case of Benjamin Britten” (音楽はどのようにして社会の力と子どもの関係を描くことができるか——ベンジャミン・ブリテンの場合)	2009年	8月	国際児童文学学会第19回研究大会(ドイツ、フランクフルト)で、ドイツのオペラ上演に見る、子どもについての新しい発想をテーマに研究発表を行う(ドイツ語)。“Kinder im Musiktheater: Neue Gedanken über Kinder bei deutschen Opernaufführungen” (オペラ劇場の子どもたち——ドイツのオペラ上演に見る、子どもについての新しい発想)	2009年	12月	日本児童文学学会の東京例会で、研究発表を行う。「ドイツの子ども向けオペラと演劇の現在 ——旧東独圏の劇場の活動を中心に——」	2012年	12月	ドイツのカッセルで行われた、グリム兄弟メーメルヒェン集200周年記念学会(BRÜDER-GRIMM-KONGRESS 2012 “Märchen, Mythen und Moderne: 200 Jahre Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm”)で、フンパーディンクのオペラ《ヘンゼルとグレーテル》について発表。“Wenn Kinder eine Grenze zwischen zwei Welten überqueren: Engelbert Humperdincks „Hänsel und Gretel“ als „Fantasy-Oper””(子どもたちがふたつの世界の境界を渡るとき——「ファンタジー・オペラ」としてのエンゲルベルト・フンパーディンク《ヘンゼルとグレーテル》)
1999年	6月	日本児童文学学会の東京例会で、「19世紀後半の西洋児童文学にみる芸術への関心」というテーマで研究発表を行う。																				
2004年	11月	日本児童文学学会第43回研究大会(東京学芸大学)で、ベンジャミン・ブリテンのオペラ《小さな煙突掃除》について発表を行う(「オペラと児童文学の接点——ブリテンのオペラ『小さな煙突掃除』をめぐって——」)。子どもをテーマとするオペラ作品についての発表は、このときが初めて。																				
2005年	10月	日本児童文学学会第44回研究大会(同志社大学)で、研究発表「1930年代の「学校オペラ」——子どもの主体性をめぐって」を行う。																				
2007年	8月	国際児童文学学会第18回研究大会(京都)で研究発表(英語)。“How can music depict the relationship between the power of the society and children? – in the case of Benjamin Britten” (音楽はどのようにして社会の力と子どもの関係を描くことができるか——ベンジャミン・ブリテンの場合)																				
2009年	8月	国際児童文学学会第19回研究大会(ドイツ、フランクフルト)で、ドイツのオペラ上演に見る、子どもについての新しい発想をテーマに研究発表を行う(ドイツ語)。“Kinder im Musiktheater: Neue Gedanken über Kinder bei deutschen Opernaufführungen” (オペラ劇場の子どもたち——ドイツのオペラ上演に見る、子どもについての新しい発想)																				
2009年	12月	日本児童文学学会の東京例会で、研究発表を行う。「ドイツの子ども向けオペラと演劇の現在 ——旧東独圏の劇場の活動を中心に——」																				
2012年	12月	ドイツのカッセルで行われた、グリム兄弟メーメルヒェン集200周年記念学会(BRÜDER-GRIMM-KONGRESS 2012 “Märchen, Mythen und Moderne: 200 Jahre Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm”)で、フンパーディンクのオペラ《ヘンゼルとグレーテル》について発表。“Wenn Kinder eine Grenze zwischen zwei Welten überqueren: Engelbert Humperdincks „Hänsel und Gretel“ als „Fantasy-Oper””(子どもたちがふたつの世界の境界を渡るとき——「ファンタジー・オペラ」としてのエンゲルベルト・フンパーディンク《ヘンゼルとグレーテル》)																				

学会等発表・役員参加	2013年	8月	国際児童文学学会第21回研究大会(オランダ、マーストリヒト)で、フリードのモノ・オペラ《アンネの日記》について発表を行う(英語)。“A Mono-opera “The Diary of Anne Frank” — How does “Modern Music” depict a girl in the Nazi Time?”(モノ・オペラ《アンネの日記》——ナチス時代の少女を描く「現代音楽」)
	2013年	11月	日本児童文学学会第52回研究大会(広島経済大学)で研究発表。「ベンジャミン・ブリテン《子どもの十字軍》にみる「戦争児童音楽」の可能性——子どもの音楽演奏によって、過去と現在を結びつけるということ」
	2013年	11月	日本イギリス児童文学学会東日本支部秋の例会(川村学園女子大学)で研究発表。「ベンジャミン・ブリテンが開いた、音楽で子どもを描く新たな可能性——1960年代の作品を中心に」
	2013年	11月	日本児童文学学会運営委員(現在に至る)
	2014年	10月	日本児童文学者協会会員(研究部部員)(現在に至る)
	2014年	11月	日本音楽学会第65回研究大会(九州大学)で研究発表。「ツェムリンスキー《人魚姫・管弦楽のための幻想曲》——「死の交響曲」から生きることの痛みを描く音楽への展開」
	2015年	8月	国際児童文学学会第22回研究大会(イギリス、ウスター)で、ブリテンの連作歌曲集『ウィリアム・ブレイクの歌と箴言』について発表を行う(英語)。““Why do you always need ‘innocent’ children?” – Benjamin Britten’s method to depict “childhood” in his song cycle “Songs and Proverbs of William Blake””
共同研究の実績	年	月	年 月 特になし 年 月 年 月
大学院生指導	特になし(出身大学院では、ゼミで他の院生への助言を行ってきた)		
研究能力評価に対する	一橋大学大学院言語社会研究科では、大規模なオペラについて、音楽と台本の両面から緻密な分析を行い、さらに豊富な文献資料を細部まで調査分析した上で駆使し、あまり知られていない作品に新たな価値を見出した点が、高く評価された。さらに、他のジャンルや、有名でないものも含めた他の音楽作品との比較を徹底して行うことで、研究対象としている作品の新たな面に光をあてた点が、筆者の研究の特色という点も含めて高い評価を受けている。音楽産業や社会に対する問題意識や、文章の分かりやすさもまた、評価の対象となっている。		

### サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2014年	6月	山梨県立笛吹高校で同高校内進路ガイダンスに参加、山梨英和大学についてのプレゼンテーションを行う。
	2014年	8月	山梨英和大学オープンキャンパスで模擬授業(「作曲家の仕事——音楽の喜怒哀楽——」)を行う。
	2015年	2月	新カリキュラム検討WGメンバーを務める(～2016年3月)。
	2015年	4月	英語・英語圏文化コースコーディネーターを務める(～2016年3月)。
	2015年	4月	学生サービス部運営委員会委員(副学長指名による、～2016年3月)。
	2015年	6月	山梨英和大学オープンキャンパスで模擬授業(「絵本を深読み!～バートン『ちいさいおうち』」)を行う。
	2015年	11月	山梨県立甲府西高校で出前授業(「絵本の読み方～乗り物絵本～」)を行う。
	2016年	3月	山梨県立笛吹高校で出前授業(「英語の絵本を読む——物語・社会・そして英語」)を行う。
	2016年	4月	グローバル・スタディーズ領域連絡者を務める。

アドバイザー活動実績	2014年度より、基礎ゼミ担当学生および担当留学生を中心に、履修・学習・生活などの指導を行っている。
後進育成活動実績	特になし(一橋大学大学院では、ゼミ生や留学生への助言に加えて、修士論文発表会などの場にもできるかぎり参加し、他のゼミの学生にも、必要に応じて助言を行っている)。また、関連分野の大学教員公募用提出書類の作成方法について、求められて助言を行うことがある。
社会貢献活動	(1)講演会
	2008年 6月 ドイツ・ライブツィヒの「国際学生週間」で、日本文化(日本歌曲)についての講演を行う(ドイツ語)。西洋文化を受け入れ、自分なりに消化することによって「自分たちの新たな伝統」を作り上げてきた経緯をドイツの人々に伝え、「なぜ日本人は西洋音楽を必要とするのか」という典型的な問いに対する答えとした。
	2015年 11月 清泉女子大学英語英文学科の中の授業に招聘され、授業内講演(「音楽で子どもを描くということ——ベンジャミン・ブリテンの作品から」)を行う。
	(2)出前講座 年 月 特になし
	(3)公開講座 2016年 6月 メイプルカレッジ講座「絵本深読み講座」を担当(同年11月まで、全5回を予定)
	(4)学外審議会・委員会等 年 月 特になし
	(5)その他
	2015年 1月 「山梨英和コンサートシリーズ」を開始。比較的知られていない作品を含め、クラシック音楽を幅広く、そして深く理解しながら楽しむ演奏会シリーズの企画および運営を行っている。
	2015年 7月 日本児童文学者協会「がっぴょうけん(合評創作研究会)」で、「詩・掌編」部門の世話人を務める(本年7月にも同部門の世話人を務める予定)。
	2013年 3月 ブラームス《ドイツ・レクイエム》(飯森範親指揮、オーケストラ・アンサンブル金沢、サウンドブリッジ合唱団)の字幕用歌詞日本語訳を作成。
2012年 9月 札幌室内歌劇場「子どものための音楽／唱歌の学校」構成協力。	
2013年 10月 札幌室内歌劇場《タンホイザー》芸術監督補佐。このほか、音楽会企画・補助・作曲・編曲活動多数。	
年 月 ソニーから発売されたクラシック音楽CDでのライナーノートや、R・シュトラウス協会年誌でのドイツのオペラ上演評を翻訳している。児童文学の評論、小規模雑誌への寄稿、演奏会プログラム掲載解説などの執筆も多数。	

## 成果と目標

専門的成果	<p>① ツェムリンスキーのオペラ《夢見るゲルゲ》をテーマとする博士論文。知られざる音楽作品の価値、ファンタジーの要素をもったオペラ、社会において無力な芸術家の取るべき態度は何か、といった自分の関心および問題意識をひとつの論として結びつけている点で、「自分の考えていることを明確に伝える」努力が、最大限実現されたものと考えている。</p> <p>② 雑誌掲載論文「音楽を描く児童文学、その諸相」。「音楽をテーマとする作品」という新たな視点からの児童文学論を提供すると同時に、このテーマを通して児童文学作家たちの社会や世界に対する見方に問題提起を行ったものとして、高い評価を得た。この成果は山梨英和大学での授業にも反映されている。</p>
-------	--

<p>専門的成果</p>	<p>③ 上記の実績にはないが、オペラ《おおきなかぶをぬいたら》の台本。メールヒエンや児童文学などの要素をさまざまに組み合わせて、面白く上演・鑑賞でき、かつ社会批判的な視点も分かりやすく伝える(ことを意図した)作品である。</p>
<p>専門的目標</p>	<p>① 博士論文の書籍化。また、卒業論文以来長く研究してきた、子どもを描くオペラの歴史についての議論も、書籍としてまとめたいと考えている。</p> <p>② 研究成果をもとにした、娯楽と知的好奇心の両方を満たし、何らかの問題提起性も含む文化行事(たとえば音楽会)の企画を行い、定着・発展させ、この種の催しが東京圏以外でも頻繁に行われるきっかけを作る(昨年度より開始:「社会貢献活動」の項目を参照のこと)。</p> <p>③ 児童文学作品をテーマとした音楽作品を作曲すること(書けばいいというものではないので、その作品がある程度流通するための工夫もしたい)。</p>

<p>最新データ入力日</p>	<p>2016年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
ホンダ アキオ 本多 明生	男	非公表	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(文学)	専門分野	心理学	
学歴	2001年 3月 山形大学人文学部人間文化学科卒業 2001年 4月 東北大学大学院文学研究科人間科学専攻博士前期2年の課程入学 2003年 3月 東北大学大学院文学研究科人間科学専攻博士前期2年の課程修了 2003年 4月 東北大学大学院文学研究科人間科学専攻博士後期3年の課程入学 2006年 3月 東北大学大学院文学研究科人間科学専攻博士後期3年の課程修了, 博士(文学)			
実務経歴	2003年 4月 仙台福祉専門学校非常勤講師(2005年3月まで) 2003年 10月 東北大学文学部ティーチングアシスタント(2004年3月まで) 2004年 4月 仙台医療福祉専門学校非常勤講師(2005年3月まで) 2005年 4月 日本学術振興会特別研究員(DC2)(2006年3月まで) 2006年 4月 日本学術振興会特別研究員(PD)(2006年4月まで) 2006年 5月 いわき明星大学人文学部心理学科研究助手(2011年3月まで) 2011年 4月 東北大学電気通信研究所研究支援者(2012年3月まで) 2011年 4月 スズキ記念病院附属助産学校非常勤講師(2014年3月まで) 2012年 4月 東北福祉大学総合福祉学部福祉心理学科助教(2014年3月まで) 2014年 4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科准教授(現在に至る) 2016年 4月 山梨大学非常勤講師(現在に至る)			
受賞歴	2007年 3月 第11回日本バーチャルリアリティ学会学術奨励賞 2013年 5月 第21回日本感情心理学会独創研究賞			
所属学会	2001年 4月 東北心理学会 2001年 4月 日本心理学会 2005年 4月 日本認知心理学会 2006年 4月 日本バーチャルリアリティ学会 2007年 9月 日本感情心理学会 2009年 12月 International Multisensory Research Forum 2014年 12月 地域安全学会			
特免資格等	年 月 年 月 年 月 年 月			
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	「自主自律」と「公平公正」を教育理念にしている。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>授業は、(1)前回の授業の復習、(2)当日の授業、(3)グループワーク、から構成されている。(1)前回の授業の復習は、10～15分程度で、前回の授業で学生たちに配布した資料(パワーポイントのスライド16枚程度)を中心に内容を解説する形式である。(2)当日の授業は、当日の授業の概要と到達目標を説明してから、40～45分程度で視聴覚教材等を活用して解説を行う形式である。(3)グループワークは、授業によって異なるが、2～3名程度のグループになり、到達目標に対応した課題を行うことが多い。各授業では、出席表を配布・回収しており、出席表に記入される授業内容に対する有益な質問やコメントに対しては、翌週の授業で回答するようにしている。成績評価に関しては、授業でレポートを課す場合は、一つのレポートあたり5点満点で成績評価を行っており、学生が自身の成績評価状況を把握できるよう、採点して返却している。授業では、Google classroomを用いており、当日の資料を公開し、随時関連情報を提供することで、学生の自主学習の促進に取り組んでいる。特に最近はアクティブラーニングに力を入れており、マイクロディベートやワールドカフェなどを授業に取り入れている。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>本多明生(2009). 恋愛・結婚: 妬み・嫉妬. 宮下一博(監修), ようこそ! 青年心理学: 若者たちは何処から来て何処へいくのか(pp. 68-76). ナカニシヤ出版.</p> <p>林洋一(監修), 本多明生・大原貴弘(編集)(2011). 心の科学: 基礎から学ぶ心理学. 明星大学出版部.</p> <p>VandenBos, G. R. (監修), 繁樹算男・西本裕子(監訳)(2013). APA心理学大辞典. 培風館.【感覚知覚領域の訳者を担当】</p> <p>本多明生(2016). マルチモーダル/クロスモーダル知覚. 日本音響学会(編集), 音響キーワードブック(pp. 408-409), コロナ社.</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし</p>
担当授業科目	2016年度: こころの科学Ⅰ, 認知心理学, ココロと現代社会, 心理学実験演習, 基礎ゼミナール, 基礎ゼミナールⅡ(以上, 学部), 修士論文, 心理統計法特論(以上, 大学院)
代表的シラバス	【ココロと現代社会】【概要】現代において「こころの科学」である心理学の研究領域は極めて広く、人間行動のあるところ、すべて心理学の研究分野であるといえるほど、私たちの生活に密着した学問になっています。そして、心理学は、社会の具体的な問題解決に貢献することが期待されるようになってきました。この授業では、現代社会における人間行動の諸相をアクティブ・ラーニングで学びます。【到達目標】① 現代社会における人間行動の諸相を説明することができる。② 地域社会の魅力や課題を説明することができる。③ 他者との意見交換によって自己の思考を相対化することができる。
教育改善活動	担当授業では、シラバスと授業の構造化、公平公正な成績評価を心がけている。授業でレポート課題等を課した場合は、レポート提出後の授業において、採点結果をフィードバックするようにしている。特筆すべき教育改善活動のひとつとしては、授業にマイクロディベートやワールドカフェなどを取り入れており、アクティブラーニングを通じて学生が主体的に学ぶ教育に取り組んでいる。また、授業改善活動の一環として授業を公開する取組を行っている。
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>2015年度の授業評価アンケートにおいては、「教員の授業に対する熱意を感じましたか」「この授業で使用したテキストや配布資料は内容の理解に役立ちましたか」などの項目は「そう思う」「強くそう思う」が8割以上を占めるなど、一定の評価を得ている。また、前任校で担当した講義に対する学生による授業評価も同様に「理解しやすく熱意を感じる講義だった」「とても真剣に誠実に授業を行っている印象をもった」などの好意的な評価を受けており、全評価項目で大学平均値を超えるなど高い成果を上げることができた。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>前任校(東北福祉大学)ならびに山梨英和大学ではFD活動の一環として講義の見学を受け入れている。</p>

## 研究業績

研究の特徴	これまで「人間とはどのような存在か」「人間は社会とどのように相互作用しているのか」について実験心理学の視点からアプローチを行ってきた。近年は、人間とテクノロジーの問題、人間と災害の問題、人間と健康の問題を中心に研究を展開している。
研究経歴	<p>2005年 日本学術振興会特別研究員(DC2)(2006年3月まで)</p> <p>2006年 日本学術振興会特別研究員(PD)(2006年4月まで)</p> <p>2006年 いわき明星大学人文学部心理学科研究助手(2011年3月まで)</p> <p>2011年 東北大学電気通信研究所研究支援者(2012年3月まで)</p> <p>2011年 東北大学防災科学研究拠点拠点員(2012年3月まで)</p> <p>2012年 東北福祉大学総合福祉学部福祉心理学科助教(2014年3月まで)</p> <p>2014年 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科准教授(現在にいたる)</p> <p>2014年 東北大学電気通信研究所共同研究員(現在にいたる)</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>*2016年5月1日時点で著書の業績は11件である, 以下に代表的なものを5件あげる</p> <p>Honda, A., Shibata, H., Hidaka, S., Iwaya, Y., Gyoba, J., &amp; Suzuki, Y. (2008). Transfer Effects on Auditory Skills from Playing Virtual Three-Dimensional Auditory Games. In Weiss, B. N. (Ed), <i>New Research on Acoustics</i> (pp. 141-157). Nova Science Publishers.</p> <p>本多明生 (2009). 防犯: リスクと不安. 仁平義明 (編集), <i>防災の心理学: ほんとうの安心とは何か</i> (pp. 193-212). 東信堂.</p> <p>Seki, Y., Iwaya, Y., Chiba, T., Yairi, S., Otani, M., Oh-uchi, M., Munekata, T., Mitobe, K., &amp; Honda, A. (2011). Auditory Orientation Training System Developed for Blind People Using PC-based Wide Range 3D Sound Technology. In Suzuki, Y., Brungart, D., Iwaya, Y., Iida, K., Cabrera, D., &amp; Kato, H. (Eds), <i>Principles and Applications of Spatial Hearing</i> (pp. 152-162). World Scientific Publishing.</p> <p>林洋一 (監修), 本多明生・大原貴弘 (編集) (2011). <i>心の科学: 基礎から学ぶ心理学</i>. 明星大学出版部.</p> <p>本多明生 (2015). 原発災害をめぐる大学生の態度. 吉原直樹・仁平義明・松本行真 (編著), <i>東日本大震災と被災・避難の生活記録</i> (pp. 737-758), 六花出版.</p> <p>(2) 学術論文</p> <p>*2016年5月1日現在で学術論文の業績は29件である, 以下に代表的なものを5件あげる</p> <p>Honda, A., Shibata, H., Gyoba, J., Saitou, K., Iwaya, Y. &amp; Suzuki, Y. (2007). Transfer Effects on Sound Localization Performances from Playing a Virtual Three-Dimensional Auditory Game. <i>Applied Acoustics</i>, Vol. 68, 885-896.</p> <p>Honda, A., Shibata, H., Gyoba, J., Iwaya, Y. &amp; Suzuki, Y. (2009). Transfer Effects on Communication and Collision Avoidance Behavior from Playing a Three-Dimensional Auditory Game Based on a Virtual Auditory Display. <i>Applied Acoustics</i>, Vol. 70, 868-874.</p> <p>Honda, A., &amp; Nihei, Y. (2009). Sex Differences in Object Location Memory: The Female Advantage of Immediate Detection of Changes. <i>Learning and Individual Differences</i>, Vol. 19, 234-237.</p> <p>Honda, A., Shibata, H., Hidaka, S., Gyoba, J., Iwaya, Y., &amp; Suzuki, Y. (2013). Effects of Head Movement and Proprioceptive Feedback in Training of Sound Localization. <i>i-Perception</i>, Vol. 4, 253-264.</p> <p>Honda, A., Wiwattanapantuwong, J., &amp; Abe, T. (2014). Japanese University Students' Attitudes toward The Fukushima Nuclear Disaster. <i>Journal of Environmental Psychology</i>, Vol. 40, 147-156.</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>*2016年5月1日時点で技術研究報告は11件, 国内外の学会発表は90件である</p>
競争的資金採択課題	2016年5月1日時点での競争的採択課題の実績は15件である。そのうち、2016年5月1日時点で採択されている競争的資金の課題件数は6件である(研究代表者1件, 研究分担者4件, 連携研究者1件)。

学会等参加表・役員	<p>*2016年5月1日時点で、国内外の学会発表は90件である。以下に役員参加のみ記載</p> <p>2004年 4月 東北心理学会庶務・会計委員(2006年3月まで)</p> <p>2009年 12月 12th International Multisensory Research Forum実行委員(2011年10月まで)</p> <p>2013年 1月 第21回日本感情心理学会実行委員(2013年5月まで)</p> <p>2013年 12月 第12回日本認知心理学会プログラム委員(2014年6月まで)</p>
受託共同研究の実績	<p>*2016年5月1日時点で受け入れている競争的資金に関する受託研究・共同研究のみ記載</p> <p>2014年 4月 アクティブリスニング知覚過程理解に基づく音空間提示システム. 科学研究費補助金(基盤研究(B)), 研究代表者: 岩谷幸雄(課題番号: 26280078). 【分担研究者】</p> <p>2014年 4月 動的手がかりを考慮した音空間知覚に関する研究. 東北大学電気通信研究所共同研究プロジェクト, 研究代表者: 本多明生.</p> <p>2014年 4月 生きる力の認知神経科学的分析とその教育応用研究の創成. 日本学術振興会課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業領域開拓プログラム(課題D: 行動・認知・神経科学の方法を用いた, 人文学・社会科学の新たな展開), 研究代表者: 杉浦元亮. 【分担者】</p> <p>2014年 4月 古代アメリカの比較文明論. 科学研究費補助金(新学術領域研究(新規研究領域)), 領域代表者: 青山和夫(領域番号: 1601), 研究代表者: 坂井正人(研究計画A03). 【2014年度~2015年度: 研究協力者】【2016年度~現在: 研究分担者】</p> <p>2016年 4月 ADVISE理論に基づく自由聴取点高精細3次元音空間システムの開発. 科学研究費補助金(基盤研究(A)), 研究代表者: 鈴木陽一(課題番号: 16H01736). 【研究分担者】</p> <p>2016年 4月 精神健康法の効果メカニズムの脳科学的体系化と効果予測技術の開発. 科学研究費補助金(基盤研究(A)), 研究代表者: 杉浦元亮(課題番号: 16H01873). 【連携研究者】</p>
大学院生指導	<p>山梨英和大学大学院では、2015年5月1日時点、修士2年生2名、1年生1名の修士論文指導を担当している。これまで修士修了者2名を輩出した。前任校(いわき明星大学、東北大学、東北福祉大学)でも、大学院生の指導に関与してきた。</p>
研究能力に対する評価	<p>日本バーチャルリアリティ学会第11回大会学術奨励賞(2007年)、日本感情心理学会第21回大会独創研究賞(2013年)を受賞していること、これまでの競争的資金の採択実績や共同研究実績等から、国内の研究者からは、研究能力に対する一定の評価は得られているものとして理解している。そして研究論文の過半数は、国際学術誌で発表していること、それらの論文はこれまで引用されてきた経緯から、研究能力に対する国際的な評価はある程度得られているものとして理解している。以上の状況から総合的に考察すると、国内外の研究者からは、研究能力に対する一定の評価は得られていると思う。また、研究成果はこれまで各種メディア(NHK, UTY, 山梨日日新聞, 読売新聞, 毎日新聞等)に複数回取り上げられていることから、研究能力に対する世間からの評価も一定以上は得られていると思う。特に、2015年度は山梨県と連携して幼保施設の防災対策の実態調査を実施し、その研究は地域社会を中心に高く評価された。</p>

## サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	<p>2014年 6月 山梨英和大学ブランディング研究会顧問(現在にいたる)</p> <p>2014年 4月 山梨英和大学広報戦略部運営会議委員(現在にいたる)</p> <p>2014年 4月 山梨英和大学大学院FD推進委員会委員(現在にいたる)</p> <p>2015年 4月 大学運営評議会委員(現在にいたる)</p> <p>2015年 4月 学長特別補佐(広報戦略担当)(現在にいたる)</p> <p>2015年 4月 学部入学者選抜会議委員(現在にいたる)</p> <p>2015年 4月 大学院入学者選抜会議委員(現在にいたる)</p> <p>2015年 4月 FD・SD推進委員会委員(現在にいたる)</p> <p>2015年 4月 大学院FD推進委員会委員(現在にいたる)</p>
-----------------	---

アドバイザー活動実績	山梨英和大学着任後は修士修了生2名を輩出した。2016年5月1日時点、修士2年生2名、1年生1名の修士論文指導を担当している。前任校(いわき明星大学、東北大学、東北福祉大学)でも、大学院生の指導に関与してきた。
後進育成活動実績	同上
社会貢献活動	<p>(1)講演会 *2016年5月1日時点で講演会の実績は3件である、以下に山梨英和大学着任後の実績をあげる</p> <p>2014年 5月 感謝の心理学:感謝して受け取るものに豊かな収穫あり. 山梨英和大学後援会総会.</p> <p>(2)出前講座 *2016年5月1日時点で出前講座の実績は18件である、以下に山梨英和大学着任後の実績をあげる</p> <p>2014年 7月 ココロの科学:相談することはなぜストレスを解消するのか. 山梨県立巨摩高等学校定時制.</p> <p>2014年 10月 感謝の心理学:感謝して受け取る者に豊かな収穫あり. 山梨英和高等学校.</p> <p>2015年 11月 はじめての心理学. 甲府西高等学校.</p> <p>(3)公開講座 *2016年5月1日時点で公開講座の業績は7件である、以下に山梨英和大学着任後の実績をあげる</p> <p>2014年 8月 感謝の心理学:感謝して受け取る者に豊かな収穫あり. 山梨英和大学オープンキャンパス模擬講義</p> <p>2014年 10月 脳にまつわる神話と事実. 県民コミュニティカレッジ:地域ベース講座</p> <p>2015年 10月 お金は人を変えるのか. 県民コミュニティカレッジ:地域ベース講座</p> <p>(4)学外審議会・委員会等 特になし</p> <p>(5)その他 *2014年6月現在でシンポジウム等の業績は5件、その他の活動は2件である、以下に山梨英和大学着任後の実績をあげる</p> <p>2014年 10月 山梨県立北杜高等学校「総合的な学習の時間」における校外調査活動への協力</p> <p>2015年 3月 甲斐清和高等学校「1年生ガイダンス」における模擬授業への協力</p>

## 成果と目標

専門的成果	<p>①マルチモーダル情報処理過程の解明と同研究成果の工学的応用に関する学際的研究に取り組んでおり、これまで国内外の学術誌等(例えば<i>i-Perception</i>や<i>Applied Acoustics</i>, 日本バーチャルリアリティ学会論文誌)に研究成果を発表している。</p> <p>②人間と災害の問題に関する学際的研究に取り組んでおり、これまで国内外の学術誌等(例えば<i>Journal of Environmental Psychology</i>や<i>PLoS ONE</i>, 地域安全学会論文集)に研究成果を発表している。</p> <p>③上記研究成果に対しては、日本バーチャルリアリティ学会や日本感情心理学会から学会賞が授与されたほか、日本音響学会において招待講演を行うなど、評価されている。そしてこれまでの研究成果はメディアにも複数回取り上げられている。</p>
-------	---

<p>専門的目標</p>	<p>①「人間はどのような存在なのか」「人間の本質とは何か」に関しては、実験心理学的なアプローチを用いることによって、情報処理システムとしての人間の特徴を明らかにしたいと考えている。具体的には、視覚や聴覚、体性感覚等の感覚統合過程の解明と工学的応用の問題に取り組む。</p> <p>②「人間は社会とどのように相互作用しているのか」に関しては、災害心理学に関する先駆的な研究に着手したいと考えている。具体的には、原発問題やエネルギー問題、大規模災害に対する態度構造の解明に取り組む。</p> <p>③山梨県に関係するテーマにも心理学の視点からアプローチすることによって研究成果の社会還元にも取り組みたいと考えている。</p>
--------------	---

<p>最新データ入力日</p>	<p>2016年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
スギヤマ アユム 杉山 歩	男	1979年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(理学)	専門分野	数理物理・物性基礎、機械学習、サービスサイエンス	
学 歴	1998年	4月	金沢大学理学部計算科学科 入学	
	2002年	3月	金沢大学理学部計算科学科 卒業	
	2002年	4月	金沢大学大学院自然科学研究科数物科学専攻 博士前期課程入学	
	2004年	3月	金沢大学大学院自然科学研究科数物科学専攻 博士前期課程修了	
	2004年	4月	金沢大学大学院自然科学研究科数理情報科学専攻 博士後期課程入学	
実 務 経 験	2007年	4月	北陸先端科学技術大学院大学 研究員	
	2011年	4月	科学技術振興機構 下田ナノ液体プロセスプロジェクト 研究員	
	2012年	5月	北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 助教	
	2014年	4月	山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 准教授(現在に至る)	
受 賞 歴	2009年	9月	The 5th ACCMS Best Poster Award	
	年	月		
	年	月		
所 属 学 会	2011年	11月	日本応用物理学会(現在に至る)	
	2012年	9月	分子科学会(現在に至る)	
	2011年	11月	情報処理学会(現在に至る)	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・ ・	2007年	3月	高等学校教諭専修免許状 理科	
	年	月		
	年	月		
	年	月		
e-mail	ayumu[atmark]yamanashi-eiwa.ac.jp			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>教育の理念:創造的人材の育成</p> <p>文系・理系の枠組みを超えた分離融合的視点に立脚し、21世紀の知識社会を引率する知的なたくましさを備えた人材の育成を行う。グループワーク等を重視した知識共創の場を提供し、山梨県から創造的な発信を行う枠組みの構築を推進する。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>講義「基礎プログラミング」にてクリッカーを利用した学生参加型の講義を行った。プログラミングの講義では学生のバックグラウンドによって参加者にレベル差が生じ易い。そこで、座学の部分ではクリッカーによるアンケートを導入し、全員が全体の中の自分の理解度や習熟度を把握出来る様に取り組んだ。</p> <p>また、北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科において講義「基礎統計学」ではホーソールバオ教授と共に講義の全ての内容を日本語・英語の両言語を用いた講義展開を行った。全ての講義スライドは日本語・英語を併記したものを使用し、日本人学生へは英語講義の導入的役割を、留学生へは講義のフォローの意味合いを持たせる事に成功した。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>全ての講義で特に教科書は指定せず、自作したスライドを使用している</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし</p>
担当授業科目	<p>2016年度:</p> <p>IT English, 山梨学I, 山梨学II, メディア表現基礎, プログラミングI,II,III, 科学的なものの見方, 基礎ゼミナール, 専門ゼミナール, 卒業研究</p>
代表的シラバス	<p>「プログラミングI」</p> <p>概要:</p> <p>本講義では、代表的なプログラミング言語の一つであるC言語を利用しプログラムを書く手法を習得します。本科目と「プログラミング基礎演習」と合わせて履修することでC言語の基礎部分の習得を目指します。Macbook Airを利用した授業展開を予定していますので、講義には必ずMacbook Airを持参して下さい。また、個人のMacbook Airを保有していない学生に対しては貸し出しにより対応します。</p> <p>到達目標:</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. プログラムによって計算機が作動するという仕組みについて理解する。</li> <li>2. ターミナル上でコンパイル、実行、デバッグというプログラミングの一連の作業が出来る。</li> <li>3. C言語の仕様の初歩的な事項(関数main、データ型の宣言、変数、代入、流れの制御、配列)について理解し、自分でプログラムを作成することができる。</li> </ol>
教育動善活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ FD・SD活動への参加</li> <li>・ 授業アンケートのフィードバック</li> </ul>
教育能力評価に対する	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>2015年度の講義については概ね良好な結果が得られている。一部の学生から講義内容が高度すぎるとの指摘があり、本年度は講義の進捗スピードを抑える改善策を実施している。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>教員向けに講義を公開しており、参加教員からの意見を講義にフィードバックしている</p>

## 研究業績

研究の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シミュレーションベースデマイングの手法提案と技術開発</li> <li>・インクジェット用草木染インクの開発と地域ブランディングへの展開</li> <li>・SNSデータからの経験価値・信頼価値の定量的評価手法の開発</li> </ul>
-------	---

研究経歴	<p>2007年 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 博士研究員、密度汎関数理論に基づいた電子状態計算によるカーボンナノチューブの物性計算に従事</p> <p>2011年 ERATO下田ナノ液体プロジェクトにて液体シリコン及び酸化物材料の物性研究に従事</p> <p>2012年 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 助教、データマイニングの手法を用いたシミュレーションデータの解析に関する研究に従事</p> <p>2014年 山梨英和大学 人間文化学部・人間文化学科 准教授、密度汎関数理論に基づいた電子状態計算、機械学習・データマイニングによるデータ解析に関する研究に従事</p>
研究実績	<p>(1)著書 特になし</p> <p>(2)学術論文</p> <p>1. A Method for Opinion Mining of Coffee Service Quality and Customer Value by Mining Twitter Shu Takahashi, Ayumu Sugiyama, Youji Kohda Knowledge, Information and Creativity Support Systems, Vol. 416 of the series Advances in Intelligent Systems and Computing pp 521–528 (2016)</p> <p>2. All solution-processed amorphous oxide thin-film transistors using UV/O<sub>3</sub> treatment K.Umeda, T.Miyasako, A.Sugiyama, A. Tanaka, M. Suzuki, E. Tokumitsu, T. Shimoda, Jpn. J. App. Phys. 53, Num. 2S, pp. 02BE03 (2014)</p> <p>3. Impact of UV/O<sub>3</sub> treatment on solution processed amorphous InGaZnO<sub>4</sub> thin-film transistors K.Umeda, A.Sugiyama, A.Tanaka, M.Suzuki, E.Tokumitsu, T.Shimoda, J. App. Phys. 113 pp184509–184515, (2013)</p> <p>4. Ab-initio study of intermolecular interaction and structure of liquid cyclopentasilane T.P.Lam, A.Sugiyama, M.Masuda, T.Shimoda, N.Otsuka, H.C.Dam, Chem.Phys. 400, pp59–64 (2012)</p> <p>5. Simulation-based Data Mining Solution to the Structure of Water Surrounding Proteins H.C.Dam, H.T.Bao, A.Sugiyama, Proceedings of International Joint Conference on Artificial Intelligence (IJCAI) 2011, pp2424–2429 (2011)</p> <p>6. Ab initio study of the polymerisation of cyclopentasilane A.sugiyama, T.Shimoda, H.C.Dam, Molecular Physics 108, 12 pp1649–1653 (2010)</p> <p>7. First-principles study of the thermally induced polymerization of cyclopentasilane P.V.Dung, P.T.Lam, A.Sugiyama, T.Shimoda, H.C.Dam, Computational Material Science 49, 1 pp S21–S24, (2010)</p> <p>8. First principles study of the physisorption of hydrogen molecule on graphene and carbon nanotube surfaces adhered by Pt atom. T.P.Lam, P.V.Dung, A.Sugiyama, N.D.Duc, T.Shimoda, H.C.Dam Computational Materials Science 49, 1 pp S15–S20, (2010)</p> <p>9. Density functional study of Pt<sub>4</sub> clusters adsorbed on a carbon nanotube support, N.T.Cuong, <u>A.Sugiyama</u>, A.Fujiwara, T. Mitani, H.C.Dam, <b>Phys. Rev. B</b> 79, 23 pp234417 (2009)</p> <p>9. Substrate-mediated interactions of Pt atoms adsorbed on single-wall carbon nanotubes: Density functional calculations, H.C.Dam, N.T.Cuong, A.Sugiyama, T.Ozaki, A.Fujiwara, T.Mitani, H.Okada Phys. Rev. B 79, 11 pp115426–115432 (2009)</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>1. Co-experience effects of hot-spring bathing with friends: An experimental study Ayumu Sugiyama, Mizuna Nagasawa, Akio Honda 31st International Congress of Psychology (ICP2016), 2016</p> <p>2. Structural stability of bismuth-niobium-oxide films in solution process Ayumu Sugiyama, Tadaaki Mitani The 2015 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies (Pacifichem) (2015)</p> <p>3. Quantative Evaluation of the Coffee Service: Quality and Customer Value by Mining Twitter Shu Takahashi, Ayumu Sugiyama, Youji Kohda KICSS2014: 9th International Conference on Knowledge, Creativity Support System(2014)</p> <p>4. Analysis of service values: A study on Japanese coffee market by using Twitter Mining</p>

研究実績	<p>Shu Takahashi, Yuto Niwa, Ayumu Sugiyama, Hieu Chi Dam and Takafumi Kawasaki The Third Asian Conference on Information Systems (2014)</p> <p>5. Ab-Initio Study of Hydrogen Bonds in Liquid Cyclopentasilane A.Sugiyama, P.T.Lam, N.Otsuka, T.Shimoda, H.C.Dam, The 6th Conference of the Asian consortium on Computational Materials Science, Singapore (2011)</p> <p>6. Characterizing and Classification of Dynamical Structure of Water Molecules Under Ions, Ethanol Environments by Molecular Dynamics Simulation, D.Nakamura, A.Sugiyama, T.Mizukami, H.T.Bao, H.C.Dam, The 6th Conference of the Asian consortium on Computational Materials Science (2011)</p> <p>7. Data Mining Analysis of the Hydration Water behavior in the Structural Change of Protein T.Mizukami, A.Sugiyama, H.T.Bao, H.C.Dam, The 6th Conference of the Asian consortium on Computational Materials Science, (2011)</p> <p>8. Observation of Dynamical Structure of Water Molecules under Supercooling Process by Data Mining of Molecular Dynamics Simulations, Y.Nishino, A.Sugiyama, T.Mizukami, H.T.Bao, H.C.Dam The 6th Conference of the Asian consortium on Computational Materials Science, (2011)</p> <p>9. Mining Simulation Data of Aqueous Protein Solutions: A Mixture Model Approach, H.C.Dam, A.Sugiyama, N.V.Cuong, T.Mizukami, H.T.Bao, The 6th Conference of the Asian consortium on Computational Materials Science, (2011)</p>	
競争的資金採択課題	<p>(最新のものから記載)</p> <p>1. 日本学術振興会、科学研究費助成事業・若手研究(B)(2014年4月から2017年3月まで) 「帰納法アプローチによるシミュレーションデータからの物性予測と解釈」、研究代表</p> <p>2. 日本学術振興会、科学研究費助成事業・基盤研究(A)(2013年4月から2018年3月まで) 「経験・信頼に基づく知識活用型サービスバリューチェーンの実証研究」、研究分担者</p> <p>3. 三谷研究開発支援財団 平成25年度助成研究 (2013年6月から2014年5月まで) 「インクジェット草木染による地域資源ブランディング戦略」、研究代表者</p>	
学会等発表・役員参加	<p>2014年</p> <p>2014年</p> <p>2013年</p> <p>2013年</p>	<p>3月 Third Asian Conference on Information System (ACIS2014) Program Committee</p> <p>3月 「決定木を用いた質的データからのグラフ構造学習」川崎、鈴木、杉山、DAM 情報処理学会 第76回全国大会</p> <p>9月 「広告接触による消費者行動変化 デモグラフィック分割による分析」高橋、岡田、丹羽、川崎、杉山、DAM, 情報処理学会 第76回全国大会</p> <p>9月 「スパースモデルによる水溶液構造の解析」水上、杉山、川崎、高木、HO、DAM 第7回分子科学討論会</p> <p>「L1型正則か線形回帰モデルを用いたシミュレーションデータからの二元合金の物性予測」鈴木、川崎、杉山、水上、DAM、HO, 第7回分子科学討論会</p>
受託共同研究の実績	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>	
大学院生指導	特になし	

研究能力に対する評価	<p>1. シミュレーションベースデータマイニングに関する研究において、The 5th ACCMSにてBest Poster Awardを受賞している。</p> <p>2. 第一原理計算によるナノ材料の物性研究はPhys. Rev. B, App. Phys. Lett.等の一流学術誌に掲載され、高い評価を受けている</p> <p>3. 三谷研究開発支援財団、科研費等の外部資金を継続的に獲得し、着実に研究を遂行している。</p>
------------	--

### サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	<p>2015年 4月 学長特別補佐(広報戦略)</p> <p>2015年 4月 ダンス部顧問</p> <p>2014年 5月 山梨英和大学ブランディング研究会 副顧問</p> <p>2014年 4月 戦略的學生募集WG メンバー</p> <p>2014年 4月 広報戦略部運営会議 メンバー</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	<p>(1)講演会</p> <p>2015年 2月 IEN.Y 産学官金連携の取り組み ゲスト講演</p> <p>2016年 6月 IEN.Y 産学官金連携の取り組み ゲスト講演</p> <p>(2)出前講座</p> <p>2015年 9月 山梨英和高校</p> <p>2015年 10月 山梨高校</p> <p>2014年 12月 増穂商業高校</p> <p>(3)公開講座</p> <p>年 月 特になし</p> <p>(4)学外審議会・委員会等</p> <p>2016年 2月 おもてなし山梨 実行委員会 委員</p> <p>2016年 5月 Mt. Fuji イノベーションキャンプ実行委員会 委員</p> <p>(5)その他</p> <p>2012年 8月 大学発ベンチャー企業「株式会社ククルス」設立</p>

### 成果と目標

専門的成果	<p>① 密度汎関数理論に基づいた量子化学計算により2元合金の基となる2原子分子系の各種物性値のデータベース化を行った。</p> <p>②①で作成したデータベースと既知の物理量を基とし、L1型正則か線形回帰モデルによる解析を行う手法を開発し、高い精度で合金の融点予測に成功した。</p> <p>③ Twitterデータをリアルタイムで蓄積するサーバーを構築し、顔文字データの解析を行った。解析には形態素解析およびクラスタリングの手法を使用し、SNS空間での感情変化の時間経過を可視化する手法を開発した。</p>
-------	---

<p>専門的目標</p>	<p>①前年度の研究成果①を基に、1次元鎖、2次元平面に関する2原子モデルを構築し、前年度に準じた量子化学計算によりデータベースの拡張を行う。</p> <p>②拡張されたデータベースを基により広範囲の物理量に対するデータマイニングを試行し、マテリアルインフォマティクスに適切な機械学習・データマイニング手法の提案を行う。</p> <p>③Tweetデータに基づいた探索価値・経験価値・信頼価値の評価手法の開発と、珈琲に関する話題をターゲットとした実例課題に取り組む。</p>
--------------	---

<p>最新データ入力日</p>	<p>2016年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
スギウラ マサブ 杉浦 学	男	1980年	准教授	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(政策・メディア)	専門分野	教育学, 学習支援システム	
学 歴	1999年	3月	東京都 私立 学習院高等科 卒業	
	1999年	4月	慶應義塾大学 環境情報学部 入学	
	2003年	3月	慶應義塾大学 環境情報学部 卒業 学士(環境情報学)	
	2003年	4月	慶應義塾大学 政策・メディア研究科 修士課程 入学	
	2005年	3月	慶應義塾大学 政策・メディア研究科 修士課程 修了 修士(政策・メディア)	
	2005年	4月	慶應義塾大学 政策・メディア研究科 後期博士課程 入学	
	2010年	3月	慶應義塾大学 政策・メディア研究科 後期博士課程 修了 博士(政策・メディア)	
実 務 経 験	2005年	4月	学習院高等科 情報科 非常勤講師(2013年3月まで)	
	2006年	4月	慶應義塾大学 環境情報学部 非常勤講師(現在に至る)	
	2007年	4月	慶應義塾大学 看護医療学部 非常勤講師(2007年9月まで)	
	2008年	10月	津田塾大学 女性研究者支援センター 特任研究員(2009年3月まで)	
	2009年	4月	津田塾大学 女性研究者支援センター 特任助教(2010年3月まで)	
	2010年	4月	津田塾大学 女性研究者支援センター 特任講師(2013年3月まで)	
	2012年	4月	慶應義塾大学 看護医療学部 非常勤講師(2012年9月まで)	
	2012年	4月	法政大学 兼任講師(2013年3月まで)	
	2013年	4月	東京都市大学 メディア情報学部 非常勤講師(現在に至る)	
	2013年	4月	津田塾大学 女性研究者支援センター 客員研究員(現在に至る)	
	2013年	4月	山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 専任講師(2015年3月まで)	
	2015年	4月	山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 准教授	
受 賞 歴	2008年	8月	情報処理学会 コンピュータと教育研究会 第10回情報教育シンポジウム 奨励賞	
	2015年	8月	山梨英和大学 ベストエドゥケーター賞	
所 属 学 会	2004年	1月	情報処理学会 会員(現在に至る)	
	2006年	2月	日本教育工学会 会員(現在に至る)	
	2007年	8月	CIEC 会員(現在に至る)	
	2008年	7月	IEEE Computer Society 会員(現在に至る)	
	2016年	1月	電子情報通信学会 会員(現在に至る)	
特免資 許許格 等・・・	2005年	3月	高等学校 教育職員免許状 一種(情報) 慶應義塾大学	
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

国内学会発表・国際会議発表

解説

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	情報分野の専門教育に限らず、文系の学生も対象として、ICTを活用した問題発見・問題解決能力が獲得できる教育を目指す。そのため、基礎ゼミナールなどの初年次教育の段階から、ICTを活用した創造的な学習環境とカリキュラムを構築することを目標とする。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 日本語プログラミング言語を利用した初学者向けのプログラミング教育の実践等</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 慶應義塾大学SFCの初年次情報教育のカリキュラムなど多数 詳細は研究業績を参照</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 詳細は研究業績を参照</p>
担当授業科目	2016年度担当科目：基礎ゼミナール、ICTスキル、データサイエンスⅡ、メディアサイエンス、アルゴリズムとデータ構造Ⅰ・Ⅱ、メディアプロジェクトⅠ、専門ゼミナール、卒業研究
代表的シラバス	2016年度「メディアプロジェクトⅠ」概要： ICTを使ったイノベーションをどのように実現するかを実践的なプロジェクトを行いながら学びます。プロジェクトのテーマは「映像制作」「デジタルアプリケーション」「ハードウェアとソフトウェアを組み合わせたシステム構築」の3つです。それぞれのプロジェクトに取り組みながら、関連する分野の基礎知識と必要なツールの使い方を学びます。また、イノベーションを生み出す方法論として、デザイン思考について学び、ストーリーボード、マインドマップ、ラピッド・プロトタイピングなどの手法を実プロジェクトで活用する方法を身につけます。
教育改善活動	2013年度からのITリテラシー演習・ICTスキルにおいて、授業評価と教育効果測定を目的としたアンケート調査を実施し、結果を研究論文としてまとめた。同調査は継続的に実施しており、カリキュラム改善に活用している。 FD/SD研修会にて、ICTスキル向上のための講習会を担当し、業務や教育活動に関するICT活用の支援を実施している。 授業アンケート調査の方法改善(手作業による集計からマークシート方式への転換、完全デジタル化)に関する支援を実施している。
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 2015年度の担当講義については概ね良好な結果が得られている。演習科目については、質問対応にTAが十分に活用できていないという指摘があり、この点については改善を行っている。また、ICT関連の科目については、他の授業科目との関連に関する評価が低いという課題がある。この点は他のコースの授業の状況も把握し、科目間の関連性を示せるように工夫が必要と考えている。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 本学での授業評価結果はなし</p>

## 研究業績

研究の特徴	中等・高等教育における情報教育、主にプログラミング教育用のソフトウェアおよび教材コンテンツの開発、教育学習支援情報システムに関する技術開発と学習効果測定に関する研究を実施している。
研究経歴	<p>2009年 津田塾大学 女性研究者支援センター 特任教員(2013年3月まで) 教育ワークショップの実践手法と共創行動の分析(共同研究)に関する研究に従事 KinectやArduinoを活用した教育ワークショップの実践手法に関する研究に従事</p> <p>2013年 山梨英和大学 人間文化学部 専任講師(2015年3月まで) 情報教育、教育学習支援情報システムに関する研究に従事</p> <p>2015年 山梨英和大学 人間文化学部 准教授(現在に至る) プログラミング教育を対象とした教育学習支援情報システムに関する研究に従事</p>

## (1) 著書

- [1-1] 杉浦 学 著・阿部 和広 監修, Scratchではじめよう! プログラミング入門, 日経BP, 2015.6  
 [1-2] 大岩 元 監修・松澤 芳昭 著・杉浦 学 編著, ことだま on Squeakで学ぶ論理思考とプログラミング, 株式会社 イーテキスト研究所, 2008.4

## (2) 学術論文(査読有の和文論文誌 全件、査読有の国際学会 抜粋)

- [2-1] Yoshiaki Matsuzawa, Takashi Ohata, Manabu Sugiura, Sanshiro Sakai, Language Migration in non-CS Introductory Programming Through Mutual Language Translation Environment, Proceedings of the 46th ACM Technical Symposium on Computer Science Education, SIGCSE '15, pp.185-190, 2015.3.  
 [2-2] 杉浦 学・秋月 拓磨・後藤 晶・難波 道弘・高橋 弘毅, Build and Bring Your Own DeviceによるICT活用能力の育成, 日本教育工学会 論文誌 Vol.38 No.3, pp.287-297, 2014.12.  
 [2-3] 松澤 芳昭・保井 元・杉浦 学・酒井 三四郎, ビジュアル-Java相互変換によるシームレスな言語移行を指向したプログラミング学習環境の提案と評価, 情報処理学会論文誌, Vol.55, No 1, pp.57-71, 2014.1  
 [2-4] Yoshiro Miyata, Manabu Sugiura, Mihoko Kamei and Khala Gahu, Conference Proceedings of Hong Kong International Conference on Education, Psychology and Society, pp.736-742, 2013.12  
 [2-5] 宮田 義郎・杉浦 学・亀井 美穂子, ワールドミュージアム-志を広げる多文化異年齢コラボレーション, 日本教育工学会 論文誌, Vol.37 No.3, pp.299-308, 2013.11  
 [2-6] 杉浦 学・松澤 芳昭・岡田 健・大岩 元, アルゴリズム構築能力育成の導入教育: 実作業による概念理解に基づくアルゴリズム構築体験とその効果, 情報処理学会 論文誌, Vol.49 No.10, pp.3409-3427, 2008.2  
 [2-7] 松澤 芳昭・杉浦 学・大岩 元, 産学協同のPBLにおける顧客と開発者の協創環境の構築と人材育成効果, 情報処理学会 論文誌, Vol.49 No.2, pp.944-957, 2008.2  
 [2-8] 杉浦 学・大岩 元, テスト問題を改善するための協調作業を支援する環境構築, 日本教育工学会 論文誌, Vol.30 No.3, pp.171-181, 2006.12  
 [2-9] Manabu Sugiura, Hajime Ohiwa, A Supporting System of Informatics Education For University Freshmen, Ifip Wg 3.7 7th Conference on Information Technology in Educational Management(ITEM), pp.27-32, 2004.8

## (3) 国内学会発表・国際会議発表・紀要(2010年以降のみ抜粋)

- [3-1] 高橋 弘毅・近藤 美和・宿院 頼・藤巻 小百合・三井 貴子・難波 道弘・杉浦 学・秋月 拓磨, 山梨英和中学校の海外姉妹校交流におけるタブレット端末の活用, 山梨英和大学紀要 13, pp.63-73, 2015.1.  
 [3-2] Manabu Sugiura, BVH Character Animation Files for Scratch, Scratch @MIT 2014(Ignite Talk), 2014.8.  
 [3-3] Nobuko Kishi・Manabu Sugiura・Kazuhiro Abe・Stephen Howell, Introducing New Input Devices in Hands-On Workshops, Scratch @MIT 2014(Poster and Demonstration), 2014.8.  
 [3-4] Kazuhiro Abe・Akifumi Kumai・Yu Dobashi・Daisuke Kuramoto・Manabu Sugiura・Nobuko Kishi, Programming Education Gathering: Raspberry Pi, Scratch @MIT 2014(Poster and Demonstration), 2014.8.  
 [3-5] 高岡 詠子・杉浦 学・小宮 仁志, タイピング動作特性の解析, 情報処理学会 研究報告コンピュータと教育(CE-125 9), pp.1-14, 2014.5  
 [3-6] 難波 道弘・杉浦 学・秋月 拓磨・後藤 晶・高橋 弘毅, 1人1台端末の学習環境を支えるシステムの実践-2年目に向けて-, 日本教育工学会研究報告集 14(2), pp.1-6, 2014.5  
 [3-7] 難波 道弘・杉浦 学・秋月 拓磨・後藤 晶・高橋 弘毅, 1人1台端末の学習環境におけるICT教育の試み, 日本教育工学会研究報告集 13(4), pp.39-46, 2013.10  
 [3-8] 高橋 弘毅・難波 道弘・宿院 頼・近藤 美和・藤巻 小百合・杉浦 学・秋月 拓磨, タブレット端末を用いた教育実践報告, 日本教育工学会研究報告集 13(4), pp.47-52, 2013.10  
 [3-9] 高岡 詠子・田村 啓・杉浦 学, 初心者のタイピング動作特性の解析, 情報処理学会 研究会報告(CE-120 9), pp.1-8, 2013.6  
 [3-10] Nobuko Kishi, Manabu Sugiura, Can Programming Concepts Learned through Physical Actions? (Poster), The 10th Asia Pacific Conference on Computer Human Interaction (APCHI 2012), 2012.8  
 [3-11] 植原 啓介・杉浦 学・服部 隆志, 新時代の問題発見・問題解決のための情報技術関連基礎教育, 平成24年度 ICT利用による教育改善研究発表会, 2012.8  
 [3-12] Stephen Howell, Nobuko Kishi, Manabu Sugiura, Anders Berggren, Scratch and Kinect Computer Camps: Best Practices and Future Developments (Panel Discussion), Scratch@MIT (Massachusetts Institute of Technology), 2012.7  
 [3-13] 岡田 健・杉浦 学・大岩 元, オブジェクト指向を実現する日本語プログラミング言語の試作, 日本ソフトウェア科学会第27回大会, 2011.9  
 [3-14] 宮田 義郎・杉浦 学・原田 泰, 複数大学, 小学校をつなぐ協同制作による異文化・異年齢の創造的学び, 日本教育工学会研究報告集 11(1), pp.297-304, 2011.3  
 [3-15] Daishi Kato, Manabu Sugiura PaPeRoch: A Research Project for Co-Creation Using a Communication Robot and Scratch (Posters and Demonstrations), Scratch@MIT (Massachusetts Institute of Technology), 2010.8  
 [3-16] 杉浦 学・小館 亮之・来住 伸子・加藤 大志・植村 弘洋・國枝 和雄・山田 敬嗣, 創造的ワークショップを実現するロボット制御プログラミング環境, 情報処理学会 研究会報告(CE-103) Vol.2010 No.12, 2010.2

## (4) 解説記事(全件)

- [4-1] 来住 伸子・小館 亮之・杉浦 学, 女子大学生のための情報科学教育-最近の海外事例紹介-, 情報処理学会誌 53巻11号 ペタ語義, pp.1222-1225, 2012.11  
 [4-2] 杉浦 学・来住 伸子・小館 亮之, 女子中高生の理系進路選択支援を目的としたプログラミングワークショップ, 情報処理学会誌 53巻9号 ペタ語義, pp.978-981, 2012.9  
 [4-3] 来住 伸子・小館 亮之・杉浦 学・高橋 裕子, 情報通信分野における女子中高生対象の啓蒙活動-津田塾大学女性研究者支援センターの取り組み-, 産学官連携ジャーナル, Vol.8 No.8 2012, pp.23-25, 2012.9

競争的資金採択課題	2014年4月1日～2017年3月31日(予定) 科学研究費助成 若手研究(B) フィジカルコンピューティングによるメディア表現教育の支援環境構築(研究課題番号:26750089) 研究代表者  2016年度 電子情報通信学会 東京支部 教育イベント 実施責任者	
学会等発表・役員参加	学会発表については研究業績欄に記載 役員参加特になし	
共同研究・受託研究の実績	2009年	4月 教育ワークショップの実践手法と共創行動の分析(2011年3月まで, 3,000千円) NEC C&Cイノベーション研究所との共同研究 研究代表者
	2011年	4月 平成23年度 女子中高生の理系進路選択支援事業(2012年3月まで) 科学技術振興機構による津田塾大学への委託事業 実施分担
	2011年	6月 iRobot社自動掃除機、ロモティブ社教育用ロボットに関する実証研究(継続) iRobot社, ロモティブ社 日本総代理店との共同研究
	2015年	3月 株式会社アイ・ラーニング 受託研究(2016年3月まで) Scratch2Romoを活用した情報教育の実践に関する研究 研究代表者
大学院生指導	特になし	
研究能力に対する評価	<p>日本語プログラミング環境に関連した研究に関しては、教科書[1-2]としての出版や査読付き論文誌[2-1]と[2-3]と[2-6]が採録されており、一定の評価を得ていると考えている。なお、教科書[1-2]は複数の教育機関での利用実績がある。プログラミングの入門教育については[1-1]の書籍の出版として成果が得られている。</p> <p>山梨英和大学にて実践している、一人一台端末を活用した情報教育の研究に関しては、査読付き論文誌[2-2]が採録されている。</p> <p>教育学習支援システムをテーマとした研究については、論文誌[2-8]と査読付きの国際学会[2-9]に掲載実績がある。</p> <p>プログラミングをテーマとした教育ワークショップの実践手法に関しては、[4-1]や[4-3]の解説として研究活動の成果を広く公表している。複数大学におけるコラボレーションを取り入れた学習活動に関しては、論文誌[2-4]や[2-5]が採録されている。</p>	

### サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2013年	4月 入学試験問題作成・採点担当
	2014年	4月 情報システムコース コーディネーター、入学試験問題作成・採点担当 広報戦略部運営会議 委員、戦略的學生募集ワーキンググループメンバー
	2015年	4月 情報システムコース コーディネーター、入学試験問題作成・採点担当 広報戦略部運営会議 委員、新カリキュラムワーキンググループメンバー
	2016年	4月 メディア・サイエンス領域連絡者、入学試験問題作成・採点担当 広報戦略部運営会議 委員、ICTサポートデスク運営担当者

アドバイザー活動実績	基礎ゼミナール2の学生に対する学習指導、3,4年生の就職・進学支援等を実施している。
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	<p>(1)講演会</p> <p>2013年 12月 プログラミング学習普及プロジェクト「PEG」キックオフイベントにおける講演</p> <p>(2)出前講座</p> <p>2013年 6月 2013年度第1回 オープンキャンパス模擬授業担当</p> <p>2013年 8月 2013年度第4回 オープンキャンパス模擬授業担当</p> <p>2013年 12月 山梨英和中高における連携ワークショップ</p> <p>2014年 9月～3月 山梨英和中高におけるSSH指導</p> <p>2015年 9月～3月 山梨英和中高におけるSSH指導</p> <p>(3)公開講座</p> <p>特になし</p> <p>(4)学外審議会・委員会等</p> <p>2015年 5月 NPO法人山梨通信研究所理事(現在に至る)</p> <p>2015年 6月 NPO法人CANVAS フェロー(現在に至る)</p> <p>2016年 5月 Scratch Day in Yamanashi 実行委員</p> <p>(5)その他</p> <p>2010年 8月 日本教育大学院大学 教員免許講習 講師(現在に至る)</p>

## 成果と目標

専門的成果	<p>①プログラミング教育用のソフトウェアおよび教材コンテンツの開発:Squeak Etoysをベースとした日本語プログラミング環境の構築を行い、アルゴリズム構築能力を育成するためのカリキュラム作成を行った。</p> <p>②教育学習支援情報システムに関する技術開発:既存の教育学習支援システムに関する機能拡張を行うことで、試験問題の作問作業と状態遷移管理を支援し、作問やレビューの負担を軽減するシステムを開発した。</p> <p>③プログラミングをテーマとした教育ワークショップ手法の実践:コミュニケーションロボットやKinectやArduinoなどの教材を活用したワークショップのカリキュラムを開発し、実践を行った。</p>
専門的目標	<p>①フィジカルコンピューティングによるメディア表現教育の支援環境構築:メディアアートなどの表現教育におけるプログラミング学習の支援環境の構築と評価を実施する(科研採択課題)。</p> <p>②プログラミング教育の教育効果測定:①と関連し、日本語プログラミング環境を使った授業などにおいて、既に行っているテスト結果の分析作業等を行い、学習効果を具体的な数値として測定するための手法を検討する。</p> <p>③タッチタイピングの練習環境の評価:オンラインで動作するタッチタイピング練習ソフトウェアの練習ログを解析し、具体的な教育効果の測定と効果的な練習手法の分析を行う。</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
ダニー ブラウン Danny W. Brown		男	1961年	専任講師	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士		専門分野	外国語教育	
学 歴	1979年	5月	Bowling Green High School, Kentucky, U.S.A. 卒業		
	1979年	9月	Southwestern Assembly of God College, Texas, U.S.A. 入学(1980年12月まで)		
	1981年	1月	Western Kentucky University, Religion Department, Kentucky, U.S.A. 編入学		
	1983年	5月	Western Kentucky University, Religion Department, Kentucky, U.S.A. 卒業(学位、専攻:宗教学)		
	1985年	9月	North Texas State University, Graduate School, English Department, Texas, U.S.A. 入学		
	1986年	8月	North Texas State University, Graduate School, English Department, Texas, U.S.A. 卒業(修士号、専攻:英語教育)		
	1991年	9月	University of Texas at Austin, Foreign Language Education Department, U.S.A. 入学		
	1996年	8月	University of Texas at Austin, Foreign Language Education Department, U.S.A. 卒業(博士号、専攻:外国語教育)		
実 務 経 験	1987年	4月	駿台外語専門学校(大阪市)講師(1989年7月まで)		
	1989年	9月	Pittsburg State University, Kansas, U.S.A., Intensive English Program, lecturer(1991年8月まで)		
	1992年	9月	Austin Community College, Parallel Studies Department, ESL Program, part-time teacher(1997 1月まで)		
	1997年	4月	山梨英和短期大学英文学科、契約教師(2000年4月まで)		
	2000年	4月	山梨英和大学人間文化学部、契約教師(2005年4月まで)		
	2005年	4月	山梨英和大学人間文化学部、専任講師(現在まで)		
受 賞 歴	1979年	5月	German Student of the Year Award, German III class, Bowling Green High School, Kentucky, U.S.A		
	1979年	5月	ROTC Student of the Year Award, High School Reserve Officer Training Corps (all classes), Bowling Green High School, Kentucky, U.S.A.		
	1991年	9月	University Fellowship, Office of Graduate Studies, University of Texas, Texas, U.S.A. (for the 1987-88 school year)		
	1996年	12月	Nominated for Part-time Teacher of the Year Award, Austin Community College (all campuses).		
所属学会	1986年	4月	Member of Japan Association of Language Teaching (JALT)(現在まで)		
	年	月			
	年	月			
	年	月			
e-mail	非公表				

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>As an English language teacher, I am not so concerned with teaching large amounts of information as I am concerned with developing skills within each individual. This becomes a highly personal task for each student, and learning language skill requires high motivations. For this reason, I deal a lot with the motivations of students as I teach. In some ways, I cannot deal directly with the various underlying motivations that bring students to school. But I try to take each student at face value as if I expect him/her to learn for learning sake. I try to deal with the students' most immediate motivations, which are social influences before and during the class, task motivations during class and homework, grade motivations, and achievement motivation. To do this, I make my learning objectives extremely clear and my grading policies extremely clear. I also give a lot of small assignments with very clear feedback. I use social motivations in the class, including my personal presence, small group work, and pair work. In small classes and in seminar classes, I often speak personally to students regarding how I view them, their learning, and their English ability. Students are often shocked that I will sit down with them and give them a basic description of their overall English ability, including grammar, and characteristics of their pronunciation, and I think they find it exciting. Not all classes can be so personal, so I follow basic educational principles, including clear objectives and plenty of practice so students can reach a "saturation point" in which they can truly master objectives.</p> <p>I cannot discuss most methods used in this small space, but let me say that I use a lot of what is called the "direct method" of teaching language, with presentation, testing, and immediate practice. I do break one of the direct method's primary rules, however, in that I give definitions in Japanese when large lists of vocabulary must be learned, which speeds the process immensely. When performing language tasks, such as speaking about topics or reading certain texts, I am concerned to teach the language necessary for each task beforehand and I frequent review vocabulary and grammar learned so students can maintain confidence in their speaking, writing, reading, and listening skills during the class time. The above is only a small portion of my actual teaching ideas and methods.</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>English Presentation: Using mostly materials that I wrote myself, students learn the rules of intonation, pronunciation of past tense, speech-giving techniques, and advanced grammar points. They also sing a song as a choir during class, memorize the Lord's prayer with correct intonation and pronunciation, give a personal speech before the whole class using notes, practice and tell a personal story before the whole class without notes, and write and give an academic speech before the class with notes and an outline.</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>I have not created any books. However, I personally write about 70% of all text material that I use in my classes.</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>I presented a lecture titled "Grammar is not Communication," at Sundai Foreign Language Technical School (駿台外語専門学校高校で高校の英語の教師のための教育発表会). Also at the FD committee meeting of Yamanashi Eiwa College on July 21, 2013 I presented a lecture on how to teach English to low level students at Eiwa. That lecture was titled "Teaching English Methods in a Culture that is Ill-Suited for Language Learning: Opening Up Students' Hearts to English" 「外国語学習に適さない(てきさない)文化の中で英語を教える方法: 学生の心を英語に開くこと」.</p>
<p>担当授業科目</p>	<p>2016年度: Globalization 1、英語1aA、英語1bA、英語1cB、英語1dC、卒業研究、専門ゼミナール、海外インターン シップ</p>

代表的シラバ	<p>専門演習: 社会及び心理の諸問題について英語で読み、英語で討論する。本学の大学院を希望している学生にとっても、また英語を話す力をつけたい学生にとっても、最適なゼミである。 Student will study vocabulary and take multiple tests. Students will do oral readings in class about social problems: hikikomori, makein, drugs, gangs, etc. Students will discuss those social problems with the class. Each student will write a final paper over one social problem of his or her choice, in consultation with the teacher.</p>
教育改善活動	<p>I have purchased and learned how to use Adobe Photoshop software to help create pictures for my class Powerpoint presentations.</p> <p>I have studied the Japanese language so I can use it sometimes in class. I learned in graduate school that it is best to speak only the target (foreign) language in the class, but also that on occasion a few words in the students' own language can save much time and confusion. So I probably speak 95% to 98% English in the class. However I can also give word definitions in Japanese, and make short explanations to confused students in Japanese, so I feel that my teaching has greatly improved.</p>
教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>Students' evaluations of me for many years were always fairly high (4.5 out of 5). However, in the last few years, they have gone down some. This is partially because of the style of evaluation form. I also think the students seem to want more entertainment or teacher motivation than before. There is a saying, "Good teachers explain, great teachers inspire." I want to inspire students more, so starting 2Q I have been working harder to talk to students on a personal basis, even in larger classes, and to be excited and more energetic as I teach each class.</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>Yamanashi Eiwa College does not give formal evaluations of their faculty. This seems to be Japanese culture, though Americans always give formal faculty evaluations. My colleagues informally have told me that my classes are popular and that I get along well with the faculty and staff of the college so they are pleased with my work.</p>

### 研究業績

研究の特徴	<p>I have only worked on few research projects in the last few years because I use much time for my church work, prayer, and in the evenings Japanese language study (now I can read and speak Japanese at an intermediate level). So my research has decreased for the last few years.</p> <p>Learning Motivations: Most of my research has focused on student motivations. My own research suggests that Japanese college students' motivations in college classrooms appear to be largely based on task motivation or external motivations provided by the teacher. Japanese students who want to learn English depend on the surrounding context of the classroom to motivate them more than their personal desires to learn English. For example, Japanese students typically do not play with language nor personally motivate other students in the class to study, which is very different than students from other countries, especially different from American education. (I am American.) Instead, the students watch the teacher to see what he will do. As a result, the students are longing for the teacher to motivate them. The teacher should impress or interest the students by using interesting stories, jokes, and other techniques so that help students pay close attention. The teacher should also frequently offer the students tasks to perform even during lecture classes to increase motivation, and the teacher should keep students active working together in pairs to stimulate interest. Furthermore, the teacher should slowly teach students to internalize their motivations for language learning by praising students and talking about their learning in an open way. These are some of the results of my research. At this time, I have collected more data regarding motivations, but due to my Japanese language study, that research is awaiting analysis.</p>
研究の特徴	<p>Vocabulary Knowledge/English Morphemes: I have also done one study regarding active vocabulary use of students in order to understand the level of language knowledge of students entering our college. I implemented those findings into my curriculum by focusing my teaching more on certain vocabulary groupings. Furthermore, I also did one study regarding the English morphemes used by Japanese students to learn more about the level of language knowledge of our school's students. I also implemented that research into my curriculum by encouraging particular grammatical points in my class that the students were weak in.</p>

研究経歴	年 年 特になし 年
研究実績	<p>(1)著書 特になし</p> <p>(2)学術論文</p> <p>1996年 8月 博士論文 The Classroom-related Beliefs and Learning Strategies of Seven Adult Japanese Learners in a United States ESL program, 317 pp.</p> <p>2003年 2月 The Use of Vocabulary by Japanese Learners of English in Speaking Tests, 山梨英和大学紀要第1号</p> <p>2004年 1月 Natural Sequences in the Acquisition of English Morphology, 山梨英和大学紀要第2号</p> <p>2004年 1月 The Motivations of Japanese College Students to Participate in an English Vocabulary Learning Activity, 山梨英和大学紀要第2号</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 特になし</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等 役員等 参加表	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
共同研究 の実績・ 受託	<p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>
大学院生指導	特になし
研究能力 に対する 評価	特になし

## サービス活動業績

学内委員会・活動実績・作業部会等	2005年 4月 国際交流委員会委員(2011年3月まで) 2008年 4月 宗教委員会委員(現在まで) 1997年 4月 入試の試験作成(現在まで) 2005年 4月 国際交流委員会委員(2011年3月まで) 2011年 4月 入試委員会委員(2011年3月まで) 2016年 4月 英和学院の評議員会の一員(2020年3月まで) 年 月
アドバイザー活動実績	2000-2006年度 Advisor of the English Life Club (English conversation and friendship club) 2011年度 Advisor for the Maple Leaf Club (English conversation club)
後進育成活動実績	1997-Present I have taught numerous small weekly English Bible studies in my home and on campus to encourage understanding of Christian faith and morals. Many semesters I have held English Bible studies in my office at school.
社会貢献活動	(1)講演会 年 月 特になし (2)出前講座 年 月 特になし (3)公開講座 年 月 特になし (4)学外審議会・委員会等 2015年 4月 Administrator for New Life International Elementary School in Kofu: budget, contracts, ESL testing, classroom teaching every Friday while school is in session. This is voluntary--no pay. (5)その他 1999/3/1 I am pastor of New Life International Church in Kofu, Japan. New Life is a bilingual church with English/Japanese. This church currently averages 55 people in attendance, many of whom are students of our college. The church meets in a rented room, but we are attempting to buy a building. As pastor, I plan and lead the church service one time each week, preaching before the church each time, leading prayer and social activities. I coordinate programs of the church including church Bible studies (Japanese and English), the council of elders and elders' meeting, the church worship band, the children's program, and missionary offering support. I also perform many small activities related to being a pastor, such as writing recommendations for jobs or school entrance, visiting the sick, and counseling those with personal problems. Furthermore, I coordinate temporary projects, such as our annual fall retreat at Lake Yamanakako. I organized a 4-day trip for 5 people (myself included) to do volunteer work in the area of the Noto Peninsula Earthquake (能登半島地震) in March 2007. I organized another 4-day volunteer trip to the area of the Chūetsu Offshore Earthquake (新潟県中越沖地震) in July 2007 for 5 people. I have also lead our church in giving food to local refugees from the Miyagi-ken and Iwate-ken area who live in Kofu City area in March-May 2011. (1999年3月から、現在まで)

## 成果と目標

専門的成果	<p>① I have learned how to better motivate students in English classes by my teacher presentations and text writing.</p> <p>② I have learned more about the language knowledge (vocabulary and grammar) of Japanese college students for curriculum planning purposes.</p>
専門的目標	<p>① My first goal is a greater understanding of what content in teacher's lectures is most motivating to students.</p> <p>② My second goal is to learn more about how to motivate students so that they will want to speak more English during class time.</p> <p>③ My third goal is continue to continue to write classroom materials that are understandable and motivating to the students, and that contain enough repetition for learning. I often write my own class materials so I use few textbooks during class time.</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
堀江 桂吾	男	1975年	専任講師	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	修士(心理学)	専門分野	臨床心理学	
学 歴	1994年	3月	京都府立兔道高等学校卒業	
	1994年	4月	神戸大学 文学部哲学科 入学	
	1998年	3月	神戸大学 文学部哲学科 心理学専攻 卒業 学士(心理学)	
	1998年	4月	東京都立大学大学院 人文科学研究科心理学専攻 修士課程入学	
	2000年	3月	東京都立大学大学院 人文科学研究科心理学専攻 修士課程修了 修士(心理学)	
	2000年	4月	東京都立大学大学院 人文科学研究科心理学専攻 博士課程入学	
	2004年	3月	東京都立大学大学院 人文科学研究科心理学専攻 博士課程中途退学	
実務 経 験	1998年	11月	成城墨岡クリニック 水曜グループ 非常勤心理士(2004年3月まで)	
	1999年	5月	くらしなクリニック 非常勤心理士(2005年3月まで)	
	2000年	6月	練馬駅前メンタルクリニック 非常勤心理士(2004年3月まで)	
	2004年	4月	東京都立松沢病院 非常勤心理士(2005年3月まで)	
	2005年	4月	日本私立学校振興・共済事業団 東京臨海病院 常勤心理判定士(2012年1月まで)	
	2011年	4月	駒沢女子大学大学院人文科学研究科 非常勤講師(人格心理学特講)(2014年3月まで)	
	2012年	2月	医療法人社団碧水会 長谷川病院心理療法科 常勤臨床心理士(2015年3月まで)	
	2012年	4月	駒沢女子大学大学院人文科学研究科 非常勤講師(心理療法特講)(2015年9月まで)	
	2012年	4月	日本女子大学人間社会学部心理学専攻 非常勤講師(人間関係学特講)(現在に至る)	
	2012年	4月	大手前大学現代社会学部通信教育課程 非常勤講師(臨床心理学実習)(2016年3月まで)	
受 賞 歴	年	月	特になし	
	年	月		
所 属 学 会	1998年	7月	日本心理臨床学会	
	2000年	4月	日本ロールシャッハ学会	
	2001年	4月	日本精神分析学会	
	2011年	4月	日本思春期青年期精神医学会	
	2012年	4月	日本自閉症スペクトラム学会	
	2013年	12月	包括システムによる日本ロールシャッハ学会	
特 免 資 許 許 格 等 ・ ・	1999年	2月	生活技能訓練リーダー養成初級	
	2001年	4月	臨床心理士 登録番号10797	
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>学生一人一人の興味関心を尊重し、自ら積極的に学ぶ姿勢を身につけられることを目指す。具体的には、学生による質問への回答や、グループワーク、ディスカッションを積極的に活用し、学生が自分の疑問点を自覚し、理解を深めること、学ぶことの楽しさを実感できる教育を実施する。専門教育においては、心理的援助を求める人を尊重できる専門家を育成することを目指す。そのために必要な知識や技術に関しては具体的な例を挙げながらわかりやすく教授する。学生が、他者の心を想像するとはどういうことか、他者を知るとはどういうことか体験的に理解できる教育を実践する。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>①マルチメディアを用いた講義          パワーポイント・クラウドコンピューティング・配布資料といった複数のメディアを用いてアシストすることで、講義内容をわかりやすく提示するとともに、予習、復習を容易に行えるように配慮している。大教室において多人数の学生を対象にする際にも、毎回リアクションペーパーを回収し、そこに記載された意見や質問を次回の講義で取り上げることで、双方向的な授業を展開している。</p> <p>②ディスカッション重視のゼミナール          臨床心理学の専門的教育においては、自分の気持ちに気づくこと、それを言葉にすることが必要不可欠である。授業においては、学生が率直な意見や疑問を公表できるよう、教員の適度な自己開示を心がけ、許容的で自由な雰囲気づくりを行っている。そして、学生の疑問や不安という形で表現された学生の考えや感情を明確化し、言語化する介入を行うことで、学生自身が自分の心を対象化し内省することを体験的に理解できるよう工夫している。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等          特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等          特になし</p>
担当授業科目	<p>2016年度          &lt;学部&gt;基礎ゼミナール, 臨床心理学, 心理検査演習, カウンセリング演習          &lt;大学院&gt;臨床心理事例研究, 臨床心理基礎実習, 臨床心理実習</p>
代表的シラバス	<p>&lt;臨床心理学&gt;          臨床心理学の基本的な理論と技法について概説する講義です。臨床心理学は、専門的な援助実践であると同時に、その実践のための研究法でもあります。本講義では、臨床心理学の歴史や、代表的なアセスメント法、各心理療法の流派などについて紹介するとともに、臨床心理士がどのように養成され、社会の中で活動しているのかについて講義します。</p>
教育改善活動	<p>特になし</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価          2015年9月授業に対する総合評価(臨床心理学)          授業がねらいとしていた知識や技能を習得できたと思うか?          そう思う65% 強くそう思う10%</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価          本学において同僚教員による授業評価は実施していない。今後の課題と言える。</p>

## 研究業績

研究の特徴	1. 心理臨床の現場自体を研究対象とする, 臨床社会学的研究。2. 心理アセスメントのツールの信頼性・妥当性を高めるための基礎的研究。3. 心理療法のプロセスに関する研究。特に, 精神分析的な理解に基づき, 困難事例に対する心理療法において, 治療構造および治療者の内的構えを「抱えること」という概念を用いて精緻化することを目的とする。
研究経歴	<p>1997年 神戸大学において精神障害者の通所授産施設である作業所におけるフィールドワークに従事。</p> <p>1998年 東京都立大学大学院および大学院修了後に就労した医療機関において心理検査研究に着手(現在に至る)。また, 心理アセスメントグループ検討会の発話分析を実施。</p> <p>2005年 臨床心理学的事例研究を精神分析家Winnicottの「抱えること」という概念を用いて精緻化する研究に着手(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1)著書</p> <p>a.野村俊明・青木紀久代編.(2016)これからの対人援助を考えるくらしの中の心理臨床①うつ 46～50頁</p> <p>b.林直樹・松本俊彦・野村俊明編集これからの対人援助を考えるくらしの中の心理臨床②パーソナリティ障害 77～81, 88～91頁</p> <p>(2)学術論文</p> <p>a.堀江桂吾(2016)精神病寛解の患者を抱えることと本当の自己のあらわれ 思春期青年期精神医学 第25巻2号 192～200頁</p> <p>b.堀江桂吾(2016)抱えること再考 山梨英和大学人間文化学部紀要 14巻 54～62頁</p> <p>c.堀江桂吾・岸竜馬(2012)特定不能の高機能広汎性発達障害児童にみられるWISC-IIIプロフィールの特徴と下位検査評価点のばらつき—AD/HDおよび身体化障害児童との比較を通じて— 自閉症スペクトラム研究 9巻 55～62頁</p> <p>d.堀江桂吾(2011)プレイセラピーと箱庭にあらわれるころの次元—神経症児童と自閉症児童との相違— 駒沢女子大学研究紀要 18巻 255～267頁</p> <p>e.堀江桂吾(2011)甘えを許容し難い女性との心理療法過程 精神分析学研究 55巻 4号 390～395頁</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) 特になし</p>
競争的資金採択課題	特になし
学会等発表・役員参加	<p>2015年 9月 精神科疾患をもつ成人患者におけるグッドイナフ人物画知能検査(DAM)の特徴—WAIS-IIIとの比較を通して— 日本心理臨床学会第34回大会ポスター発表</p> <p>2015年 7月 自閉症スペクトラム障害をもつ青年期女性に対する心理療法過程 日本思春期青年期精神医学会第28回大会</p> <p>2014年 8月 初学者がロールシャッハ法を学ぶには9 日本心理臨床学会第33回大会 自主シンポジウム</p> <p>2014年 7月 青年期の男子とその母親を抱えること 日本思春期青年期精神医学会第27回大会</p> <p>2013年 8月 初学者がロールシャッハ法を学ぶには8 日本心理臨床学会第32回大会 自主シンポジウム</p>

表・学会等 加・役員参 員発	2012年	9月	初学者がロールシャッハ法を学ぶには7 日本心理臨床学会第31回大会 自主シンポジウム
	2011年	9月	初学者がロールシャッハ法を学ぶには6 日本心理臨床学会第30回大会 自主シンポジウム
受託共同 研究の 実績	年	月	特になし
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
大学院生指導	大学院生による心理療法に対する個人スーパーヴィジョン(1セッションあたり1回。60分実施)。		
研究能力 に対する 評価	心理アセスメントに関する研究は心理臨床学会自主シンポジウムにおいて2014年まで9年間発表し続けており、参加者によるアンケート結果においては、毎回、継続的なシンポジウムの開催を期待する意見が寄せられており、研究・教育に関して一定程度の評価を得られていると言える。 また、心理療法に関する事例研究については、事例発表を論文として投稿するよう推奨される、あるいは外部機関における公開講座の講師を依頼されるなどの評価を受けている。		

### サービス活動業績

学内委員会等 活動実績 作業	2016年	4月	学生サービス部運営会議	
	年	月		
	年	月		
	年	月		
	年	月		
	年	月		
アドバイザー活動実績	現在、大学1年生16名のアドバイザーとして相談に応じている。			
後進育成活動実績	ロールシャッハ法に関する事例検討グループに参加し、後進の指導にあたっている(年10回)			
社会貢献活動	(1)講演会	2016年	6月	引きこもり・不登校児童の心理と関わり方 山梨県央児童相談所メンタルフレンド研修会
	(2)出前講座	2012年	9月	狛江チャイルドラインフォローアップ研修講師
	(3)公開講座	2011年	12月	駒沢学園心理相談センター公開セミナー 子どもの心の発達と心理療法
	(4)学外審議会・委員会等	2015年	4月	医療法人社団碧水会長谷川病院 倫理委員会外部委員
	(5)その他	2010年	3月	西新宿臨床心理オフィス・あざみ野心理オフィス合同シンポジウム 発表

## 成果と目標

専門的成果	<p>① 初学者に対するロールシャッハ法の学びに関する学会発表を継続的に行い、ロールシャッハ法における継起分析の実践法を提示し、後進の育成に貢献した。</p> <p>② 心理アセスメントに関する基礎的研究として、ロールシャッハ法のノーマティブデータの収集に参加し、心理アセスメントツールとしてのロールシャッハ法の信頼性・妥当性の向上に貢献した。</p> <p>③ 専門学会において心理療法の事例研究発表を行い、同一担当者による親子並行面接を用いて思春期症例を抱えることの意義を明らかにした。</p>
専門的目標	<p>① 学会発表に限らず、グループ症例検討会に積極的に参加し、後進の育成と心理アセスメント能力の研鑽に励む。</p> <p>② 心理アセスメントに関する基礎的研究の一環として、人物画心理検査と知能検査の関係について明らかにする研究に着手し、専門学会において発表する。</p> <p>③ 専門学会における心理療法の事例研究発表を継続する。自閉症スペクトラムの青年期症例を、同一担当者による親子並行面接を用いて抱えるプロセスを提示し、治療構造を通じてクライアントを抱えることの意義を明らかにする。</p>

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦) (公表可否)	職名	所属
大井 奈美	女	(非公表)	専任講師	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(学際情報学)	専門分野	図書館情報学・人文社会情報学	
学歴	2007年	3月 早稲田大学 第一文学部 総合人文学科卒業 [学士(文学)]		
	2007年	4月 東京大学大学院 学際情報学府 学際情報学専攻修士課程入学		
	2009年	3月 東京大学大学院 学際情報学府 学際情報学専攻修士課程修了		
	2009年	4月 東京大学大学院 学際情報学府 学際情報学専攻博士課程入学		
	2012年	3月 東京大学大学院 学際情報学府 学際情報学専攻博士課程修了		
実務経験	2010年	4月 日本学術振興会特別研究員(～2012年3月)		
	2012年	4月 東京大学大学院学際情報学府 特任助教(～2013年3月)		
	2013年	4月 東海大学 非常勤講師(課程資格教育センター)(～2016年3月)		
	2013年	5月 東京大学大学院学際情報学府 客員研究員(～2015年4月)		
	2013年	4月 明治大学教務アシスタント(～2016年3月)		
	2015年	4月 東京経済大学 客員研究員(～現在に至る)		
	2015年	9月 大妻女子大学 非常勤講師(社会情報学部)(～2016年3月)		
2016年	4月 山梨英和大学 専任講師(～現在)			
受賞歴	2009年	2月 2008年度 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 専攻長賞(修士論文)		
	2010年	7月 情報メディア学会論文賞		
	2010年	11月 第16回情報文化学会賞(学会賞)		
	2012年	9月 社会情報学会 平成24年度 大学院学位論文賞(博士論文)		
所属学会	2008年	月 情報メディア学会 会員		
	2008年	月 情報文化学会 会員		
	2009年	月 Internationale Gesellschaft für Empirische Literaturwissenschaft 会員		
	2012年	月 社会情報学会 会員		
特免資格 等・・・	2012年	月 英語検定 1級		
	年	月		
	年	月		
	年	月		
e-mail	namiohi[atmark]yamanashi-eiwa.ac.jp			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	情報社会にあつて、すべてがデータに還元されるような機械的な世界観が広がりつつある。そこで、機械的データは生命体による解釈と切り離せないという着想にもとづく情報論を紹介したい。その情報論について具体的に理解してもらうため、講義では各種の表象文化をおもな題材とする。
教育能力	<p>(1)教育方法実践例 文学や音楽などを題材とし、現代の情報文化として再評価する情報系・図書館情報学系科目など</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 図書館情報学・社会情報学をめぐる教科書など(詳細は研究業績を参照)</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 詳細は研究業績を参照</p>
担当授業科目	2016年度の担当科目:基礎ゼミナール、コミュニケーション・スキル(ライティング)、生涯学習論、知的財産権と情報倫理、図書館情報資源特論、図書館情報技術論、図書館情報論、ICTサポートデスク
代表的シラバス	<p>2016年度 生涯学習論 概要 自分なりの問題意識を持ち続け、読書などによって問題意識に即した情報収集・アーカイブ構築をすることで、問題意識の対象と関係を結びながら実際に自分の考えを構築し鍛えていくための、基礎的な知識を扱う。</p> <p>到達目標 1. 生涯学習の意義と課題について、そもそも学習とは何かについて考察しつつ、理解する。 2. 学ぶ対象と絆を結ぶこと、そして学習を楽しむことの重要性を理解する。 3. 最新学習歴を更新し続ける主体的な学びを、生活にとりいれる。</p>
教育改善活動	<p>一年にわたって違う受講生にたいして同じシラバスでくりかえし担当するコミュニケーション・スキル(ライティング)においては、講義の内容を受講生にあわせて調整するとともに、講義でとりあげる事例を変更した。</p> <p>心理的な問題などがあつて発表や課題提出などが難しい学生にたいしては、全員一律の課題を強制することなく、教員間での緊密な打ち合わせのもと、個々の学生にあつたレベルでの課題を考案している。</p> <p>レポートのテーマ設定をめぐる個別相談などにてできるだけ時間を割き、授業内容を学生がフォローしやすいようにしている。</p>
教育能力評価に対する	<p>(1)学生による授業評価 着任一年目のため、本学での授業評価結果はなし</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 本学での授業評価結果はなし</p>

## 研究業績

研究の特徴	現在は文学と情報学との学際的な研究を遂行している。おもに俳句を研究対象として、ネオ・サイバネティクスの観点から研究している。ネオ・サイバネティクスとは、機械的なデータとしてのみ理解されがちな情報という概念を、個々の生命体にとっての意味や価値という観点から再評価する国際的な研究潮流である。
研究経歴	<p>2010年 日本学術振興会特別研究員(～2012年3月)</p> <p>2013年 東京大学大学院学際情報学府 客員研究員(～2015年4月)</p> <p>2015年 東京経済大学 客員研究員(現在に至る)</p> <p>2016年 山梨英和大学 専任講師(現在に至る)</p>

## (1) 著書

西垣通、大井奈美、河島茂生、西川アサキ編『基礎情報学のヴァイアビリティ』、東京大学出版会、2014年

大井奈美[事典項目執筆(言文一致運動)]、『現代社会学事典』、弘文堂、2012年

大井奈美[教科書項目執筆(近現代のフランス、近現代の英国)]、『図書・図書館史』、学文社、2014年

大井奈美[教科書項目執筆(感性情報学)]、『よくわかる社会情報学』、ミネルヴァ書房、2015年

## (2) 学術論文

大井奈美「俳句創作と解釈の基礎情報学的分析」、東京大学大学院学際情報学府、修士論文、2009年

大井奈美「ネオ・サイバネティクスの近現代俳句研究——文学研究にたいする基礎情報学の批判的応用」、東京大学大学院学際情報学府、博士論文、2012年

## 【査読有り論文】

大井奈美「オートポイエティック・システム論にもとづく俳句分析の試み」、『情報文化学会誌』、情報文化学会、16(1)、pp. 32-38、2009年

大井奈美「結社・協会・メディアが俳句創作と解釈に及ぼす影響の基礎情報学的分析」、『情報メディア研究』、情報メディア学会、8(1)、pp. 11-24、2009年

大井奈美「俳句革新のネオ・サイバネティクスの分析——基礎情報学によるアプローチ」、『情報メディア研究』、情報メディア学会、10(1)、pp. 23-34、2011年

大井奈美「新傾向俳句・伝統派俳句の基礎情報学的分析」、『情報文化学会誌』、情報文化学会、19(1)、pp. 7-15、2012年

Nami Ohi, "An Analysis of Shin-keiko-haiku and Dento-ha-haiku from Fundamental Informatics Perspective", in Journal of Contemporary Eastern Asia, the Austrian Association of East Asian Studies, 12 :2, 2013, pp. 35-47

## 【査読無し論文】

Nami Ohi, "Cognition as Communication: The Accursed Share by Georges Bataille as a Contribution to the Study of Fundamental Informatics", in The New Trends of Socio-information in East Asia (Graduate Students Session), Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo, January 2008, pp. 66-69.

大井奈美「ネオ・サイバネティクスと文学研究——ラディカル構成主義派とルーマン社会理論派の射程とその拡張について」、『思想』、岩波書店、1035、pp. 131-147、2010年7月

大井奈美「観察の自覚——俳句の近代化と国民文学性の構成主義システム論的再考」、『ユリイカ』(「現代俳句の新しい波」特集号)、青土社、43(11)、pp. 190-199、2011年10月

大井奈美「英語圏文学システム論の一前史——B. クラークの構成主義的文学観」、『情報学研究』(東京大学大学院情報学環紀要)、東京大学大学院情報学環、84、pp. 21-34、2013年

大井奈美「漢詩からみた正岡子規の対外関心」、『江戸風雅』、江戸風雅の会、9、pp. 162-166、2014年

## (3) 研究発表(2010年以降抜粋)

Nami Ohi, "An analysis of the emergence of a haiku system from the perspective of neocybernetics", 2010 SNU-UT Symposium, at Seoul National University (Korea), 21-22 October, 2010

Nami Ohi, "A literary study based on neocybernetics: An analysis of haiku from the perspective of fundamental informatics", Internationale Gesellschaft für Empirische Literaturwissenschaft, at University of Utrecht (Holland), 7th July, 2010

Nami Ohi, "Rethinking Haiku Analysis: Neocybernetic Approaches", German Institute for Japanese Studies, History & Humanities Study Group (Tokyo), 16 February, 2011

Nami Ohi, "Haiku as Paused Pose: A Neocybernetic Consideration on the Difference between Data and Poetry", Internationale Gesellschaft für Empirische Literaturwissenschaft, at Hilton Hotel (Chicago), 9th July, 2016.

研究実績	大井奈美「俳句システム成立のネオ・サイバネティクスの分析」、情報文化学会(第18回全国大会)、於東京大学、2010年11月	
	大井奈美「俳諧から俳句へ——ネオ・サイバネティクスの考察」、近現代俳文学研究会、於勤労福祉会館、2011年11月	
	大井奈美「B. クラークの文学システム論と基礎情報学——文学における変容の主題とメディア」、情報メディア学会(第15回研究会)、於順天堂大学、2013年11月	
	大井奈美「情報文化学と情報学の通時的比較——ネオ・サイバネティクスを中心として」、情報文化学会(第22回全国大会)、於東京大学、2014年11月	
	大井奈美「インターネット俳句と聖なるもの」、ネオ・サイバネティクス研究会、於実践女子大学、2014年12月	
	大井奈美「『ネット短詩』の基礎情報学的分析——『マイクロ・ポエトリー』のさまざまな形態をめぐって」、基礎情報学研究会(第12回勉強会)、於一般社団法人コンピュータソフトウェア著作権協会、2015年2月	
	中田(大井)奈美「俳文学史をめぐる社会情報学的考察の試み——俳諧から『マイクロ・ポエトリー』まで」、社会情報学会公開シンポジウム「社会情報学の〈これから〉——若手研究者からの発言」、於東京大学、2015年7月	
(4)翻訳など		
ジークフリート・J・シュミット「観察の論理——構成主義概論」、大井奈美、橋本渉訳、『思想』、岩波書店、1035、pp. 56-75、2010年7月(筆頭翻訳者として共訳)		
大井奈美「訳者解題」(ジークフリート・J・シュミット「観察の論理——構成主義概論」について)、『思想』、岩波書店、1035、pp. 56-58、2010年7月		
ブルース・クラーク、マーク・B・N・ハンセン「ネオサイバネティックな創発——ポストヒューマンの再調律」、大井奈美訳、『基礎情報学のヴァイアビリティ』、東京大学出版会、2014年		
競争的資金採択課題	「俳句の情報学的分析——オートポイエーシス概念にもとづいて」(日本学術振興会特別研究員 DC2 2010~2012) 「俳句の「配合」構造にたいするメディア変化の影響——発句からインターネット俳句まで」(山梨県若手研究者奨励事業 2016)	
学会等発表・役員参加	2009年 月	情報文化学会第17回全国大会 実行委員
	2012年 月	情報メディア学会 学会誌編集委員(～現在)
	2012年 月	情報文化学会 評議員・選挙管理委員・学会誌編集委員・研究部会委員(～現在)
	年 月	
	年 月	
	年 月	
	年 月	
受託共同研究の実績	2012年 月	ネオ・サイバネティクス研究会 共同運営担当(～現在)。研究会の成果は書籍として発表済。また、来年度にもあらたな書籍として発表予定(いずれも共著)。
	年 月	
	年 月	
	年 月	
	年 月	
大学院生指導	東京大学大学院学際情報学府、特任助教として、大学院生向けの講義のティーチングアシスタントを担当	
対研究する能力に	学位論文・研究論文にたいして、いくつかの受賞歴がある(詳細は受賞歴欄)。	

## サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2016年 月 図書館情報メディアセンター運営会議 委員(～現在) 年 月 年 月 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	基礎ゼミナールの学生20人程度を中心に、学生生活全般にかんする面談を定期的におこなっている。
後進育成活動実績	
社会貢献活動	<p>(1)講演会</p> <p>(2)出前講座</p> <p>(3)公開講座 2016年 10月 県民コミュニティカレッジでの講義</p> <p>(4)学外審議会・委員会等</p> <p>(5)その他 2016年～現在 樺(あらき)俳句会(恩田侑布子代表)編集長・ホームページ制作管理</p>

## 成果と目標

専門的成果	<p>①ドイツを中心に行われてきた文学システム理論(構成主義システム理論の文学研究にたいする応用研究)の網羅的調査とその現代的可能性の検討</p> <p>②情報学を応用した俳句研究(現代俳句を中心に)</p> <p>③ネオ・サイバネティクスの紹介とその応用研究(研究会運営・共著の書籍化を含む)</p>
専門的目標	<p>①北欧を含む欧米における情報学理論の網羅的調査</p> <p>②俳句とマイクロ・ポエトリーをおもな研究対象として、機械的データと詩との異同等について考究する</p> <p>③文学研究をつうじた、情報概念の再検討(観察視点に注目して)</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
イダ トシハル 飯田 敏晴	男	1979年	助教	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	博士(心理学)	専門分野	臨床心理学、健康心理学・健康開発	
学 歴	1998年	3月 千葉市立稲毛高等学校卒業		
	2004年	3月 明治学院大学文学部心理学科卒業		
	2004年	4月 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻修士課程入学		
	2006年	3月 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻修士課程修了		
	2008年	4月 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻博士後期課程入学		
	2013年	3月 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻博士後期課程修了		
実 務 経 験	2002年	9月 渋谷けやき福祉作業所 非常勤指導員(～2004年9月)		
	2005年	4月 国立国際医療センター戸山病院精神科 非常勤心理療法士(～2010年3月)		
	2005年	4月 東京都港保健所 非常勤グループワーカー(～2007年3月)		
	2006年	5月 亀有メンタルクリニック 非常勤カウンセラー(～2008年3月)		
	2006年	10月 東邦大学医学部 非常勤講師 健康心理実習 担当(～2010年3月)		
	2007年	4月 四谷ゆいクリニック 非常勤カウンセラー(2008年3月)		
	2008年	4月 明治学院大学 特別ティーチングアシスタント 心理統計法担当(～2008年7月)		
	2008年	9月 明治学院大学 ティーチングアシスタント 心理支援論担当(～2009年1月)		
	2009年	4月 明治学院大学 ティーチングアシスタント 心理統計法担当(～2009年7月)		
	2010年	4月 公益財団法人エイズ予防財団 リサーチ・レジデント(～2012年3月)		
	2012年	4月 国立国際医療研究センター病院精神科 非常勤心理療法士(～2013年3月)		
	2012年	5月 北里大学健康管理センター学生相談室 非常勤カウンセラー(2013年3月)		
	2013年	4月 山梨英和大学人間文化学部人間文化学科 助教(現在に至る)		
	2013年	4月 国立国際医療研究センター病院精神科 嘱託心理療法士(現在に至る)		
受賞 歴	2008年	7月 日本コミュニティ心理学会 若手学会員 研究・実践奨励賞		
	年	月		
所 属 学 会	2004年	4月 日本コミュニティ心理学会(現在にいたる)		
	2004年	6月 日本応用心理学会(現在にいたる)		
	2004年	6月 日本心理臨床学会(現在にいたる)		
	2004年	6月 日本カウンセリング学会(2015年3月まで)		
	2006年	2月 日本教育心理学会(2014年3月まで)		
	2006年	1月 多文化間精神医学会(現在にいたる)		
	2010年	6月 日本エイズ学会(現在にいたる)		
	2011年	8月 日本健康心理学会(現在にいたる)		
	2014年	4月 日本心理学会(現在にいたる)		
	2015年	4月 日本外来精神医療学会(現在にいたる)		
特免資 許許格 等	2007年	4月 臨床心理士(臨床心理士資格認定協会認定 17736号)		
	2014年	4月 多文化間精神保健専門アドバイザー(多文化間精神医学会認定)		
	年	月		
e-mail	tiida*@*yamanashi-eiwa.ac.jp (remove asterisk(*) before and after @ for actual e-mail address)			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	机上の学問ではなく、「実践経験」を重視しています。学生に、そこでの知見を伝えるにあたっては、学生にとって身近なところからの理解を深めてもらい、さらに、問題意識や自らの問いの形成を心がけている。その意識や問いを、理論と結びつけることでより有機的なものとなる。実際の教育においては、学生のニーズや理解度を確認しつつ、適宜工夫を加えていくことで、講義がより有意義な時間となるよう心がけているつもりである。
教育能力	<p>(1) 教育方法実践例</p> <p>a) 山梨英和大学人間文化学部の「異常心理学」の講義において、Google社のWEBアンケート機能を活用した講義。大学内のWifi環境を活かし、質問をWEB上で無記名により回答させ、集計結果のグラフを教材として活用している。履修生は、回答直後に、他の履修生の理解度、意識を知ることができる。簡単なグループワークを行い、「授業中に学んだこと」を近くの他の履修生に説明させることで、より深い理解となるよう進めている。</p> <p>(2) 作成した教科書、教材等</p> <p>市販されている書籍を参考書として使用・紹介している。その他、講義ではパワーポイント、市販の映像教材などを多用して、聴覚的な理解に留まらず視覚的な学習を促進する教材を使用している。</p> <p>(3) 教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>看護短大の新生を対象としたオリエンテーションにおいて、学校生活への見通しを得、適応を促進するために企画されたグループワークの効果について調査研究を行い、日本教育心理学会第53回総会において、次の演題と演者で共同発表した。益子洋人・岸太一・飯田敏晴・川島義高・木村真人・近藤育代・富沢貞雄・山本菜樹・稲津教久・加藤真子・善福正夫・片野真・佐藤真由美・副久美代・竹内信・高橋有子 2011 看護短大新生における入学前グループワークの効果測定の試みー学校生活への見通しと過剰適応行動に焦点を当ててーである。</p>
担当授業科目	2016年度：【学部】Psychology in ENG I & II、ストレスマネジメント法、心理検査実習、心理臨床実践演習Ⅱ、異常心理学、【大学院】臨床心理実習
代表的シラバス	<p>異常心理学</p> <p>概要：人間の「異常」を考えていくうえでは、一つの視点からだけではなく、様々な観点からなされるのが通常である。本講義では、歴史的に、こころの異常がどのように理解され、分類・整理されてきたのか、また、それが、どのようなものなのかについて、映像(DVD)や文献を基にして学んでいく。そして、その理解を基にして、心理学を学んだ者が、どのようなアプローチをとることが可能かについて学んでいく。</p> <p>到達目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「異常」についての、その歴史や現在の問題点など、いくつかの観点から述べる事が出来る。</li> <li>2. 代表的な精神疾患の基礎を理解し、そこで心理学的アプローチについて学ぶ。</li> <li>3. 正しい知識を学ぶことで、偏見をなくすことの大切さを理解する。</li> </ol>
教育改善活動	座学形式の講義においては、『感想・メモシート』と題したものを配布、回収している。シートでは、①当日授業の理解したこと、感じたこと、②不明・質問点、③教員へのメッセージを尋ねている。①と②については、座学講義内容が、学生の理解力に沿ったものであるかどうか、あるいは、説明が適切であったかどうかの確認を可能とする。②については、開講期間中に、それまでの講義内容に対する中間のまとめ講義を取り入れており、その際に、質問に答える形で展開している。このことで、学生は他学生の質問にも触れ、また違った視点から講義内容を捉えることにつながっているようである。③については、受講学生に開示することはしないが、適宜講義内容の改善に役立っている。
教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価</p> <p>「授業評価アンケート」での代表的な結果を記載する。座学式の講義(ストレスマネジメント法)では、授業への集中度、出席率、肯定的な回答者が全体の6割以上を占めている。自由記述による評価では「ストレス対策を実践的に学べた」といった回答が多い。一方で「グループ活動の機会がほしかった」等の要望が上がっており、これを現在の検討課題としている。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>現在、同僚教員等による講義評価は行っていない。今後の課題である。</p>

## 研究業績

研究の特徴	病気の治療過程にある人の心理的な苦痛、または生活を過ごしていく上で直面する現実的な困難さを軽減することを目的とした研究をしている。また、これまでの実践経験をもとにして、総合病院での心理職の職能についても検討している。
研究経歴	<p>2010年 公益財団法人エイズ予防財団リサーチレジデントとして、国立国際医療研究センター病院 エイズ治療・研究開発センターにて、利用者が専門家に相談しやすくなるようにするための実践型研究に従事した。</p> <p>2013年 山梨英和大学 人間文化学部 助教 (大学院兼任) 臨床心理学、病院臨床、健康開発に関する研究に従事(現在にいたる)</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>a. 疾病によって、当事者が発言する力を奪われず、かる「主体」性を保つための支援について論じるために、渡邊愛祈氏との共著で、『HIV/エイズとともに生きる人への臨床心理士・カウンセラーによるアドボカシー 井上孝代編『臨床心理士・カウンセラーによるアドボカシー』p123-141 風間書房 2013.3』というタイトルで執筆した。</p> <p>b. 『老老介護』について、コミュニティ心理学視点から論じた。『老老介護』日本応用心理学会(企画)内藤哲雄・玉井寛(編) 現代社会と応用心理学6 クローズアップ高齢社会</p> <p>(2) 学術論文(最新3年間以内の主だったもの)</p> <p>a 保健所等が提供する「エイズ相談・検査」の利用を促進し、もって、HIV感染拡大に歯止めをかけるための基礎的な研究を行った(飯田敏晴 2016 エイズ相談・検査利用の「利益性」「障害性」認知の概念化の試み: 受検経験による違い 山梨英和大学紀要, 14, 63-77.)。</p> <p>b 医療機関を利用する在日外国人を対象とした支援のあり方について、『飯田敏晴・井上孝代・貫井祐子・高橋卓巳・今井公文・伊藤紅・山田由紀・青木孝弘・岡慎一 2015 HIV感染の治療過程で自殺企図を繰り返した在日外国人: チーム医療における多文化間カウンセラーの役割をめぐって ころと文化, 14(2), 147-158. [査読有]』という題目で、論文を執筆した。</p> <p>c 保健所等が提供する「エイズ相談・検査」の利用を促進し、もって、HIV感染拡大に歯止めをかけるための基礎的な研究を行った(飯田敏晴・佐柳信男 2014 エイズ相談・検査利用の利益性と障害性の認知に関する質的分析: 自由記述式調査による探索的検討 山梨英和大学紀要, 13, 45-62.)。</p> <p>d. 大学生が認識するHIV感染へのイメージを明らかにするための調査を行い、その成果を『飯田敏晴・いとうたけこ・井上孝代 2014 大学生におけるHIV感染想定時の自己イメージの意味構造: 性別、HIV感染経路に関する知識及びHIV/AIDSに関する偏見との関連 山梨英和大学紀要 12,18-31』という題目で公表した。</p> <p>e. HIV感染拡大の阻止、およびHIVの治療過程にある者への偏見低減のための一連の調査を学位論文としてまとめ、その成果として、博士(心理学)の学位を授与された(飯田敏晴 エイズ相談促進の為の健康信念モデルに基づいた検討 明治学院大学大学院心理学研究科 学位論文 全108頁 2013.3.31)。</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a. HIVへの知識と偏見との関連性について実証的に調査を行い、『Iida T, Ito T, Inoue T. HIV-related knowledge and attitude toward people living with HIV/AIDS among university students in Japan. 13th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting, October, 2008. Tokyo, Japan.』として公表した。</p> <p>b. HIVが、人間の認知機能に与える影響を検討する一助として、事例に基づいた検討を行った(Iida T, Sugiyama Y, Koyama T. Assessing Neurocognitive Function of HIV infected client: Neuropsychological Assessments Availabilities in Japan.The 10th International Congress on AIDS in Asian and the Pacific. August, 2011. Busan, Korea.)。</p>

競争的資金採択課題	<p>a. 2008年度 日本コミュニティ心理学会若手学会員研究・実践活動奨励金 HIV/AIDSの感染予防教育と偏見予防教育-HIV/AIDSに対するコミュニティスティグマ尺度の開発。[研究代表者]</p> <p>b. 2013年度～2015年度 厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 HIV母子感染例における認知機能の実態(『HIV母子感染児における神経学的予後についての研究(研究代表者: 田中瑞恵)』[研究分担者]</p> <p>c. 2014年度～2016年度 日本学術振興会 科学研究費助成金研究 若手研究B『エイズ相談の利用を促進する予防的介入方法の開発と評価(研究課題番号: 26780403)』[研究代表者]</p> <p>d. 2016年度 日本学術振興会 科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(研究成果公開促進費)『エイズ相談利用促進に関わる規定要因の心理学的検討(課題番号: 16HP5199)』</p>
-----------	---

学会等発表・役員参加	1) 学会等発表(第一発表者であるもののみ。基本的には、医療機関における多職種協働での支援のあり方や、人間の記憶や注意記憶といった認知機能の解明について取り組んでいる。)	
	2015年	12月 「HIV母子感染6例における認知機能の特徴」という題目で、母子感染によってHIVに感染した者6例を対象とした神経心理学的研究の成果を、第29回日本エイズ学会学術集会・総会にて発表した。
	2015年	9月 「エイズ相談利用と利益性・障害性認知に関する研究: エイズ検査の受検経験による違い」という題目で、エイズ相談を利用する理由についての調査を行い、日本心理学会第79回大会で発表した。
	2015年	9月 『エイズ検査利用の利益性・障がい性認知に関する研究: 利用者の意識調査から』と題して、「日本健康心理学会第28回大会」で公表した。
	2015年	7月 「転院時「卵を運んでいる」と述べた中年男性との面接過程: HIV診療における心理臨床家の役割をめぐって」、第15回日本外来精神医療学会で発表予定である。
	2013年	9月 「エイズ相談意図とヘルスブリーフモデルに基づいた諸要因との関連」という題目で、エイズ相談を利用する理由についての調査を行い、日本応用心理学会第80回大会で発表した。
	2013年	7月 『DVD視聴によるエイズ相談意図促進の効果』と題して、人が視聴覚教材を見た際に、どの程度、エイズ相談を利用しようと思うかについての数量的に把握するための調査を行い、その成果を「日本コミュニティ心理学会第16回大会」で公表した。
	2013年	7月 『HIV/AIDS医療における心理専門職の実践に関する一報告 日本コミュニティ心理学会第16回大会自主シンポジウム『チーム医療における心理専門職の実践: コンサルテーションに焦点をあてて(企画者: 安田みどり)』として、病院内における心理の専門家が多職種とどのように連携をしていくかについてその経験を論じた。
	2013年	6月 『飯田敏晴・貫井祐子・今井公文 HIV感染時の治療過程で自殺企図を繰り返した在日外国人』として、在日外国人を対象とした心理支援の実践についてまとめ、第16回多文化間精神保健アドバイザー研修会で発表した。
	2013年	5月 『飯田敏晴・田沼順子・小松賢亮・渡邊愛祈・今井公文・岡慎一 神経心理検査を用いたHIV陽性者の認知機能の検討』として、簡便な心理検査を用いて、HIVの治療過程にある者の認知機能の実態について調査し、その成果を、「第2回MIND & EXCHANGE研究会」で公表した。
2013年	5月 『飯田敏晴 HAND診断に有用なスクリーニング検査は何か?: 国際医療研究センターからの報告』と題して、医療機関で簡便なスクリーニング検査の開発を目指した検討を行い、その成果を「第2回MIND & EXCHANGE研究会」で公表した。	

学会等発表・役員参加	2012年	11月	『飯田敏晴・田沼順子・諸岡都・窪田和雄・今井公文・岡慎一 神経心理学検査を用いたHIV陽性者の認知機能の検討』として、医療機関に通院するHIV陽性者の認知機能の実態を『26回日本エイズ学会学術集会・総会』で発表した。
	2) 学会等の役員参加		
	2012年	11月	第26回日本エイズ学会学術集会・総会 共催セミナー シンポジスト
	2011年	9月	日本健康心理学会第24回大会大会企画シンポジウム シンポジスト
	2011年	9月	第18回多文化間精神医学会学術総会 一般演題 座長
共同研究・受託研究の実績	2009年	4月	HIV医療包括ケア体制の整備(カウンセラーの立場から)(平成21年度 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 HIV感染症の医療体制の整備に関する研究。研究代表者:濱口元洋)における研究協力者(至 2010年3月)
	2011年	4月	邦人海外渡航者の渡航前・渡航中・渡航後のメンタルヘルスサービスの需要に関する研究(平成23年～平成24年度 日本学術振興会 科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究, 研究代表者:山本菜樹)における連携研究者(至 2013年3月)
	2012年	4月	自然災害時の精神保健医療対応と多文化対応(平成24年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野 『被災地における精神障害等の情報把握と介入効果の検証及び介入方法の向上に資する研究 研究代表者:金吉晴、分担研究者:秋山剛』)における研究協力者(至 2013年3月)
	2013年	4月	『精神・心理の評価(平成23年度～平成25年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 『全国のスリッドマインド胎芽病患者の健康、生活実態に関する研究 研究代表者:吉澤篤人、分担研究者:今井公文』)における研究協力者(至 2014年3月)
	2013年	4月	HIV母子感染例における認知機能の実態(平成25年度～平成27年度厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 『HIV母子感染児における神経学的予後についての研究 研究代表者:田中瑞恵』)における研究分担者(現在にいたる)
大学院生指導	大学院生の実習機関である山梨英和大学附属心理臨床センターにおいて、大学院生が担当するケースへの実習指導(個人スーパービジョン)を行っている。		
研究能力に対する評価	これまでの青年を対象とした、エイズ相談の利用促進及び、HIV/AIDSに関する偏見低減を扱った研究では、信頼性の高い質問紙尺度を開発するとともに、研究目的に対応する成果として一定のものを挙げてきたと考えられる。この研究領域は、本邦での心理学分野での検討は乏しく、基礎的な研究として位置づけられると考えられる。研究成果のいくつかは国内外の学会誌等を通じて公表をしているが、一部に留まっている。今後、さらに研究を進め知見の公開をはかり、研究をより広く、深くしていくことを課題としている。現在、学術振興会より科学研究費助成金を得て、エイズ相談の利用を促進する教育教材の開発に取り組んでいる。なお、これらの研究成果の一部は、①日本コミュニティ心理学会から若手学会員実践・研究活動奨励賞を受賞、②日本学術振興会の科学研究費助成金研究成果公開促進費を得た。		

### サービス活動業績

学部内委員会等活動・実作	2013年	4月	心理臨床センター紀要編集委員(現在に至る)	
	2015年	4月	臨床心理士資格認定大学院継続申請書作成のためのワーキングメンバー(2016年7月まで)	
		年	月	
		年	月	

アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	a. 山梨英和大学付属心理臨床センターにおける大学院生への実習指導 b. 国立国際医療研究センター精神科における研修心理療法士(大学院生・修士修了生)への臨床指導
社会貢献活動	(1)講演会
	2015年 12月 AIDS×ARTイベント実行委員会主催。HIV/AIDSサポートネットワークやまなし共催『AIDS×ART～みて、感じる～』にて、市民向けに「私たちが取り組むべきHIV予防:臨床心理士の立場から」という題目で論じた。
	2013年 12月 NPO法人 山梨いのちの電話主催『山梨いのちの電話 公開講座 ネット社会と人のこころ～激変した情報環境で、人間関係は?』講師として登壇した。
	2011年 11月 明治学院大学社会学部付属研究所主催 第25回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会の講師として「被災地での心のケアをめぐる～専門家の役割とは～」を論じた。
	2011年 7月 広島県臨床心理士会『第1回 HIV/AIDS専門カウンセラー研修会(広島ブロック)』講師 「HIV医療における心理支援について」論じた。
	2009年 11月 東京家政学院大学社会学部『ジェンダー論』という講義において、「HIV感染/AIDSについて」と題して知識の普及啓発を行った。
	(2)出前講座
	2016年 6月 山梨県立富士ふれあいセンター平成28年度『地域福祉講座』にて、市民50名程を対象として、「精神障がい者の地域生活支援:障がい特性の理解と関わり方の基本を学ぶ」を論じた。
	2016年 5月 山梨県中北保健所平成28年度『出張メンタルヘルス講座』として、社会福祉法人奥湯村福祉会にて、職員約40名を対象として、「職員のメンタルヘルスケアについて」を論じた。
	2015年 6月 山梨県立笛吹高校1年生(約280名)にて、「セルフマネジメント:ストレスの心理学」にて出張講義を行った。
	2014年 4月 山梨県笛吹市 スコレー大学『ストレスマネジメント入門』講師(2015年2月まで)
	2013年 1月 日本測地株式会社 第142回“まちづくり研究会” 講師 「気分障害 うつ病とは?」
	(3)公開講座
	2016年 11月 山梨英和大学における地域連携講座『お金とこころのサイエンス』『お金がなくても幸せなわけ』の講師を務めた。
	2015年 10月 山梨英和大学における地域連携講座『サイコロジーフェスティバル』にて、「病は気から?気は病から?心技体の心理学」の講師を務めた。
	(4)学外審議会・委員会等
	2012年 3月 平成23年度公益財団法人エイズ予防財団主催 HIV感染者等保健福祉相談事業 相談員連絡会議 世話人
	2010年 4月 多文化間精神医学会在日外国人支援委員会委員
	2011年 3月 多文化間精神医学会多文化災害支援委員会委員
	(5)その他
2016年 4月 山梨県被害者サポートセンター 専門家相談員(現在に至る)	
2015年 11月 山梨新報2015年11月13日付2面に、11月4日(水)の県民コミュニティカレッジにおける講座で開いた「お金がなくても幸せなわけ」の記事が掲載された	

社会 活動 貢献	2015年	4月 エフエム甲府(76.3 MHz)における生涯学習の時間で、「多文化共生における外国出身者への心理的サポートをめぐって」のテーマで出演した。
	2014年	3月 山梨県 エイズ治療の中核拠点病院連絡協議会に参加(現在に至る)
	2013年	4月 山梨英和大学附属心理臨床センター兼任カウンセラー(現在に至る)

## 成果と目標

専門的成果	<p>①母子感染によってHIVに感染した者が、その成長過程において、記憶や注意機能といった認知機能がどのように発達し、HIVがどのように影響を与えうるか、について実態調査を進めている。</p> <p>②人が、HIVやエイズについて悩んだ際に、専門家への相談をしやすいするための要因の解明について取り組んでいる。2013年に学位授与対象となった博士論文は、日本学術振興会から科研費の出版助成金を得ることとなった。</p> <p>③実践経験に基づいて、総合病院において専門家がどのような果たしうるか、という観点から事例研究による検討を行い、その成果は、査読付き学術雑誌二編に採択された。</p>
専門的目標	<p>①総合病院において、専門家が背景の異なる専門家にどのような助言を成しうるか(コンサルテーション)、あるいは、どのように連携しうるか(リエゾン(橋渡し))について考察を深めたい。</p> <p>②在日外国人、在外邦人支援、セクシュアリティ、HIV/AIDS、等での多様性のある方を対象とした心理支援のあり方についての検討およびその教育について理解を深めていきたい。</p> <p>③現在、人が、HIVやエイズについて悩んだ際に、専門家への相談が利用しやすくなるような教育教材の開発に取り組んでいる。</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
シマウチ ヒロカズ 島内 宏和	男	非公表	助教	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(情報科学)	専門分野	基礎解析学(複素解析), 情報学基礎(情報数理)	
学歴	2007年 3月 神戸大学 理学部 数学科 卒業 2010年 4月 東北大学大学院 情報科学研究科 博士前期課程 入学 2012年 3月 韓国・浦項工科大学校 JSSO海外学生支援制度による半月の短期留学 2012年 3月 東北大学大学院 情報科学研究科 博士前期課程修了 2012年 4月 東北大学大学院 情報科学研究科 博士後期課程 入学 2012年 8月 ドイツ・ヴェルツブルク大学 Programme students制度による1ヶ月間の短期留学 2015年 3月 東北大学大学院 情報科学研究科 博士後期課程修了			
実務経験	2009年 12月 独立行政法人 理化学研究所 テラヘルツイメージング研究チーム 研究補助者(2009年3月まで), 研究支援者(2012年4月から7月まで) 2010年 10月 東北大学大学院 情報科学研究科 計算機技術補佐 準職員 (2013年9月まで) 2010年 10月 東北大学全学教育TA (2015年3月まで, 微分積分学・線形代数学・微分方程式等を合計5科目担当) 2015年 4月 山梨英和大学 人間文化学部人間文化学科 助教(現在に至る) 2016年 6月 東京工業大学 理学院 流動研究員(現在に至る)			
受賞歴	2012年 6月 東北大学 国際高等研究教育機構「博士研究教育院生」採用 年 月 年 月			
所属学会	2013年 3月 日本数学会(現在に至る) 年 月 年 月 年 月			
特免資格等	2007年 3月 高等学校教諭一種免許状(数学) 2007年 5月 基本情報技術者 2008年 6月 ソフトウェア開発技術者(現・応用情報技術者) 年 月			
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>情報科学及び数学関連講義等を通じ、「自ら考え、行動できる人材」の育成を目指す。講義では、「問題を理解し、関連する既知の情報を整理し、解答の計画をたて、計画を実践し、得られた結果を検討する」というプロセスを何度も体験させ、変化の激しい現代においても柔軟に対応できる力を育む。社会においても柔軟に対応できる力を育む。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>講義「数学の世界1・2」は、受講生のバックグラウンドが多種多様であった。出来るだけ多くの受講生にとって有意義な講義となるように、扱うテーマを厳選して平易な解説を心がけ、演習の時間に各個人のがわからなかった部分を可能な限りフォローをするように努めた。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>数学の世界1・2では、教科書は使用せず、Google Classroomにてスライドや資料を配信した。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>特になし。</p>
担当授業科目	<p>2016年度</p> <p>ICTスキルa・b・c・d, データサイエンス I, 情報数理 I・II</p> <p>ネットワークとセキュリティ, メディアプロジェクト II</p> <p>2015年度</p> <p>ITリテラシー演習1・2, 数学の世界1・2, オペレーティングシステム</p> <p>情報システム実験演習I・II</p>
代表的シラバス	<p>数学の世界1・2</p> <p>概要</p> <p>数学の授業と聞くと、「はじめに定義・定理およびその証明を学び、計算や証明の練習を繰り返す」というイメージを持つ方も多いかもかもしれません。本講義はそのような流れを汲まず、はじめに日常生活に現れる現象等を取り上げ、その数学的な解釈を試みるというアプローチをとります。扱う数学は泥縄式に、必要になったら導入するという方式で進めます。数学の世界1で扱うテーマは、「文章と記号論理」、「車の運転と微分」、「都道府県の人口・面積と積分」、「自然・芸術と黄金比」です。数学と様々な現象や科学等との有機的な繋がりと、現れる数学の面白さが伝わるように、平易な解説を心掛けます。</p> <p>到達目標</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 数学と様々な現象や科学などとの有機的な繋がりを確認する。</li> <li>2. 導入した数学の定義や定理を理解し、自ら問題に応用できる。</li> <li>3. 講義内で学んだ数学について説明できる。</li> </ol>
教育動改善活	<p>演習の時間に学生の理解度を確認し、必要があれば補足の時間を増やすなど可能な限り柔軟な対応を心がけている。また、GoogleFormを活用して進捗についてのアンケートを実施したり、講義への意見を収集するなどして、講義の改善に取り組んでいる。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価</p> <p>授業アンケートの良かった点としては、例えば「数学の世界」において「テキストや配布資料は内容の理解に役立った」と回答した人が90%を超えていた点、「この授業がねらいとしていた知識や技能を習得できたと思う」と回答した人が90%を超えていた点、などが見られた。改善すべき点としては、滑舌の悪さや話すスピードのはやさからか、「聞き取りにくい」などの回答が目立った。今後の講義で改善していきたい。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価</p> <p>本学での授業評価なし</p>

## 研究業績

研究の特徴	擬等角写像の数値計算法の研究や複素力学系理論の計算機援用研究など、計算機を用いた複素解析学周辺理論の研究と応用に取り組んでいる。
研究経歴	<p>2012年 東北大学国際高等研究教育機構 博士研究教育院生 擬等角写像の新しい数値的構成手法に関する研究に従事。(2015年3月まで)</p> <p>2015年 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 助教 数値擬等角写像、複素力学系、及びレブナー方程式の数値計算法の研究に従事。(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1) 著書 特になし。</p> <p>(2) 学術論文, プロシーディングス R. M. Porter and H. Shimauchi, "Numerical solution of the Beltrami equation via a purely linear system", Constructive Approximation, 43(3), 371-407 (2016). R. M. Porter, H. Shimauchi, "A numerical algorithm for solving the Beltrami equation", AIP Conf. Proc. 1648, 440006 (2015). H. Shimauchi, "A remark on Zagier's observation of the Mandelbrot set", Osaka Journal of Mathematics, Volume 52, Number 3, 737-747 (2015). H. Shimauchi, "On the coefficients of the Riemann mapping function for the exterior of the Multibrot set", Topics in Finite or Infinite Dimensional Complex Analysis, Tohoku University Press (2013), 237-248. H. Shimauchi, "ON THE COEFFICIENTS OF THE RIEMANN MAPPING FUNCTION FOR THE EXTERIOR OF THE MANDELBROT SET (Integrated Research on Complex Dynamics)", RIMS Kôkyûroku 1807 (2012), 21-30. H. Shimauchi, "ON THE COEFFICIENTS OF THE RIEMANN MAPPING FUNCTION FOR THE COMPLEMENT OF THE MANDELBROT SET (Conditions for Univalence of Functions and Applications)", RIMS Kôkyûroku 1772 (2011), 109-113.</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等) [シンポジウム・研究集会等口頭発表] H. Shimauchi, "A numerical algorithm for quasiconformal mappings", トポロジーとコンピュータ, 日本大学, 2015.11.08. H. Shimauchi, "Numerical quasiconformal mappings by certain linear systems", 「リーマン面・不連続群論」研究集会, 大阪, 2015年2月21日. H. Shimauchi, "Piecewise linear approximation of quasiconformal mappings by certain linear systems", 東北大学大学院 情報科学研究科 情報数理談話会, 仙台, 2014年12月16日. H. Shimauchi, "線形系による擬等角写像の離散化", 東北大学 国際高等研究教育院 学際科学フロンティア研究所 共催 第2回 全領域合同研究交流会, 仙台, 2014年11月14日. H. Shimauchi, "線形系による擬等角写像の区分線形近似", 東工大複素解析セミナー, 2014年10月30日. H. Shimauchi, "効率的な数値擬等角写像の新しい構成手法", 東北大学国際高等研究教育機構 先端基礎科学領域基盤・情報工学社会領域基盤 合同主催 縦横無尽に階層・領域をまたぐ融合理工学セミナー, 仙台, 2013年12月6日. H. Shimauchi, "A numerical algorithm for quasiconformal mappings with measurable Beltrami coefficients", The 2nd GSIS-RCPAM International Symposium: Geometric Function Theory and Applications in Sendai, 2013.09.10. H. Shimauchi, "On the Coefficients of the Conformal Maps Associated with the Mandelbrot Set", 9th International Symposium on Geometric Function Theory and Applications, Istanbul, Turkey, 2013.08.27. H. Shimauchi, "On the coefficients of the normalized conformal map associated with the Mandelbrot set", Seminar talk at University of Würzburg, Würzburg, Germany, 2013.08.02. H. Shimauchi, "On the coefficients of the Riemann mapping function for the exterior of the Mandelbrot set", Integrated Research on Complex Dynamics, Kyoto, Japan, 2012.01.25.</p>

研究実績	<p>H. Shimauchi, "On the coefficients of the Riemann mapping function for the complement of the Mandelbrot set", The 19th International Conference on Finite or Infinite Dimensional Complex Analysis and Applications, Hiroshima, Japan, 2011.12.12.</p> <p>H. Shimauchi, "On the coefficients of the Riemann mapping function for the complement of the Mandelbrot set", Conditions for Univalence of Functions and Applications, Kyoto, Japan, 2011.06.10.</p> <p>[ポスター発表] H. Shimauchi, "On the coefficients of the normalized conformal mapping onto the exterior of the Mandelbrot set", The XXIIInd Rolf Nevanlinna Colloquim, Helsinki, Finland, 2013.08.05-09.</p> <p>[査読] 欧米の大学の数学誌に投稿された論文の査読経験あり。守秘義務があるため詳細については非公開。</p>	
競争的資金採択課題	<p>東北大学国際高等研究教育機構, 平成24年度 博士研究教育院生研究費, 研究課題名「精度保証付き数値擬等角写像の新しい構成手法の確立とその画像処理への展開」, 研究代表者(2012年6月-2015年3月)</p> <p>日本学術振興会, 平成28年度 科学研究費助成事業・基盤研究(B), 研究課題名「空間複雑性と理想境界のポテンシャル解析」, 研究分担者(2016年6月-現在)。</p> <p>日本学術振興会, 平成28年度 科学研究費助成事業・若手研究(B), 研究課題名「極値的擬等角写像の可視化」, 研究代表者(2016年6月-現在)。</p>	
学会等発表・役員参加	<p>2014年 9月</p> <p>2014年 8月</p>	<p>R. M. Porter, H. Shimauchi, "線形系による離散擬等角写像 (Discrete quasiconformal maps via a linear system)", 日本数学会 2014年度秋期総合分科会, 広島。</p> <p>9th International Symposium on Geometric Function Theory and Applications, Istanbul, Turkey, 2013, 1セッションの座長を務めた。</p>
受託共同研究の実績	<p>年 月 特になし。</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p> <p>年 月</p>	
大学院生指導	<p>特になし。</p>	
研究能力に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Mandelbrot集合の外部へのRiemann写像の係数について研究し, 成果を2編の論文として纏め, 査読つき論文として受理されている。研究の過程で, 複数の国際会議・研究集会などでその途中経過を報告している。</li> <li>・CINVESTAVのR. Michael Porter教授と擬等角写像の数値計算法の研究に取り組み, ある条件下では収束性の保証された新しいアルゴリズムを提示した。得られた成果は, 査読つき論文として雑誌 Constructive Approximation に掲載されている。また, 研究の経過を複数の学会・研究集会などで発表している。</li> <li>・科研費等の外部資金を獲得し, 研究を順調に進めている。</li> </ul>	

## サービス活動業績

会等 績活 動実 績部 学内 委員 部	年 年 年 年	月 月 月 月	特になし.
アドバイザー活動実績		特になし.	
後進育成活動実績		特になし.	
社会 貢献 活動	(1) 講演会 年      月 (2) 出前講座 2015年      6月 山梨英和高校・SSH課題研究指導補助。(現在に至る) (3) 公開講座 年      月 (4) 学外審議会・委員会等 年      月 (5) その他 年      月		

## 成果と目標

専門的 成果	<p>①CINVESTAVのR. M. Porter教授と共同で、擬等角写像を近似する区分線形写像を構成する新しいアルゴリズムを提示した。アルゴリズムにより得られる近似解は、特定の条件下ではメッシュを細かくしていく真の解に広義一様収束することを示した。</p> <p>②複素力学系の双曲稠密性予想へのアプローチとして、一般化されたMandelbrot集合の外部への等角写像のローラン展開の係数について研究をし、係数の付値に関する不等式を得た。得られた結果は、Zaigerにより観察され、山下により示された不等式を含むものとなっている。また、関連して一般化されたMandelbrot集合の反転の外部への等角写像のテイラー展開の係数について研究した。EwingとSchoberにより得られていた係数公式等を拡張し、係数が零となる十分条件を得た。</p> <p>③得られた成果を論文や国内・国外における学会・国際会議・研究集会の発表などで公表しつつ、個人ホームページなども利用して幅広く成果の発信に努めている。</p>
専門的 目標	<p>①極値的擬等角写像およびペルトラミ方程式のPrincipal Solutionの高速かつ高精度な数値計算手法の確立を目指す。得られた成果を、複素力学系などの問題へ応用することを目指す。また、医用画像処理や工学など他の分野への展開にも取り組む。</p> <p>②複素解析的視点からレブナー流の可視化の研究に着手し、高速かつ高精度な新しい数値計算手法を構築する。</p> <p>③前年に引き続き、研究経過や得られた成果を学会や国際会議等の場で発表する。また、webや本学で実施しているオープンキャンパスなども利用して、成果を幅広く発信する。また、研究基盤維持のため外部資金の獲得にも積極的に挑戦する。</p>

最新データ入力日	2016 年 5 月 1日
----------	---------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
ゴウ アキラ 後藤 晶	男	1984年	助教	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(情報コミュニケーション学)	専門分野	理論経済学・人間情報学	
学歴	2003年 3月 神奈川県立横浜翠嵐高等学校 全日制普通科 卒業 2008年 3月 中央大学 総合政策学部 政策科学科 卒業 2010年 3月 明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科 修士課程 修了 2015年 3月 明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科 博士後期課程 修了 年 月			
実務経験	2008年 4月 明治大学 情報コミュニケーション学部 ティーチング・アシスタント 2010年 4月 明治大学 情報コミュニケーション学部 助手 2012年 4月 貞静学園短期大学 非常勤講師 2013年 3月 山梨英和大学 人間文化学部 助教(現在に至る) 2014年 4月 明治大学行動経済学研究所 客員研究員(現在に至る) 2014年 4月 帝京科学大学 学芸員課程 非常勤講師 2015年 4月 明治大学 情報コミュニケーション学部 兼任講師(現在に至る)			
受賞歴	2010年 3月 第一回 明治大学大学院 院長賞 受賞 2013年 3月 情報コミュニケーション学会 優秀発表賞 受賞 2014年 3月 日本計画行政学会関東支部／社会情報学会共催 若手研究交流会優秀賞			
所属学会	2011年 4月 行動経済学会(現在に至る) 2011年 10月 日本人間行動進化学会(現在に至る) 2013年 4月 情報コミュニケーション学会(現在に至る) 2013年 7月 日本リスク学研究学会(現在に至る) 2013年 8月 日本社会心理学会(現在に至る) 2013年 12月 日本シミュレーション&ゲーミング学会(現在に至る) 2014年 4月 社会情報学会(現在に至る) 2014年 4月 人工知能学会(現在に至る) 2014年 5月 情報知識学会(現在に至る) 2015年 2月 地域デザイン学会(現在に至る)			
特免資 許許格 等・・・	2015年 2月 普通自動車第一種運転免許 取得 年 月 年 月			
e-mail	a.goto[atmark]yamanashi-eiwa.ac.jp			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

<p>教育理念、方針、方法</p>	<p>従来、人文系大学における「情報系」科目においては情報処理教育及び情報モラル教育が中心となっていた。しかし、この技術革新が進み情報量が増加し続ける現代社会においてはIT技術に対する深い理解および知識は必要不可欠である一方で、それだけでは現代社会に適応することは困難である。このような現状を踏まえて、「情報処理教育」、「情報リテラシー教育」だけではなく、情報量が増加し続ける社会に適応していくために種々の事象を「クリティカル」に認識し、意思決定をする能力の改善は情報教育の一環として図っていく必要がある。そのためには、人間自身の意思決定のクセを十分に把握する必要がある。</p> <p>いわゆる「クリティカルシンキング」は物事を正しく認識し、考えるということであるが、これを支えるのは意思決定や思考のクセを認知することである。そのために、クリティカルシンキングの養成を情報教育の核として据え、高度に発展し続ける情報社会に対する「適応能力」を育成する必要があると考えている。クリティカルシンキング能力は現代社会において求められている「教養」である。実業の世界では重要視されている一方で、いずれも十分に理論的かつ体系的に示されているわけではない。これらの点を踏まえ、行動経済学の観点から理論的かつ体系化を試みることにより、地域および現代社会に貢献する学生の育成をしたいと考えている。</p>
<p>教育能力</p>	<p>(1)教育方法実践例</p> <p><b>【意思決定論】</b>          本科目は本学において「融合科目」として位置づけられ、行動経済学の観点から人間の意思決定の特徴について講義をする。主に、ヒューリスティックやフレーミング理論、プロスペクト理論に代表される意思決定の特徴について講義した上で、ゲーム理論を用いて利他性についても講義する予定である。          また、各学生に貸与されているMacBook Airを用いて、「意思決定実験」や「経済学実験」も踏まえた授業の展開を計画している。</p> <p><b>【専門情報リテラシー(人間行動/社会行動)、明治大学】</b>          本科目は行動経済学に関わる知識を身につけると同時に、「仮説検証」の一連のプロセスを統計ソフトであるRを用いて学ぶアクティブラーニング形式の授業である。「専門情報リテラシー(人間行動)」においては人間の意思決定について着目して授業を展開し、「専門情報リテラシー(社会行動)」においては経済ゲーム実験を実施したり、主観的厚生概念の一つとして「幸福」に着目して授業を行う予定である。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>本学において担当する全科目について、演習課題の配布および学生が適宜講義資料を確認できることの2点を目的としてGoogle Classroomを用いて授業を行っている。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>本学における情報教育環境について学会報告・研究会報告を行った。また、経済学Iの講義において、2016年7月に実施された参議院議員選挙に関連した授業を実施して、記事を寄稿した。詳細は業績欄を参照のこと。</p>
<p>担当授業科目</p>	<p>2016年度(山梨英和大学):意思決定論・経済学I・データアナリティクスI/II/III・データサイエンスII・ICTスキルa/b/c/d・ITリテラシー演習1/2・専門ゼミ          2016年度(明治大学):ICTベーシックI/II・専門情報リテラシー(人間行動/社会行動)</p>
<p>代表的シラバス</p>	<p><b>【意思決定論】</b>          我々人間には、わからないことがたくさんある。投資や購買といった経済行動から、進学や結婚といった人生に関わる重大な意思決定も、わからないことがある状況で行わなければならない。このような時に我々はどうのように意思決定を行っているのだろうか。          本講義では、意思決定を学ぶために重要である、経済行動・人間行動の記述的理論である行動経済学・行動意思決定論の基礎について導入し、幅広い観点から不確実性のある状況における人間の意思決定の特徴を学ぶ。同時に、規範的理論となる経済学・OR(オペレーションズ・リサーチ)の観点からの意思決定の特徴についても検討する。          これらの学習を通じて、意思決定に対する幅広い視座を獲得し、現代社会を生き抜くために重要な人間行動に関する知識と考え方を獲得することを目標とする          到達目標「1. 人間の意思決定の特徴を理解することができる。」「2. 合理的な意思決定の特徴を理解することができる。」「3. 1および2に対する理解に基づいて、適切な意思決定ができるようになる。」「4. ゲーム理論的な観点からの社会や人間行動の分析・理解が可能になる。」</p>

教育改善活動	一部の授業を除き、担当している授業においては、学生の理解度の確認および授業の改善を目指してオンライン上で①小課題、②授業に対するコメント、③学内で学期末に行う授業評価アンケートのフォーマットに基づいた授業評価の3点を毎回行なっている。これにより学生の理解度の確認を行うと同時に、教育の質の向上を目指した活動を行なっている。 その他、2015年には一般社団法人私立大学連盟主催の「FD推進ワークショップ(新任専任教員向け)」に参加した。
教育能力に対する評価	(1)学生による授業評価 2015年度開講科目であったITリテラシー応用演習について毎回の授業評価を見ると、目標達成度・声、言葉の適切性・定時性・授業環境の発言のしやすさ・授業環境の集中しやすさ・シラバスとの対応・資料の適切性・学生の興味、意欲に対する工夫の各観点において、学生のほぼ100%が「強くそう思う」「そう思う」と答えている。しかしながら、より学生にとって最善の環境を作れるように工夫をしていく必要がある。  (2)同僚教員等による授業評価  特には現在行っていない。今後の課題である。

## 研究業績

研究の特徴	研究の特徴は学際性にあり、現在は実験ゲーム研究およびアンケート調査研究を中心に行っている。実験ゲーム研究は経済学のみならず、会計学や心理学、生物学、社会学や人類学と言った非常に幅広い分野からアプローチされているテーマである。現在は人間の協力的行動を促進させるメカニズムについて社会的ジレンマゲームをベースとして検討しており、同研究テーマについて学外の研究者と共同研究を進めると共に、社会的ジレンマ状況における意思決定に関連した脳のメカニズムについても学外の研究者と共同研究を進めている。これらについては基礎研究を中心に行ってきたが、現在は行動経済学的な観点からオンライン調査を実施し、制度設計・政策応用を視野に入れた研究を展開している。 また、今年度からはオンライン上における経済行動に着目した企業との共同研究も開始し、より大きな視座での行動経済学の発展に貢献を志している。
研究経歴	2010年 明治大学情報コミュニケーション学部助手／明治大学大学院情報コミュニケーション研究科博士後期課程大学院生として、公共財ゲームの枠組みを用いた、協力的行動の促進要因に関する研究に従事。  2013年 山梨英和大学人間文化学部助教として、公共財ゲームの枠組みを用いた、協力的行動の促進要因に関する研究に従事。
研究実績	(1)著書 後藤 晶(他4名), 2012,『情報コミュニケーション学際研究論集 第1号』,明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科  後藤 晶, 2012,「2-3防災と情報」,「2-4避難所等の情報」,「2-6安否確認」, 野上 修市(他7名編), 2012,『地域・マンションの防災ハンドブック』, 地域マネジメント学会・大成出版社  (2)学術論文 Hirose, Yoshitaka, Akira Goto, in print, "The Effects of Self-Regulation on Audit Quality: Experimental Analysis Using a Public Goods", American Accounting Association Conference Paper Fujii, Takayuki, Akira Goto, Haruto Takagishi, 2016, "Does facial width-to-height ratio predict Japanese professional football players' athletic performance?", Letters on Evolutionary Behavioral Science, vol.7, no.1, pp.27-40.  後藤 晶, 2015,「プレミアム商品券の経済行動:購入判断に対する社会経済的要因に着目して」, 行動経済学会誌, vol. 8, pp.86-89 .  後藤 晶, 2015,「プレミアム商品券の経済行動:購入判断に対する社会経済的要因に着目して」, 行動経済学会第9回大会発表論文  後藤 晶, 2015,「プレミアム商品券は経済を活性化させたか:社会経済的側面に着目した政策効果の検討」, 公共選択学会第19回大会発表論文

- 後藤 晶, 2015, 「損失は協力行動を促進するか: カタストロフゲームによる実験的アプローチ」, 社会情報学会誌, vol.4, no.2, pp.1-16.
- 後藤 晶, 2015, 「幸福度・利己性と自然に対する意識に関する一考察」, 情報知識学会誌, vol.25, no.2, p.200-207.
- 後藤 晶, 2015, 「ゲーム状況における協力行動に関する研究: カタストロフゲーム・アプローチ」, 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科博士学位請求論文, 165p.
- 杉浦 学, 秋月 拓磨, 後藤 晶, 難波 道弘, 高橋 弘毅, 「Build and Bring Your Own Device」によるICT活用能力の育成」, 日本教育工学会論文誌, vol. 38, no. 3, pp.287-297.
- 後藤 晶, 2014, 「損失が発生する「範囲」は協力行動に影響を与えるか?: カタストロフゲームによる実験的アプローチ」, 情報コミュニケーション学会誌, vol.10, no.1.
- 後藤 晶, 2014, 「損失と協力行動に関する一考察: 成果報酬条件におけるカタストロフゲームによる実験的アプローチ」, 情報知識学会誌, vol.24, no.1, pp.164-171.
- 後藤 晶, 2013, 「集団間バイアスに関する事例研究: 情報機器操作に関する授業を通じて」, 情報コミュニケーション学会誌, vol.9, no.2, pp.20-26.
- 後藤 晶, 2013, 「協力行動と公共財ゲームに関する一考察: 経済学実験および心理学実験を中心に」, 『山梨英和大学紀要』, vol.12, pp.32-48.
- 後藤 晶, 2013, 「「カタストロフ」は協力行動を促進するか: 「カタストロフゲーム」の提案と予備的実験」, 『貞静学園短期大学研究紀要』, 貞静学園短期大学, vol.4, pp.15-25.
- 後藤 晶, 2013, 「「線形性の期待」を崩壊するカタストロフ」, 『貞静学園短期大学研究紀要』, 貞静学園短期大学, vol.4, pp.5-13.
- 後藤 晶, 2012, 「社会的ジレンマに関する一考察: 囚人のジレンマゲームを例として」, 『情報コミュニケーション学際研究論集 第1号』, 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科, pp.31-43.
- 後藤 晶, 2011, 「意思決定の神経科学的基盤: 近赤外線分光法を用いた実験による予備的考察」, 『情報コミュニケーション研究論集』, vol.2, 明治大学大学院, pp. 1-19.
- 後藤 晶, 2010, 「社会的感情の機能とその進化に関する一考察 -社会的行動に対する二重過程理論的アプローチ-」, 『情報コミュニケーション研究論集』, vol.1, 明治大学大学院, pp.1-19.
- (3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)
- Hirose, Yoshitaka and Akira Goto, (accepted), THE EFFECTS OF SELF-REGULATION ON AUDIT QUALITY: EXPERIMENTAL ANALYSIS USING A PUBLIC GOODS GAME, The 28th Asian-Pacific Conference on International Accounting Issues.
- Hirose, Yoshitaka and Akira Goto, (accepted), The Effects of Self-Regulation on Audit Quality: Experimental Analysis Using a Public Goods Game, The 2016 American Accounting Association Annual Meeting.
- Goto, Akira, (accepted), Happiness and Altruism: Experience Sampling Method Approach, 31st International Congress of Psychology
- 後藤 晶, 2016, 「政党名を隠して政策比較をすると、「政策」と「政党」は一致するのか?」, 株式会社パイブドビッツ 政治山カンパニー, <http://sejiyama.jp/article/news/nws20160713-2.html>
- (文責)市ノ澤 充, (分析, 協力)後藤 晶, 本田 正美, 2015, 「なぜ維新の会は第一党を維持できたのか?-大阪で問われている政党と政治家のあり方とは-」, 株式会社パイブドビッツ 政治山カンパニーレポート, S16-0420009000MI
- 後藤 晶, 2014, 「書評『その問題, 経済学で解決できます。』ウリ・ニーズィー, ジョン・A・リスト 著(望月 衛 訳)」, 行動経済学会誌, vol.7, pp.19-22.
- 後藤 晶, 2014, 「「情報」・「コミュニケーション」・「社会」」, 情報コミュニケーション学会誌, vol.10, no.2, p.33.
- 後藤 晶, 2014, 「人の心動かす経済対策を」, 2014年9月26日山梨日日新聞14面(文化・くらし欄, ともに学ぼう! 知識を地域へ「時代を読む79」)
- Goto, Akira, 2014, "Catastrophes Promote Cooperation: Experimental Approach with Catastrophe Game", Available at SSRN: <http://ssrn.com/abstract=2417866>. (working paper)

競争的資金採択課題	<p>a.修士論文執筆の為の研究調査プログラム(明治大学大学院情報コミュニケーション研究科), 2009年度,「感情が意思決定に与える影響」, 研究代表者, 125千円</p> <p>b.修士・博士論文執筆の為の研究調査プログラム(明治大学大学院情報コミュニケーション研究科), 2010年度,「感情が意思決定に与える影響:二重過程理論アプローチ」, 研究代表者, 125千円</p> <p>c.明治大学大学院 研究調査プログラム, 2011年度,「意思決定における社会的感情の影響とその進化」, 研究代表者, 142千円</p> <p>d.明治大学大学院 研究調査プログラム, 2012年度,「感情が意思決定に与える影響:カタストロフゲームによる実験的アプローチ」, 研究代表者, 135千円</p>
学会等発表・役員参加	<p align="center"><b>2015年度以降のみ記載. その他25件(単独19件, 共著4件, うち2件筆頭)</b></p> <p>2016年 9月 後藤 晶 “成果報酬は「いい制度」か? :オンラインアンケート調査を用いた社会経済的要因の検討”, 2016年 社会情報学会大会, 札幌学院大学</p> <p>2016年 9月 廣瀬喜貴, 後藤晶, 自主規制機関が監査の品質に及ぼす影響: 公共財供給ゲームによる実験研究, 日本会計研究学会第75回大会 自由論題報告, 静岡コンベンションアーツセンター</p> <p>2016年 7月 横井忠泰, 大谷内翔平, 増澤崇, 橋本千里, 塚原孝史, 後藤晶, 「消費意欲と「クチコミ」に関する一考察」, 情報コミュニケーション学会第3回社会コミュニケーション部会, 明治大学</p> <p>2016年 7月 後藤 晶, 「報酬制度に関する一考察:オンライン調査を用いて」, 情報コミュニケーション学会第3回社会コミュニケーション部会, 明治大学</p> <p>2016年 7月 後藤 晶, 「将来世代を見据えた時間割引に関する一考察:消費増税に関するオンライン調査から」, 情報コミュニケーション学会第3回社会コミュニケーション部会, 明治大学</p> <p>2016年 7月 後藤 晶, 本田正美, 「監視カメラの社会的許容度に関する一考察:プログレレポート」, 情報コミュニケーション学会第3回社会コミュニケーション部会, 明治大学</p> <p>2016年 6月 後藤 晶, 本田正美, 「監視カメラの社会的許容度に関する一考察」, 情報処理学会情報システムと社会環境研究会第137回研究発表会, 國學院大學 渋谷キャンパス</p> <p>2016年 3月 後藤 晶, 「主観的幸福度と利他性に関する一考察:ESM調査による検討」, 日本計画行政学会/社会情報学会共催第10回若手研究交流会, 青山学院大学</p> <p>2016年 3月 後藤 晶, 三森 朋宏, 永谷 研一, 「協力行動としてのフィードバックが研修効果に与える影響: 情動知能との関連から~今後の研究に向けて~」, 学習分析学会2015年度第2回研究会, 上智大学市谷キャンパス</p> <p>2016年 3月 後藤 晶, 「繰り返される損失は協力行動を促進するか: マルチショットカタストロフゲームによる実験的アプローチ」, 第13回情報コミュニケーション学会全国大会, 大阪電気通信大学</p> <p>2016年 2月 後藤 晶, 「主観的厚生指標としての幸福度に関する一考察:経験サンプリング法による検討」, 2015年度社会情報学会第1回中国・四国支部研究発表会, 島根大学松江キャンパス</p> <p>2016年 1月 後藤 晶, “What are desirable compensation systems?: Analysis by online questionnaire”, 第22回社会情報システム学シンポジウム, 電気通信大学</p> <p>2016年 1月 後藤 晶, “Is “Good Luck” Really a “Good Thing”? A Study with the Experimental Games”, 第22回社会情報システム学シンポジウム, 電気通信大学</p> <p>2015年 12月 後藤 晶, 「「イイコト」は協力行動を促進するか?: ウィンドフォールゲームによる実験的アプローチ」, 第8回日本人間行動進化学会, 総合研究大学院大学葉山キャンパス</p> <p>2015年 11月 後藤 晶, 「プレミアム商品券の経済行動: 購入判断に対する社会経済的要因に着目して」, 行動経済学会第9回大会, 近畿大学東大阪キャンパス</p> <p>2015年 11月 Hirose, Yoshitaka, Akira Goto, 「Accounting audit institution as public goods: Experimental analysis of the impact of selfregulation on the audit quality」, 第19回実験社会科学カンファレンス, 東京大学</p> <p>2015年 11月 後藤 晶, 「プレミアム商品券は経済を活性化させたか: 社会経済的側面に着目した政策効果の検討」, 公共選択学会第19回大会, 明海大学</p> <p>2015年 10月 後藤 晶, 三森 朋宏, 永谷 研一, 「協力行動としてのフィードバックが研修効果に与える影響: 情動知能との関連から」, 学習分析学会2015年度第1回研究会, 静岡大学浜松キャンパス</p>

学会等発表・役員参加	2015年	7月	後藤 晶,「山梨県と東京都における大学生の幸福度・利他性の比較に関する予備的考察」, 地域デザイン学会関東・東海地域部会第6回研究会, 一般社団法人ソーシャルユニバーシティ.
	2015年	5月	後藤 晶, 杉山 歩,「公共サービスとしての観光戦略:「やまなし」を仕掛ける」, 第29回人工知能学会全国大会, 公立ほこだて未来大学.
	2015年	5月	後藤 晶,「損失と協力行動に関する一考察: 成果報酬条件におけるカストロフゲームによる実験的アプローチ」, 情報知識学会第23回年次大会, 東洋大学
	2015年	3月	後藤 晶,「幸福度・利己性と自然に対する意識に関する一考察」, 日本計画行政学会/社会情報学会共催第9回若手研究交流会, 東京工業大学.
	2015年	3月	後藤 晶,「協力行動は「報酬条件」によって変わるか: プール解析による検討」, 第12回情報コミュニケーション学会全国大会, 東北芸術工科大学.
その他, 2016年度社会情報学会全国大会において座長を担当する予定であり, 情報コミュニケーション学会第2回社会コミュニケーション部会研究会, 日本教育工学会研究会14-2, 第11回情報コミュニケーション学会全国大会, 第9回情報コミュニケーション学会全国大会にて座長を担当した.			
受託共同研究の実績	2016年	4月	共同研究,「『顧客化』に向けたデジタル時代の経済行動の解明」, 株式会社博報堂プロダクツ, 750千円.
	年	月	
	年	月	
	年	月	
大学院生指導	明治大学情報コミュニケーション研究科の博士前期課程の学生2名のアンケート調査の協力・指導を行っている。また, 博士後期課程の学生とは共同研究を推進し, 指導を行っている。		
研究能力に対する評価	現在は特に災害時/幸運発生時の自発貢献メカニズムの解明を実験及びシミュレーション的な手法により試みており, そのモデル化を試みている。この問題は2011年, 未曾有の大災害である東日本大震災に直面した我が国にとって非常に重要な課題である。また, その観点を踏まえると思いがけない幸運に恵まれた際の行動についても検討をする必要がある。一方で, 現状では情報学や経済学, 心理学など様々な学術領域の知見にたっても統一的説明する枠組みが存在していないのが現状である。しかし, より広い応用可能性を持つ実験ゲームの枠組みに用いることにより, 社会科学及び人文科学にも応用可能な研究が推進可能であると確信している。 また, 同研究テーマについて学会発表にて優秀発表賞を受賞したり, 行動経済学や実験経済学の手法を用いた共同研究を外部の研究機関・企業と現在進行しているなど一定程度の評価を受けていると考えられる。		

## サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2015年	1月	COC+ワーキンググループ構成員
	2015年	1月	新カリキュラムワーキンググループ構成員
	年	月	
	年	月	
	年	月	
アドバイザー活動実績	特になし		
後進育成活動実績	特になし		

社会 貢 献 活 動	(1)講演会	年 月 特になし
	(2)出前講座	
	2016年	6月 蕪崎工業高校1年生に向けた「MacBook Air体験講座」で講師を担当
	2016年	1月 第一学院高校において「経済学と心理学が教えてくれる！人間のインセンティブとモチベーション」にて講師を担当
	2015年	7月 蕪崎高校において「経済学と心理学が教えてくれる！人間のインセンティブとモチベーション」にて講師を担当
	2015年	6月 蕪崎工業高校1年生に向けた「MacBook Air体験講座」で講師を担当
	2015年	2月 聖隷クリストファー高等学校にて「ダイエットの意思決定 ～感情と理性の戦い～」で講師を担当
	2014年	6月 蕪崎工業高校1年生に向けた「MacBook Air体験講座」で講師を担当
	(3)公開講座	
	2015年	5月 一般社団法人大月青年会議所5月例会「クラウド活用講座」で講師を担当
	2015年	1月 一般社団法人大月青年会議所1月例会「Google活用講座」で講師を担当
	(4)学外審議会・委員会等	
	2015年	4月 地域デザイン学会フォーラム推進委員会 委員
	(5)その他	
	2015年	4月 株式会社パイプドビッツ政治山カンパニーにおけるアンケート調査の設計および分析を協力。 2011年3月11日に発生した東日本大震災を受けて、「被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト(つなプロ)」に参加。宮城県内で津波の被害にあった女川町から山元町の沿岸部にかけての避難所にてアセスメント活動に従事した。
	2011年	3月
2008年	9月 横浜市の少年野球チーム、宮前パワーズ日常の練習活動のサポート及び合宿等の行事の企画を担当している(現在に至る)。	
2008年	9月 横浜市の少年野球チーム、宮前パワーズ寺子屋にて小学生の論理的思考力のトレーニング活動に従事(現在に至る)。  その他、学生時代より横浜市の企画する小学生対象の宿泊行事にボランティアとして参加をしたり、小学校の体験学習の運営サポート、学生の合宿形式の研究会イベント等の企画・代表を経験している。	

## 成果と目標

専門的 成果	<p>①協力行動の促進メカニズムに関する研究：</p> <p>複数の学術領域に渡り研究が積み重ねられている協力行動の促進メカニズムについて、社会的ジレンマの枠組みを踏まえて実験研究を積み重ねている。現在はカタストロフ研究を発展・応用させて継続的な研究を続けるとともに、社会心理学や会計学など他領域の研究者との共同研究を進めており、国際会議での発表および英文誌への掲載が決定している。</p> <p>②行動経済学の知見の社会への応用</p> <p>行動経済学の知見は様々な結果が得られつつある一方で、社会においてどのようなインパクトを与えているのか、もしくは与えるのか検討していく必要がある。前者についてはプレミアム商品券に関する研究や監視カメラに関する研究を一例として展開しており、後者については企業との共同研究として深化させていく計画である。</p> <p>③文化や慣習が意思決定・経済行動に与える影響の検討：</p> <p>これは現在萌芽的な研究を行っている研究テーマである。文化・慣習は意思決定・経済行動に対して多分なる影響を与えていることは間違いない。現在は仮説を立てて理論的検討をしており、これからの成果が期待される。</p>
-----------	--

<p>専門的目標</p>	<p>①協力行動の促進メカニズムに関する研究：  協力行動の促進メカニズムについては、損失の生じるカタストロフのみならず利益の生じるウィンドフォールにも着目して研究を展開していく。同時に、社会における制度はどのように推移していくのか、主観的指標を含めて他領域の研究者との共同研究を展開していく。</p> <p>②行動経済学の知見の社会への応用  行動経済学的な知見を社会・政策に応用することで、より「心地よい社会」の形成が目標である。一方で、「心地良い」ことが人間にとって望ましいことであるとは決して限らない。「心地よさ」が人間行動に対してどのような影響を与えるのかを解明する。特に、キーワードとなるのは「信頼」と「協力」である。</p> <p>③文化や慣習が意思決定に与える影響の検討：  ヒトは自身の「短期的な利益」だけで意思決定を行いがちである。しかし、本来ならば短期的な利益だけでなく、「長期的な利益」を考慮しなければならない。この考慮すべき「長期的な利益」を伝える手段の一つが文化・慣習・規範であると考えられる。文化・慣習・規範が意思決定に与える影響について実験的研究を行いたい。</p>
--------------	---

<p>データ入力日</p>	<p>2016年 5月 1日</p>
---------------	--------------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
ヤマグチ カツヒロ 山口 勝弘		男	1941年	教授	人間文化学部人間文化学科 大学院人間文化研究科臨床心理学専攻
取得学位称号	修士(文学)	専門分野	臨床心理学・障害児心理学・特別支援教育		
学 歴	1960年	3月 東京都 私立 早稲田高等学校 卒業			
	1960年	4月 日本大学文理学部 心理学科 入学			
	1964年	3月 日本大学文理学部 心理学科 卒業			
	1964年	4月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 修士課程 入学			
	1966年	3月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 修士課程 修了(文学)			
	1966年	4月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 博士課程 入学			
	1969年	3月 日本大学大学院 文学研究科 心理学専攻 博士課程単位取得満期退学			
実 務 経 験	1969年	4月 埼玉県立精神衛生センター嘱託(1970年3月まで)			
	1970年	4月 山梨大学 教育学部 助手(1972年3月まで)			
	1972年	4月 山梨大学 保健管理センター 講師(1978年4月まで)			
	1978年	5月 山梨大学 保健管理センター 助教授(1979年4月まで)			
	1979年	5月 山梨大学 教育学部 助教授(1987年4月まで)			
	1987年	5月 山梨大学 教育学部 教授(1998年3月まで)			
	1994年	4月 山梨大学 学生部長併任(1996年3月まで)			
	1995年	4月 山梨大学大学院 教育学研究科 教授(2007年3月まで) (1994年8月大学院設置審査会で○合適格判定)			
	1998年	4月 山梨大学 教育人間科学部 教授(2007年3月まで)			
	1998年	4月 山梨大学 教育人間科学部 評議員(2002年3月まで)			
	2004年	4月 山梨大学 保健管理センター長(併任)(2007年3月まで)			
	2007年	4月 山梨大学 名誉教授			
2007年	4月 山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科兼同大学院人間文化研究科 教授 現在に至る				
受 賞 歴	2011年	10月 厚生労働大臣表彰(第59回精神保健福祉全国大会)			
	2012年	9月 日本特殊教育学会理事長表彰(学会創立50周年記念)			
所 属 学 会	1965年	4月 日本心理学会会員(1985~1987年および1989~2009年)(現在に至る)			
	1965年	4月 日本心理学会会員(専門別議員:1985~1987年および1989~2009年) (現在に至る)			
	1967年	4月 日本児童精神医学会(現日本児童青年精神医学会)会員(2009年3月まで)			
	1968年	4月 日本アルコール医学会(評議員:1978年4月~1992年3月まで)会員 (1992年3月まで)			
	1970年	4月 日本特殊教育学会会員(現在に至る)			
	1984年	4月 日本電子情報通信学会会員(2009年3月まで)			
	1990年	4月 日本心理臨床学会会員(現在に至る)			
	2001年	4月 日本音楽療法学会会員(現在に至る)			
特免資 許許格 等	1990年	1月 臨床心理士(日本臨床心理士資格認定協会 登録番号第02019)			
e-mail	非公表				

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>いつの時代にも変わらぬ大学教育の使命がある。それは専門性の探求と、人としての深い教養の修学である。適応的なライフサイクルを実現していくためには、これらの課題をそれ相応に両立させて行くことが肝要である。</p> <p>このような基本的な考えのもと、バランスの取れた人材育成を目指す教育活動を実践する。そのためには、2つの学習方法、即ち、知的学習と体験学習の組み合わせで構成される学習環境の整備や指導法の工夫が重要となる。単なる知的学習に留まらずに、そこで得た事象を体現する力(実践力)にまで発展させるために、2つの形態の学習を自己の中で咀嚼していける授業展開を目指したい。その結果、青年期に生きる学生の自分探し(アイデンティティ)、人間関係の営み技術(コミュニケーション)そして学習への主体的取り組み姿勢の構築に役立つことを伝えたい。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a.山梨英和大学大学院カリキュラムの中で担当している、“障害者(児)臨床心理学特論”で精神遅滞、学習障害、コミュニケーション障害、広汎性発達障害等の行動理解、発達支援、指導構造及び指導法、親の障害受容について、自ら担当した治療教育相談実践例を通して分析、解説、2004年度－2010年度。</p> <p>b.放送大学山梨学習センター、面接授業”障害児の発達支援”で、障害児の実態把握のための教育診断法、発達過程、問題行動のとらえ方、治療教育の方法論等について、視聴覚教材や体験学習のためのエクササイズ(ロールプレイ・コミュニケーション技法)を導入して概説、2008年度－2010年度。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等</p> <p>a.山口勝弘他編著、“子どもの発達支援”－障害児教育のフィールドワーカー、pp48－58、84－96 啓明出版、ISBN:4－87448－030－6、2002。</p> <p>b.山口勝弘、“療法的手法による音楽指導”、“音楽の生涯教育－理論と実際－、高萩保治・中嶋恒雄編著、pp92－99、玉川大学出版部、ISBN:4－472－40232－7</p> <p>c.山口勝弘・大島貞夫著、“心理学要説”、pp3－19、21－50、51－64、81－94、117－140、165－167、194－204、相川書房、ISBN:4－7501－0261－X、1999。</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等</p> <p>a.山口勝弘、“音楽療法士に求められること”、pp1－36、(岐阜県音楽療法士協会 設立記念講演 発表資料)、2002. 10</p> <p>b.山口勝弘、“障害児教育臨床に携わる者に求められること－子ども理解のために－、山梨障害児教育学研究紀要Vol.1、pp1－14、山口勝弘退官記念講演、2007. 7</p> <p>c.山口勝弘、“脳血管障害の対象者に対する音楽療法－障害受容の視点から”、(発表者:井上幸一)、井上氏の論文へのコメント、音楽療法 Vol.17、2007</p> <p>d.山口勝弘、“音楽療法にまつわる介護現場でのコミュニケーションに関する一考察－介護福祉士から見た音楽療法－、(発表者:宮澤 崇)、宮澤氏の論文へのコメント、音楽療法、Vol.18、2008</p>
担当授業科目	2016年度:教職実践演習(学部)、臨床心理事例研究、臨床心理実習、SV(以上大学院)
代表的シラバス	<p>教職実践演習および大学院では演習の形態を取るのので、受け身・待ちではなく、自主的・積極的な授業参加ができるような授業構造を設定している。具体的な問題設定から始まって、文献講読、資料分析、プレゼンまでの作業過程を体験学習できるように配慮している。</p> <p>講義では最新情報の提供と併せて、単に知識・情報を機械記憶するだけでなく、話された講義内容に対応する具体的な例を自己の生活に求め、自らを関与させながら反すうするという学習態度の習得を可能にするように構成している。</p>
教育改善活動	<p>a.文献検索の具体的手法及び資料収集についての講義を特科して設置。</p> <p>b.講義における視覚情報教材の大幅な導入。</p> <p>c.教員からの一方的な話しではなく、相互コミュニケーションを体現するための教授法の工夫を常時検討。</p> <p>d.集団討議・エクササイズ・ロールプレイ等の体験学習形態を導入</p>

教育能力に対する評価	<p>(1) 学生による授業評価(アンケートより)</p> <p>全体的評価: わかりやすい、おもしろい等の感想が寄せられ、受講生の適応水準を考慮した授業が展開されたと認識している。大人数の、しかも出席を原則として取らない授業で、ほとんど欠席が見られなかった。演習形式の授業では、最初の頃受け身の姿勢が通らないことに戸惑い、ストレスを感じていたが、支持的指導を受けて適応してくれた。</p> <p>良い点・改善してほしい点(自由記述欄より): 日常生活での自己体験に対応して理解を深めることを求められるので、抽象的な概念も理解しやすかった。反面、授業で適度な緊張感を持続していないといけない旨の感想も寄せられた。また、自我関与することができにくい学生の場合、知的学習のみに集中すべく、毎講義の逐語録を毎回配布してほしい旨の要望も出された。</p> <p>改善に向けた今後の方針: 学生の個人差を受容できる学習の場づくりをこれからも多面的に改善していくが、今日、従来の個人差の概念では理解しがたい差異が観察され、それに対応する教育環境の整備が求められる。</p> <p>(2) 同僚教員等による授業評価</p> <p>基礎ゼミ等では、一部担当教員間でフィードバックを行ってきただけではあるが、同僚教員等による講義評価は定例的には行っていない。今後の課題になる。2012～2013年度、FD活動の更なる活性化が進行している。</p>
------------	--

## 研究業績

研究の特徴	<p>1971年から今日まで、“治療的小集団研究”に取り組む。発達教育や心理的適応を目指す治療的小集団の形成過程や集団力動の機能等について、実践的研究を行ってきた。このグループ過程の行動学的研究の成果を学生相談におけるグループ・アプローチ、治療教育における指導法そして集団療法の技法検討に活用している。小集団研究で得られた知見は、治療的小集団のみならず、家族、学校、職場、地域社会等における個と集団の関係を理解する際にも活用できる普遍性を所持していることが実証されつつある。大学はじめ、各地域の研究者との共同作業や情報交換を通して、研究を推進している。</p> <p>1984年から1991年にかけて、障害児教育における言語指導のためのマイクロコンピュータによるバイオフィードバックシステムの開発に着手し、音声認識装置の開発とソフトプログラムの実証的研究に従事。併せて、1999年からはPCに換えて、音・音楽活動を媒介にした指導法の実践的研究に着手。現在、これら障害児・者の治療教育、集団力動に関する研究を統合整理。</p>
研究経歴	<p>1971年 山梨大学教育学部助手・同保健管理センター講師・助教授、山梨大学教授、山梨英和大学教授</p> <p>エンカウンターグループを主催 大学生の精神健康増進のための体験学習による指導法の実証的研究に従事(現在まで)</p> <p>1984年 山梨大学教育学部助教授・教授 障害児の言語指導のための教材開発(1991年3月まで)</p> <p>1999年 山梨大学教授、山梨英和大学教授 発達障害、精神障害における音楽療法の効用と限界に関する基礎調査に従事(現在まで)</p> <p>2007年 犯罪被害者支援活動ネットワーク(山梨)の創生に参加(2012年度まで)</p> <p>2011年 公益社団法人 被害者支援やまなしの設立に向けてのコミュニティ活動の実践研究に従事</p> <p>～2015年 実践研究に従事</p> <p>(1) 著書</p> <p>a. 山口勝弘・大島貞夫著、心理学要説、pp3-94、117-140、165-167、194-204、相川書房、ISBN:4-7501-0261-X、1999.</p> <p>b. 山口勝弘・古屋義博編著、子どもの発達支援—障害児教育のフィールドワーク—、pp48-58&amp;84-96、啓明出版、ISBN:4-87448-030-6、1997.</p> <p>c. 山口勝弘・山下滋夫著、障害を持つ子ども達との理解とその教育、pp1-96、啓明出版、ISBN:4-87448-027-6、1994</p> <p>など。</p>

研究 経 歴	<p>(2)学術論文</p> <p>a.山口勝弘、“私の精神保健—障害児・者との関わりを通して学んだこと—”、山梨英和大学心理臨床センター紀要第8号、2013. 5</p> <p>b.山口勝弘・長田由布紀著、“就学期を迎えた障害児の母親に対する心理的支援について”、山梨障害児教育学研究紀要第5号、pp35-46、2011. 2</p> <p>c.山口勝弘著、“日本における音楽療法の導入とその変遷”、音楽療法第19号、pp35-57、2010. 7</p> <p>d.山口勝弘・加藤千晴著、“障害児の親の障害否認・受容に関する一研究”、山梨障害児教育学研究紀要第3号、pp111-122、2009. 2</p> <p>e.山口勝弘著、“音楽による療法的手法”、山梨大学教育人間科学部紀要8巻、pp241-254、2007. 3</p> <p>f.山口勝弘著、“障害児教育臨床に携わる者に求められること”、山梨障害児教育学研究紀要創刊号、pp1-14、2007. 2 など。</p> <p>(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>a.学術雑誌”音楽療法”(日本臨床心理研究所)Vol. 1~19(1991~ 2010年)への投稿論文査読審査および編集の任に当たる。</p>	
	競争的資金採択課題	<p>a.平成2・3年度(1988年4月~1991年3月)科学研究費(重点領域研究)「コミュニケーション障害児の診断と教育に関する研究」—障害児のためのCAIシステムの開発(平成2年度)・重度・重複障害児へのフィードバック機能を持つCAIシステムの活用(平成3年度)—研究分担者</p> <p>b.2001年4月~2002年3月 厚生科学研究費(障害保健福祉総合研究事業)「音楽療法の臨床的意義とその効用に関する研究」 研究分担者</p> <p>c.1977年度~2006年度 学生相談研究会議(国立大学保健管理センター及び学生相談室で構成され、文部省科研費—厚生補導特別経費—で運営してきた組織)の会員として、「大学生の精神健康増進のためのグループアプローチ」 研究分担者</p>
学 会 等 発 表 ・ 役 員 参 加	<p>1998年 4月 日本心理学会専門別議員(1985年~1987年, 1989年~2009年まで)</p> <p>2007年 11月 山口勝弘他、座談会”音楽療法の未来に向かって—地域とともにはぐくむ音楽療法へ”、第6回日本音楽療法学会関東支部地方大会、パネリスト</p> <p>2008年 7月 ”音楽療法”Vol.17・18(2009年)投稿論文におけるコメンテーター、pp70、pp54.</p> <p>2010年 8月 教科指導(音楽・図工・美術)”、第44回全日本特別支援教育研究協議会関東甲信越地区特別支援教育研究集会、指導助言者、都留文科大学、pp37-38</p> <p>2011年 10月 第36回関東甲信越地区特別支援知的障害教育校長会、指導助言者(甲府)</p> <p>2011年 11月 山梨県PTA協議会母親研修会、指導助言者(甲斐市)</p>	
受 託 実 績 共 同 研 究 の ・	特になし	
大学院生指導	<p>大学院生(主)指導 教員(山梨英和大学大学院人間文化研究科 臨床心理学専攻)</p> <p>2010年度 * 障害児・者を育てる親の障害受容過程に関する研究—夫婦の会話に焦点を当てて—</p> <p>* メンタルフレンド活動における青少年への関わり方に関する一考察—実践者への面接を通して—</p> <p>2011年度 * 中年期危機への対処行動に関する一考察</p> <p>2012年度 * 不登校理解に関する一考察—担任教師とSCの視点の相違から—</p> <p>* 仕事役割と親役割間の葛藤と心理的Well-beingに関する一考察</p>	

大学院生指導	2013年度 * 一般女子学生における摂食障害傾向と家族関係に関する一考察 2014年度 * 重度聴覚障害者のアイデンティティ形成過程に及ぼす諸要因について * 高齢者の喪失体験に対する意味の付与と自己成長感に関する一考察
研究能力に対する評価	1977年から取り組んできたグループアプローチの実践研究は、キャンパスにおける大学生のメンタルヘルスへの対処に関する厚生補導の指針として文部省と共同開発。国公私立大における保健管理に己貢献。特に個人カウンセリングと集団療法の併用、精神健康増進について具体的方法論の開発に貢献。障害児・者への治療教育に関するプログラム開発・効果の査定等に関する研究の中で、①言語発達を促進するための音声認識装置を利用したバイオフィードバックシステムの開発は、障害児教育における科研費重点領域課題として位置付けられ、その成果は日経をはじめとする業界紙に紹介された。開発されたハード・ソフトは教育現場、特に重度重複障害児の指導に導入された。また、②音・音楽活動を媒介にした治療教育の基礎・実践研究では、児童・生徒及び成人の音楽療法の研究成果や文部省海外短期出張研修での資料等が、日本ではじめての県立音楽療法研究所の開設に利用された。また日本音楽療法学会の設立や音楽療法士の国家資格制度実現のための施策の中で利用されている。

### サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	2007年 4月 共通科目委員会、教職課程運営委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、 2008年 4月 教職課程運営委員会、日本語教員養成課程運営委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、 2009年 4月 教職課程運営委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、進路支援委員会、 2010年 4月 ハラスメント防止委員会、紀要委員会、進路支援委員会、 ~2011年 自己点検・評価委員会、大学院臨床実習運営委員会、心理臨床センター管理運営委員会、大学運営委員会、入試委員会、教職課程存廃検討委員会、 2012年 4月 大学院専攻主任、心理臨床センター管理運営委員会、教職課程運営会議、入学者選抜会議(学部・大学院)、個人情報保護委員会、大学運営評議会 2013年 4月 大学院専攻主任、心理臨床センター管理運営委員会、教職課程運営会議、 ~2016年 入学者選抜会議(学部・大学院)、個人情報保護委員会、大学運営評議会 危機管理委員会、FD/SD推進委員会、大学院FD委員会、学長・副学長会議(2015から)
アドバイザー活動実績	2007年度~2010年度は各年度10~15名(留学生を含む)を担当し、原則として毎週水曜日1限あるいは2限を指定して、アドバイザー活動を実践した。1~2回の来室で問題解決する場合や、定期的に相談に来られる場合もあったが、全く接触がない場合で後日不応状態になった事案に遭遇した。2011年度に向けて、指導のあり方について要検討。2012・13・14年度は20名の学生のアドバイザーを担当する。

後進育成活動実績	<p>1. エンカウンターグループを中心としたグループワークの主催(1981年～2009年)を通して集団力動を体験学習した医療従事者・教諭・心理カウンセラー等の養成に従事。延べ81回のグループダイナミクスセミナーを開催。参加者は延べ約800名。</p> <p>2. 音楽療法士養成。精神医学、教諭(小・中・養護学校)・OT・PT・看護・音楽等の背景をもつ対象への音楽療法士養成プログラム及び共同研究の場づくりに従事。音楽療法セミナー 計34回主催 1977年～2014年。</p> <p>3. 被害者支援電話相談ボランティア養成(毎年10～15名、学生・社会人)のためのプログラム編成や実践指導に継続的に従事(2007～2016年度)。現在80余名を育成。</p>
社会貢献活動	<p>(1)講演会</p> <p>2008年 2月 静岡県知的障害児・者音楽療法講演会:磐田市</p> <p>2008年 7月 第2回地域療育等支援事業講演会「暮らしの中で考える障害を持つ人たちの性」講師</p> <p>2010年 9月 山梨県視覚障害者講演会「音楽と心のやすらぎ」:山梨県ボランティアセンター講師</p> <p>2010年 12月 山梨県PTA協議会主催講演会(対象:義務教育・教育相談担当者)講師</p> <p>2011年 3月 山梨県PTA協議会主催講演会(対象:県下全小・中学校PTA地域指導者)講師</p> <p>2012年 2月 山梨県若者サポートステーション家族支援セミナー講師</p> <p>2013年 5月 山梨音楽療法研究会総会講演「ウイーンの音楽療法事情」講師</p> <p>(2)出前講座</p> <p>2007年 1・2月 被害者支援センターやまなし主催 ボランティア養成講座講師(2014年度まで)</p> <p>2007年 4&amp;11月 山梨県立就業支援センター主催 訪問介護員1級養成研修会(1班・2班)講師(2012年度まで)</p> <p>2007年 6月 山梨県教育委員会主催スクールカウンセラー派遣事業要請訪問カウンセラー(2014年度まで)</p> <p>2007年 7月 山梨県教育委員会主催 校長会研修(学校における精神保健)講師</p> <p>2008年 5月 放送大学面接授業(障害児の発達支援)・山梨学習センター講師(2010年度まで)</p> <p>2009年 10月 山梨県臨床心理士会・山梨県弁護士会共催 「子ども何でも相談」相談員(2014年度まで)</p> <p>2010年 12月 山梨労働局第1回メンタルヘルス研修会講師(第2・3回研修会は、2011年1月)</p> <p>2013年 5月 県立北杜高等学校「介護職員初任者研修課程」講師(2014年度まで)</p> <p>6月 山梨県教育四者教育相談員連絡会議(教育相談研修会)(2016年5月継続)</p> <p>(3)公開講座</p> <p>2007年 10月 山梨県精神保健協会主催セミナー 「認知症とは」(対象:児童・生徒・父兄)企画・運営(2013年度まで—2009年度を除く—)</p> <p>(4)学外審議会・委員会等</p> <p>2007年 4月 山梨県障害児適性就学推進委員会会長(2016年5月継続)</p> <p>2007年 4月 山梨県精神保健協会理事(2016年5月継続)</p>

社会貢献活動	2007年	4月 甲府家庭裁判所外部委員会委員(2009年7月まで)
	2007年	4月 山梨県社会福祉審議会児童福祉専門分科会部会長(2016年5月継続)
	2007年	4月 (社)被害者支援センターやまなし副理事長兼センター長(2016年5月継続)
	2007年	5月 山梨県臨床心理士会会長(2016年5月まで)
	2009年	4月 山梨県高次脳機能障害支援体制検討会議委員(2016年3月まで)
	2009年	4月 山梨県発達障害者支援企画・推進委員会委員(2016年5月まで)
	2016年	4月 山梨県発達障害者支援体制整備検討委員会・発達障害者支援センター運営協議会委員(2016年5月から)
	2012年	4月 (公社)被害者支援センター副理事長(2016年5月継続)
	2013年	4月 甲府保護司選考会委員(2016年3月まで)

## 成果と目標

専門的成果	<p>①音楽療法の基礎的・実践的研究の成果は、科学としての音楽療法の構築に向けて参考とされ、治療教育、高齢者リハビリテーション及び精神医療における治療論や職業としての専門性の確立に利用されている。</p> <p>②重複障害児の言語指導に導入した機器の開発は、その後のPCの進化に伴って、学校現場で利用しやすいように改善。障害児教育現場へのバイオフィードバックシステムの導入に道筋をつけた。</p> <p>③グループダイナミクスに関する研究成果は、集団研究(小集団の構造論や集団力動等)の先駆的役割に貢献。論文、専門書として発信。多くの人との間で、共有されてきている。</p>
専門的目標	<p>①音楽療法関係については、診断と査定技法の一層の検討を踏まえて、信頼性・妥当性のある教育指導法・治療技法の実現が急がれる。そのために、各領域における事例研究の更なる蓄積をしていく。</p> <p>②障害児の言語指導に関しては、バイオフィードバックシステムを遊戯療法その他の指導法とどのように組み合わせていくか、対象事例の属性を念頭に入れた実践研究を関係者間の協力で取り組んでいく。</p> <p>③集団研究の成果は、家族、学校のクラス等々、種々の集団に共通して見られる集団形成過程の原型を抽出すべく、実践研究の基礎資料を基にした概念化作業に着手していく。</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名		性別	生年(西暦)	職名	所属
モトウ ヒロシ 近藤 弘		男	1944年		人間文化学部人間文化学科
取得学位称号		文学修士	専門分野	教育社会学, 子ども社会学, ジェンダー論, 教員養成論	
学歴	1968年	3月	立教大学文学部教育学科卒業		
	1971年	4月	立教大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程入学		
	1973年	3月	立教大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了		
実務経験	1968年	4月	東京家庭裁判所調査官補(1971年3月まで)		
	1973年	4月	立教大学文学部助手(1976年3月まで)		
	1976年	4月	関東学院女子短期大学幼児教育科専任講師		
	1980年	4月	関東学院女子短期大学幼児教育科助教授		
	1989年	4月	関東学院女子短期大学幼児教育科教授(1990年3月まで)		
	1990年	4月	立教大学文学部助教授(学校・社会教育講座教職課程)		
	1991年	4月	立教大学文学部教授2010年3月まで)		
	1991年	4月	関東学院女子短期大学非常勤講師(1994年3月まで)		
	1991年	4月	東横学園女子短期大学非常勤講師(2000年3月まで)		
	1993年	4月	放送大学非常勤講師(1997年3月まで)		
	2000年	4月	明治学院大学非常勤講師(2005年3月まで)		
	2000年	4月	日本女子大学非常勤2013年3月まで)		
	2010年	4月	山梨英和大学教授(現在に至る)		
同上	4月	立教大学兼任講師(2012年3月まで)			
受賞歴	2011年	10月	豊島区功労者		
	年	月			
所属学会	2008年	10月	八潮市男女共同参画苦情処理員(現在に至る)		
	2005年	9月	日本教師教育学会事務局長(2008年9月まで)		
	2005年	10月	豊島区生涯学習推進協議会会(2013年3月まで)		
	2006年	4月	財団法人としま未来財団理事(2010年3月まで)		
	2008年	8月	文部科学省「男女共同参画社会に向けた教育・学習支援企画」(2009年3月まで)		
特免資格等	2008年	8月	国立女性教育会館「地域活性化に向けた男女共同参画推進に関する調査研究」プロジェクト委員会座長(2010年3月まで)		
	年	月			
	年	月			
	年	月			
	年	月			
e-mail	非公表				

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

略

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	教職免許取得希望者(教職課程受講生)に教職に関する基本的な理解を深めることを第一に据えている。その際、教職の現実をしっかり把握することを受講生に根づかせたいと考えている。そのために受講生の既成の教職観を一度突き崩して改めて教職に関する各人の考え方を確立することに焦点を当てたいと考えている。講義が中心となるが、できる限り双方向の授業を試みたいと考えている。
教育能力	(1)教育方法実践例 特になし (2)作成した教科書、教材等 特になし (3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし
担当授業科目	(2016年度) 教職実践演習(中・高)、教育制度論、教育原理Ⅰ、教育原理Ⅱ、教育課程論
代表的シラバス	【教育原理】 (概要) 現代日本の中等教育特に高等学校段階の教育に関する基本的事項を講述する、特に現在の高等学校教育が抱えている問題を中心に取る (到達目標) 1. 中等教育の「中等」という意味をきちんと理解できる、2. 高校教育に係わる基本的概念をきちんと理解できる、3. 高校教育の課題をきちんと理解できる
教育改善活動	特になし
教育能力に対する評価	(1)学生による授業評価 特になし (2)同僚教員等による授業評価 特になし

## 研究業績

研究の特徴	1990年代初めよりジェンダー(社会的に形成された性別)に関心を持ち、ジェンダー形成と教育の関係を中心に主として教育社会学的手法を用いて分析を行っている。近年は「男女共同参画社会」に関する研究を進めている。特に「男女共同参画基本計画」に関する政策的な分析を進めていく。
研究経歴	2002年4月 立教大学ジェンダーフォーラム所長(2010年3月まで) 年 年

研究実績	(1)著書	1995年	3月	教育原理(短編著:東京書籍)
		2003年	9月	教師学と私[第2版](共著書:学文社)
		2005年	10月	教育とジェンダー形成(編著書:ハーベスト社)
	(2)学術論文	1990年	12月	「近代家族」と子どもーアリニス『<子ども>の誕生』読解の試み (単著論文:立教大学教育学科年報第34号40～60頁)
		1999年	6月	子どものジェンダー形成(単著論文:日本子ども社会学会編『いま、子どもに 何が起きているか』北大路書房66～74頁)
		2000年	3月	男女共同参画社会・エンパワーメント・ジェンダー(単著論文:立教大学ジェ ンダーフォーラム年報第1号3～15頁)
		2002年	3月	大学におけるジェンダー教育実践の課題ー受講生の意識変容を中心に (単著論文:立教大学ジェンダーフォーラム年報第3号34～43頁)
		2010年	3月	男女共同参画社会とはどのような社会かー「男女共同参画社会基本法」制 定10年を迎えてー
		2010年	9月	「男女共同参画社会」をめぐるー考察ー「第三次男女共同参画基本計画」 策定の年にあたってー(単著論文:「大衆文化」第4号37～45頁)
		2011年	3月	男女共同参画社会とはどのような社会かー男女共同参画社会基本法・男 女共同参画基本計画を中心にー(境界を越えてー比較文明学の現在:単 著論文31～46頁)
	(3)その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)	2009年	9月	日本教師教育学会年報編集委員(205年8月まで)
競争的資金採択課題	平成16～18年度(2004～2006年度)「感情」の社会化に関する総合的研究:「文化とし ての涙」の形成過程に着目してー研究分担者			
学会等発表・役員参加	2001年	10月	近藤弘他「大学におけるジェンダー教育実践の課題ー受講生の意識変容 を中心にー」第53回日本教育社会学会大会	
	年	月		
	年	月		
	年	月		
	年	月		
	年	月		
受託共同研究の実績	年	月	特になし	
	年	月		
	年	月		
	年	月		
	年	月		
大学院生指導	特になし			
研究能力に対する評価	1999年に制定された「男女共同参画社会基本法」は21世紀の日本社会を男女共同参画社会の実 現に向けて形成していくことを国家的な目標とし、具体的には「男女共同参画基本計画」において政 策的に実現を目指すことが決められている。しかし、現実にはその歩みは遅々としてしており、特に 女性の意思決定過程への関与は国際的にみても大きく遅れている。そうした現実をふまえてどのよ うに男女共同参画社会の形成を進めていくのかを研究課題として研究を進めている。立教大学ジェ ンダーフォーラムの所長時代にはそうした課題を授業実践、ジェンダーセッション、講演会等を通し て進めていくことを試みてきた。所長を8年にわたり務めることができたのも、そうした姿勢が評価さ れた結果ではないかと自負している。			

## サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績	年	月	特になし
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
	年	月	
アドバイザー活動実績		特になし	
後進育成活動実績		特になし	
社会貢献活動	(1) 講演会 年          月 特になし (2) 出前講座 年          月 特になし (3) 公開講座 年          月 特になし (4) 学外審議会・委員会等 年          月 特になし (5) その他 年          月 特になし		

## 成果と目標

専門的成果	<p>①「男女共同参画社会」とはどのような社会であるかについて、「男女共同参画社会基本法」及び「男女共同参画基本計画」等の分析を通して解明を試みてきたが、その結果として「男女共同参画社会」とは突き詰めると「性差別のない社会」ではないかという結論にいたった。</p> <p>②教員養成に係わって、特に教員の資質・能力の向上が常に謳われているが、はたして教師の資質・能力に関してコンセンサスが確立しているのかといえ、必ずしも確立しているとは言えない現状である。むしろ、それは不可能に近いのではないかとさえ思える。その点を常に意識しながら解明を進めてきたと言える。</p>
専門的目標	<p>①「男女共同参画社会」を「性差別のない社会」ととらえたとき、具体的にどのようにしてそのような社会を形成していくのかを特に「男女共同参画基本計画」の分析を通して解明していく。</p> <p>②学校教育の成否は詰まるところ教師の在り方によるというパラダイムは強固である。そうしたパラダイムをどのように崩していくのかを特に教員の資質・能力とは何かを中心に考察していき、新しいパラダイムの提起ができればと考えている。</p>

最新データ入力日	2016年 5月 1日
----------	-------------

専任教員職務業績集

山梨英和大学

フリガナ 氏名	性別	生年(西暦)	職名	所属
持館 尚武	男	非公表	専任講師	人間文化学部人間文化学科
取得学位称号	博士(教育学)	専門分野	教育心理学・教育工学・特別支援教育	
学 歴	2000年	4月 国際基督教大学教養学部教育学科入学		
	2004年	3月 国際基督教大学教養学部教育学科卒業(教養学士)		
	2004年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士前期課程入学		
	2006年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士前期課程修了(教育学修士)		
	2006年	4月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程入学		
	2012年	3月 国際基督教大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(教育学博士)		
実務 経 験	2006年	4月 国際基督教大学教育研究所助手 (2014年3月まで)		
	2012年	4月 明星大学非常勤講師(教育心理学Ⅰ・Ⅱ) (現在に至る)		
	2013年	4月 明星大学非常勤講師(心理学調査法・心理統計学Ⅰ・Ⅱ) (2014年3月まで)		
	2013年	4月 東京農業大学非常勤講師(カウンセリング論・心理学概説) (現在に至る)		
	2013年	4月 山梨英和大学非常勤講師 (2014年3月まで)		
2014年	4月 山梨英和大学専任講師			
受 賞 歴	年	月		
	年	月 特になし		
	年	月		
所 属 学 会	2006年	4月 日本感情心理学会		
	2007年	4月 日本教育工学会		
	2008年	4月 日本応用心理学会		
	2008年	4月 日本環境心理学会		
	2009年	4月 日本教育心理学会		
	2009年	4月 日本認知心理学会		
	2013年	3月 Sign Language Linguistics Society		
	2013年	3月 日本行動計量学会		
	2013年	4月 日本コミュニケーション障害学会		
特 免 資 格 等 ・ ・	年	月		
	年	月		
	年	月		
	年	月		
e-mail	非公表			

## 目 次

### ○教育業績

教育理念、方針、方法

教育能力

教育方法実践例

作成した教科書、教材等

教育方法や実践に関する発表、講演等

担当授業科目

代表的なシラバス

教育改善活動

教育能力に対する評価

### ○研究業績

研究の特徴

研究経歴

研究実績

著書

学術論文

その他の研究活動

競争的資金採択課題

学会等発表、役員参加

共同研究・受託研究の実績

大学院生指導

研究能力に対する評価

### ○サービス活動業績

学内委員会・作業部会等活動実績

アドバイザー活動実績

後進育成活動実績

社会貢献活動

### ○専門的活動(教育業績、研究業績、サービス活動業績)の統合による成果と目標

専門的成果

専門的目標

### ○添付資料

### ○最新データ入力日

## 教育業績

教育理念、方針、方法	<p>知識を一方向的に与えるのではなく、最終的には学生が自ら主体的に学ぶことができるように、学生の思考力と自信を育むことを目標としている。必ずしも回答が1つに絞れないような、学生が試行錯誤できる課題を提示することを心がけ、学生には、時として答えに至る最短の道ではないとしても、グループワークやディスカッション等、他者との関わりの中で、付随するさまざまなものを学んでほしいと考えている。勉強面だけに留まらない全般的な人間教育への貢献を目指している。</p>
教育能力	<p>(1)教育方法実践例</p> <p>a. グループワーク、ディスカッションを取り入れた講義経験 5-8名から成る学生グループを対象に研究計画の立案からデータ収集の実施・分析、論文の作成、研究発表(口頭・ポスター)までの一連の指導を各研究法で実践する演習型講義を行ってきた。国内学会発表、卒業研究に十分対応できる力を養っている。</p> <p>b. 達成目標を意識させた講義 授業の最初に大きな設問を与え、講義を通してその設問への答えを得るという形式で講義を行っている。学生が漫然と授業を聞くことを減らし、授業内容を自身の問題に引きつけて考えるきっかけとしている。</p> <p>c. 情報保障を前提とした講義経験 聴覚障害者大学教育支援プロジェクトにおいて高校生の難聴者・聾者対象に、情報保障を前提にした講義を行っている。パワーポイントの利用や指示語の配慮など速記者の負担を減らす工夫や難聴者・聾者のために提案された日本福祉工学会マニュアルに準拠した講義経験がある。</p> <p>(2)作成した教科書、教材等 特になし</p> <p>(3)教育方法や実践に関する発表、講演等 特になし</p>
担当授業科目	<p>2016年度: 教育心理学、社会心理学、 心理学実験Ⅰ・Ⅱ、心理学統計法Ⅰ・Ⅱ、心理学データ分析演習Ⅰ・Ⅱ、データサイエンスⅠ 卒業研究、専門ゼミナール、基礎ゼミナール</p>
代表的シラバス	<p>「教育心理学」 教育心理学とは、教育現象を心理学的に研究する実証科学であり、主に学習、評価、発達、社会の4領域から成り立っています。この4領域に沿って、教育心理学に発展に寄与した代表的な心理学者たちを取り上げながら、人(学習者)の個人差と適切な学習への援助について、その方法、基本的な概念や理論、具体的な技術に関して学びます。</p>
教育改善活動	<p>日本社会事業大学GP 大学教育・学生支援推進事業[テーマA]大学教育教育プログラム外部委員(2009年～2011年):外部委員として、ソーシャルワーク・コミュニケーション検定、e-ポートフォリオの検討を行った。最終年、2011年には公開シンポジウムのパネリストとして他分野の専門家の方々とともに最終結果の検討を行った。</p>
教育能力に対する評価	<p>(1)学生による授業評価 FDからは苦勞をするが得るものが多いという主旨のコメントが目立ち、自身の教育目標はある程度達成できていると感じている。一方で、授業についていくことができない学生が確実に存在すること、また学生の過度の負担を減らすためにも、配信型の予習教材の作成が今後の課題である。</p> <p>(2)同僚教員等による授業評価 本学では教員による相互評価のシステムはないため、その評価を得ることが出来ていない。</p>

## 研究業績

研究の特徴	<p>Pedagogical Agentsと総称されるキャラクター教材を題材とした応用研究や、絵や図といった視覚刺激と音やナレーションといった聴覚刺激の組み合わせから効果的なメディア教材の設計原理を提案する基礎研究を行っている。近年は、視線の動きを指標とした手話理解の研究や語用障害をキーワードに、ASD児の感情音声理解、特にASD児の方言選好に関する実験的研究を行っている。またコミュニケーション障害の検査の作成といった学際的な共同研究に従事している。</p>
研究経歴	<p>2006年 国際基督教大学博士後期課程在籍時、同大学教育研究所研究員として認知負荷理論に基づくマルチメディア教材の効果測定の研究に従事(現在に至る)</p> <p>2009年 社会事業大学 斎藤研究室と手話理解ならびに聴覚障害児に関連する各種共同研究に従事(現在に至る)</p> <p>2012年 共立女子大学 権藤研究室とASD児の言語発達の研究およびCCC-2の評定者間一致率の研究に従事(現在に至る)</p> <p>2012年 東京学芸大学 松井研究室とアイトラッキングを利用したASD児のプロソディに基づく感情理解の研究に従事(現在に至る)</p> <p>2012年 金沢大学 大井研究室と言語障害児のためのチェックリストの作成とその利用に関する研究に従事(現在に至る)</p>
研究実績	<p>(1) 著書</p> <p>CCC-2刊行委員会(印刷中).子どものコミュニケーションチェックリスト第2版(CCC-2)日本語版 日本文化科学社</p> <p>(2) 学術論文</p> <p>槻館尚武・大井学・権藤桂子・松井智子・神尾陽子(2015).Children's Communication Checklist-2 日本語版の標準化の試み:標準化得点の検討 コミュニケーション障害学, 32, 99-108.</p> <p>綾野鈴子・権藤桂子・槻館尚武・大井学・田中早苗(2014).Children's Communication Checklist-2(日本語版)による幼児コミュニケーション評価—養育者と保育者の比較— コミュニケーション障害学, 31, 140-149.</p> <p>N, Tsukidate. (2010). The Effects on the Human-Agent Interaction of Users' Imagination of Sensations Experienced by the Animated On-Screen Agent. Educational Studies, 52, 89-96.</p> <p>(3) その他の研究活動(国際会議発表、学術誌編集、学術論文査読等)</p> <p>国際会議発表</p> <p>N. Tsukidate &amp; Y. Morishima, The effect of an embodied agent's performance on self-efficacy in human-agent interaction. The 3rd IET International Conference on Intelligent Environment, Ulm, Germany, October, 2007.</p> <p>N. Tsukidate, Consideration of the redundancy principle in foreign language narration. The 4th International Conference on Cognitive Load Theory 2010, Shanghai &amp; Macao, November, 2010.</p> <p>K, Saito &amp; N, Tsukidate, Eye Gaze and Eye Movement in Japanese Sign Language. Theoretical Issues in Sign Language Research (TISLR) Conference 11, London, UK, July, 2013.</p> <p>K. Gondo, T. Matsui, R. Kojima, &amp; N. Tsukidate, Longitudinal Study on Expressive Vocabulary Acquisition among Japanese Children with ASD. 15th International Clinical Phonetics &amp; Linguistics Association 2014, Stockholm, Sweden, June, 2014.</p> <p>M. Oi, H. Fujino N, &amp; N. Tsukidate, Quantitative Communicative Impairments Ascertained in a Large National Survey of Japanese Children, XI Autism-Europe International Congress, Edinburgh, UK, September, 2016.</p> <p>学術論文査読等</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 編集委員(2015-)</p> <p>日本語用論学会 『語用論研究』 査読者(2016年)</p> <p>コミュニケーション障害学会 『コミュニケーション障害学』 査読者(2016年)</p> <p>認知科学会 『認知科学』 査読者(2012年)</p> <p>日本人工知能ファジィ学会 『知能と情報20 ソーシャル・エージェント特集号』 査読者(2008年)</p>

<p>競争的資金採択課題</p>	<p>日本学術振興会(JSPS)平成20年度科学研究費補助金, 基盤研究(B)「手話・舞踊・演劇に見る言語性と非言語性の相互関係を利用した異文化理解教育」 分担研究者 2009年4月-2011年3月</p> <p>日本社会事業大学共同研究資金「脳科学を福祉教育に活かす～コミュニケーション能力を高める授業をめざして」 共同研究者 2009年4月-2011年3月</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成22年度科学研究費補助金, 挑戦的萌芽研究「視線の段階的言語化理論の構築」 分担研究者 2010年4月-2012年3月</p> <p>みずほ福祉助成財団研究助成「聴覚障害者のスキルアップ・ステップアップのための書記日本語教育法およびマニュアル開発～エラーアナリシスを中心に」 共同研究者 2011年4月-2012年3月</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成24年度科学研究費補助金, 基盤研究(B)「視覚・聴覚障害児の認知能力を利用した小学校英語バリアフリー教授法・教材の開発」 分担研究者 2012年4月-現在に至る</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成23年度科学研究費補助金, 基盤研究(B)「子どものコミュニケーション・チェックリスト日本版の標準化と日英語用障害などの比較」 分担研究者 2013年4月-2014年3月</p> <p>日本学術振興会(JSPS)平成25年度科学研究費補助金, 挑戦的萌芽研究「言語的・パラ言語的・非言語的視線の記述システムの開発」 分担研究者 2013年4月-2015年3月</p>
<p>学会等発表・役員参加</p>	<p>2016年 1月 鈴木 聡・笹島 康明・小方 博之・槻館 尚武 教師役の身体化エージェントの外観と言葉遣いがユーザの学習に及ぼす影響: 役割語に着目して 情報処理学会第166回ヒューマンコンピュータインタラクション研究発表会 槻館尚武 韻律を手がかりとした感情の同定: ASD児の特徴 ラウンドテーブル: 語用論発達の測定と評価 企画: 大井学・藤野博 第26回発達心理学会 東京大学</p> <p>2015年 3月 槻館尚武 韻律を手がかりとした感情の同定: ASD児の特徴 ラウンドテーブル: 語用論発達の測定と評価 企画: 大井学・藤野博 第26回発達心理学会 東京大学</p> <p>2013年 7月 槻館尚武・大井学・権藤桂子 Children's Communication Checklist-2日本語版検査項目における内的整合性の検討 第39回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 上智大学</p> <p>2013年 7月 綾野鈴子・権藤桂子・槻館尚武・大井学 CCC-2日本語版による幼児のコミュニケーションの養育者と保育者の評定者間比較 第39回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 上智大学</p> <p>2011年 9月 槻館尚武 マルチメディア学習におけるナレーションと字幕の言語の組み合わせが保持・転移課題成績に及ぼす影響-外国語ナレーションにおける冗長性効果の検討- 日本教育工学会第27回大会 首都大学東京</p> <p>2011年 3月 小松由樹子・武井友希・田坂麻紘・槻館尚武 青年期の愛着スタイルと恋愛へのロマンチック希求度の関係 日本発達心理学会第22回大会 東京学芸大学</p> <p>2010年 10月 武井友希・田坂麻紘・小松由樹子・槻館尚武 恋愛におけるロマンチック希求尺度の作成の試み 日本パーソナリティ心理学会第19回大会 慶応義塾大学</p> <p>2010年 9月 槻館尚武 アニメーション教育エージェントが示す遂行と非言語による理解度表出が学習者の自己効力感に及ぼす影響 日本教育工学会第26回金城学院大学</p> <p>2009年 9月 槻館尚武 教育用エージェントの理解度表出が学習者の自己効力感に及ぼす影響 日本教育工学会第25回大会 東京大学</p> <p>2009年 9月 槻館尚武・佐藤彩華 身体化エージェントの発話をユーザの感覚と結びつける演出がそのインタラクションに及ぼす影響 日本応用心理学会第75回大会 横浜国立大学</p>
<p>受託研究の実績</p>	<p>共同研究</p> <p>年 月</p> <p>年 月 特になし</p> <p>年 月</p>
<p>大学院生指導</p>	<p>特になし</p>

研究能力に 対する 評価	ASD児を対象とした共同研究および子どものためのコミュニケーションチェックリスト第2版を指標とした共同研究は順調に進展しており、一定の評価を得ているものと思われる。上記の研究課題に関しては論文の作成・出版が進んでいるものの、ろう者を対象とした手話研究の成果報告が進んでいない。同様に、個人研究であるメディア教材を題材にした認知負荷理論の検討およびベダゴジカル・エージェントの効果測定に関する研究はデータの整理、追試が追いついていない状況にあり、共同研究とのバランスをとることが課題であると考えている。
--------------------	--

### サービス活動業績

学内委員会・ 等活動実績 作業部会	2015年 4月 FD・SD委員会委員(現在に至る) 2015年 6月 授業アンケート改訂ワーキンググループ委員(2015年12月迄) 2016年 4月 山梨英和大学心理臨床センター紀要編集委員 年 月 年 月 年 月 年 月
アドバイザー活動実績	特になし
後進育成活動実績	特になし
社会貢献活動	(1)講演会 年 月 (2)出前講座 2015年 6月 山梨英和高等学校 『教育心理学と最近の話題』 2016年 6月 山梨英和高等学校 『教育心理学のあれこれと最近の話題』 (3)公開講座 2014年 10月 県民コミュニティカレッジ サイコロジー・テウデイ:第2回 『学ぶことの心理学:これまでとこれから』 (4)学外審議会・委員会等 2009年 4月 日本社会事業大学GP 大学教育・学生支援推進事業[テーマA]大学教育教育プログラム 外部委員(2011年3月まで) (5)その他 2015年 4月 山梨市教育委員会生涯学習課との連携事業として、山梨市生涯学習アンケートの作成・分析を行った(2016年3月まで)

### 成果と目標

専門的成果	①CCC-2標準化作業を終え、検査マニュアルとしてのまとめを行った。 ②ろう者向けマルチメディア英語学習教材試作版を作成した。 ③手話使用およびマルチメディア学習時の視線データを収集する実験環境を整え、実証的資料の収集を行った。
-------	--

<p>専門的目標</p>	<p>①CCC-2標準化のために得られた2万5千件のデータにおける無回答項目の出現傾向に焦点をあて再解析を行い、今後の研究のための知見を得る。</p> <p>②ASD児の感情音声課題遂行時の他者の表情への注視傾向および方言への選好に関する実証データをまとめ、学術誌にて成果報告を行う。</p> <p>③ろう者向けマルチメディア英語学習教材試作版の改訂作業を進める。</p>
--------------	--

<p>最新データ入力日</p>	<p>2016年 5月 1日</p>
-----------------	--------------------